福岡市西区

都地遺跡・金武城田遺跡

市道野方・金武線新設道路建設に伴う発掘調査報告書

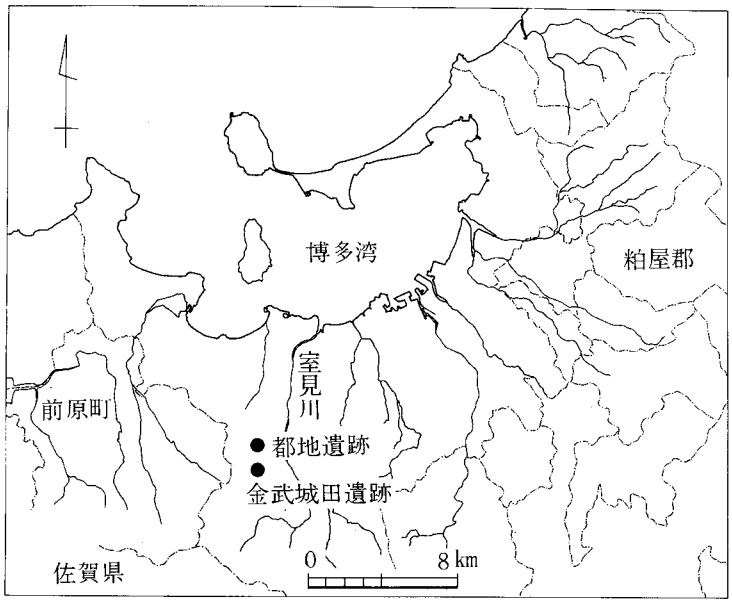
（1）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第186集

1988

福岡市教育委員会

都地遺跡（とじ）・金武城田遺跡（かなたけしろた）



都地遺跡	遺跡略号	ＴＺＩ	遺跡調査番号	8344
金武城田遺跡	遺跡略号	ＫＴＩ	遺跡調査番号	8322

１９８８年３月

福岡市教育委員会

序　文

福岡市は昭和55年に５区から７区制に再編成され室見川以西が西区となりました。野方から金武にかけては国指定史跡野方遺跡や吉武遺跡群をはじめ数多くの埋蔵文化財の包蔵地が分布しています。そこで土木局と事前協議を重ね、やむをえず現状保存出来ないところについては事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めるこになりました。

調査の結果、弥生時代から歴史時代にかけての数多くの遺構・遺物が確認され、予想以上の成果をあげることが出来ました。これも地元をはじめ関係者の皆さま方の埋蔵文化財に対する御理解と御協力によるものであり、深く、感謝の意を表するものであります。

本報告書は昭和58年から62年まで調査を実施したうちの昭和58年度分をまとめたものですが、市民の皆さまの文化財保護への御理解のため幅広く活用いただければ幸いです。

昭和63年３月

福岡市教育委員会
教育長
佐　藤　善　郎

例　言

1．本書は福岡市西区に新設される道路建設工事、野方・金武線事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を行なった第1次発掘調査（都地遺跡・金武城田遺跡）の報告書である。

2．事業は福岡市都市計画局道路計画課により令達され、当教育委員会文化部埋蔵文化財課第一係が実施した。発掘調査・資料整理・報告書の作製は、二宮忠司・浜石哲也、林田憲三・大庭友子・村上かをり（補助員）・渡辺和子（現筑紫野市嘱託）、久保寿一郎（九州大学）が担当し、事務は柳田純孝、岡嶋洋一（前任）、折尾学、岸田隆が担当した。

3．本書の執筆の内、都地遺跡は二宮、大庭が、城田遺跡は浜石が分担して行なった。

4．都地遺跡の挿図の内遺構の実測は二宮、渡辺が、城田遺跡の遺構の実測は浜石、赤司善彦、上敷領久、岡部裕俊、佐藤一郎が行なった。都地遺跡の遺物実測は二宮、大庭が、城田遺跡の遺物実測は浜石、林田、久保、村上が行なった。トレースは大庭と村上が行なった。

5．都地遺跡の遺構・遺物の写真は二宮、大庭の撮影による。城田遺跡の遺構・遺物の写真は浜石、林田の撮影による。

6．本書の編集は浜石と二宮が行なった。

7．都地遺跡は金武B遺跡と称表していたが本来、都地遺跡群の中に組み入れるものであるため都地遺跡群第3次調査として登録する。第1次調査は都地館跡、第2次調査は都地南遺跡として登録する。

8．出土遺物、写真、図面等は公開準備が出来次第、市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定である。

本文目次

第１章　はじめに……1
1　調査に至る経過……1
2　調査の組織……1
3　遺跡の立地と環境……2
第２章　都地遺跡群第３次調査……7
1　発掘調査の概要……7
2　調査の記録……8
遺構　(1)　弥生時代の遺構……溝……8
②住居址……8
③甕棺墓……8
(2)　古墳時代から平安時代の遺構……21
土坑墓・溝……21
(3)　掘立柱建物……25
遺物……29
甕棺の型式分類……29
溝・土坑の遺物……42
第３章　金武城田遺跡……45
1．遺跡の位置……45
2．調査の概要……46
3．Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の遺構と遺物……46
1）各区の概要と土層……46
2）遺構と遺物……48
(1)　掘立柱建物……48
(2)　竪穴住居跡……52
(3)　土坑……55
(4)　溝……61
(5)　SX26列石遺構……63
(6)　製鉄遺構……71
(7)　その他の遺構……77

(8) ピット・包含層出土遺物……78
4．Ⅳ区の遺構と遺物……88
1）概要……88
2）遺構と遺物……89
(1) 掘立柱建物……89
(2) 竪穴住居跡……89
(3) 土坑……95
(4) 表土層出土遺物……96
5．まとめ……97

挿図目次

Fig. 1　都地遺跡・金武城田遺跡位置図（縮尺1/50,000）……x
Fig. 2　野方・金武線路線図と調査地点（縮尺1/10,000）……4
Fig. 3　都地遺跡第3次調査区（縮尺1/800）……6
Fig. 4　甕棺墓配置図（縮尺1/100）……10
Fig. 5　SK01～04甕棺墓実測図（縮尺1/25）……11
Fig. 6　SK05～08甕棺墓実測図（縮尺1/25）……12
Fig. 7　SK09～12,14甕棺墓実測図（縮尺1/25）……13
Fig. 8　SK13,15,17～19甕棺墓実測図（縮尺1/25）……14
Fig. 9　SK20～26甕棺墓実測図（縮尺1/25）……15
Fig. 10　SK27～33,35甕棺墓実測図（縮尺1/25）……16
Fig. 11　SK34,36～38甕棺墓実測図（縮尺1/25）……17
Fig. 12　SK39～43甕棺墓実測図（縮尺1/25）……18
Fig. 13　SK16,44,46,47甕棺墓・木棺墓実測図（縮尺1/25）……19
Fig. 14　溝・土坑・土坑墓・掘立柱建物配置図（縮尺1/200）……22
Fig. 15　土坑・土坑墓実測図（縮尺1/25）……23
Fig. 16　掘立柱建物実測図－1（縮尺1/100）……24
Fig. 17　掘立柱建物実測図－2（縮尺1/100）……26
Fig. 18　掘立柱建物実測図－3（縮尺1/100）……27
Fig. 19　掘立柱建物実測図－4（縮尺1/100）……28
Fig. 20　甕棺実測図－1（縮尺1/8,1/12）……30
Fig. 21　甕棺実測図－2（縮尺1/12）……31
Fig. 22　甕棺実測図－3（縮尺1/8）……32
Fig. 23　甕棺実測図－4（縮尺1/12,1/16）……33
Fig. 24　甕棺実測図－5（縮尺1/8）……34
Fig. 25　甕棺実測図－6（縮尺1/12）……35
Fig. 26　甕棺実測図－7（縮尺1/12,1/16）……36
Fig. 27　甕棺実測図－8（縮尺1/8）……37
Fig. 28　甕棺実測図－9（縮尺1/12）……38
Fig. 29　甕棺実測図－10（縮尺1/12）……39
Fig. 30　溝・土坑出土遺物実測図（縮尺1/3,1/4,1/8）……41
Fig. 31　金武城田遺跡周辺地形図（1/8000）……45
Fig. 32　発掘地点周辺図（1/1000）……折込み
Fig. 33　II区西壁土層略図（1/80）……47
Fig. 34　SB01・02・03・04・05・06実測図（1/100）……49
Fig. 35　SB07・08・09・10実測図（1/100）……51
Fig. 36　SB11・12実測図（1/100）……52

Fig. 37 SC01実測図（1/60,1/40）……53
Fig. 38 SC02実測図（1/60）……54
Fig. 39 SB02・04・05・06,SC01・02出土遺物実測図（1/3）……55
Fig. 40 SK01・02・03・04実測図（1/40,1/80）……56
Fig. 41 SK02・04出土遺物実測図（1/3）……57
Fig. 42 SK06・08・09・10・11・12・13実測図（1/40）……58
Fig. 43 SK05・08・09出土遺物実測図（1/3,1/1）……60
Fig. 44 SD02出土遺物実測図（1/3）……62
Fig. 45 SD03出土遺物実測図（1/3,1/2）……63
Fig. 46 SX26実測図（1/50）……折込み
Fig. 47 SX26出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……65
Fig. 48 SX26出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……66
Fig. 49 SX26出土遺物実測図Ⅲ（1/3）……67
Fig. 50 SX26出土遺物実測図Ⅳ（1/3）……68
Fig. 51 SX26出土遺物実測図Ⅴ（1/3,1/2）……69
Fig. 52 SX01・02・03・04・05実測図（1/20）……70
Fig. 53 SX06・07・08・09・10・11・12・13・14・16・17実測図（1/20）……72
Fig. 54 SX19・20・21・22・23・28実測図（1/20）……74
Fig. 55 SX01・04・05・06・07・09・22出土遺物実測図（1/3）……75
Fig. 56 SX25・27出土遺物実測図（1/3）……76
Fig. 57 ピット出土遺物実測図（1/3,1/2）……78
Fig. 58 Ⅰ区包含層出土遺物実測図（1/3）……79
Fig. 59 Ⅱ区包含層出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……81
Fig. 60 Ⅱ区包含層出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……82
Fig. 61 Ⅱ区包含層出土遺物実測図Ⅲ（1/3）……83
Fig. 62 Ⅱ区包含層出土遺物実測図Ⅳ（1/3）……84
Fig. 63 Ⅱ区包含層出土遺物実測図Ⅴ（1/3,1/2）……85
Fig. 64 Ⅲ区包含層出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……86
Fig. 65 Ⅲ区包含層出土遺物実測図Ⅱ（1/3,1/2）……87
Fig. 66 SB13・14・15・16・17実測図（1/100）……90
Fig. 67 SC03実測図（1/60）……91
Fig. 68 SC04,SK07実測図（1/60,1/40）……92
Fig. 69 SB16,SC03,SC04出土遺物実測図Ⅰ（1/3）……93
Fig. 70 SC04出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……94
Fig. 71 SC04出土遺物実測図Ⅲ（1/3）……95
Fig. 72 Ⅳ区表土層出土遺物実測図（1/3）……96

図版目次

PL. 1 a 都地遺跡調査区全景（南から撮影）
b 調査区近景（南から撮影）
PL. 2 a 溝・甕棺墓・掘立柱建物全景（南から撮影）
b 溝・掘立柱建物近景（南から撮影）
PL. 3 a 掘立柱建物・土坑墓全景（南から撮影）
b 土坑・溝・建物検出状態（南から撮影）
PL. 4 a 土坑・溝・掘立柱建物近景（西から撮影）
b 溝・掘立柱建物全景（南から撮影）
PL. 5 a 土坑墓・掘立柱建物全景（北から撮影）
b 掘立柱建物全景（南から撮影）
PL. 6 a 甕棺墓検出状態（南から撮影）
b 甕棺墓検出状態全景（南から撮影）
PL. 7 a 甕棺墓検出状態近景（西から撮影）
b 甕棺墓検出状態近景（南から撮影）
PL. 8 a 甕棺墓検出状態部分写真（南から撮影）
b 甕棺墓検出状態部分写真（南から撮影）
PL. 9 a 甕棺墓検出状態部分写真（南から撮影）
b 甕棺墓検出状態部分写真（西から撮影）
PL. 10 各甕棺墓検出状態－1
PL. 11 各甕棺墓検出状態－2
PL. 12 甕棺墓・土坑墓検出状態
PL. 13 遺物写真－1（縮尺1/15）
PL. 14 遺物写真－2（縮尺1/15）
PL. 15 遺物写真－3（縮尺1/15）
PL. 16 遺物写真－4（縮尺1/7.5、00034は1/15）
PL. 17 遺物写真－5（縮尺1/7.5）
PL. 18 遺物写真－6（縮尺1/6,00007、1/12,00017、他は1/7.5）
PL. 19 1 Ⅰ区全景（南から） 2 Ⅰ区全景（北から） 3 Ⅱ区上層全景（南から）
4 Ⅱ区上層全景(南から) 5 Ⅱ区下層全景（南から） 6 Ⅱ区下層全景（北から）
PL. 20 1 Ⅲ区南半全景(南から) 2 Ⅲ区北半全景（北から） 3 Ⅳ区全景（南から）

	4	Ⅳ区全景(北から)	5	SB05･06	6	SB16
PL. 21	1	SC01	2	SC02	3	SC03
	4	SC04	5	SC04竈	6	SC04竈
PL. 22	1	SK05	2	SK04	3	SX26
	4	SX25	5	SX01	6	SX01土層
PL. 23	1	SX02	2	SX03	3	SX04
	4	SX06	5	SX08	6	SX12・13
PL. 24	1	SX09	2	SX09土層	3	SX07
	4	SX20	5	SX21	6	SX28

PL. 25　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物Ⅰ

PL. 26　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物Ⅱ

PL. 27　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物Ⅲ

PL. 28　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物Ⅳ

PL. 29　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物Ⅴ

PL. 30　Ⅳ区出土遺物

表　目　次

Tab. 1　都地遺跡甕棺観察一覧表……43
Tab. 2　都地遺跡Pit一覧表 ……44
Tab. 3　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅰ ……100
Tab. 4　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅱ ……101
Tab. 5　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅲ ……102
Tab. 6　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅳ ……103
Tab. 7　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅴ ……104
Tab. 8　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅵ ……105
Tab. 9　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅶ ……106

付　　図

付図－1　都地遺跡第3次調査遺構配置図（縮尺1/200）
付図－2　金武城田遺跡遺構配置図（縮尺1/200）

Fig. 1　都地遺跡・金武城田遺跡位置図（縮尺1/50,000）

第1章　はじめに

1、調査に至る経過

福岡市の人口増加現象は中央部に薄く周辺部に厚いドーナツ現象をもたらし、このため行政区の分区を昭和57年に5区から7区（早良区、城南区を新設）とした。特に西区は西区、早良区、城南区に分割され、各区の道路・施設の整備は各区の住民から懇願されていたところである。このため土木局道路計画課は金武から野方までの新設道路を計画し、昭和58年よりその計画を実施するにあたり教育委員会文化部文化課に埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。これを受け文化課では、遺跡分布地図、現地踏査、試掘調査を行い7ヶ所（金武城田遺跡、都地遺跡、都地遺跡群第4次調査、七反田遺跡、吉武遺跡群、太田遺跡、羽根戸原C遺跡群）に遺跡の包蔵地を確認しその旨を道路計画課に報告した。昭和58年度には城田遺跡と都地遺跡の発掘調査を行うこととなり、翌59年度には吉武遺跡群の一部、60年度には羽根戸原C遺跡の調査、61年度には七反田遺跡と太田遺跡の一部、都地遺跡群第4次調査、62年度は太田遺跡と吉武遺跡群の未調査部分の調査を実施した。

2、調査の組織

調査委託	福岡市土木局道路計画課・西区土木農林課
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係
調査総括	文化課課長　生田征生（前任）　柳田純孝
	第1係長　柳田純孝（前任）　折尾学
事務担当	岡嶋洋一（前任）　岸田隆
調査担当	二宮忠司　浜石哲也
調査補助	赤司善彦　岡部裕俊　上敷領久　佐藤一郎　渡辺和子
整理補助	大庭友子　久保寿一郎　田中稿二　林田憲三　村上かをり
発掘作業	牛尾豊　牛尾準一　尾﨑達也　榊光雄　榊太郎　柴田大正　結城弥澄
	青柳弘子　石橋輝枝　伊藤みどり　井上ムツ子　井上和子　井上清子
	牛尾二三子　牛尾シキヨ　牛尾奈美枝　牛尾秋子　牛尾睦子　尾﨑八重
	大内文恵　太田頼子　大穂玉恵　大穂栄子　大穂朝子　小柳和子　金子ヨシ子
	菊地キミ　菊地栄子　菊地ミツヨ　北島藤子　倉光千鶴子　倉光ナツ子

倉光アヤ子　倉光京子　菰田洋子　斎藤国子　榊スミ子　清水文代
正崎由須子　新町ナツ子　杉村文子　惣慶トミ子　高原ナヲ　典略初
鍋山千鶴子　中牟田サカエ　能美八重子　浜田澄美枝　藤タケ　細川ミサヲ
又野栄子　真名子ユキエ　八尋君代　山下サノエ　山野住実恵　山西人美
吉岡員代　吉岡タヤ子　吉岡蓮枝　脇坂ミサヲ　結城シズ　結城信子
結城千賀子　結城君江　横溝恵美子　米嶋ハツネ

整理作業　青柳恵子　有吉千栄子　尾崎京子　大江美和子　神田洋子　木村絹子
斎藤美紀枝　嶋崎純子　南里三佳　平田ミサ子　真名子順子　藤信子
藤崎洋子　戸渡洋美

このほかにも地元の方々をはじめとして多くの方々のご理解、ご協力によって事故も無く調査・報告書が完了する運びと成りました。紙面をもって感謝の意を表します。

3、遺跡の立地と環境

都地遺跡群は福岡市西区大字金武字都地に立地している。国土地理院発行の1：50,000福岡の左上隅を基準として右に13cm、下に30.4cmの位置にある。背振山系から派生した油山山麓は内野付近まで西に延び、ここを境として北に向かい西公園まで達し福岡平野と早良平野を二分する。また一方、福岡市と佐賀県の境をなす背振山から派生した500m～1,000m級の山々が北へ北へと延び長垂海岸まで達し糸島平野と早良平野を二分する。海岸より約2㎞南に叶岳がある。その南に飯盛山、西山とつづくが、この飯盛山と西山の間に古代からの幹道が開かれている。これは日向(ひなた)峠と呼ばれ、糸島平野と早良平野を結ぶ幹道であった。

西山から派生した段丘は標高20m～40mを保ち、北・東に傾斜を持ちながら室見川に達する。地名は西側を乙石、北側を吉武、東側を都地と言い、乙石から吉武にかけて西山を上流とする日向川が流れている。この日向川は吉武遺跡群のなかでかなり流れの方向を変えた形跡が調査によって明らかとなった。これは発達した段丘と段丘の間に僅かな谷部が形成されていたことが一つの要因で大水の度ごとに流れが変わったものと思われる。

都地地区、城田地区でも数多くの谷が形成されている。しかしすぐ東側が室見川であることとヤツデ状に広がった舌状台地であることから水の便は良かったものと思われる。遺構は台地上に立地しているが、平坦部には住居址、館跡、甕棺墓群などが形成されている。山岳部には7～8世紀にかけての古墳群が形成されている。福岡市には貴重な装飾古墳である金武古墳群吉武K群第8号墳や通称夫婦古墳と呼ばれている金武古墳群乙石H群等がある。平坦部には5世紀代の古墳である樋渡古墳第1・2号墳や6世紀代の多くの円墳がある。

一方、城田遺跡は都地遺跡から南に約１㎞のところに位置する。野方・金武線の金武側の出発点に近い所である。500m東に室見川が流れ、西山から派生した丘陵の先端部に位置し標高が33m前後をはかる。近くには谷を挟んで東に浦江遺跡群があり、西に乙石遺跡群がある。それぞれ谷を挟みヤツデの葉のように入り組み合っている。比高差は10～20m前後である。

飯盛圃場整備事業（飯盛地区農業構造改善基盤整備事業）の事前発掘調査でこの地区の遺構の在方が鮮明に成りつつある。第１次調査（1.2ha）では弥生時代前期末の金海式甕棺墓・中期の甕棺墓群（140基）・中期の円形住居址群・古墳時代前期の住居址群・日向川の支流等を検出した。

第２次調査（２ha）では、縄文後期の貯蔵穴48基、弥生時代後期の溝・掘立柱建物、古墳時代前期から中期にかけての住居址・掘立柱建物・溝等を検出した。なかでも韓国系の陶質土器が多量に出土した８区は須恵器しか出土せず、これに反して９区は土師器しか検出しない現象が認められた。

第３次調査（2.5ha）では、弥生時代の中期の甕棺墓200基余りと樋渡古墳１・２号墳（１号墳は前方後円墳、２号墳は前方後方墳）、古墳の下層から検出した甕棺墓には鏡・玉・剣等の副葬品を持ち、墳丘を形成していたことが明らかとなった。

第４次調査（2.5ha）も３次調査と同様に弥生時代前期末から中期にかけての甕棺墓が250基以上検出され、なかでも前期末の金海式甕棺墓には墓標とも思える石組みが検出され、その下には他の甕棺より大型の物や大型の木棺墓が埋葬されていいた。甕棺内部には三角縁神獣鏡をはじめ勾玉・管玉・細形銅剣等が副葬されていた。副葬品を持つ甕棺墓は区域が限られ、上部構造を持つ。他の甕棺墓は上部構造や副葬品はまったく認められなかった。

他に古墳時代前期の溝から模型の船（構造船）や陶質土器等が出土している。遺構は掘立柱建物や竪穴式住居址等を検出した。

第５次調査（３ha）では、大石遺跡（甕棺墓200基の内10数基に銅剣・銅戈・玉等の副葬品を持ち、高木遺跡と同様に区域が設定されている状態で検出された甕棺墓群がある）や太田遺跡（飯盛太田第２次調査）などの調査をおこなった。

大石遺跡と高木遺跡の墓域構造が非常に類似しているばかりでなく、同時期もしくは一世紀前後の上層階級の墓域として設定されたとも考えられる。

飯盛圃場整備事業の調査で約1,000基以上の甕棺墓が検出されているが、出土状態から考察すると(1)甕棺ロードとも呼べる配置を呈する。これは埋葬地域が他の部分より高かったことを意味し、上層階級の墓域はその平坦地に区域を設定したものと思われる。(2)甕棺墓の時期は弥生時代前期末の金海式土器から始まる。この時期の墓域は４ヶ所ある。１ヶ所目は第１次調査地点の東側で南西から北東に向かって約30基検出した。２ヶ所目は第１次調査地点の西側４区で12基が直径10mの範囲に納まる墓域を設定していた。この中の１基から銅剣の鋒先が出土した。

Fig.2　野方・金武線路線図と調査地点（縮尺1/10,000）

3ヶ所目は第4次調査の吉武高木遺跡で、上部構造を持ち甕棺も一回り大きく造られている。墓域も直径20mの範囲に納まる。4ヶ所目は吉武高木遺跡の谷を挟んだ北側に位置する吉武大石遺跡である。大石遺跡も銅剣・玉等を数多く副葬した甕棺墓があたかも区域を設定したかのような検出状態であった。

弥生時代中期になると甕棺ロード地帯に数多くの甕棺墓が埋葬されるが、その中心となる地区は第3次調査の樋渡古墳1号墳の下層にマウンドを持つ一群であろう。鏡・玉・直刀等を副葬品として埋蔵された甕棺墓は他には認められず、被葬者は上級階級者と思われる。
弥生時代後期の甕棺墓も検出されたが、その数は少ない。

弥生時代前期末から中期にかけてこの地域を支配した人々の墓域として吉武高木遺跡、大石遺跡、樋渡遺跡を当てることができる。時期的には高木遺跡と大石遺跡が弥生時代前期末から中期初頭にかけての支配者集団と上級階級の墓域と考えられる。もう一歩押し進めて考えると高木遺跡は支配者の墓域、大石遺跡は上級階級・戦闘・戦士階級の墓域として設定することも出来る。樋渡遺跡は弥生時代中期中葉から後期初頭までの支配者集団の墓域で全体にマウンドを形成している。このマウンドがいつの時期に造られたかという問題はあるが、土層を見るかぎり中期にもマウンドを持つていたことが明らかである。このことは新しい発見で、前期末の甕棺墓には石を組合わせて墓標とし、中期から後期にはマウンドを持つという事象が明らかとなった。弥生時代だけでなく古墳時代にも数多くの人達が生活を営んだ痕跡が検出されているが、特に圃場整備調査の第2・3次調査で出土した陶質土器、準備造船の模型等特異な出土遺物が数多い。古墳築造では樋渡前方後円墳を始めとして前方後方墳、円墳とその周囲に広がりやがて群集墳へと移行し、山麓の方へ築造していく。

歴史時代には圃場整備内に寺院址（？）やそれを取り囲む溝（瓦が多量に出土）や条里の区割溝等が検出している。寺院とすれば東光寺址か長楽寺址の前身とも考えられる。

南北朝時代から安土・桃山時代にかけての遺構として都地館跡がある。現状は土塁しかないが全面的に調査をおこなえば全容が明らかになると思われる。昭和52年度に一部破壊されるため土塁の調査を行った。土塁は内側に巡らされ、外側に周溝を持つ形態である。溝から土塁までの高さは約4m（溝の深さ2m、土塁の高さ2m）である。現在判明している廓は北と南の2ヶ所である。文献にある細川若狭ノ守の館跡であることは明らかである。また市指定の妙法寺榊文書の中にあることもこれを裏付けるものである。

このほかにも板碑や石造狛犬（県指定）等があるが、この時代の飯盛神社の繁栄から発せられたものである。飯盛山の山頂には経筒や経瓦の出土はよく知られている。細川若狭ノ守の時代に山城（飯盛山城址）があり、有田の田部氏が荒平山城を持ち、合戦に及んだことが記録として残っている。

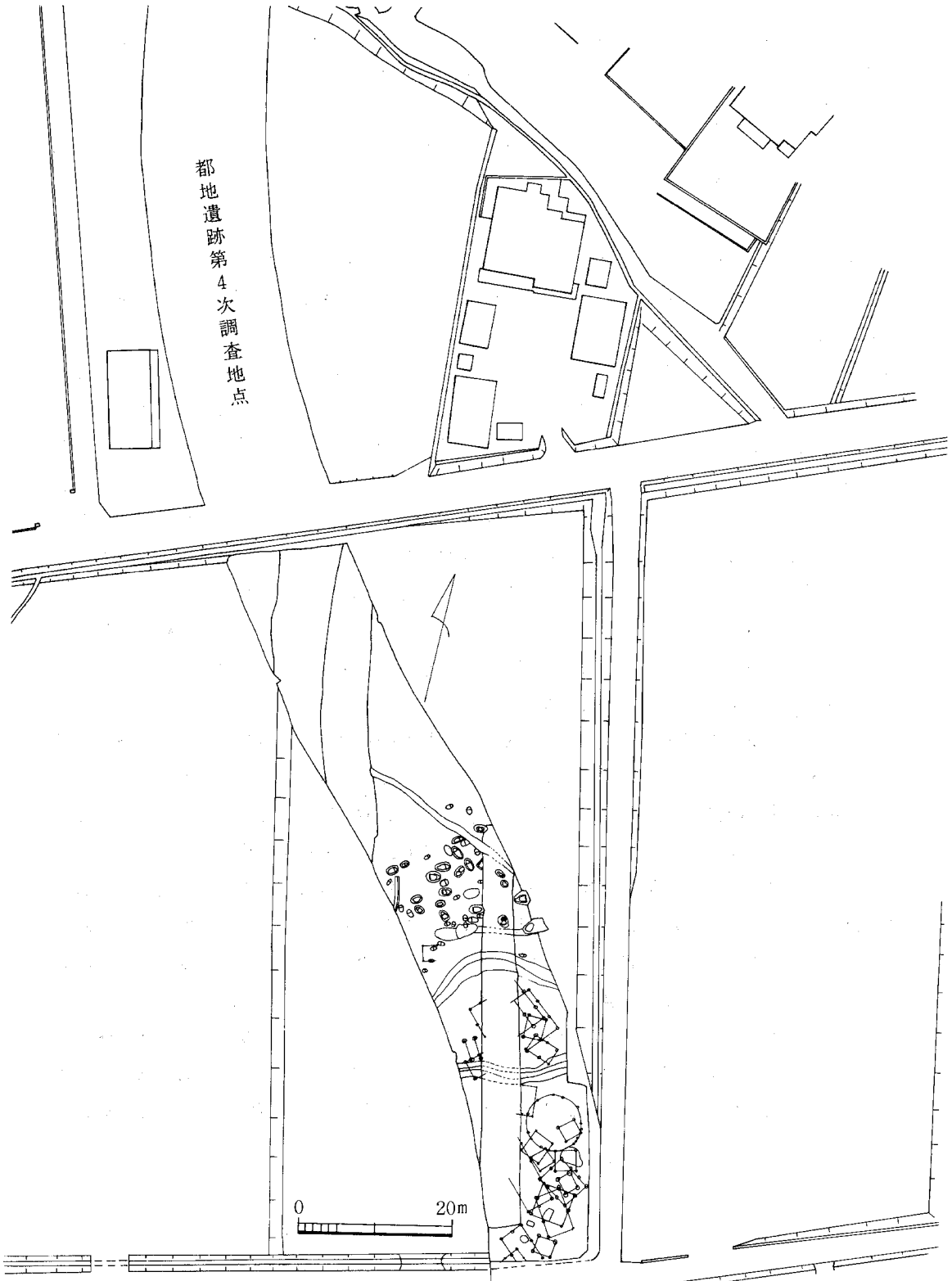


Fig. 3　都地遺跡第3次調査区（縮尺1/800）

第２章　都地遺跡群第３次調査

１、発掘調査の概要

都地遺跡群は福岡市西区大字金武字都地一帯を総称するが、都地館跡に因んでいる。第１次調査は都地館跡、第２次調査は都地南遺跡、第３次調査は野方・金武線第１次調査、第４次調査は野方・金武線第４次調査等を総称して都地遺跡群とする。

都地遺跡群第３次調査は前年度の試掘結果で甕棺墓群の調査との報告があり、幅16m、長さ150mの2,400㎡を調査対象面積とした。この内720㎡はブドウ園の耕作時に破壊を受けていたため調査外とした。完掘したのは1,680㎡である。調査によって検出した遺構は弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓45基・木棺墓１基、古墳時代の掘立柱建物15棟・溝２条、歴史時代の土坑墓３基、溝２条、ピット多数である。この調査地点もブドウ園の耕作（幅５m、深さ0.5m）で中央部が撹乱されていた。このため数多くの甕棺墓が破壊された痕跡が認められた。また古墳時代の遺構や歴史時代の遺構の中からも甕棺の破片が数多く出土するところから、これらの時代にも弥生時代の甕棺墓は破壊されたものと思われる。

弥生時代の甕棺墓の検出状態を観るとほぼ南西から北東を軸として約20mの幅で確認されている。これは吉武高木・大石・樋渡遺跡の甕棺墓の配列とよく類似している。甕棺ロードとも呼べる形状を呈している。この現象は吉武遺跡群・都地遺跡群に限ったものかもしれないが、現象としてはっきり捉える事が出来る。これはこの部分が周辺部より高かったことを意味し、弥生人がこの部分を墓地として認定した結果であろう。また小児は浅く、成人は深く埋葬していることも吉武遺跡群と同じである。

遺構は北西に薄く南東に濃い検出状態を示すが北西部分はかなりの削平を受けていることが土層の観察で判明した。ただ削平を受けていなくとも南東ほどの濃い分布は無いものと思われる。

古墳時代の遺構では、かなりのピット群が検出出来たが調査面積が狭いこととブドウ園の撹乱によつて掘立柱建物を検出することが出来なかった。おそらくまだ数十棟は建つていたものと思われる。

歴史時代の遺構の時期は明確にはできない。糸切り皿の破片が一片出土しただけである。

発掘調査は昭和58年６月１日より開始し、７月31日をもつて終了した。

2、調査の記録

(1) 弥生時代の遺構　Fig. 4、14、16　付図－1　PL. 4、6～12

弥生時代の遺構として確認出来たものは溝1条、削平の著しい円形住居址・掘立柱建物と甕棺墓・木棺墓である。調査の範囲以上に遺跡は広がりをみせる。その範囲を確定することは時間の問題、調査上の問題で出来なかったが、古老の話しではブドウ園を造る際にかなりの甕棺が出土し、その範囲は調査区より東に300m離れた金武小学校のグランドまで続いていたとのことである。現に金武小学校のグランドは甕棺墓群として遺跡に登録されている。この周辺一帯は弥生時代の生活、墓地として利用されていた所でその極一部を調査したものであろう。またブドウ園のためにかなりの広範囲に渡り撹乱を受けていることが判明した。

溝（SD－02）Fig. 14、付図－1、PL. 1、4

甕棺墓と住居址群を区別する位置に設けられ住居址群を取り囲む形状を呈する。調査範囲が限られているため全体の形状をつかむことはできないが現存するもので幅1.6m、深さ70cm、長さ18mを測る。遺物は図示できない破片ばかりであるが中期の範中に入るものばかりで、時期も弥生時代中期に比定することができる。

住居址（SB－01）Fig. 16、PL. 1、4

Fig. 16SB－01に見られる柱穴だけの遺構である。遺構全体が著しい削平を受けているため柱穴だけしか残らなかったものと思われる。柱穴の間隔は少し広く2.5mを測る直径7mの円形住居址である。遺物が出土した柱穴はPit－21、22、46で小破片ばかりで実測に堪えうる物はないが弥生時代中期の土器である。

甕棺墓（SK－01～46）Fig. 4～13、付図－1、PL. 6～12

甕棺墓群は幅20mで南西から北東にかけて列をなしている。これは吉武遺跡群飯盛遺跡、高木遺跡、大石遺跡の甕棺墓群の配列と同じ高い尾根状の上に墓域を設定したことが要因としてあげられる。これは地形による要因で、ヤツデ状に広がった扇状地は尾根と谷の比高差がある。谷部や水田平坦地に住居、尾根部に墓地とする生活上の知恵から由来している。しかしブドウ園による撹乱で十数基以上が破壊されたものと考えられる。また古墳時代以降にも溝や土坑によって破壊を受けている。これらの中で46基の甕棺墓を検出した。一般的に小児甕棺墓が上に埋棺され、成人用甕棺墓が下に埋棺されていることは当遺跡でも同じである。時期の相違から甕棺墓が下の甕棺墓を破壊している例SK－07、08等もある。

SK－01（Fig. 5）この小児甕棺墓が最も北に位置する。約1/3が破壊されているが甕＋甕の接口式の小児甕棺墓である。墓坑は一方が隅丸になる形状を呈する。　**SK－02**は頭部を北に向け挿入式の甕＋甕の小児甕棺墓である。この2基が最も北に位置する。　**SK－03**は鉢＋甕の成人

甕棺墓の接口式であるが、上甕と下甕の1/3がブドウ園の撹乱により破壊されている。主軸はN－71°－Eの方位を示す。 **SK－04**はSD－05によって破壊されている。下甕の底部が少し移動している。両方の口縁部は離れているが、その部分に粘土帯を巻き付けている。甕＋甕の小児甕棺墓で埋土角度（今後埋角という）は－9度である。 **SK－05**もSK－04と同様にSD－05によってほとんど破壊されている。恐らく甕＋甕の成人甕棺墓で主軸はN－38°－Eを測る。 **SK－06**もSD－05により切られ、約1/3程度しか残っていない。破壊が著しいため合わせ甕か単棺なのかは不明であるが、ここでは小児の単棺墓として登録しておく。 **SK－07**は他の遺跡の小児甕棺墓が成人甕棺墓の上に造られていると同様にSK－08の上面に造られ、このため破壊を受ける割り合いが高く上甕と下甕の約3/4が破壊されている。恐らく甕＋甕の小児甕棺墓であったものと思われ、ほぼ水平に埋棺されている。 **SK－08**は鉢＋甕の成人甕棺墓で覆口式である。底面に粘土が観察できたので恐らく粘土帯を巻いていたとおもわれる。埋角は－7°30′で、主軸はN－57°－Wである。 **SK－09**は両方の口縁部を打ち割り粘土帯によって接合している。両方とも底部が現存していないため埋角は不明であるが下甕から5度前後のものであろう。甕＋甕の成人甕棺墓である。主軸はN－12°－Wの方位である。 **SK－10**は鉢＋甕の組み合せの接口式成人甕棺墓である。墓坑は楕円形を呈し、ほぼ水平に埋棺している。下甕の底部は動いているため上甕の状態からみると埋角がほぼ0°と考えてもよい。主軸はS－57°－Wの方位である。 **SK－11**は下甕の約2/3がブドウ園により破壊を受けている。甕＋甕の接口式小児甕棺墓である。主軸はS－64°－Wで、埋角は上甕で3度を測る。 **SK－12**は現存部分が僅かであるためかろうじて甕＋甕の接口式小児甕棺墓であることが判明した。 **SK－13**は隅丸方形の土坑で、埋土の中に上甕の破片は全くないところから単棺と考えてよい。埋角22度、主軸S－63°－Wの方位をもつ成人甕棺墓である。 **SK－14**は上部構造を破壊されているため単棺か合わせかは不明。壷形土器の小児用甕棺墓で埋角32度、主軸N－44°－Eの方向を測る。 **SK－15**は当遺跡で2番目の大きさをもち、下甕は126.5cmもある。上甕と考えられるものが埋土から出土している。恐らく覆口式成人甕棺墓と考えられる。埋角は37度、主軸S－60°－Wの方位を測る。 **SK－16**はブドウ園の造成による削平と支柱のためほとんど破壊されている。かろうじて口縁部と胴部の一部が現存するだけであった。主軸はN－45°－Eの方位をとる。 **SK－17**は甕＋甕の接口式小児甕棺墓であるが破壊が著しく上甕はほとんど残っていない。主軸はS－6°－Wの方位を測る。 **SK－18**は上甕が口縁部だけで、甕＋甕の接口式小児甕棺墓で埋角13度、主軸N－30°－Wを測る。

SK－19は甕＋甕の接口式小児甕棺墓である。上甕は削平を受けているが底部を除いてほとんど残っている。埋角は23度、主軸はS－44°－Eを測る。 **SK－20**は甕＋甕の接口式小児甕棺墓で一部破壊を受けているが、甕棺自体の形は良く現存している。墓坑は楕円形を呈し、埋角は－5度、主軸はN－59°－Eの方位を測る。 **SK－21**は調査区の南西隅に位置し上・下棺がほとんど破壊を受け胴部の一部しか残っていない。小児甕棺墓とおもわれる。

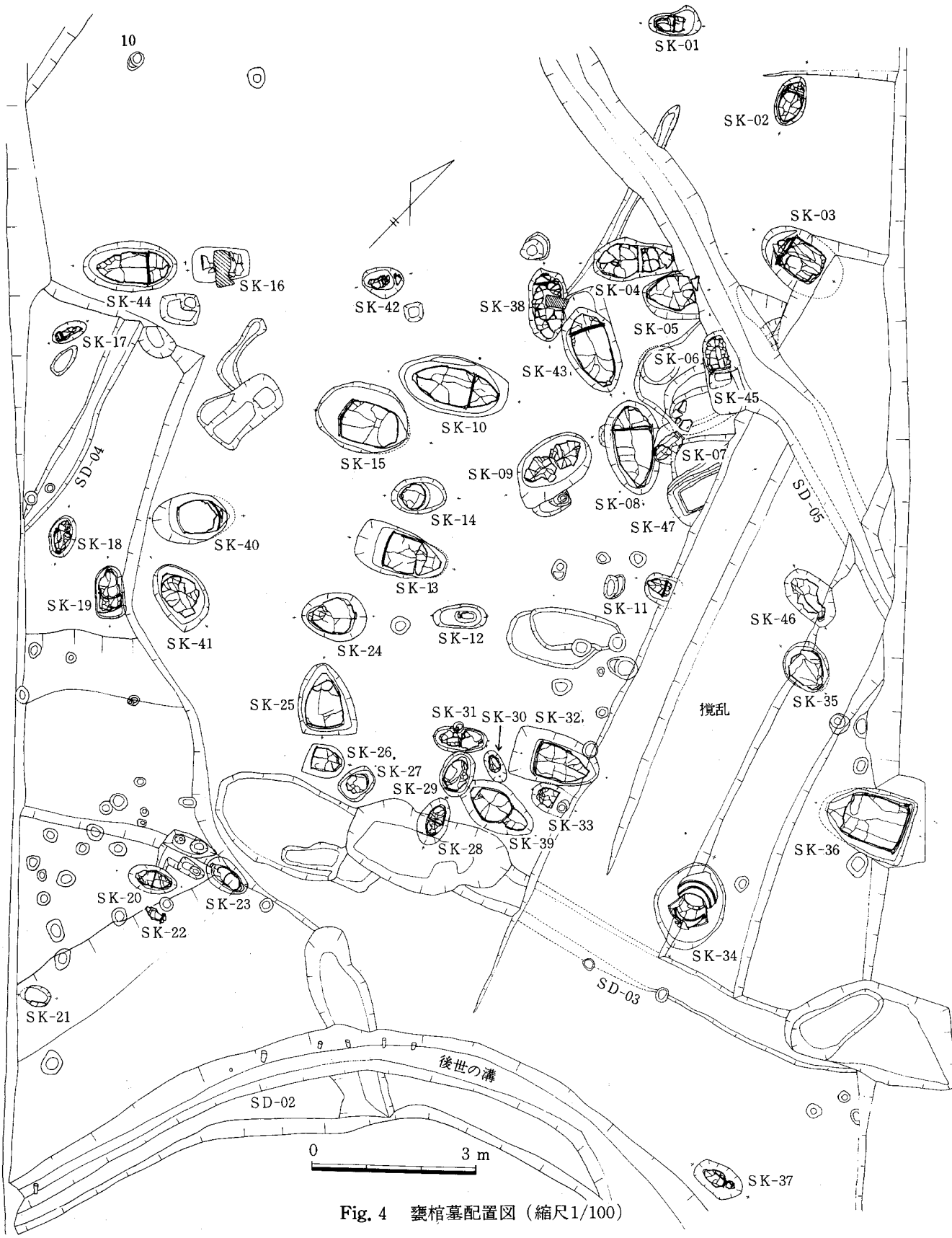


Fig. 4　甕棺墓配置図（縮尺1/100）

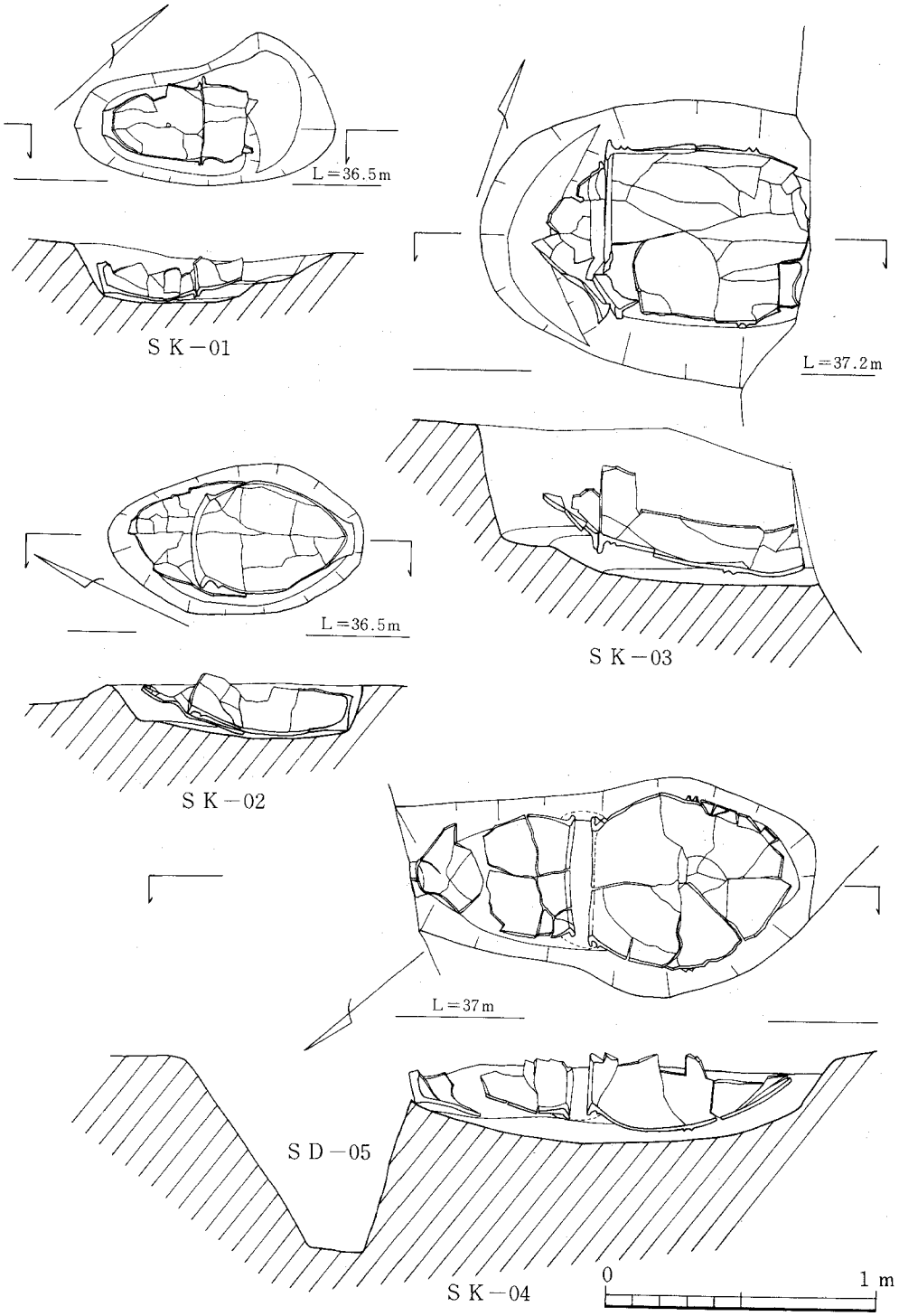


Fig. 5　SK01～04甕棺墓実測図（縮尺1/25）

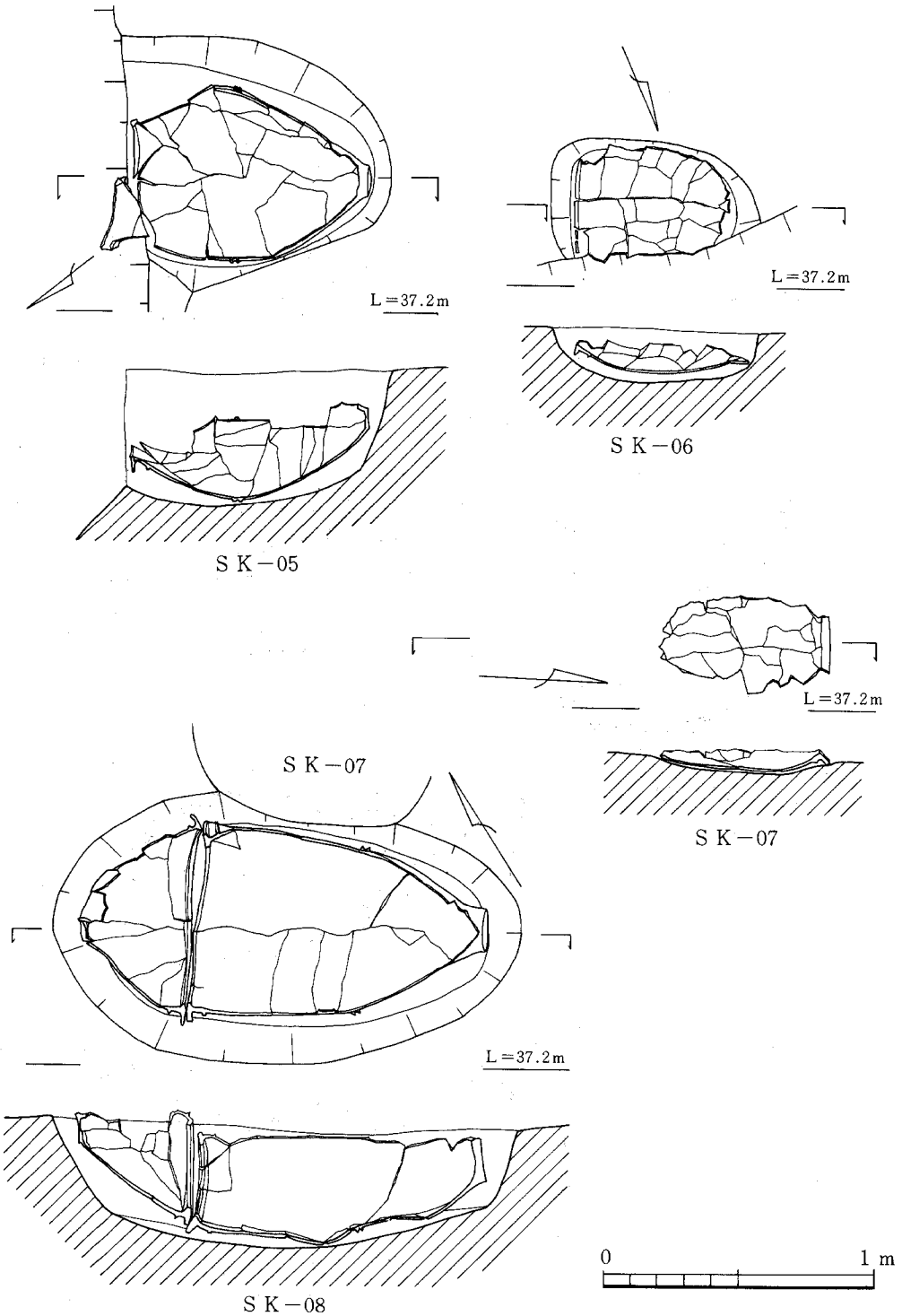


Fig. 6　SK05～08甕棺墓実測図（縮尺1/25）

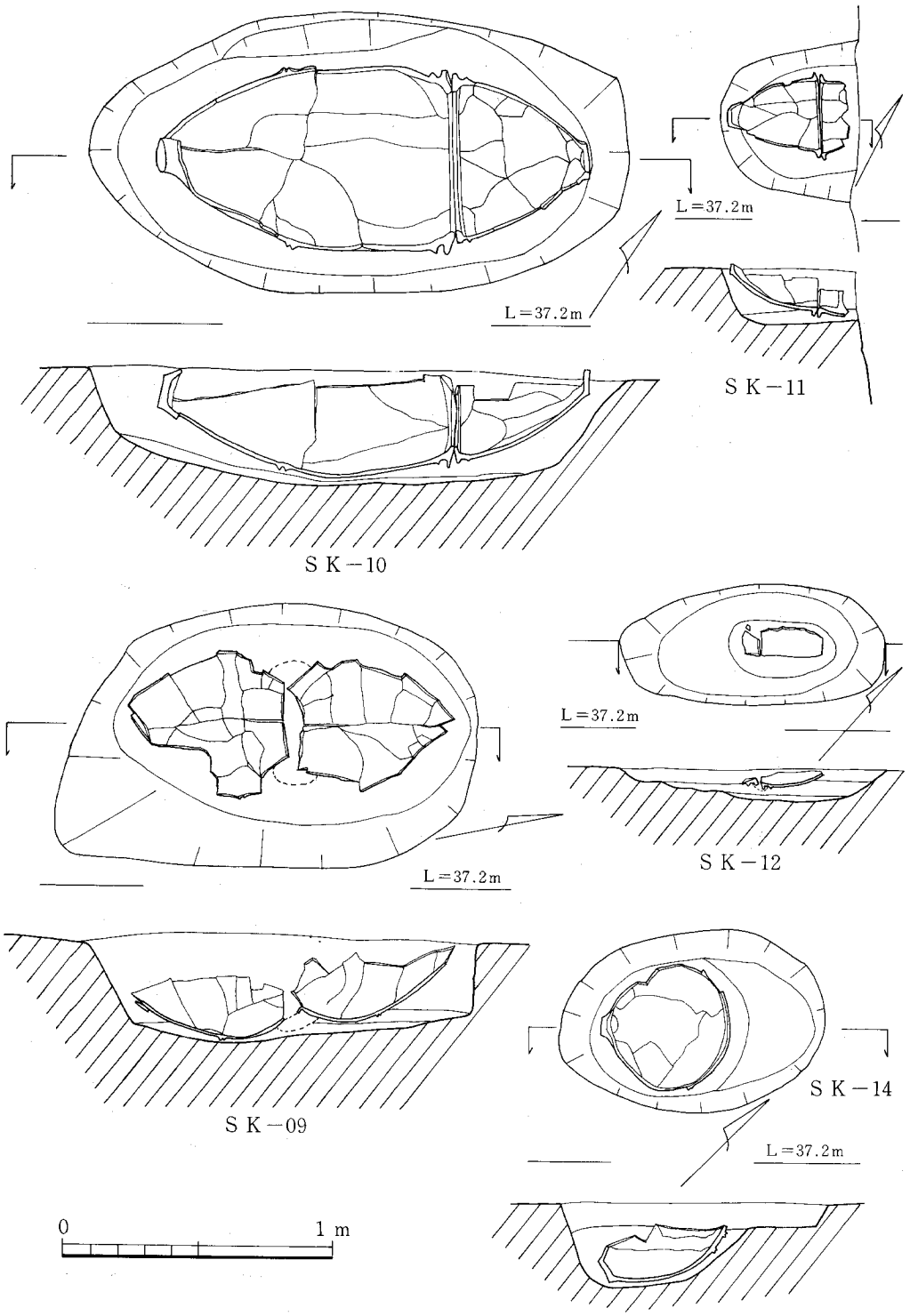


Fig. 7　SK09～12,14甕棺墓実測図（縮尺1/25）

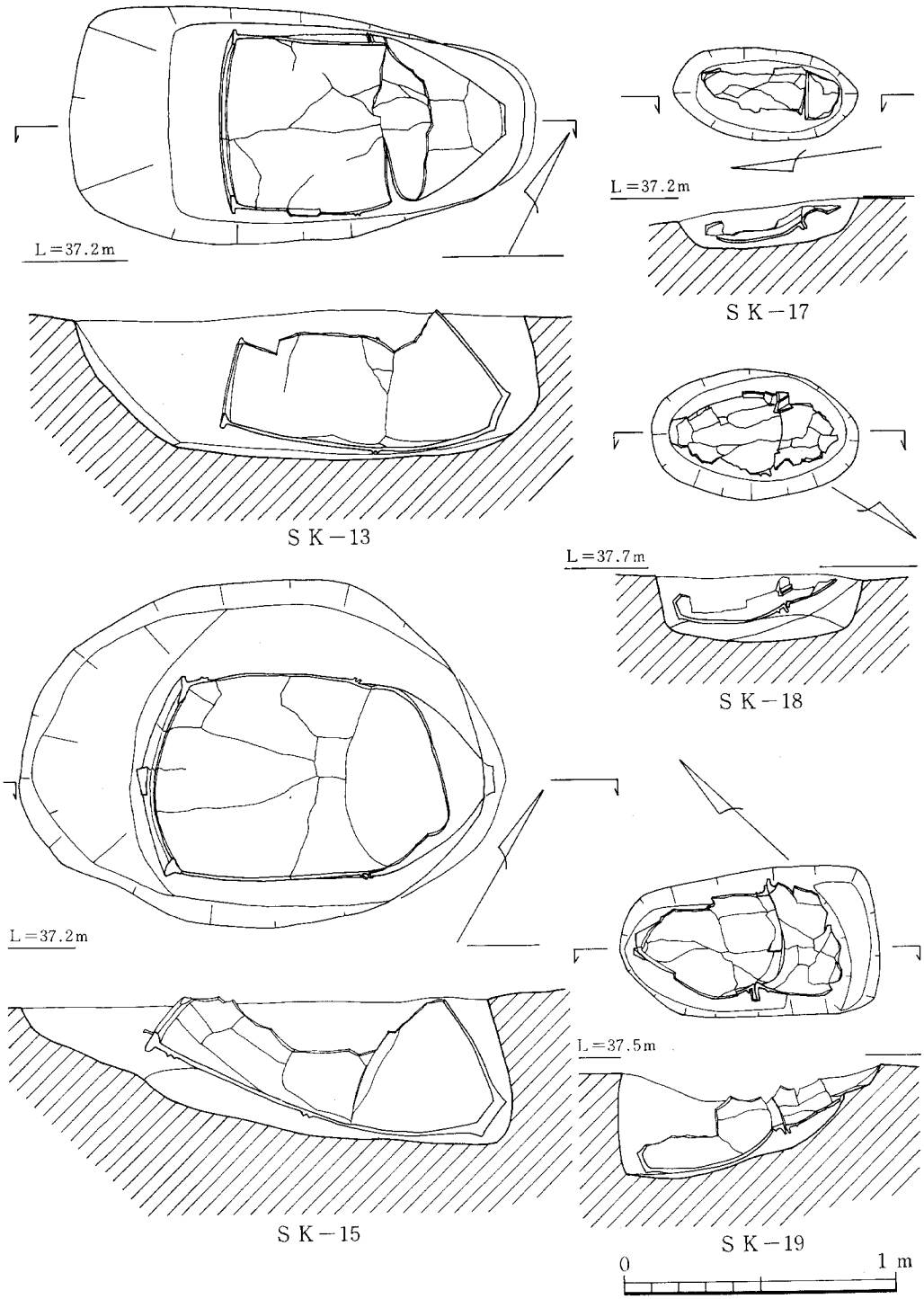


Fig. 8　SK13,15,17～19甕棺墓実測図（縮尺1/25）

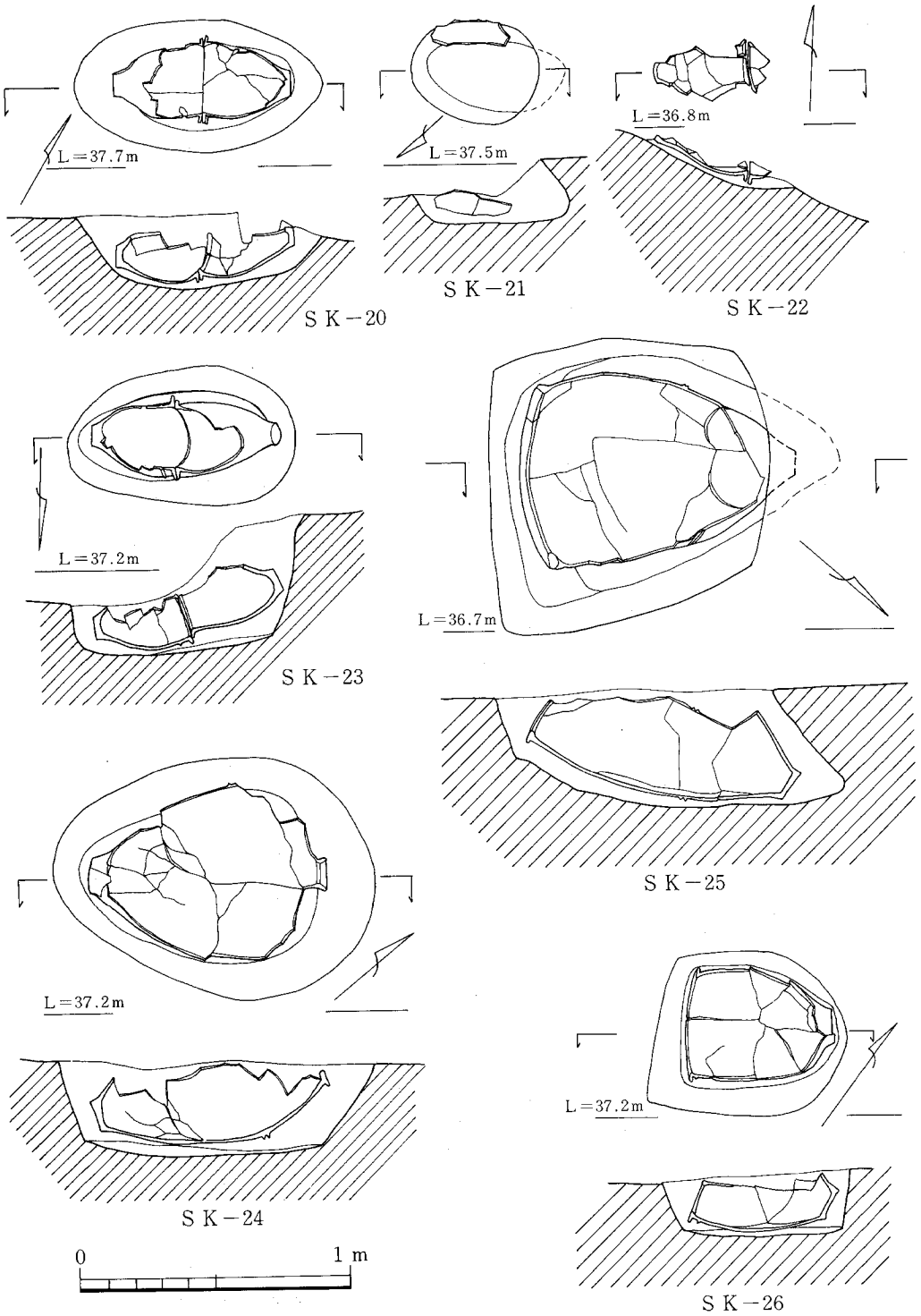


Fig. 9　SK20～26甕棺墓実測図（縮尺1/25）

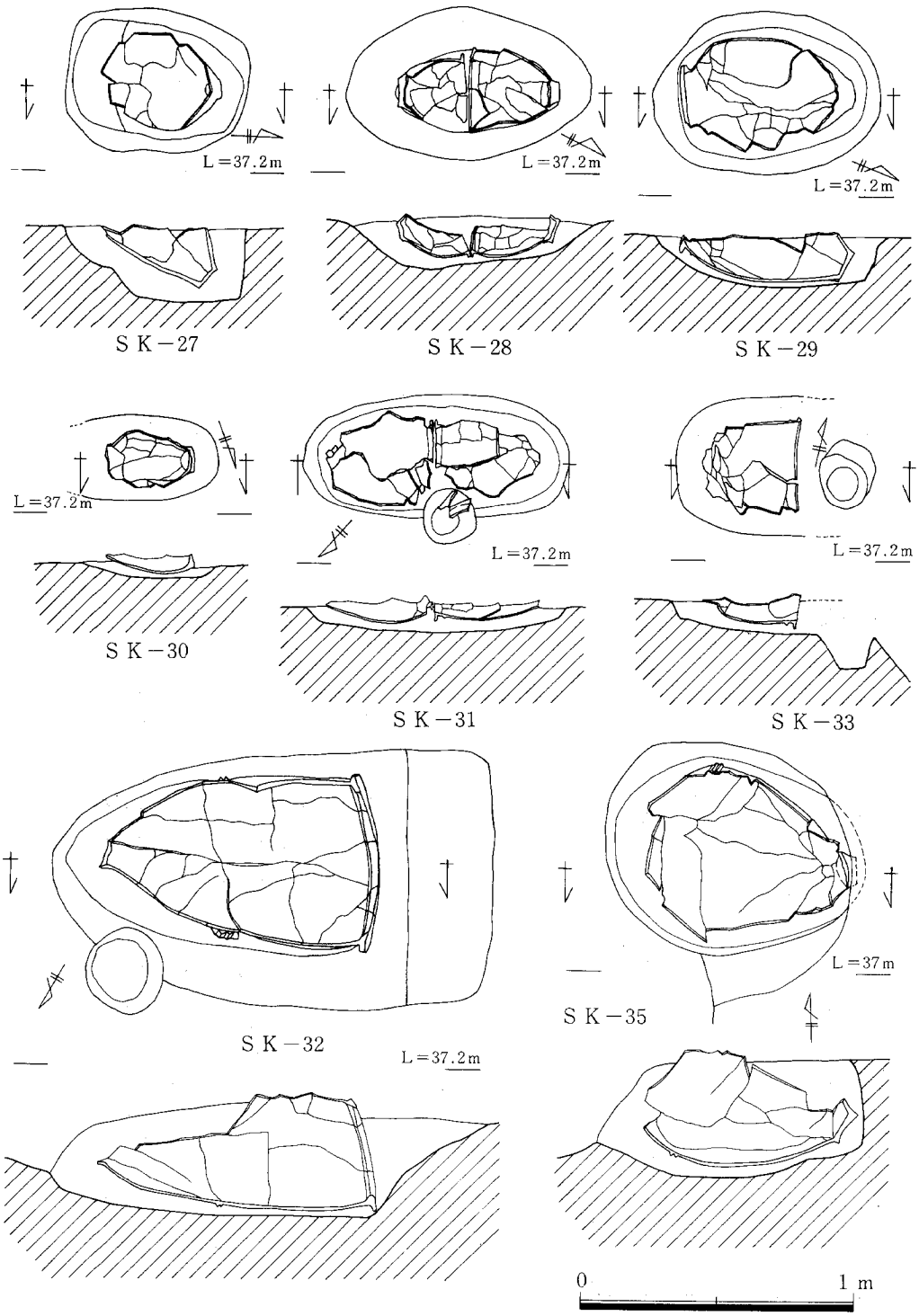


Fig. 10　SK27～33,35甕棺墓実測図（縮尺1/25）

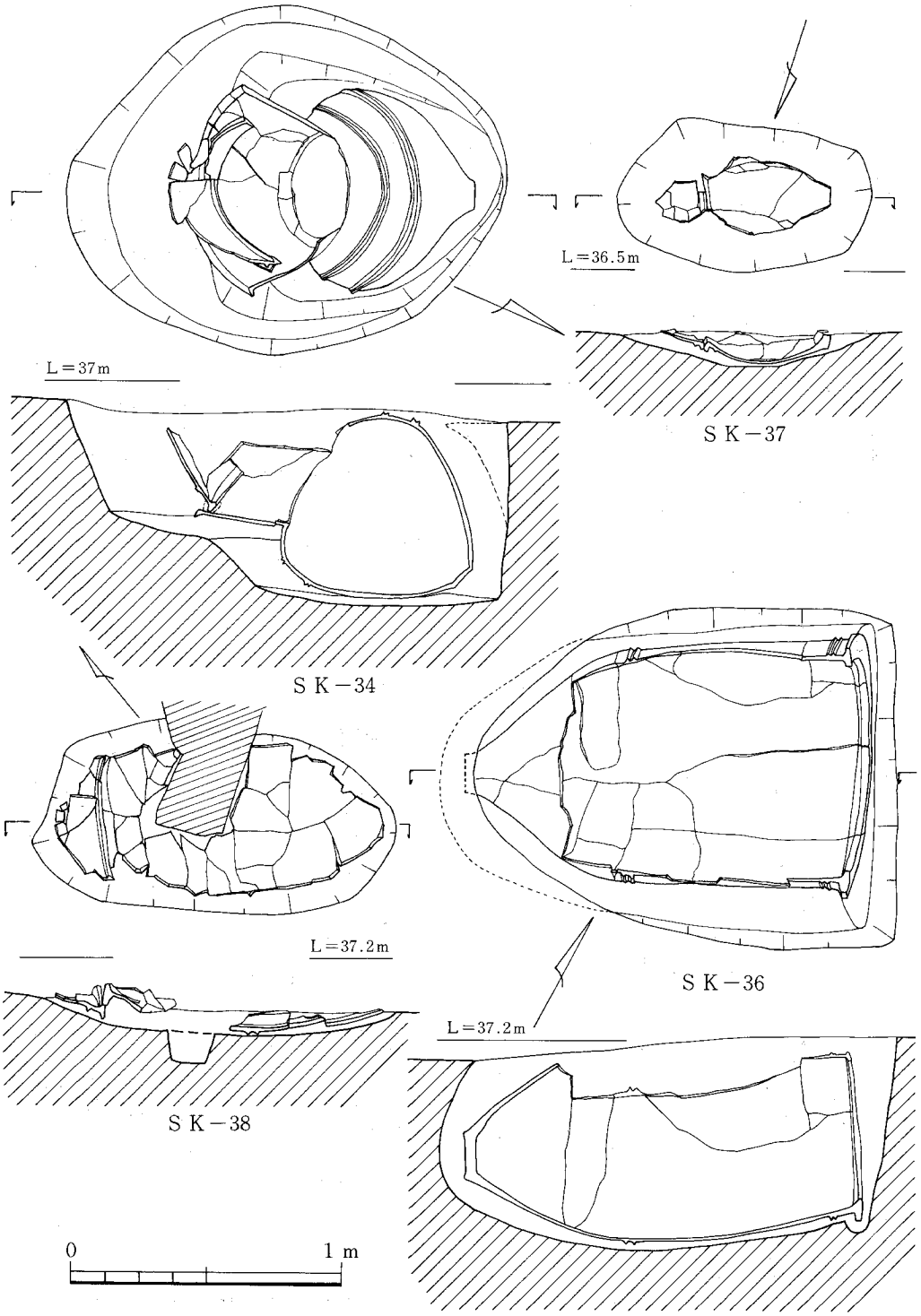


Fig. 11　SK34,36～38甕棺墓実測図（縮尺1/25）

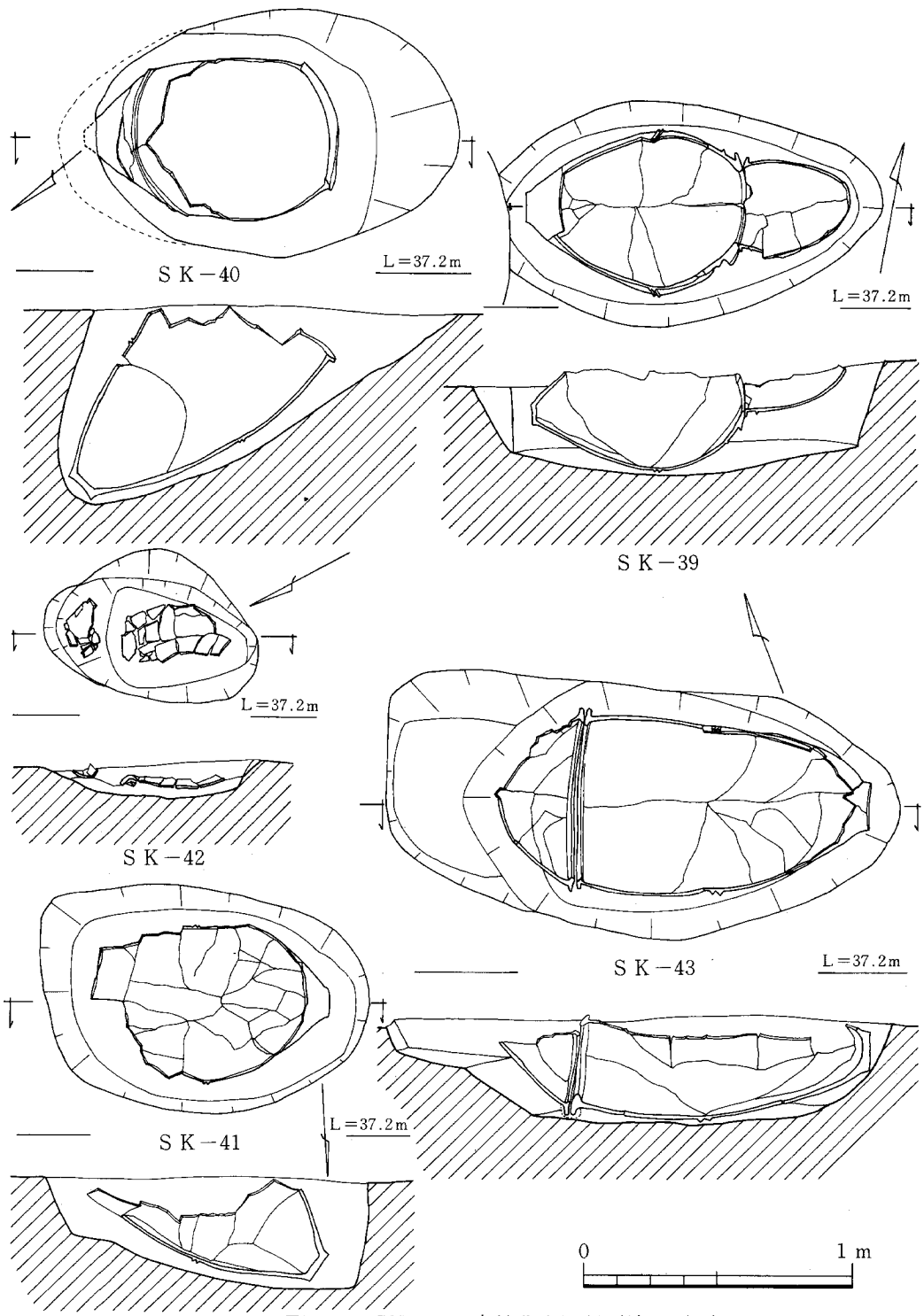


Fig. 12　SK39～43甕棺墓実測図（縮尺1/25）

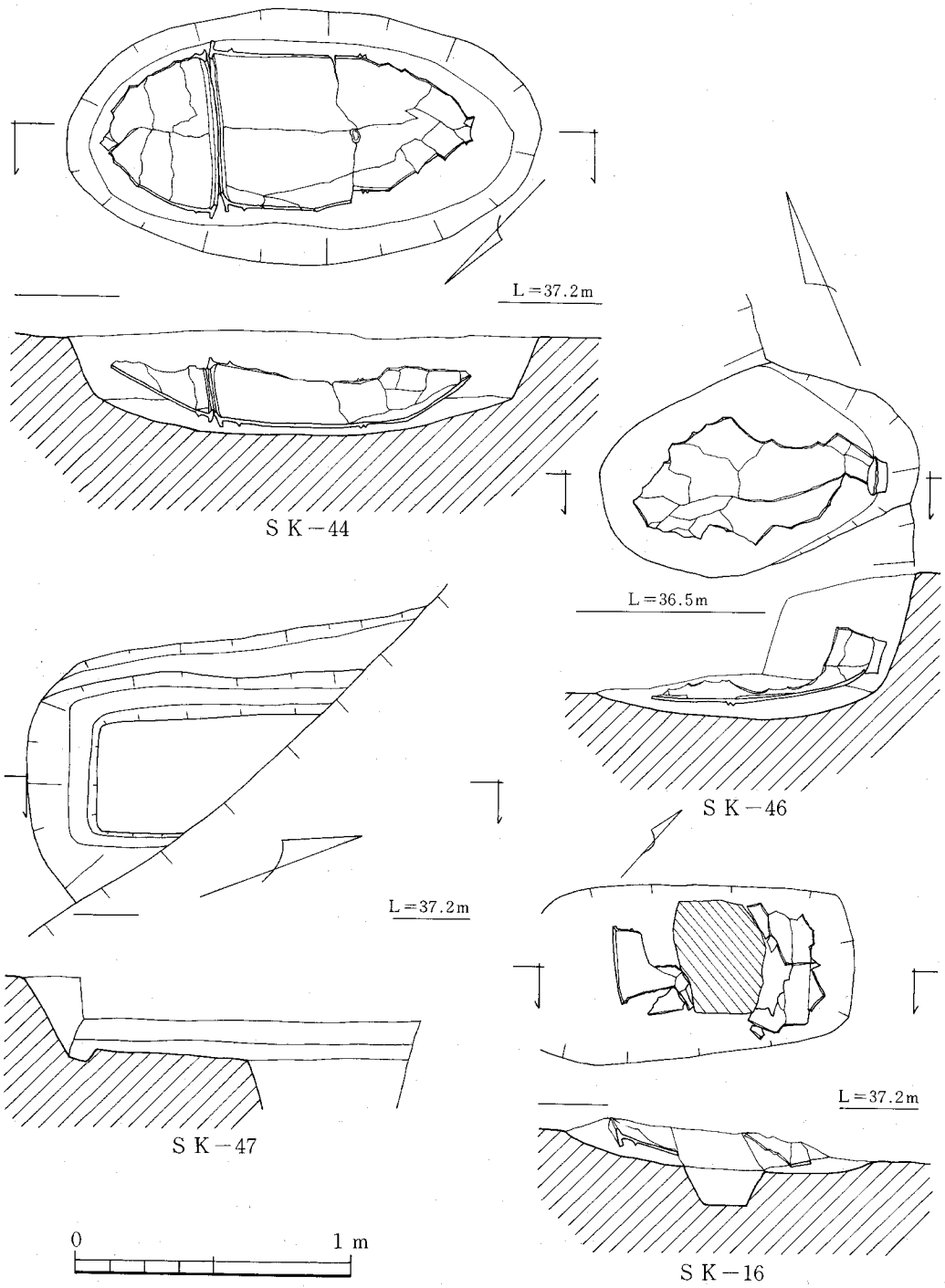


Fig. 13　SK16,44,46,47甕棺墓・木棺墓実測図（縮尺1/25）

SK－22はSK－20の南に位置する。後世の削り出しにより墓坑は破壊され底面の部分だけがかろうじて残っている。これから甕＋甕の接口式小児用甕棺墓で、主軸S－86°－Wの方位を測る。**SK－23**も22と同じく後世の削り出しを受けているが22程ではなく遺存状態は良い。ほぼ楕円形の墓坑を呈し、小児にしては珍しく良く残っている。甕＋甕の接口式小児甕棺墓で埋角７度、主軸S－88°－Wの方位を測る。 **SK－24**は台地全体が削平を受けているにもかかわらず良く残っている。成人の単棺で、埋角が21度、主軸がN－40°－Eの方位を測る。 **SK－25**は単棺で、成人用の甕棺墓である。墓坑は台形を呈し、底部は挿入の形を造り出している。埋角は36度で、主軸N－41°－Wの方位をとる。 **SK－26**は小児甕棺墓であるが、墓坑の形状からすると合わせ甕とは考えられず、50cmの単棺とも考えにくい。一応ここでは単棺として登録しておく。埋角23度、主軸N－54°－Eの方位を測る。 **SK－27**は下甕の胴部下位しか残っていない。恐らく甕＋甕の小児甕棺墓であろう。埋角43度、主軸S－２°－Wの方位を測る。 **SK－28**はSD－04から切られている。甕＋甕の接口式小児甕棺墓である。埋角18度、主軸S－27°－Wの方位をとる。墓坑は楕円形を呈する。 **SK－29**はSK－31,39を切る。恐らく合わせ甕と思われる。上甕を破壊されていると考えられる。甕＋甕の小児甕棺墓で埋角30度、主軸S－23°－Wの方位をとる。 **SK－30**はSK－29,31,32,39に取り囲まれている。削平が著しく下甕の底面しか残っていない残存状態から甕＋甕の小児甕棺墓で、ほぼ水平に埋棺されていたとかんがえられる。主軸はS－20°－Eである。 **SK－31**はPitにより切られている。楕円形の墓坑を呈し、甕＋甕の接合式小児甕棺墓でほぼ水平に埋棺されている。主軸はS－48°－Wをとる。 **SK－32**は墓坑をPitと後世の撹乱により破壊されている。単棺でほぼ水平に埋棺した成人の甕棺墓である。主軸はS－60°－Wを測る。**SK－33**は32の南に位置し、Pitと後世の撹乱によって破壊されているが、かろうじて下甕？が残っていた。埋棺はほぼ水平に置かれている。恐らく甕＋甕の小児甕棺墓であろう。主軸はN－76°－Eを測る。 **SK－34**は鉢＋壷の組み合わせで、挿入式成人甕棺墓である。墓坑は楕円形を呈し、二段掘を行い下甕は挿入となっている。上甕は下甕に載る形を呈し、この部分に白色粘土を巻いている。埋角は44度で、主軸はS－25°－Eを測る。 **SK－35**はブドウ園の撹乱によって上甕から下甕の口縁部にかけて破壊されている。成人の甕棺墓であるが、合わせか否かは不明。埋角は33度、主軸はN－87°－Wを測る。 **SK－36**は当遺跡で一番大きな甕棺である。単棺で全長145.7cm、口縁径91.6cmを測り、最大級の大形甕棺墓である。蓋類の確認はできなかったが、恐らく木蓋と考えて良い。ほぼ水平に埋棺しており、主軸はN－62°－Eを測る。 **SK－37**は南東隅に一基だけある甕＋甕の接口式小児甕棺墓でかなりの削平を受けている。埋角は５度で、主軸はS－72°－Wを測る。 **SK－38**は削平とブドウ園の撹乱により底面の部分しか現存しない。甕＋甕の覆口式小児甕棺墓でほぼ水平に埋棺している。主軸はN－50°－Wを測る。 **SK－39**は墓坑の一部をSK－29によって切られている。覆口式の甕棺墓で下が大型甕形土器、上が小型甕形土器であることから成人と小児の中間に位置する。埋角は４度で主軸はN－79°－Eを測る。

SK－40は傾斜角度28度の掘り込みを持つ甕の単棺である。埋角44度、主軸N－40°－Eを測る。

SK－41は40の南に位置し、ほぼ東に主軸を持つ甕の成人用単棺である。上部は削平を受けている。埋角35度、主軸N－87°－Eを測る。 **SK－42**は10の西に位置し北東に主軸をとる。合わせ甕は大部分破壊を受けているが、下甕の口縁部の下に上甕の口縁が僅かではあるが認められる。覆口式甕＋甕の小児甕棺墓である。下甕はほぼ水平に埋棺されている。主軸はN－29°－Eを測る。 **SK－43**は38によって墓坑を切られている。墓坑上部をかなり削平されているが、2段の掘り方を持つ。棺はほぼ水平に埋棺され、鉢＋甕の成人甕棺墓で、主軸はN－69°－Wの方位をもつ。 **SK－44**は調査区の北西隅に位置し、SK－17に近接している。ほぼ水平に埋棺され、鉢＋甕の接口式成人甕棺墓である。主軸はN－47°－Eの方位をとる。 **SK－45**はSK－06の直下にあり、06とSD－05、ブドウ園の造成により破壊を受けている。このためほとんど壊滅状態で僅かに底部が残っているに過ぎなかった。 **SK－46**もブドウ園の撹乱でその大半が失われ、底面に張りついている部分だけが辛うじて現存していた。成人棺ではあるが単棺なのか合わせ甕なのかは不明。埋角44度、主軸N－66°－Wの方位をとる。

木棺墓SK－47 Fig.13、PL.7

木棺墓SK－47は甕棺墓が一番密集する一角にある。約1/2ほどはブドウ園の造成により破壊されている。墓坑は長方形を呈し、側壁は二段、木（小）口壁は一段の掘方を呈する。棺底には、浅いが木（小）口板用掘り込みと側板用掘り込みが認められ、棺底は平である。墓坑を復原すると2m×1m、棺底は0.4m×1.5mの規模となる。主軸方位はN－21°－Eをとる。

(2) 古墳時代から平安時代の遺構

(1)SK－50～53,SX－01 Fig.14,15、PL.3～5

SK－50～52は馬の骨と思われる骨を丁寧に埋葬している土坑墓である。 **50**は円形土坑で下顎骨等を11点検出した。1.2m×0.9mの円形土坑で底面標高37.3mを測る。 **51**は土坑の上部に木が渡してあり、その上に石が置かれていたと考えられる出土状態を示していた。隅丸方形を呈し、底面標高は37.11mを測る。主軸N－88°－Wの方位を測る。 **52**にはかなりの骨を検出した。長方形の土坑、長軸1.52m×短軸0.95m、底面標高36.72mを測る土坑で下顎骨を始めとして大腿骨等も出土している。そのほかに両端を切断した径12cmの丸太があたかも枕のように置かれていることや長さ0.7～0.9m、幅0.03m加工材を10本、曲物で造られた杓と須恵器の蓋、土師器片、青磁片が出土している。この遺物から鎌倉時代～室町時代の時期に設定できる。主軸はN－7°－Eの方位を持つ。 **SK－53**は不整形な長方形を呈する。出土遺物は無いため時期不明。主軸はN－55°－Eの方位をとり底面の標高は36.65mで長軸1.8m、短軸1.05m、深さ0.45mを測る。 **SX－01**は不整形な楕円形を呈し、二段形成である。Pitによって二ヶ所切られている。出土遺物は弥生時代中期から古墳時代前期まで含まれている。一番新しい時期の遺物は

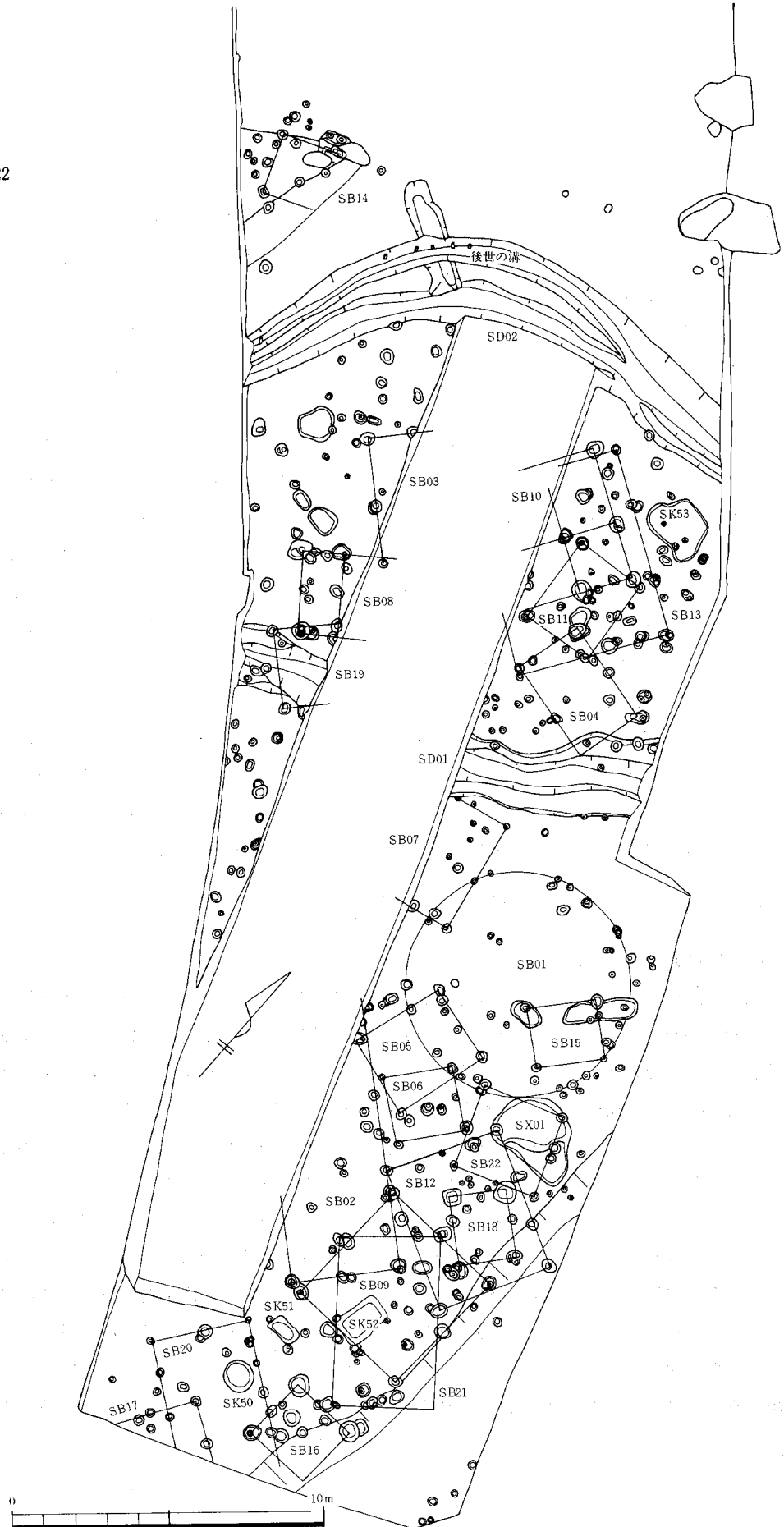


Fig. 14　溝・土坑・土坑墓・掘立柱建物配置図（縮尺1/200）

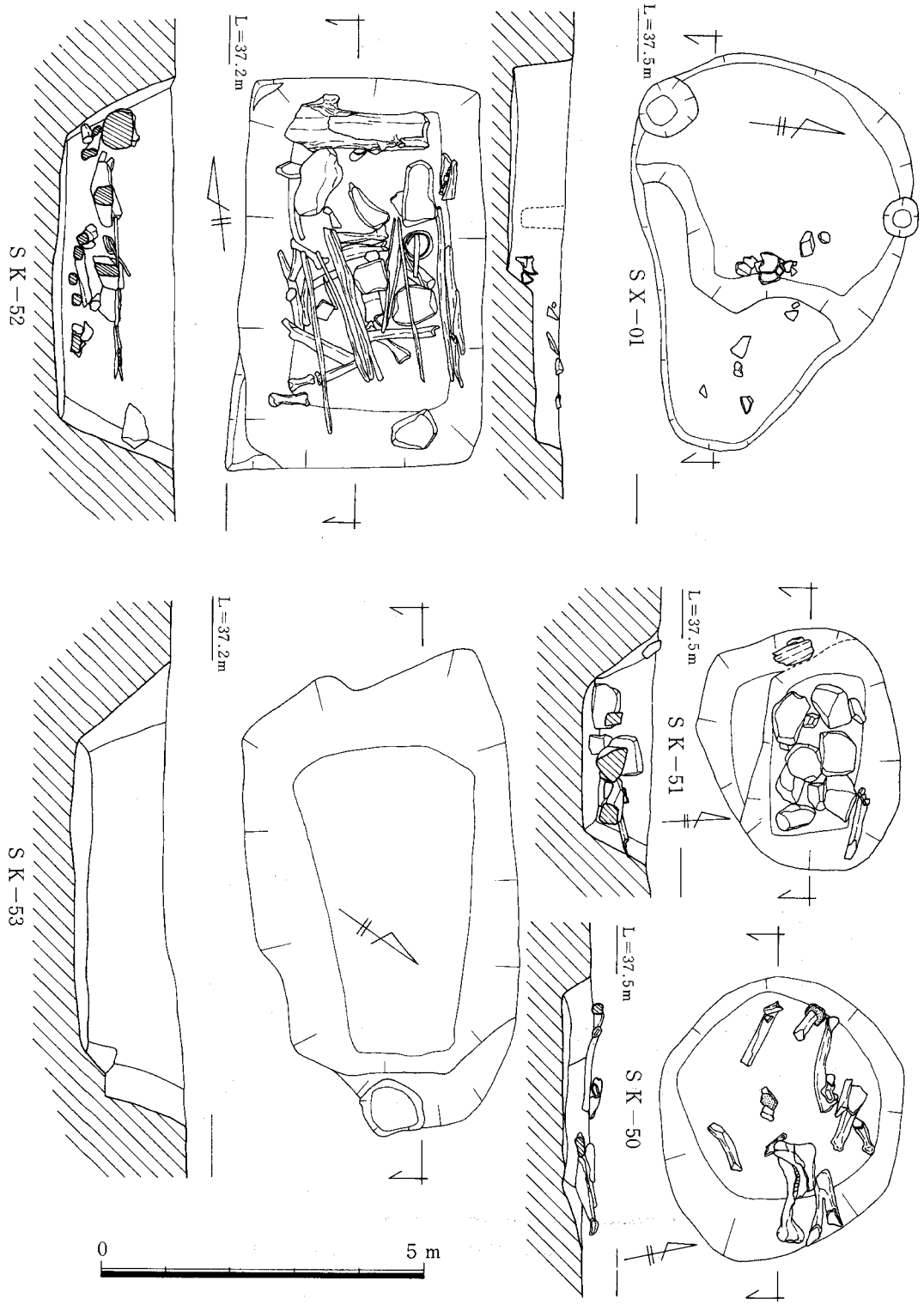


Fig. 15　土坑・土坑墓実測図（縮尺1/25）

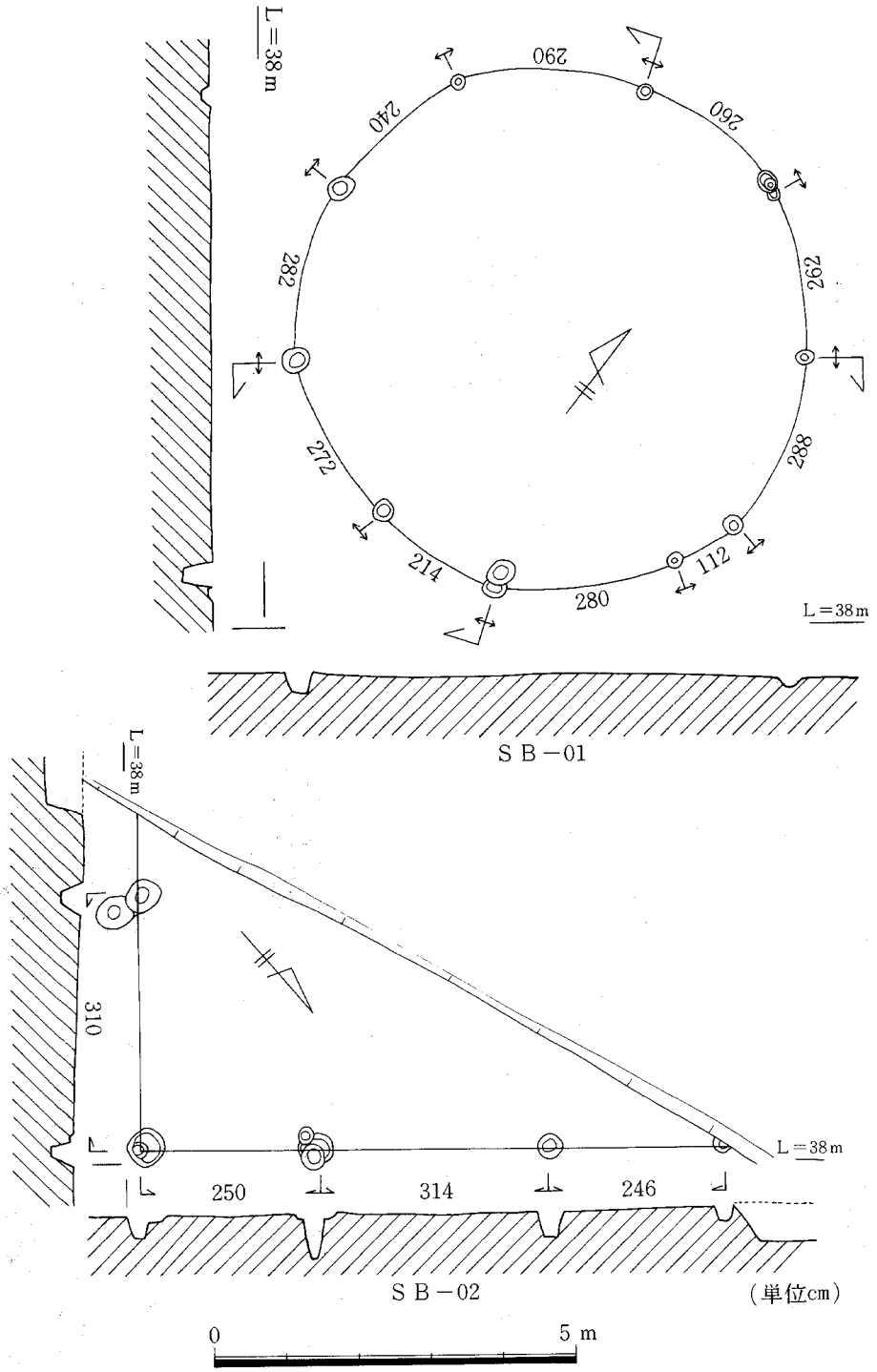


Fig. 16　掘立柱建物実測図－1（縮尺1/100）

Fig. 30－10の丸底壷で古墳時代前期に比定できSX－01の時期もこの時期と考えられる。

(2)溝（SD－01,03～05）Fig. 14、PL. 1

SD－01当遺跡の南に位置し東西に流れる溝である。東から西に流れ、東の底面標高37.21m、西の底面標高37.06mで、幅2.0m、深さ20～30cmである。遺物は須恵器が中心で7～8世紀の時期の物が一番新しい。 **SD－03**はSD－02の北側を同じく東西に流れる。時期不明の不整形土坑によって破壊されている。遺物は全く出土していない。幅0.8m、深さ0.1mと浅い。 **SD－04**は調査区の西、SK－16、17、18、44に囲まれた状態で南から北に流れるがSK－44の段落ち部で消滅する。幅0.6m、現長4.3m、深さ0.1mで、遺物は古墳時代前期、布留併行期である。 **SD－05**は東西溝で、SK－04、05、06等の甕棺墓を破壊している。遺物は多量に出土したが、甕棺の破片が多い。この溝の時期を決定する遺物はFig. 30－12、16で奈良時代～平安時代と考えられ、SK－50～53の土坑の時期と一致する。

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物は20棟検出した。この内4棟が弥生時代、7棟が古墳時代、2棟が平安時代である。時期を決定できない建物7棟がある。ただ切り合い関係から相当する時期を設定したが、根拠はない。時期を決定する資料は柱穴より出土した遺物を基準とするもので柱痕跡出土か、埋土出土かで、その時期を決定した。柱間寸法を図上に示した。

弥生時代の掘立柱建物（Fig. 17,SB－03～06）PL. 1～5

弥生時代に比定出来る建物はFig. 17、**SB－03～06**棟の4棟である。SB－03,04が1×2間、05,06が1×1間で、柱痕より弥生中期の土器が出土している。

古墳時代の掘立柱建物（Fig. 16－02,17－8～19,18）PL. 1～5

SB－02はブドウ園の撹乱により約1/2破壊を受けているが2×3間、埋土より弥生時代の土器片が出土。時期は古墳時代前期。 **SB－08**は1×1間、礎盤のある柱穴があり、柱痕跡内から土師器が出土している。時期は古墳前期。 **SB－09**は2×2間であるが、SK－52により柱穴が破壊されている。時期は柱痕内より土師器が出土していることから古墳前期。 **SB－10**は1×2間であるがブドウ園の撹乱により約半分破壊されている。時期不明。**SB－11**も時期不明の1×1間の建物である。 **SK－12**はSX－01を切ることと、柱痕内より土師器が出土していることから古墳前期、**SB－14～20,22**は1×1間の建物。14は甕棺墓をきり、15はSB－01を、19はSD－01を、22はSX－01を切る。時期は07・14～18が古墳前期。19～22が奈良から平安時代に比定できる。SB－13は2×3間であるが撹乱によりその全貌は不明。時期は不確定ではあるが古墳時代の建物と考えられる。全体的に削平が著しいため遺構の残りが非常に悪く、甕棺墓等から0.5～1mの削平が考えられる。

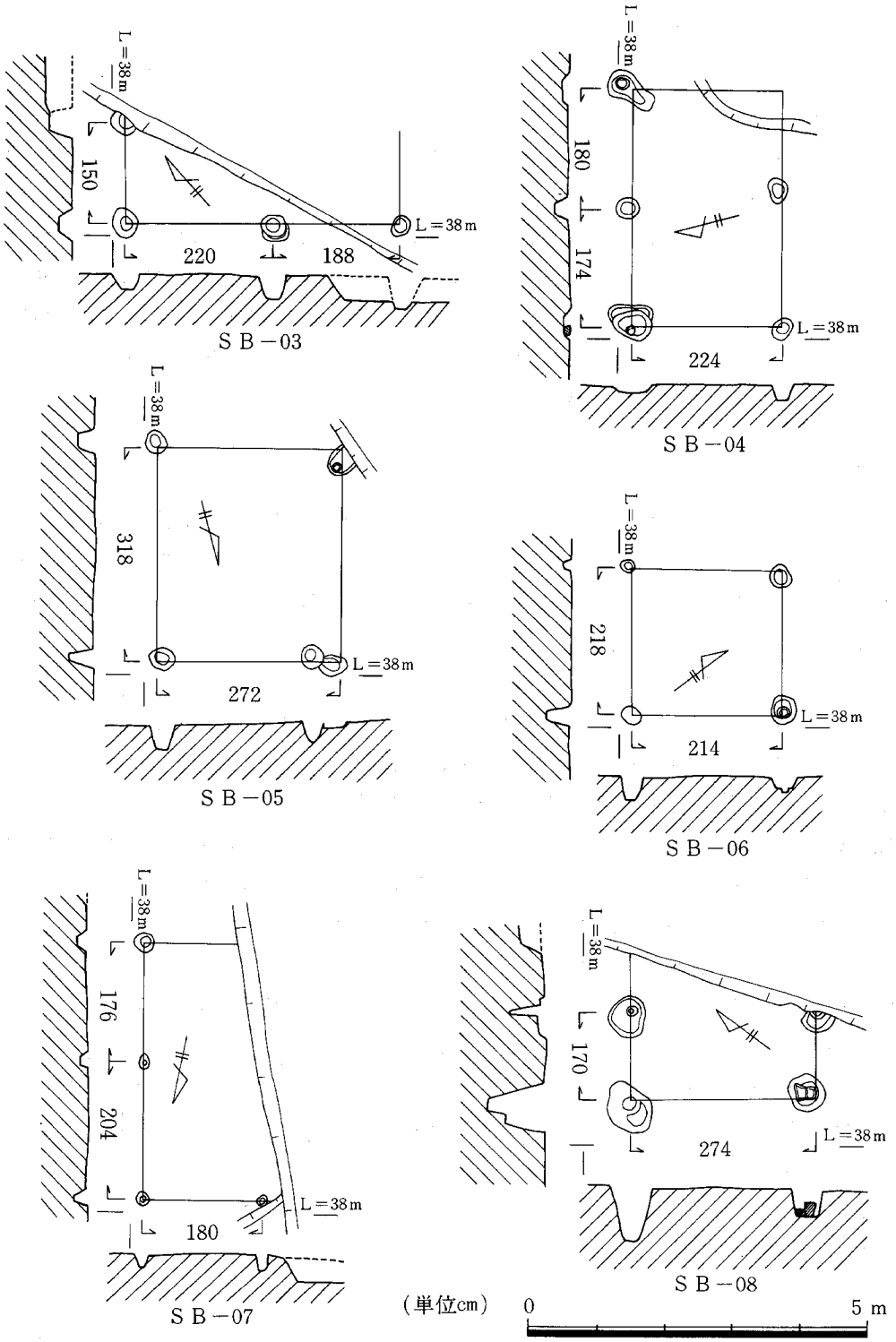


Fig. 17　掘立柱建物実測図－2（縮尺1/100）

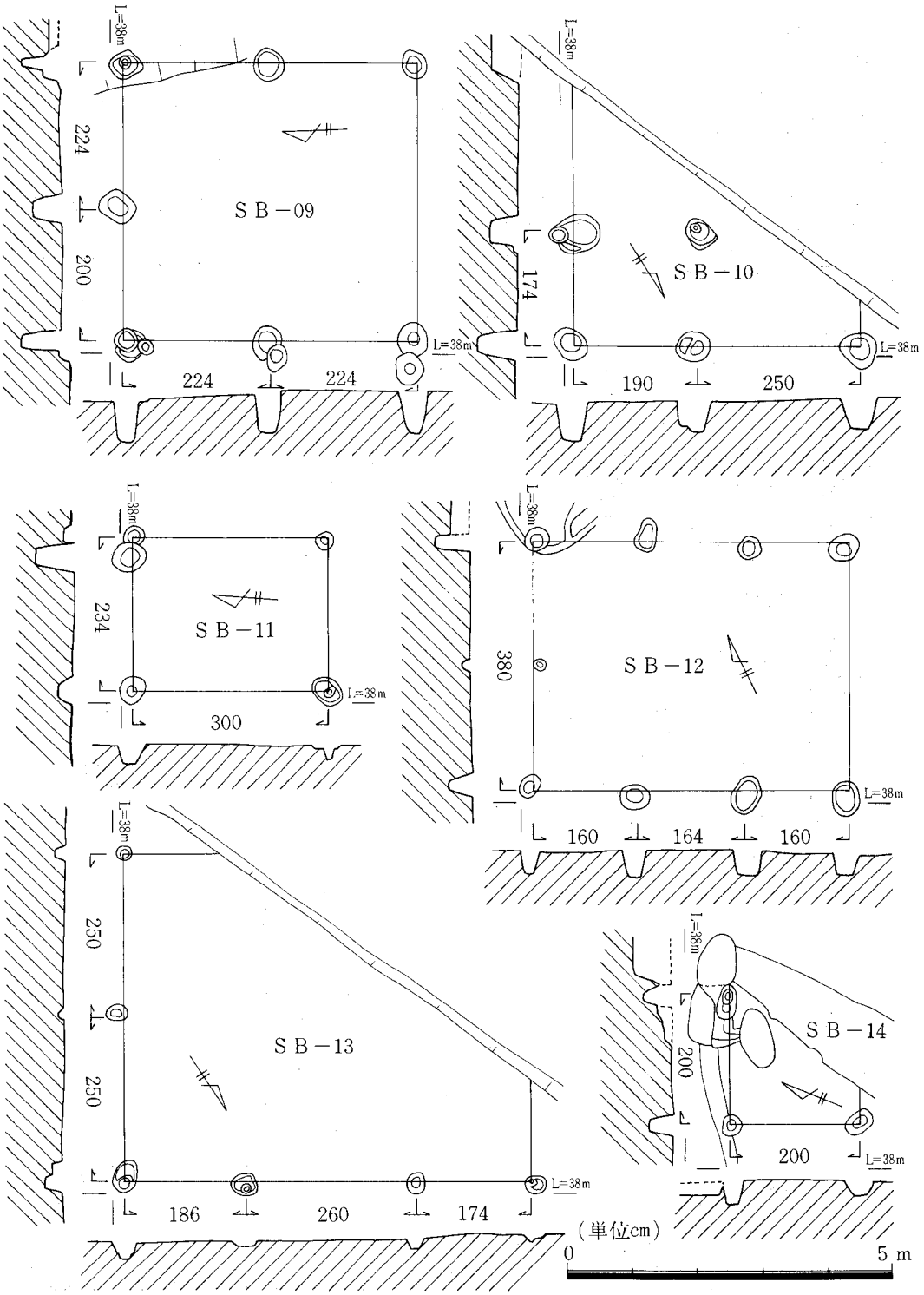


Fig. 18　掘立柱建物実測図－3（縮尺1/100）

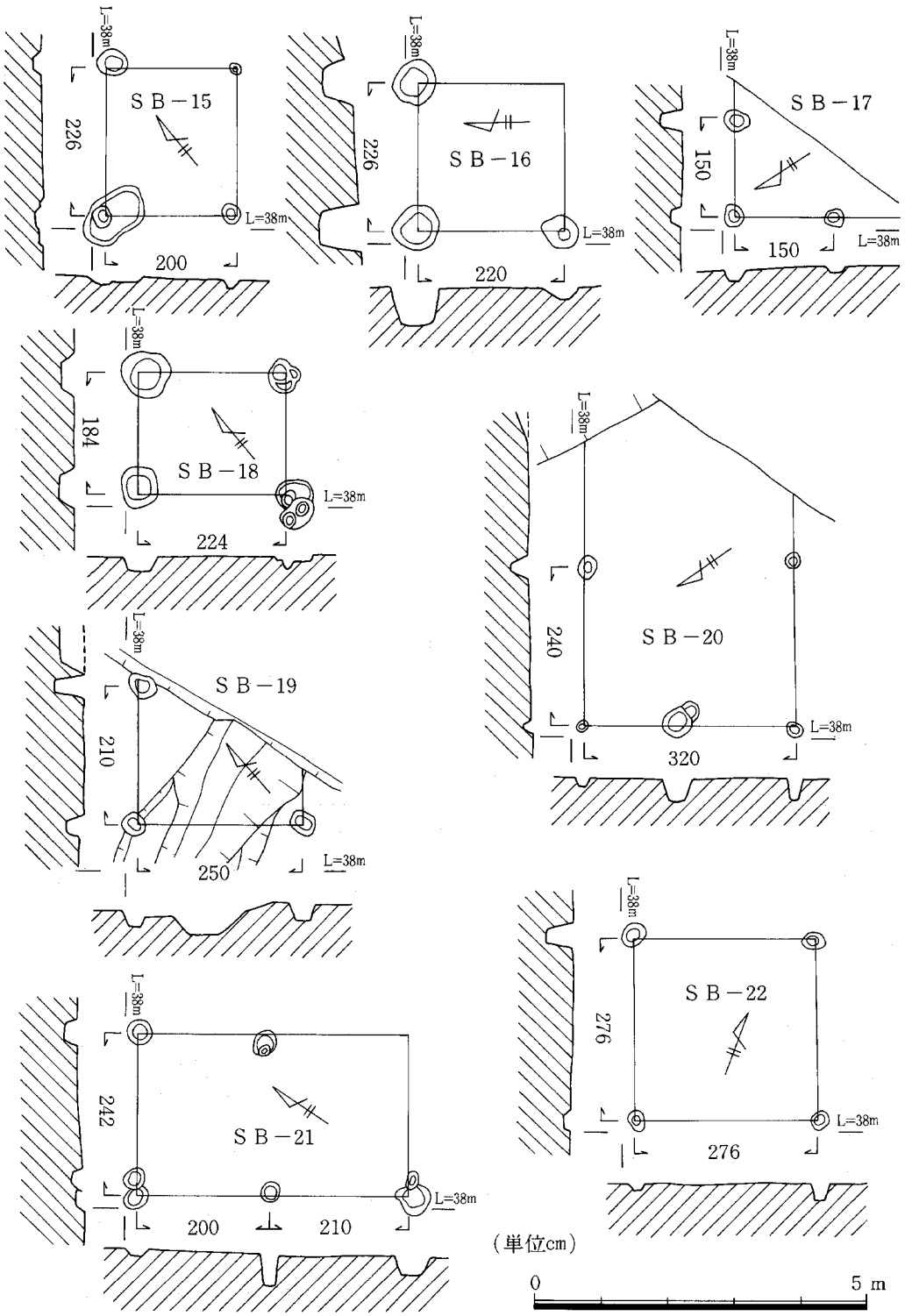


Fig. 19　掘立柱建物実測図－4（縮尺1/100）

遺　物（Fig.20～30）PL.13～18

甕棺　今回調査で出土した甕棺墓は総数46基である。個体数で72個（遺構図では単棺であるが整理中に合わせとなるもの、その可能性の高いものにも番号を与えている）であるが、図示出来たのは66点である。遺物番号は５桁で00020～00091までで、与えた番号は一個体に一つ。

紙面の都合上、型式分類しそれをもって土器の説明とし、又、まとめともしたい。大型甕形土器と小型甕形土器とに分け分類する。分類の基準として、橋口達也氏の型式分類（九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告（XXXⅠ）中巻、福岡県教育委員会1979）と折尾学氏の型式分類（金隈遺跡第２次調査概報、17集1971、史跡　金隈遺跡、123集1985福岡市教育委員会）とを参考にした。

(1)　甕棺の形式分類

大型甕形土器（甕棺）**１類**　橋口氏のＫⅡｃ式、折尾氏の金隈Ⅲａ式に相当する型式。やや上底か平底で、底部からやや外反しながら立ち上がり凸帯付近で垂直に立ち上がる。頸部付近でやや内湾しながら口縁部に達する。Ｔ字口縁を呈し、口唇部はやや下がりぎみである。口縁下の凸帯は認められない。この１類が当遺跡では７例あり、SK13(00042), SK25(00061), SK40の下甕（00082), SK41（00083), SK43（00087), SK46（00091）がこれにあたる。

２類　橋口氏のＫⅢａ式、折尾氏の金隈Ⅲｂ，ｃ式にあたる型式で、底部から口縁にかけての器形の特長はほぼ１類と同じであるが、口縁下に１条の三角凸帯を有することと、１ｍを超える大型の物も出現してくる。当遺跡出土のSK36(00075)は146.7cmと大型である。SK03(00024, 00025) SK10（00037, 00036) SK38（00078, 00079), SK44（00088, 00089）等がこれにあたる。

３類　橋口氏がＫⅡｂ式～ＫⅢａ式の丸味を帯びた甕棺と提唱した型式である。最大径が胴部中位にあり丸みを持つ。頸部はかなり内湾し、口縁部内側が発達している。当遺跡でも３類が７個体出土しているが、この中も３つに区分できる。ａ、三角凸帯を胴部上位に２条巡らし、胴部がかなり膨らんだ形状を呈する。ｂ、口縁部は平坦で、口縁下に１条の三角凸帯を巡らす。ｃ、形状はｂと変わらないが凸帯がコの字状を呈し、胴部凸帯もコの字状を呈する。３ａがSK09（00034, 00035)、SK35（00074)、３ｂがSK04の下甕（00027)、SK39の下甕（00081)、３ｃがSK05（00028）に区分できる。

４類　２類の形状に類似するが口縁下の凸帯がコの字状を呈する。橋口氏の分類ではＫⅢａの新しい段階のものとして位置付けられている型式と思われる。当遺跡では２個体出土した。SK08（00032, 00033)、SK15（00045）である。

小型甕形土器に関しては橋口氏が「甕棺編年と日常容器編年との関係」の中で各甕棺型式併行期の日常容器の型式分類がある。小児甕棺が日常容器としてとらえられるか否かは多少の問

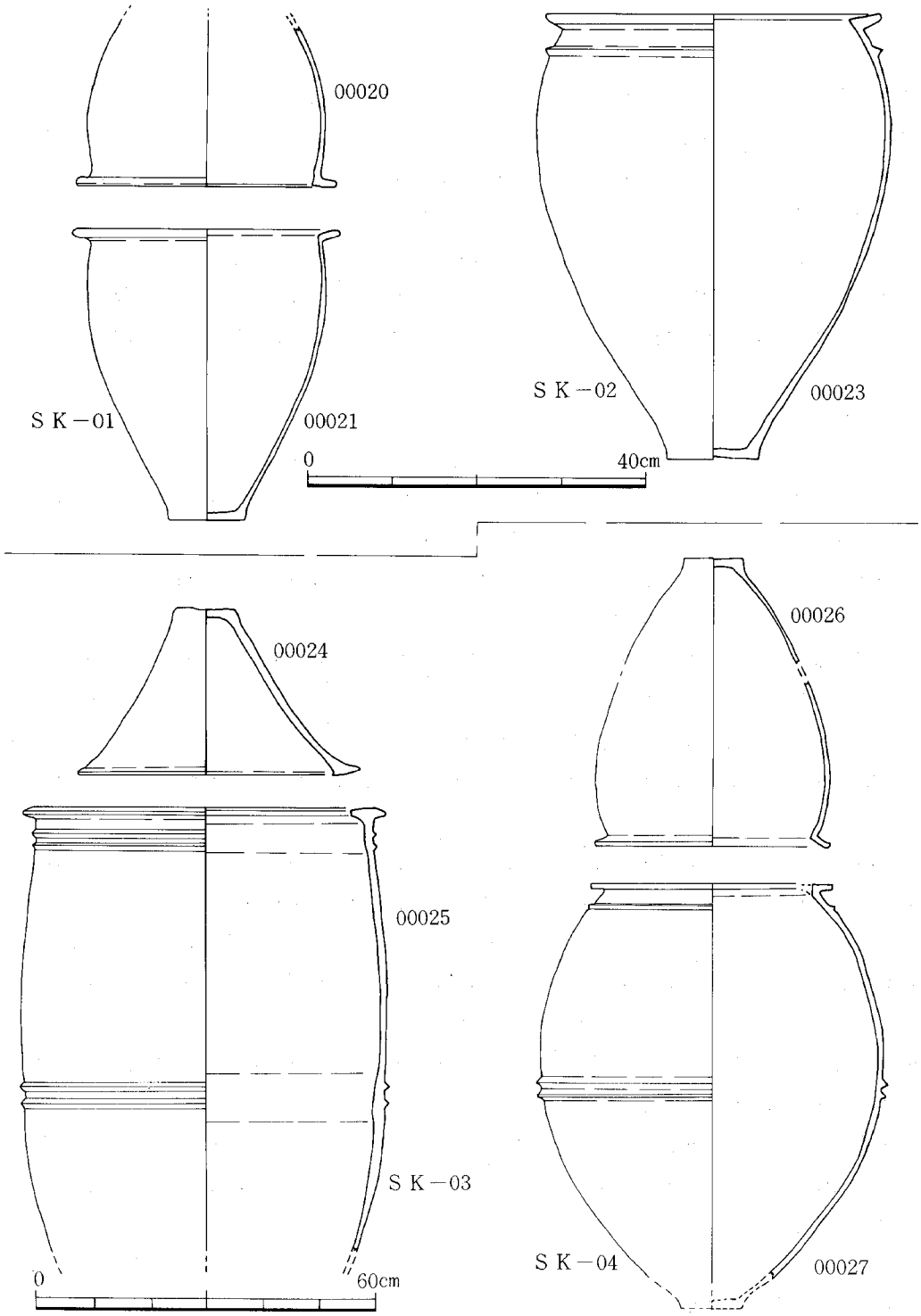


Fig. 20　甕棺実測図－1（縮尺1/8,1/12）

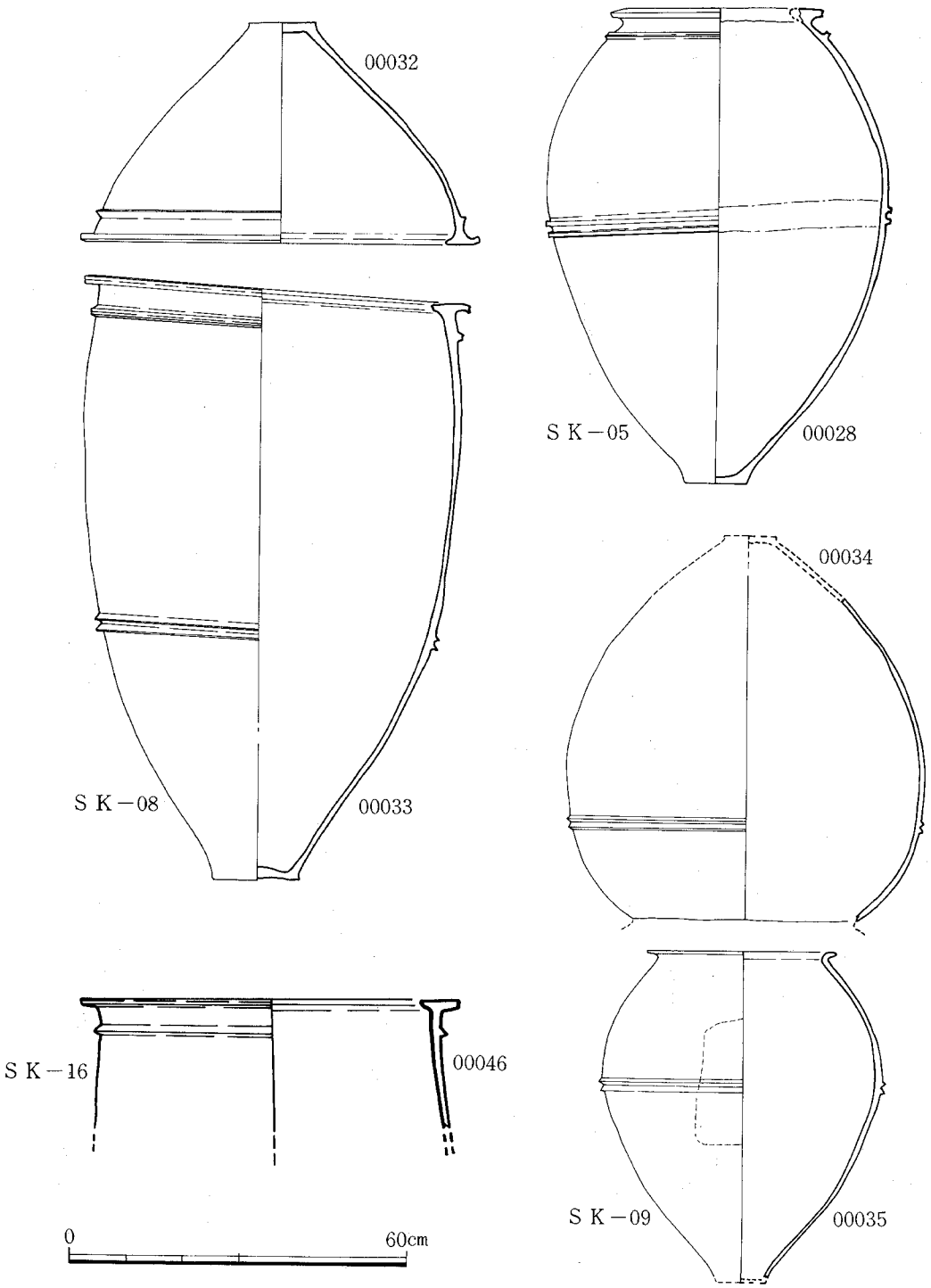


Fig. 21　甕棺実測図－２（縮尺1/12）

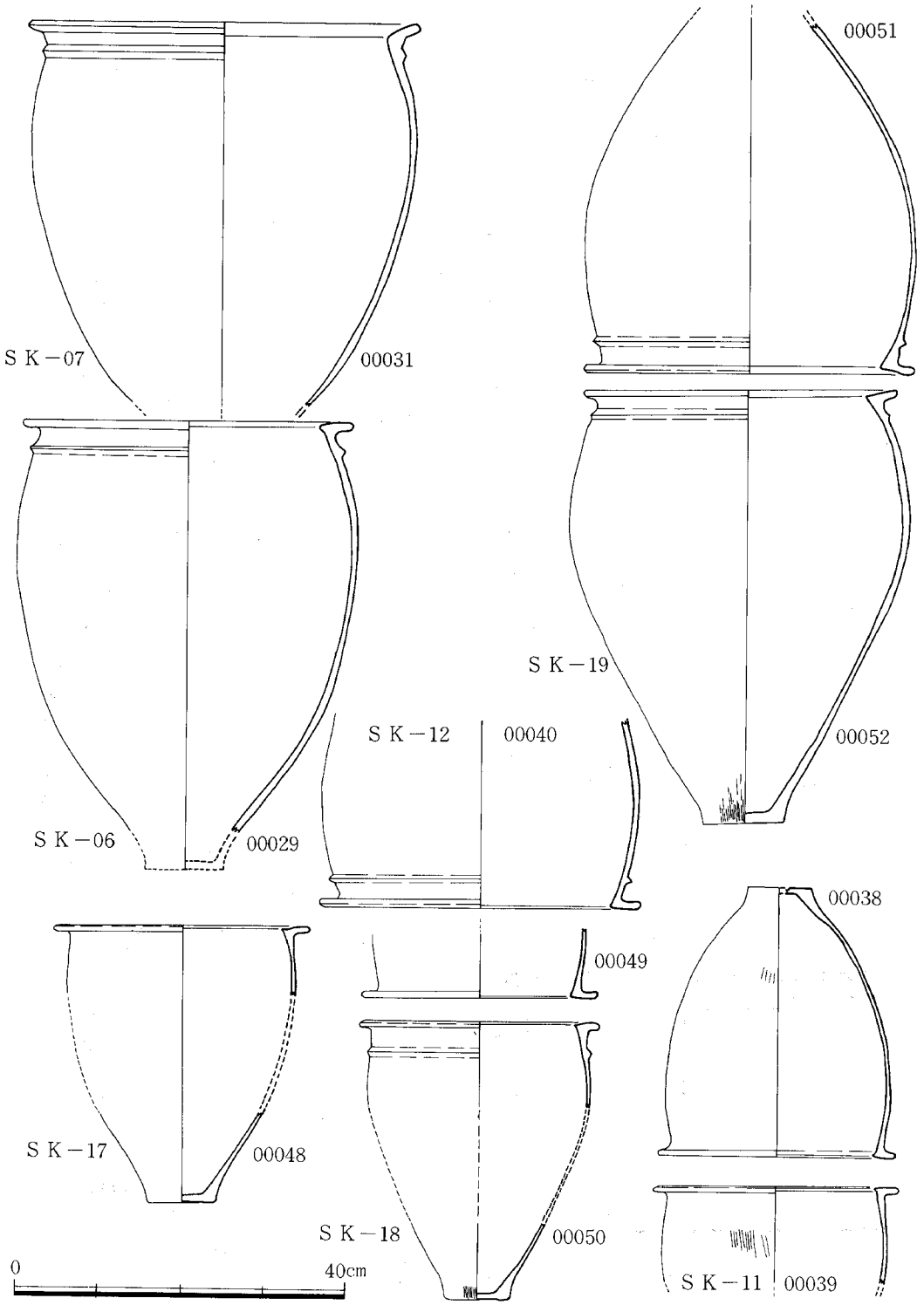


Fig. 22　甕棺実測図－3（縮尺1/8）

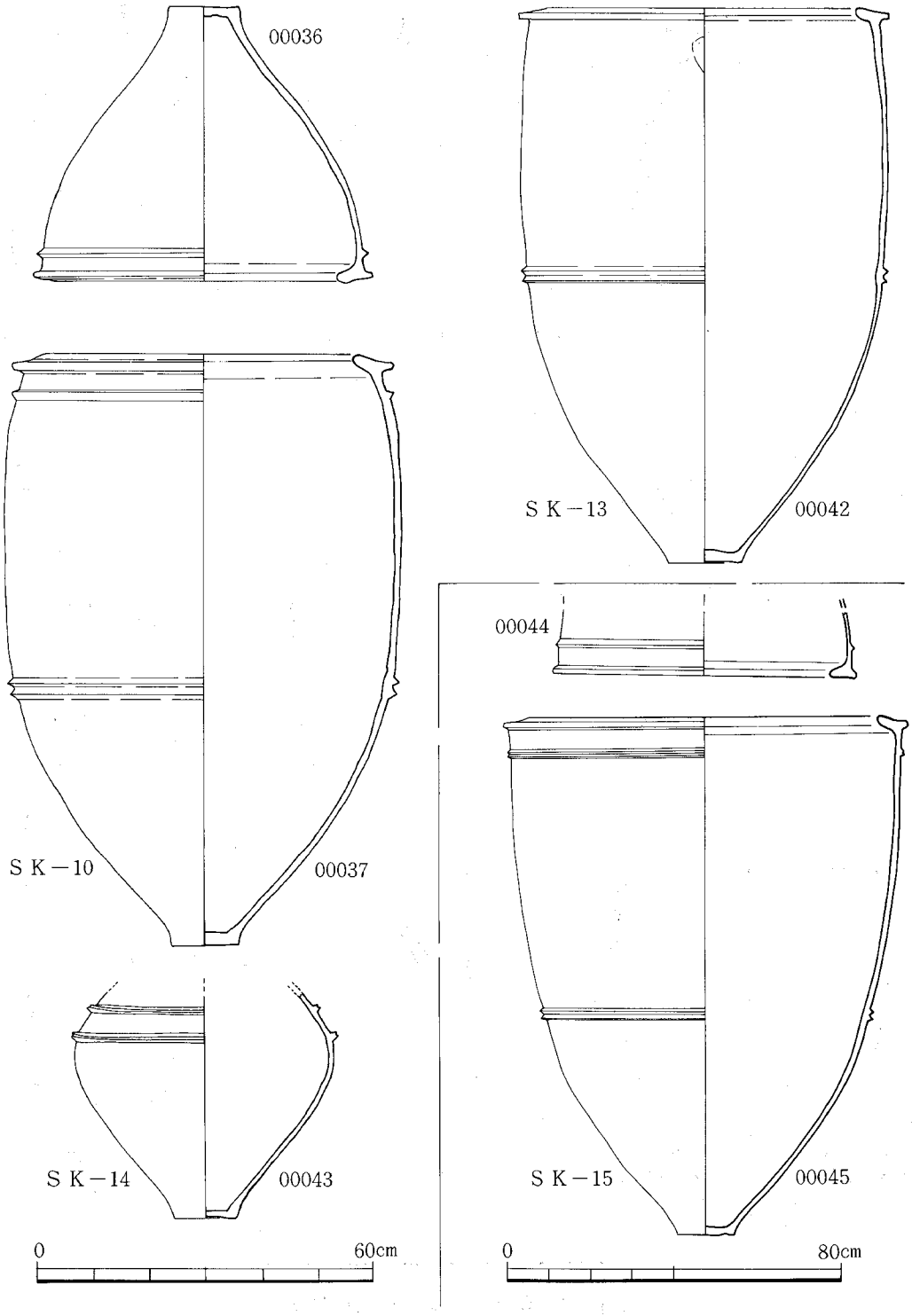


Fig. 23　甕棺実測図－４（縮尺1/12,1/16）

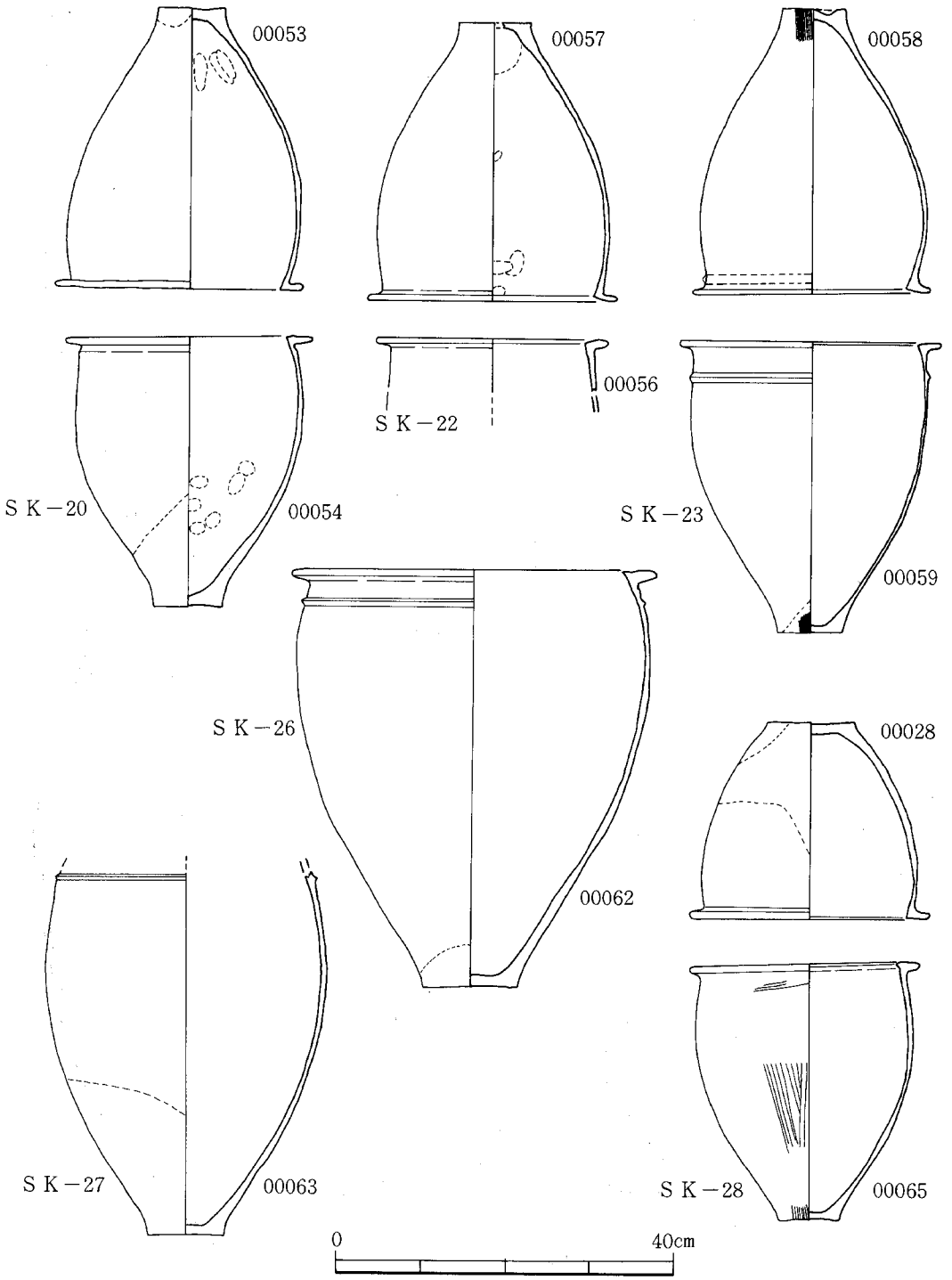


Fig. 24　甕棺実測図－５（縮尺1/8）

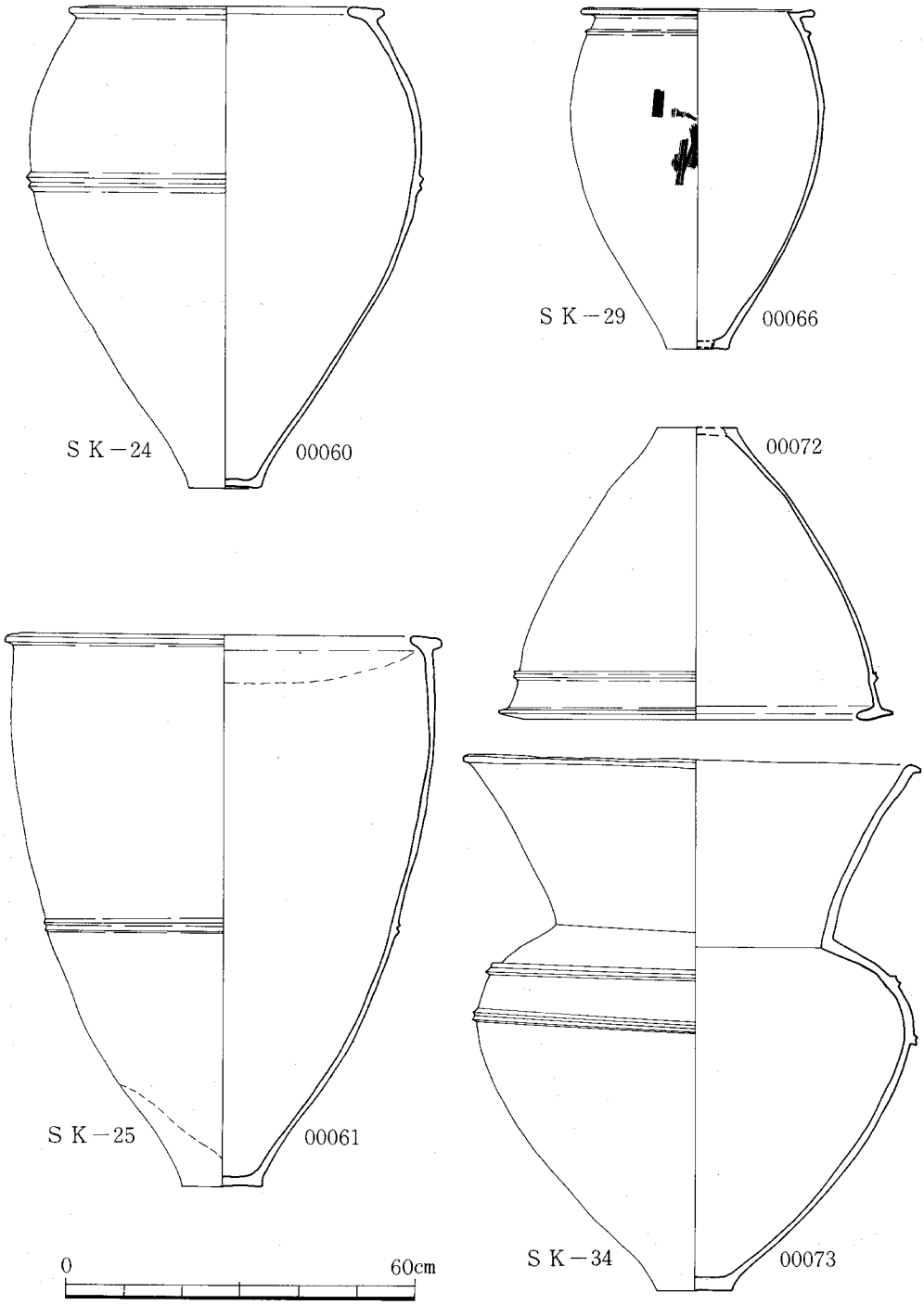


Fig. 25　甕棺実測図－6（縮尺1/12）

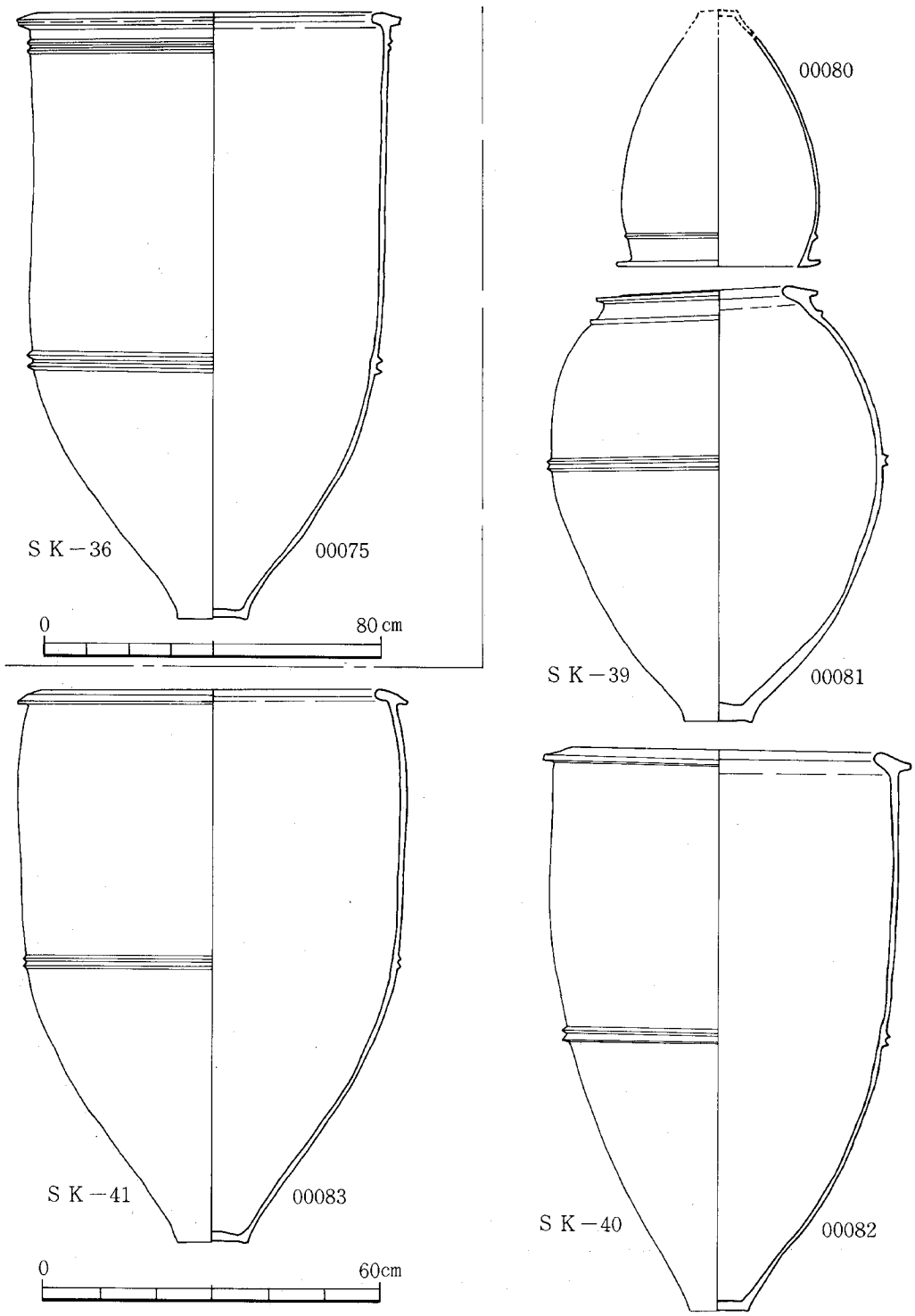


Fig. 26　甕棺実測図－７（縮尺1/12,1/16）

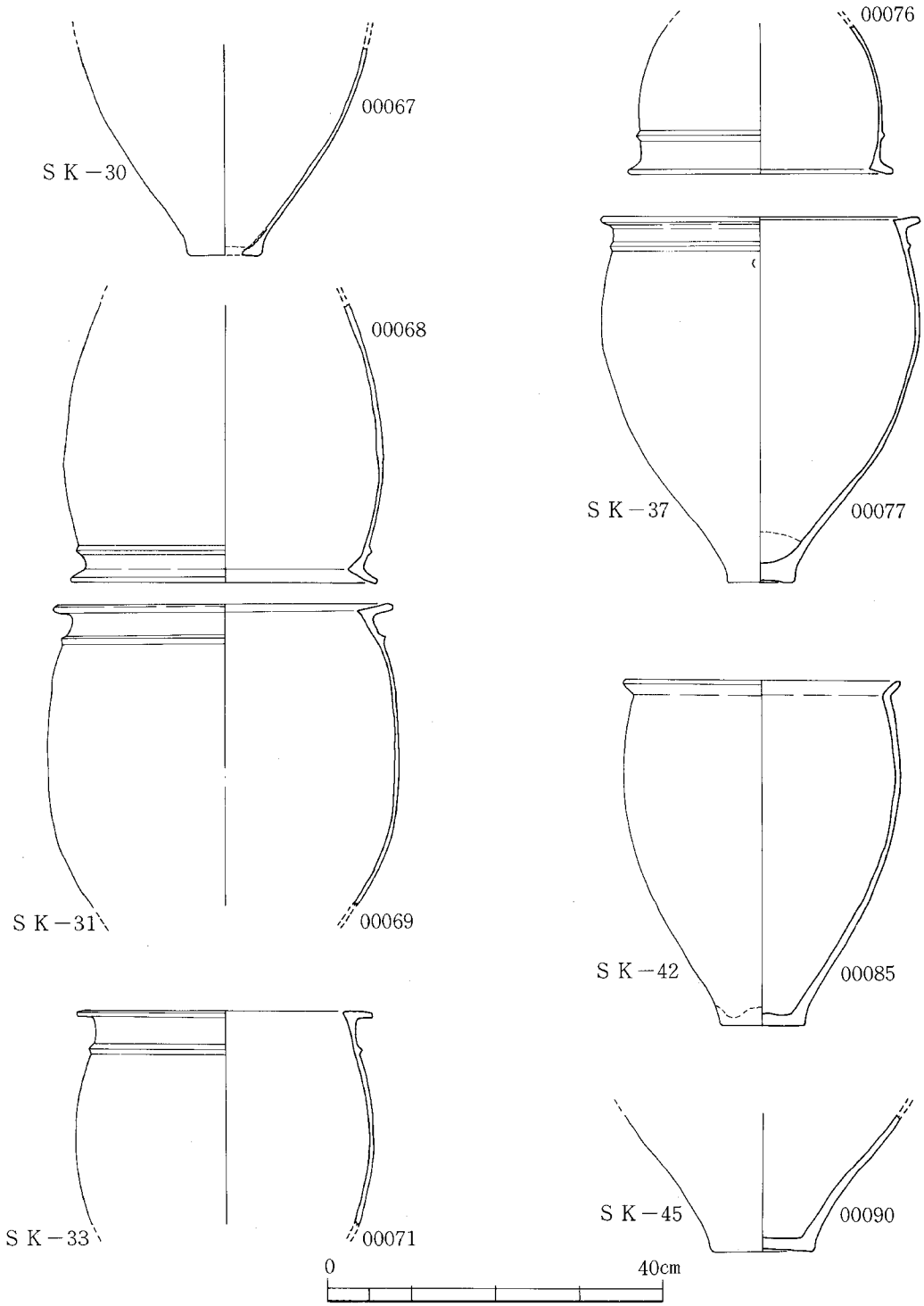


Fig. 27　甕棺実測図－８（縮尺1/8）

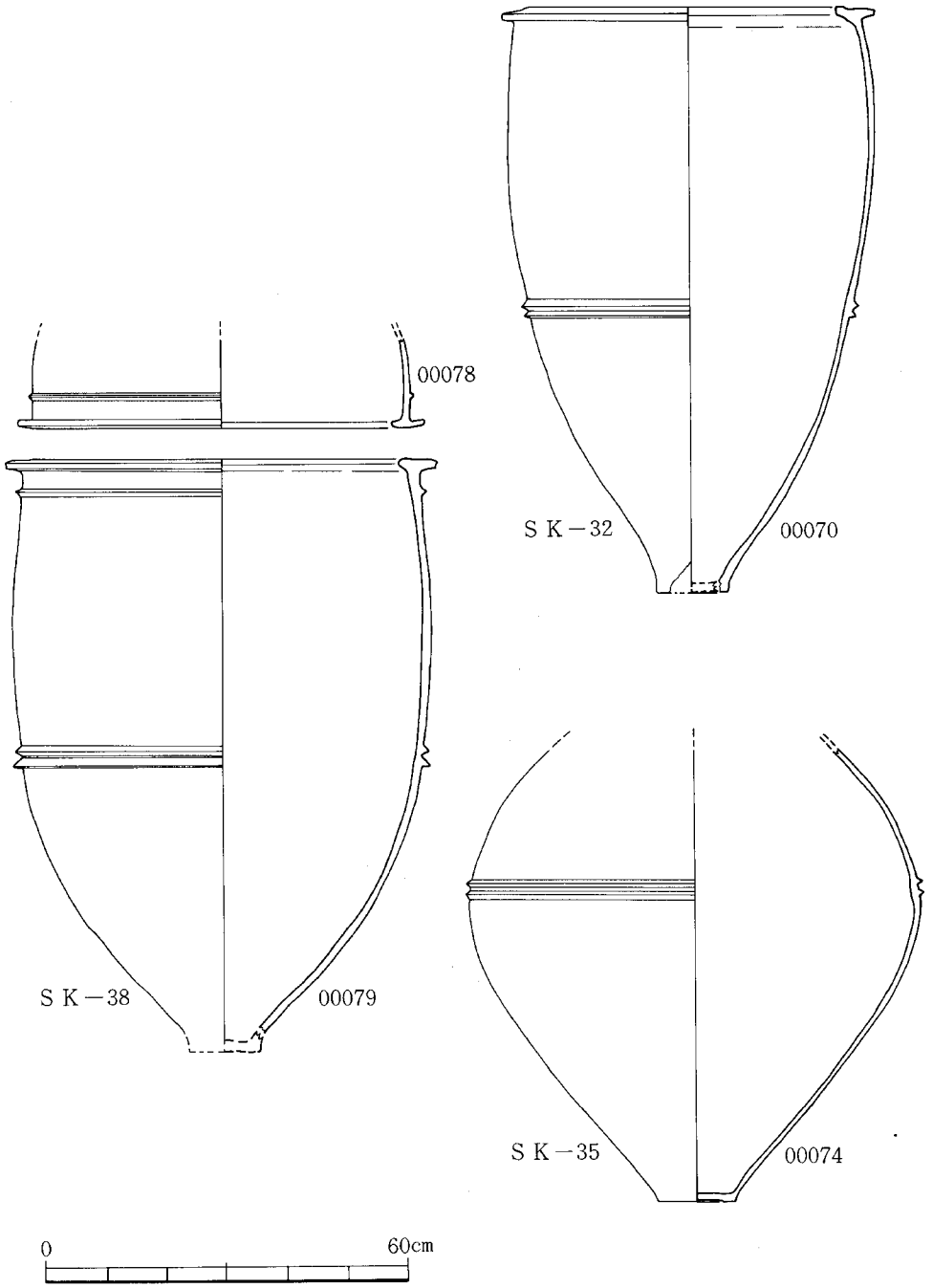


Fig. 28　甕棺実測図－９（縮尺1/12）

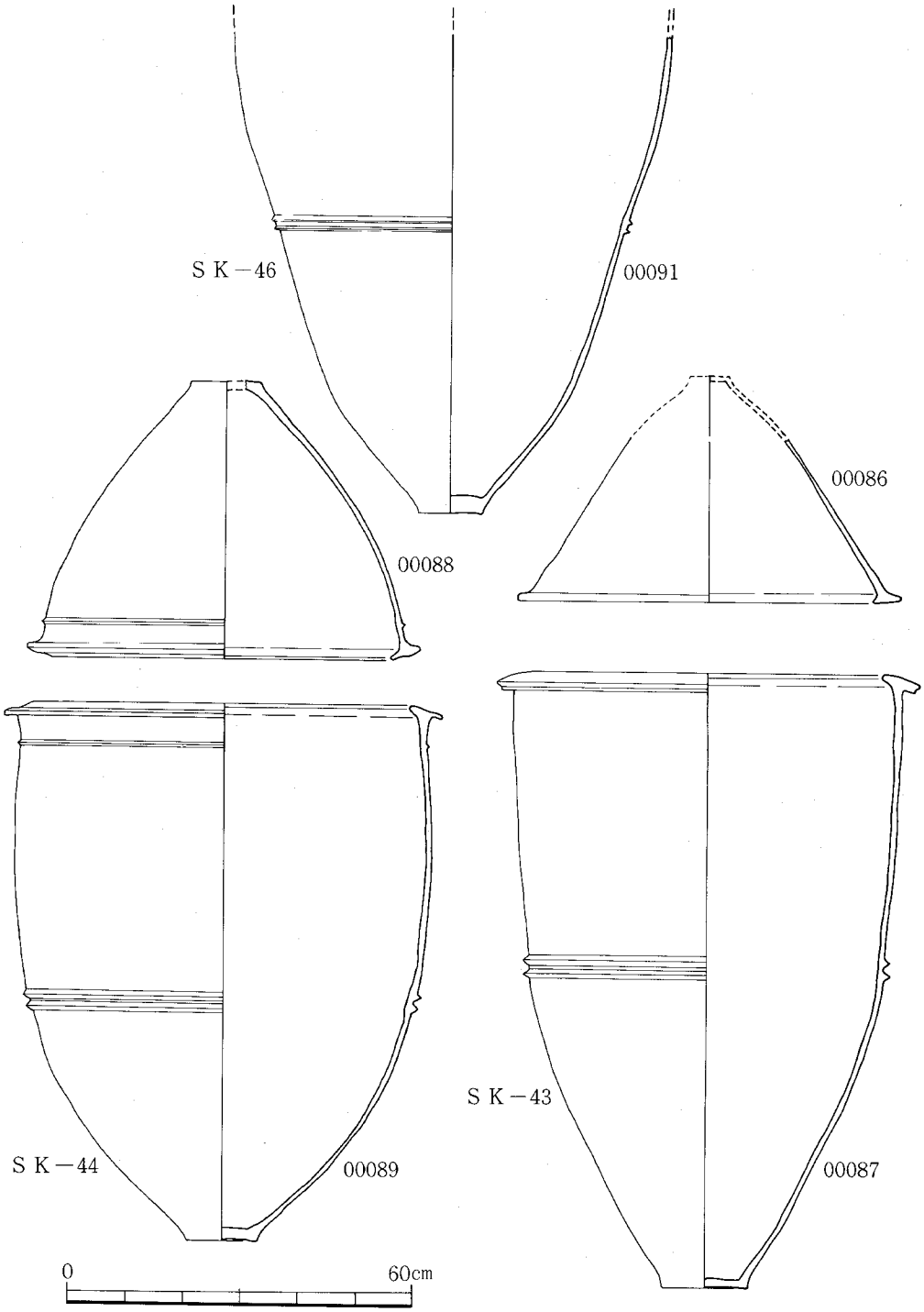


Fig. 29　甕棺実測図－10（縮尺1/12）

題を含んでいるかもしれないが、型式分類上必要なことで橋口氏の分類に従って進めてみたい。

A類　橋口氏のKⅡb～Ⅱc併行期の日常容器の範疇に入る型式で、最大径は胴部上位にあり口縁は内側にやや傾斜する逆L字状口縁を呈し、口縁下に1状の三角凸帯を巡らす。底部はわずかに上底か平底である。SK02(00023)、SK06(00029)、SK19(00052)、SK29(00066)、SK31の上下(00038,00039)の6個体がこの型式に相当する。折尾氏の型式分類では金隈Ⅱb～Ⅲaに相当する。

B類　1類の形態的特徴はまだ有するが、1類と異なる点は最大径が口縁か、もしくは口縁と胴部がほぼ同一を呈する。この型式は橋口氏の分類のKⅡc式、折尾氏の分類では金隈Ⅲa式に相当する。当遺跡では6個体出土した。SK07(00031)、SK12(00040)、SK19(00051)、SK23(00058)、SK37(00076, 00077)が相当する。

C類　口縁が平坦となり、最大径が口縁部となる。底部は平底化し、口縁下に三角凸帯を1条巡らすものと、無凸帯のものもある。橋口氏の分類ではKⅢa式、折尾氏分類では金隈Ⅲb式に相当する。当遺跡ではこの型式の小児棺が主で16個体出土した。SK01(00020)、SK11(00038, 00039)、SK17(00048)、SK18(00049, 00050)、SK20(00053, 00054)、SK22(00056, 00057)、SK23(00059)、SK26(00062)、SK28(00064, 00065)、SK39(00080)が相当する。

D類　橋口氏分類のKⅢc式、折尾氏分類の金隈Ⅳ式に相当する。口縁部がくの字を呈し、底部から外反しながら立上がり、口縁部付近では垂直かやや内湾しながら口唇部で大きく外反する型式である。当遺跡からはSK01(00021)、SK04(00026)、SK42(00085)の3個体が出土した。

以上が大型甕形土器(甕棺)、小型甕形土器(小児甕棺)の型式分類である。これ以外にはSK14(00043)、SK34(00073)の壷棺がある。時期は4類と同時期の中期後半に位置付けられる。

甕棺墓の中で型式分類の異なるセット関係をもつものがある。例えばSK01の上甕がC類、下甕はD類という具合であるが橋口氏も考察しているように古い型式が残り、新しい型式とのセット関係をもち埋棺されることは有りうることと考えられる。

3類の前後関係を再検討してみると単棺であるSK05(00028)は3cに分類したが型式上から4類の範疇に、SK04(00027)、SK39(00081)も4類に組み入れておきたい。SK04の上甕はD類で時期差は認められるがセット関係からすれば中期の後半に位置付けられる。3aとした型式は2類の範疇と考えられる。ここで森貞次郎先生、岡崎敬先生の提唱されてきた型式分類に当て嵌めると1類とB類が汲田式、2類、3a類とC類が須玖式、3b, c類、4類とD類が立岩式となり、1とA、B類が中期前半、他が中期後半で、当遺跡の甕棺墓の時期は中期の中にすべて納まる。弥生時代前期末から中期にかけ急速に甕棺墓が盛行していく。特に中期中葉、2類の時期に至っては大型の甕棺が製造され、それまで行われていた土坑墓、木棺墓は衰退し

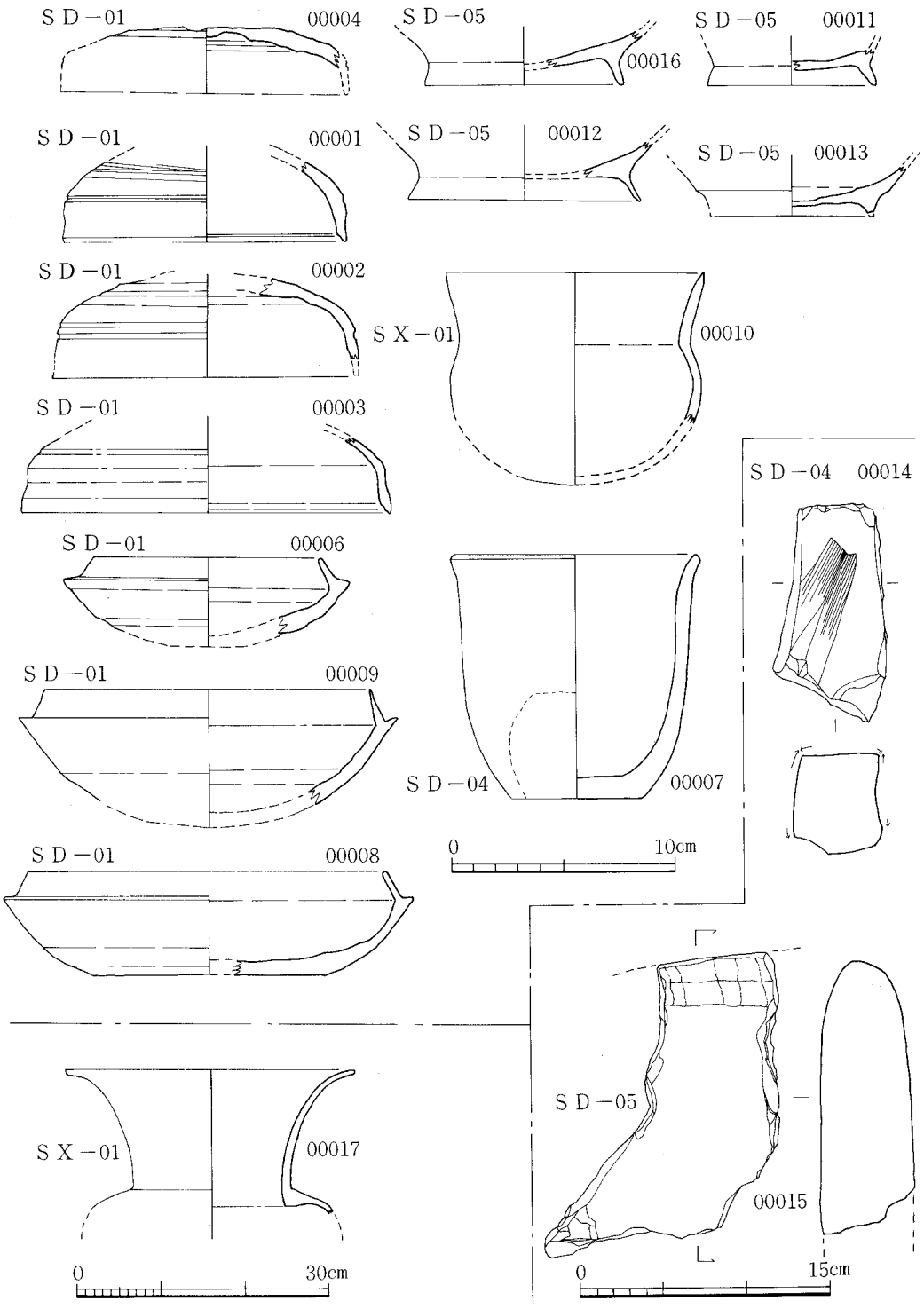


Fig. 30　溝・土坑出土遺物実測図（縮尺1/3,1/4,1/8）

ていく。

当遺跡の標準的な木棺墓・甕棺墓の配列は木棺墓・SK31－SK06・37・41・43－SK10・36・11・44－SK04－SK01・08・15の順となる。都地遺跡・吉武遺跡群には2,000基以上の甕棺墓が発見されつつあるが、その8割が中期の甕棺墓であるという事実はなにを語りかけてくるのか。

溝・土坑の遺物

Pit,溝，土坑からの遺物はほとんどが細片で、図示できる物はFig. 30に上げた16点であった。SD－01から出土した遺物は00001～04,06,08,09の7点である。01～04は須恵器の蓋である。**04**は復原口径12.8cmで、回転篦削りが1/3程、頂部は指オサエを行っている。ロクロ回転は右回りで、胎土は3～5㎜の石英粒を多く含む。色調は灰色を呈し、焼成は普通である。**01**は口径12.8cm、1/3が回転篦削り、2/3がナデ仕上げで、体部と天井部との境に凹線が巡り、口縁内部には段を付す。ロクロ回転は左回りである。胎土は3㎜前後の砂粒、石英・長石を多く含む。色調は明青灰色を呈し、焼成は良好。 **02**は01より多少大きめの口径13.6cmで、約1/2が篦削りを呈する。体部と天井部の境に凹線が巡る。ロクロ回転は右回り。胎土、色調、焼成は01と同じ。 **03**は復原口径16.5cmとかなり大型であるが凹線も消え、ナデ部分がかなり上部まで達している。内面には辛うじて段を有している。ロクロ回転は左回りで、胎土、色調、焼成は01と同じ。

06,08,09は杯身で、口径は**06**が10.4cm，**08**が16.2cm，**09**が14.6cmを計る。3点とも口縁内面には段を持たず、立上りは1～1.5cmを測るが、かなり内湾する06,08とあまりしない09とに分かれる。ロクロ回転は左回りが06、右回りが08、土器が軟質のため不明のもの09。06,08とも胎土色調、焼成とも01と同じ。これらの土器は古墳後期に位置付けられる。

11～13,16はSD－05より出土した。内黒の高台付土師器である。高台径は7.1cm～10.5cmで、奈良時代後半から平安時代前期に位置付けられる。

SX－01の遺物は10,17の2点である。**10**は小型丸底壷で口径11.6cmを測る。**17**は鋤先口縁の壷で、口径34.8cmの弥生中期の時期。2点とも表面剝落のため調整手法は不明。

SD－04からは07,14がある。**07**は弥生中期の甕形土器で、口径11cm、器高11cm、底径6cmを測る。**14**は砂岩製の砥石である。**15**はSD－05より出土した滑石製の台石であろう。

以上遺物について述べてきたが、ブドウ園の造成時の破壊にもかかわらず弥生中期の甕棺墓46基、木棺墓1基、円形住居址、掘立柱建物、溝、古墳時代の溝、掘立柱建物、奈良時代から平安時代にかけての土坑墓（馬？の骨を丁寧に埋葬している）掘立柱建物、溝等の遺構が検出できたことは予想以上の成果であった。これも作業員のみなさまをはじめとして多くの方々の御協力の賜物で無事発掘調査を終了することが出来ました。また都地遺跡の報告書も刊行することができました。末筆ながら紙面をかりて感謝の意を表します。

Tab.1　甕棺墓観察一覧表

甕棺番号 SK-	登録番号 8344	埋棺方法	小児成人	形態	口径×器高×底径 復(復原)・残(残存高)・(cm)	墓坑形状 長さ×幅×深さ(cm)	埋角	方位	備考	時期
01上	00020	接口	小児	甕	復 残 31.2×14.9×——	2段の墓坑構造 不整 楕円形 95×42.5×20	15°	N-43°-E		C類 中期後半
01下	00021			甕	32×35×9					D類
02上	00022	挿入	小児	甕		楕円形 94×55×19	10°	N-25°-W		A類 中期前半
02下	00023			鉢	復 40×53.1×11					A類
03上	00024	接口	成人	鉢	55.6×30×11	攪乱により墓坑を壊されている 楕円形 121+α×105×56	——	N-71°-E	下部凸帯部位最大径65.4cm	2類 中期中葉
03下	00025			甕	64.8×79.5×——					2類
04上	00026	粘土帯	成人	甕	復 復 42.2×52.1×10.8	SD-05に切られている 楕円形 150+α×81×28	−9°	N-42°-E		D類 中期後半
04下	00027			甕	復 復 43.2×76.5×——					3b類
05	00028	—	成人	甕	37×85.5×11	楕円形SD-05に切られている 102.5+α×81.5×48.5	5°	N-38°-E		3c類 中期後半
06	00029	単棺	小児	甕	復 残 40×55×——	SD-05に切られている 楕円形 76.5×45+α×20	ほぼ水平 ——	N-66°-W		A類 中期前半
07上	00030	不明	小児	—	——	実測不可 不明 墓坑は不明確	——	N-30°-W		中期前半
07下	00031			甕	復 残 47.6×46.7×——					B類
08上	00032	覆口	成人	鉢	72.2×40.1×12	SK-07が上部に上る 楕円形 171×101.5×45	−7°30′	N-57°-W		3a類 中期後半
08下	00033			甕	68.8×110×16					4類
09上	00034	粘土帯	成人	甕	残 ——×5.8×——	不整 楕円形 155×98×40.5	——	N-12°-W	胴部最大径64.4cm 最大径胴凸帯59cm	3a類 中期中葉
09下	00035			甕	残 34.2×59×——					3a類
10上	00036	接口	成人	鉢	61×49.6×13	楕円形 201×105×43	0	S-57°-W	胴部最大径 71.2cm	2類 中期中葉
10下	00037			甕	復 68.6×107×12					2類
11上	00038	接口	小児	甕	復 28.8×33×7.5	攪乱により墓坑が破壊されている 楕円形 52.5+α×57.5	3°	S-64°-W		C類 中期中葉
11下	00039			甕	復 残 30×12×——					C類
12上	00040	覆口	小児	甕	復 残 39.4×23.5×——	楕円形 100×45×12.5	——	S-48°-W		B類 中期前半～中期中葉
12下	00041			甕	実測不可					B類
13	00042	単棺	成人	甕	68.8×100.5×13	隈丸 167.5×87.5×56	22°	S-63°-W		1類 中期前半
14	00043	単棺	成人	壺	残 ——×46×11.4	楕円形 98×62.5×22.5	32°	N-44°-E	胴部凸帯部位最大径 28cm	4類 中期後半
15上	00044	覆口	成人	甕	復 残 73.6×15.8×——	楕円形 170×127.5×54	37°	S-60°-W		4類 中期後半
15下	00045			甕	復 97.4×125.2×14					4類
16	00046	不明	成人	甕	残 68.6×23.3×——	ブドウ園造成の為破壊	——	S-48°-W		2類 中期中葉
17上	00047	接口	小児	甕	実測不可	楕円形 67.5×34×15	——	S-6°-W		C類 中期中葉
17下	00048			甕	復 復 31.1×34×8.5					
18上	00049	接口	小児	甕	復 残 28.5×8×——	楕円形 76×47.5×25	13°	N-30°-W		C類 中期中葉
18下	00050			甕	復 29×35×7.8					C類
19上	00051	接口	小児	甕	残 40×43.1×——	隈丸長方形 95×55×37.5	23°	S-44°-E	胴部最大径41cm 口径(復原内径)28.4cm	B類 中期前半～中期中葉
19下	00052			甕	復 35.8×53.3×9.8					B類
20上	00053	接口	小児	甕	29.8×33.8×8	楕円形 92.5×50×28	−5°	N-59°-E		C類 中期中葉
20下	00054			甕	29.6×32.5×8.2					C類
21	00055	不明	小児		実測不可	楕円形 47×37.5×23	——	N-42°-E		——
22上	00056	接口	小児	甕	復 復 29.9×33.7×7.4	ブドウ園攪乱のため 不明 墓坑は不明確	——	S-86°-W		C類 中期中葉
22下	00057			甕	復 残 27.8×6.6×——					C類
23上	00058	接口	小児	甕	28.6×34.5×7.5	楕円形 85×53×50	7°	S-88°-W		B類 中期中葉
23下	00059			甕	31.5×35.2×7.7					C類
24	00060	単棺	成人	甕	復 54×83.2×12.4	楕円形 119×88.5×35	21°	N-40°-E	胴部最大径68cm	3a類 中期中葉
25	00061	単棺	成人	甕	復 73×95.5×14	隈丸三角形 132.5×109×43	+36°	N-41°-W		I類 中期前半
26	00062	単棺	小児	甕	復 43.4×50.4×——	隈丸方形 71×61×23	23°	N-54°-E		C類 中期中葉
27	00063	単棺	小児	甕	残 ——×44×9	隈丸方形 67×53×27.5	43°	S-2°-W		?
28上	00064	接口	小児	甕	復 28.9×23.9×10.5	楕円形 90×56×19	18°	S-27°-W		C類 中期中葉
28下	00065			甕	27.6×31×7.2					C類
29	00066	単棺	小児	甕	復 40.6×58.6×11	楕円形 83.5×60×19	30°	S-23°-W		A類 中期前半
30	00067	単棺	小児	甕	残 復 ——×25×9	SK-39に切られている 楕円形 50+α×31×4	上甕 −10°	S-20°-E	下甕は破壊	?

甕棺番号	登録番号 8344	埋棺方法	小児成人	形態	口径×器高×底径 復(復原)・残(残存高)・(cm)	墓拡形状 長さ×幅×深さ(cm)	埋角	方位	備考	時期
31上	00068	接口	小児	甕	復 37×33.7×—— 復	楕円形 97.5×46×9	—	S-48°-W		A類 中期前半
31下	00069			甕	復 20.2×36.4×—— 残					A類
32	00070	単棺	成人	甕	62×98×11.6	攪乱により墓坑が壊れている 隅丸長方形 174＋α×95.5×41	—	S-60°-W		1類 中期前半
33	00071	接口の可能性有	小児	甕	復 35.4×26.2×—— 残	ぶどう園の攪乱により墓坑を壊されている 楕円形 51＋α×51×10.5	—	N-76°-E		C類 中期中葉
34上	00072	挿入	成人	鉢	68.4×50.5×14 復	楕円形 160×130×70.5	44°	S-25°-E		3b類 中期後半
34下	00073			壺	79×92.5×13					4類
35	00074	単棺	成人	壺	——×76×13	丸 86.5×78.5×43	33°	N-87°-W	胴部最大径74cm	3a類 中期中葉
36	00075	単棺	成人	甕	91.6×145.7×16.6	隅丸三角形 157.5×125×80	0	N-62°-E		2類 中期中葉
37上	00076	接口	小児	甕	復 32×18.1×—— 残	不整楕円形 95×57×13.5	5°	N-72°-E		B類 中期前半
37下	00077			甕	復 40.2×44×8					B類
38上	00078	接口	成人	甕	68×15×—— 残	削平を受けている 楕円形 140×70×15	—	N-50°-W		2類 中期中葉
38下	00079			甕	復 72×100×—— 推定					2類
39上	00080	覆口	成人	甕	36.6×41.5×—— 残	SK-29に切られている 楕円形 140＋α×85×37.5	4°	N-79°-E	胴部凸帯部位最大径60.6cm	C類 中期後半
39下	00081			壺	35.6×78.3×12.4					3b類
40	00082	単棺	成人	甕	65.5×101.5×10.4	楕円形 135×92.5×72.5	44°	N-40°-E		1類 中期前半
41	00083	単棺	成人	甕	復 92.4×99.5×12.6	不整楕円形 122.5×85×40	35°	S-87°-W		1類 中期前半
42上	00084	覆口	小児	甕		不整楕円形 75×57.5×15	—	N-29°-E		— 中期後半
42下	00085			甕	復 33.3×41.5×10					D類
43上	00086	接口	成人	鉢	66.8×——	不整楕円形 162.5×97×42	2°	N-69°-W		1類 中期前半
43下	00087			甕	復 72×107.5×15					1類
44上	00088	接口	成人	鉢	69.5×48.5×12.4 残	楕円形 171×93×37.5	—	N-47°-E		2類 中期中葉
44下	00089			甕	76×94×12.4					2類
45	00090	?		甕	底部のみ 残 16.6×12	破壊されている 不明 116×60×15	—	—		?
46	00091	単？	成人	甕	残 84×11.2	楕円形 115×75×50	14°	N-66°-W		1類 中期前半

Tab.2 Pit計測一覧表

Pit No.	形状	長×幅×深(cm)	時期	遺構関係	遺物
1	丸	31×38×12.5	古墳		
2	丸	41×41×32	古墳後	SB－02	須恵器片
3	丸	69×70×58.5	古墳後	SB－03	須恵器片
4	方形	32×41×48.5	古墳後	SB－05	須恵器片
5	丸	42×50×36	古墳後	SB－05	須恵器片
6	丸	42×52×32	古墳後	SB－07	須恵器片
7	丸	39×40×19	室町	SB－04	須恵器片
8	丸	40×50×57.5	古墳後	SB－05	須恵器片
9	丸	38×39×30	古墳後		須恵器片
10	丸	30×40×34.5		SB－07	
11	丸	40×40×3.5	古墳	SB－05	土師器片
12	楕円形	40×53×42.5	古墳	SB－05	土師器片
13	方形	40×47×41.5	古墳後	SB－05	須恵器片
14	丸	40×30×23.5	古墳後	SB－07	須恵器片
15	丸	28×24×18.5	弥生		弥生土器片
16	方形	60×56×20	古墳後	SB－08	須恵器片
17	丸	40×40×35	弥生	SB－10	弥生土器片
18	丸	30×30×31.5	古墳後		須恵器片
19	丸	35×35×36	古墳後		土師器片
20	丸	32×32×36	弥生	SB－06	弥生土器片
21	丸	22×22×18	古墳後	SB－13	須恵器片
22	丸	38×38×28.5	弥生	SB－13	弥生土器片
23	丸	35×35×31	弥生		弥生土器片
24	丸	24×24×23	弥生		弥生土器片
25	方形	50×40×7	弥生	SB－15	弥生土器片
26	丸	46×46×36.5			
27	丸	30×30×17.5	弥生		弥生土器片
28	丸	40×40×32.5	弥生	SB－21	弥生土器片
29	丸	40×40×11			
30	丸	40×40×8	弥生		弥生土器片
31	楕円形	34×28×33	古墳後		須恵器片
32	方形	42×50×9	古墳後		土師器片
33	丸	40×40×21.5	古墳後	SB－20	土師器片
34	丸	30×30×27.5	古墳後		須恵器片
35	丸	20×20×43	古墳後		須恵器片
36	丸	50×50×20	古墳後		須恵器片
37	丸	30×30×49	古墳後	SB－04	須恵器片
38	楕円形	34×30×34	古墳後	SB－01	須恵器片
39	丸	52×52×18	古墳後	SB－03	土師器片
40	楕円形	36×28×19.5	弥生		弥生土器片
41	楕円形	50×40×26.5	弥生		弥生土器片
42	丸	30×30×21.5	弥生		弥生土器片
43	方形	38×30×21	古墳後		須恵器片
44	丸	50×50×62	弥生	SB－05	弥生土器片
45	楕円形	40×60×38.5	古墳後	SB－07	土師器片
46	丸	28×28×75	弥生	SB－13	弥生土器片
47	楕円形	74×40×24	弥生	SB－15	弥生土器片

第3章　金武城田遺跡

1．遺跡の位置

金武城田遺跡は、福岡市西区金武字城田に所在する。国土地理院発行の5万分の1地図「福岡」の北から31.5cm、西から12.8cmに位置する。ここは早良平野の奥近くに当たり、平野を北に貫流する室見川は遺跡の西を流れる。(Fig. 2, 31)

遺跡は、南北を小河川に挟まれた東北方向に張り出す丘陵上にある。遺跡のほぼ中軸線（東北－西南）部分が標高35m前後の尾根を形成し、両側の小河川へと下る。調査時には段状の水田・畑地となっていた。遺跡からは、東側の眺望が開けている。小さな谷や河川に隔てられた周囲の丘陵には、多数の遺跡群・古墳群が認められる。道路建設予定地は、この遺跡のほぼ中央部

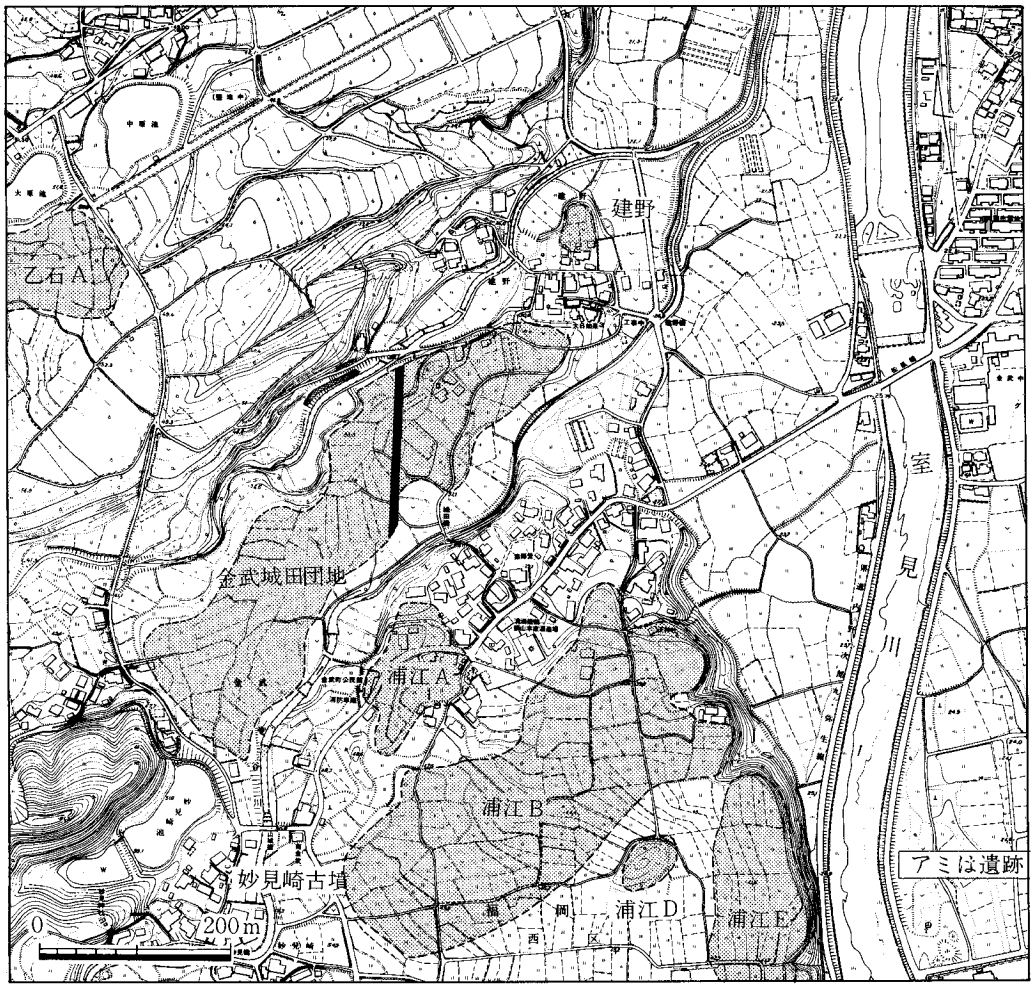


Fig. 31　金武城田遺跡周辺地形図（1/8000）

を南北に縦断する形になっており、尾根線を境に西北側と南東側に小さく広がるテラス部分で遺構を検出した。(Fig. 32)

2．調査の概要

1983年2月の試掘調査、その後の西区土木課との協議を受け、同年12月21日から発掘調査を開始した。調査は翌1984年3月29日までの約3カ月間を要した。

調査開始時には、路線内の農道・水路がまだ利用されており、これを避けての調査を余儀なくされた。このため調査区が分割されることになり、これら農道などを挟んで南からⅠ～Ⅳ区の地区割りを行った。Ⅲ'区が尾根上の部分に当たり、ここからⅠ～Ⅲ区は南に、Ⅳ区は北に低くなる。Ⅱ・Ⅲ区に比べⅠ区はやや高く、またⅣ区はⅢ'区の北斜面下に位置する。さらに包含層の遺物取り上げ、遺構の位置を明確にするためⅠ区南端から10mごとに小区を設定し、A～R区に分けた。本報告では、この小区は使用していない。調査面積は1862m²に及んだ（Ⅱ区の重層調査面積は含まない)。

Ⅲ・Ⅳ区には収穫を待つ大根畑があったため、調査はⅠ区から開始し、順次北へ進んだ。真冬から初春にかけての発掘で、降雪、凍結、霜などの自然条件に悩まされたが、作業員、調査補助員、地元の人々などの協力を得て、無事調査を完了した。

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物（ＳＢ）17棟、竪穴住居跡（ＳＣ）５基、溝（ＳＤ）4条、土坑（ＳＫ）13基、製鉄遺構（ＳＸ）22基の他、列石遺構、ピットなどがある。これらの遺構は、主に奈良時代に属している。しかし出土遺物には、縄文時代後・晩期、弥生時代、古墳時代、平安・鎌倉時代のものも見られ、この遺跡が多時期にわたって営まれたことを示す。

以下これらの遺構・遺物についての報告を行うが、Ⅲ'区を境に丘陵尾根下の東側平坦地を利用したⅠ～Ⅲ区と、北側の平坦地を利用したⅣ区に地形的に大別できることから、まずⅠ～Ⅲ区の遺構・遺物をまとめて述べ、次にⅣ区のそれについて述べる。ただ、Ⅲ'区(調査面積161m²)では表土下が地山となり、攪乱坑のほかは遺構もなく、また遺物も出土しなかったため、これ以上本報告では触れない。

また遺物につにては本文中で詳しく述べることができなかったので、巻末に掲載遺物の観察表(Tab. 3-9)としてまとめた。これには福岡市埋蔵文化財センター収蔵のための遺物登録番号も記載しているので、併せて参照されたい。

3．Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の遺構と遺物

1）各区の概要と土層

Ⅰ区　調査対象地の一番南に位置する。調査面積320m²。土層は比較的単純で、西壁でみると、地表下30～40cmが耕作土、その下に厚さ10cm程度の黒褐色の遺物包含層があり、さらに明

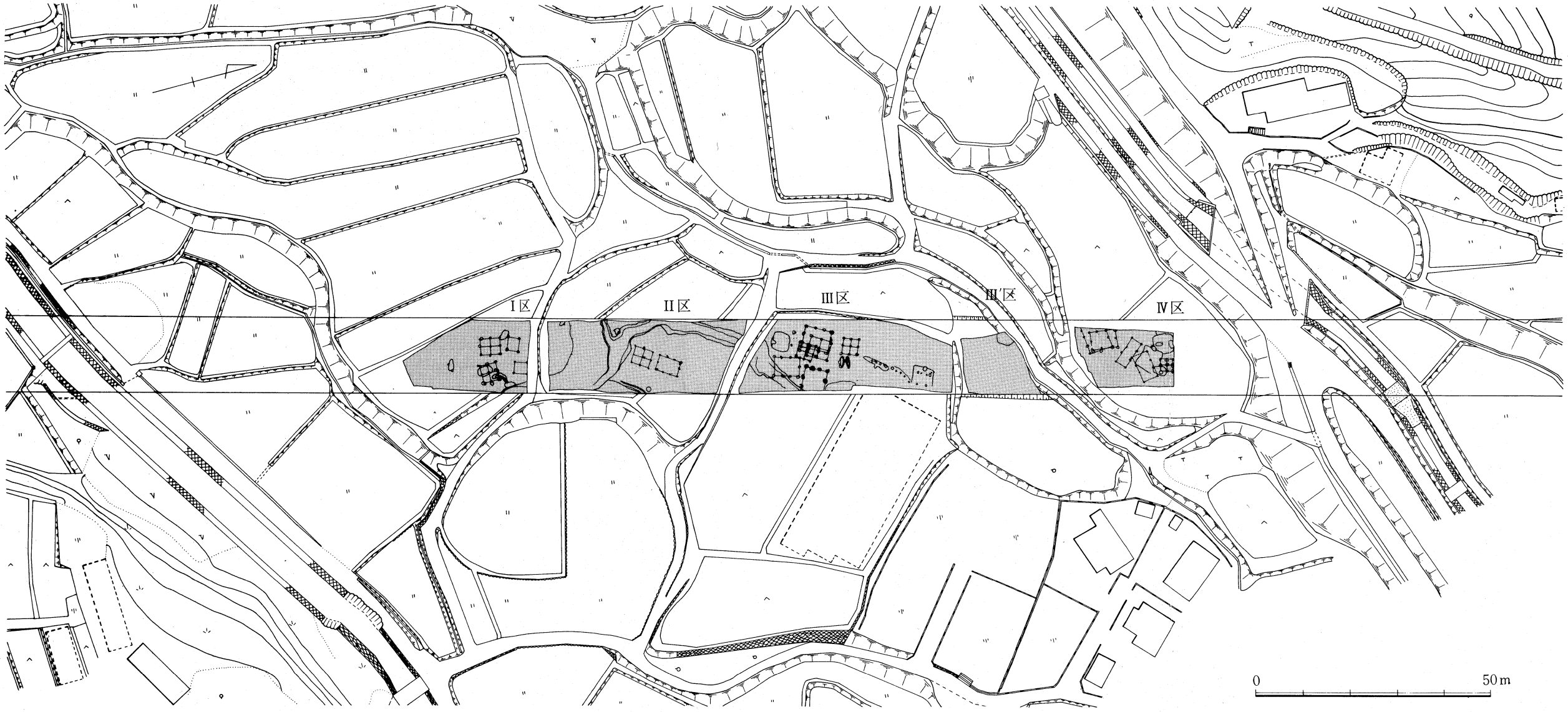


Fig. 32　発掘地点周辺図（1/1000）

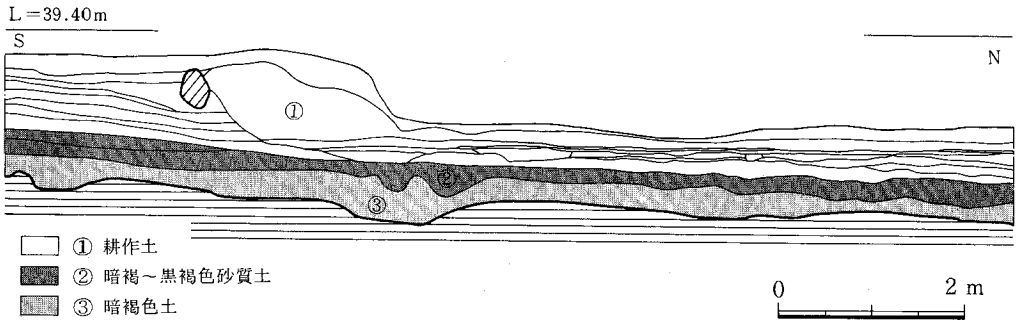


Fig. 33　II区西壁土層略図（1/80）

黄褐色の硬い地山への漸移層がある。地山は北側が礫、南に向かうにつれ赤褐色の粘質土となる。遺物包含層は、Ⅰ区南側には認められず、耕作土下が地山となっている。また地山面は、西から東に傾く。検出した遺構は、掘立柱建物４棟（ＳＢ01～04)、土坑４基（ＳＫ01～03、08)、溝１条（ＳＤ01)、製鉄遺構１基（ＳＸ28)、及び多数のピット群である。

II区　Ⅰ区から農道を挟んで、低くなりながら北へ続く地区である。調査面積580m²。しかし後述するように、上下2層に分けて発掘したため、調査延べ面積は1052m²となる。西壁の土層略図をFig. 33に示したが、おおまかに地表から①耕作土、②暗褐～黒褐色砂質土、③暗褐色土に分けられ地山（礫・赤褐色土）に至る。耕作土は厚さ70～100cm。段状に水田が作られているため、北側の水田が低くなっている。②③はほぼ水平に西壁面に認められ、その厚さは②が20～30cm、③が20～40cmである。ただ南端では地山面が高いので両層は薄くなり、また北端では両層の区別がやや困難となる。また東側に向かうにつれ全体に層が薄くなる。この②③は遺物包含層で、②を上層、③を下層と呼ぶ。また③の上面は遺構面（上層遺構面）となっており、製鉄遺構17基（ＳＸ01～14・16・17・19)、土坑３基（ＳＫ04・05・06)、列石遺構（ＳＸ26）などを検出した。さらに③の下面で溝(ＳＤ03)に西側を囲まれた掘立柱建物(ＳＢ05・06)、土坑2基(SK09・10）などを検出した（下層遺構面)。発掘にあたっては上層遺構面を精査した後③を剝し、下層遺構面の検出に移った。しかし東西に方向をとる溝（ＳＤ02）以南では地山が高く、両遺構面の区別がつかなかった。

III区　II区の北にあたり、III'区によって北側がさえぎられる。調査面積577m²。土層はII区とほとんど同じであるが、②に砂質部分がなくなり、③との分層発掘が困難となった。掘り下げる途中で製鉄遺構（SX20～23）などを確認し、その面を追ったがはっきりせず、結局地山近くでしか遺構面が検出できなかった。この遺構面では、西北～北にかけて丘陵斜面が続き、その前面に掘立柱建物６棟（ＳＢ07～12)、竪穴住居跡2基（ＳＣ01・02)、土坑3基（ＳＫ11～13）および多数のピット群が重複して設けられていた。またII区からの溝（ＳＤ03）も東北方向に続いている。このようにIII区では、丘陵裾に囲まれるようにして遺構が位置する。

以上みてきたように、II・III区では上下２層の遺構面の存在を確認した。しかし上層遺構面を検出できたのはII区だけであり、III区では遺構の一部にとどまる。また地形的に高いＩ区では、上下包含層の区別さえ定かでない。すなわち、Ｉ区では上下遺構面が重複し、II区では上下遺構面が南側を除けば明確に区別できる。またIII区では、一部遺構が上層遺構面に属する他は下層遺構面としてとらえたが、上層遺構が重複している可能性も強い。

以下各々の遺構とその出土遺物について観察を行うが、遺構面にとらわれず各遺構ごとに記述する。遺構面相互の関係については出土遺物なども勘案し、「５．まとめ」の項で論じる。

２）遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

あわせて12棟を確認した。ただIII区は柱穴の重複が著しく、一部図上復元となった。この他に多数のピットを検出しており、中には柱痕跡がみられ、まとめきれなかった建物があることをうかがわせる。

ＳＢ01（Fig. 34）　Ｉ区で検出した2×2間の総柱の建物である。実長360cmの正方形をなし、柱間寸法は6尺（180cm）の等間である。建物方位はN-3.5°-Eにとる。柱掘形は平面楕円形を呈するものが多く、円形のＰ2を除けば長径55～92cmである。深さは13～45cm。埋土から土師器甕、須恵器甕などが出土した。ＳＫ01を切っている。８世紀代のものか。

ＳＢ02（Fig. 34）　Ｉ区で検出した2×2間の総柱の建物である。梁行360cm、桁行420cmの実長をもつ南北棟で、柱間寸法は梁が6尺（180cm）の等間、桁が7尺（210cm）の等間となる。建物方位はN-14°-E。掘形は径35～75cmの円形。深さは削平されて浅いＰ1、Ｐ2のほかは10～22cmである。ＳＫ02を切る。８世紀代か。

出土遺物（Fig. 39-001）　Ｐ3からのみ土師器甕、須恵器甕・杯蓋などの細片が出土した。001は土師器甑の把手部分である。把手はナデで仕上げる。甕外面には刷毛目が残り、内面はヘラ削り。内壁には炭化物が付着する。

ＳＢ03（Fig. 34）　Ｉ区で検出したN-17°-Eに方位をとる1×1間の建物である。実長は東西240cm（8尺）、南北270cm（9尺）をはかる。柱掘形は径37～48cmのほぼ円形。深さは8～31cm。出土遺物はＰ3から出土した受け部をもつ土師器杯身細片１点のみである。

ＳＢ04（Fig. 34）　Ｉ区ＳＢ02のすぐ北側で検出した。N-24°-Eに方位をとる1×1間の建物で、実長は東西270cm（9尺）、南北240cm（8尺）をはかる。柱掘形は、径57～100cmの略円形を呈し、深さは18～34cm。ＳＫ02を切る。

出土遺物（Fig. 39-002）　Ｐ3からのみ出土した。002は手捏ね風の小型鉢である。平底で、口縁部はわずかに外反し丸くおさめる。内面下半はヘラ削りののちナデ。上半から外面は横ナデ。粗雑な作りだが、焼成は良く硬い。２次焼成を受け表面が剥離する。柱穴上面からの出土

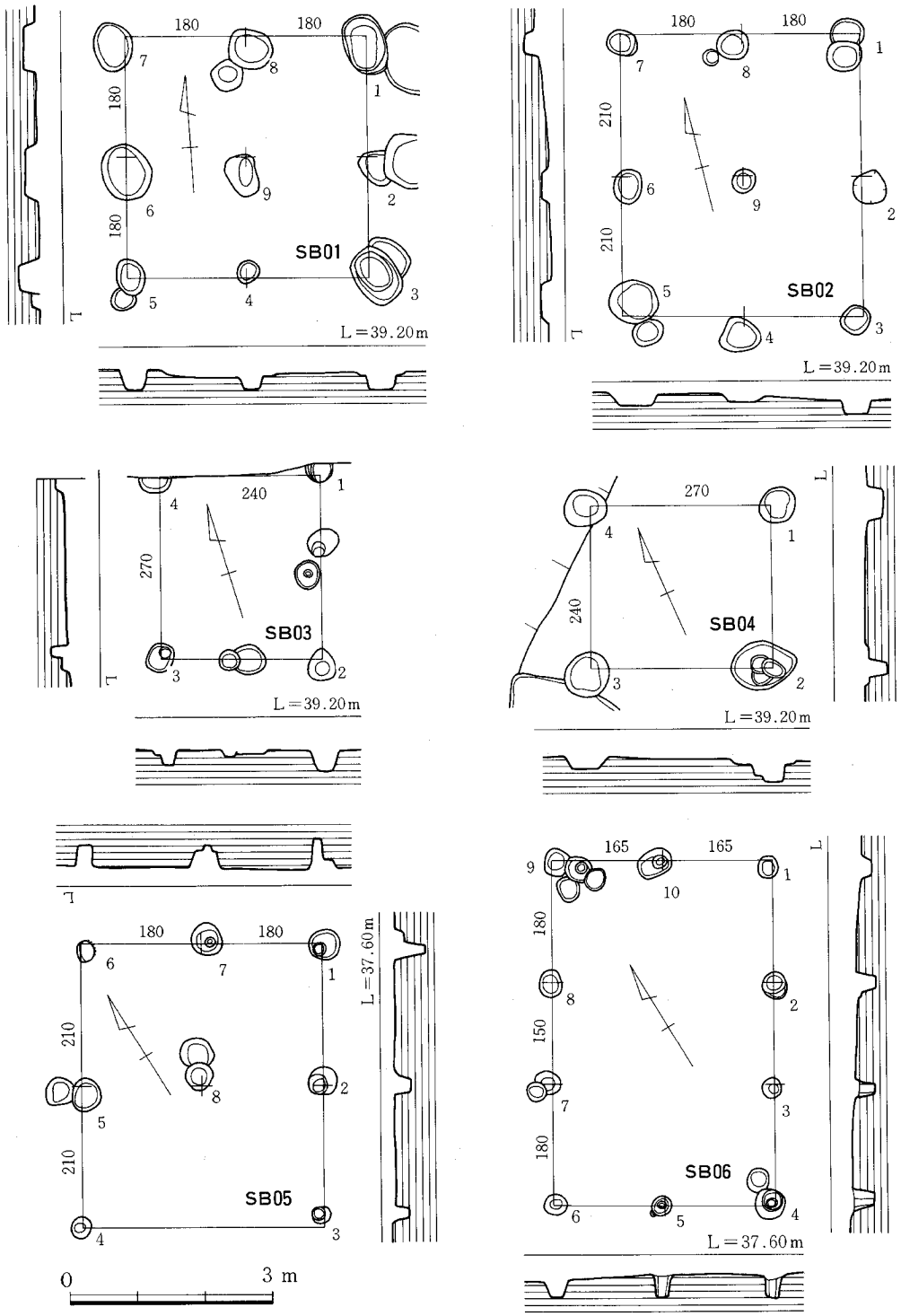


Fig. 34　SB01・02・03・04・05・06実測図（1/100）

で、この遺構の時期を表すものではない。ほかに土師器甕の細片2が出土した。

ＳＢ05（Fig. 34）　Ⅱ区で検出した2×2間の建物である。南側の中間柱は検出できなかったが、総柱になるものと考えられる。梁行360cm、桁行420cmの実長をもつ南北棟で、柱間寸法は梁6尺（180cm）、桁7尺（210cm）のいずれも等間である。建物方位はN-32°-Eで、すぐ北側に位置するＳＢ06と縦に並ぶ。柱掘形は径30～50cmの円形で、深さは12～46cmをはかる。遺物からすれば、８世紀前半。

出土遺物（Fig. 39-003）　Ｐ1・Ｐ4・Ｐ5・Ｐ7から少量出土した。003はＰ7から出土した須恵器蓋細片で、端部がやや内湾気味に短く立つ。ほかに土師器甕・蓋・椀、須恵器甕の細片少量と鉄滓が出土した。

ＳＢ06（Fig. 34）　Ⅱ区で検出した2×3間の南北棟である。建物方位はＳＢ05とほとんど変わることなくN-31°-Eにとる。実長は梁行330cm、桁行510cm、柱間寸法は梁が5.5尺（165cm）の等間、桁が北から6・5・6尺（180・150・180cm）となる。柱掘形は径30～46cmの円形で、深さは26～36cmをはかる。Ｐ4・Ｐ5・Ｐ10には柱痕跡が認められる。ＳＢ05と同時期。

出土遺物（Fig. 39-004）　Ｐ5をのぞいた柱穴から遺物が少量ずつ出土した。004は須恵器のつまみを持つ蓋の細片である。天井部は回転ナデ、内面はナデで仕上げる。Ｐ10出土。ほかには土師器甕・椀細片、フイゴ羽口片、鉄滓がある。

ＳＢ07（Fig. 35）　Ⅲ区で検出した2×3間の南北棟である。実長は梁行390cm、桁行540cm、柱間寸法は梁が8.5尺（195cm）、桁が6尺（180cm）のいずれも等間である。建物方位はN-16.5°-E。柱掘形は径53～98cmの円あるいは楕円形で、深さは30cm前後である。ＳＤ03を切り、ＳＢ11と重複する。Ｐ3・Ｐ4・Ｐ7から土師器甕細片、鉄滓が出土したにとどまる。

ＳＢ08（Fig. 35）　Ⅲ区ＳＢ07のすぐ北側で検出した梁行３間の東西棟である。桁行の東側は発掘区外にかかるが、現状で２間分確認できる。梁行は実長480cm、柱間は160cmの等間で復元してみたが、5尺（150cm）の等間としてとらえることも可能である。桁は7尺（210cm）の等間。建物方位はN-27°-E。柱掘形は楕円形にちかく、Ｐ1をのぞけば82～106cmの長径をもつ。深さは42～76cmをはかる。ＳＤ03に切られる。Ｐ2・Ｐ4・Ｐ7・Ｐ8から須恵器蓋、土師器甕などが少量出土したが、いずれも細片で実測できない。

ＳＢ09（Fig. 35）　Ⅲ区ＳＢ08の西側で、N-27.5°-Eのほぼ同じ方位をもって建てられた3×3間の南北棟である。実長は梁行450cm、桁行600cm、柱間寸法が桁が西から6・5・4尺（180・150・120cm）、梁が北から7・7・6尺（210・210・180cm）。柱掘形は径40～106cmの円あるいは楕円形で、深さは28～73cm。南梁柱から210cm離れた南側に、ＳＢ09に沿った2間分の柱列を確認しているが、あるいはこの建物に属する施設かもしれない。ＳＢ10に切られ、ＳＢ11を切る。またＳＫ11と重複する。Ｐ1・Ｐ2・Ｐ9をのぞいた柱穴から、須恵器杯、土師器杯・甕、鉄滓などが少量、なおかつ細片で出土した。時期の分かるものとして須恵器の杯身があり、それからすれ

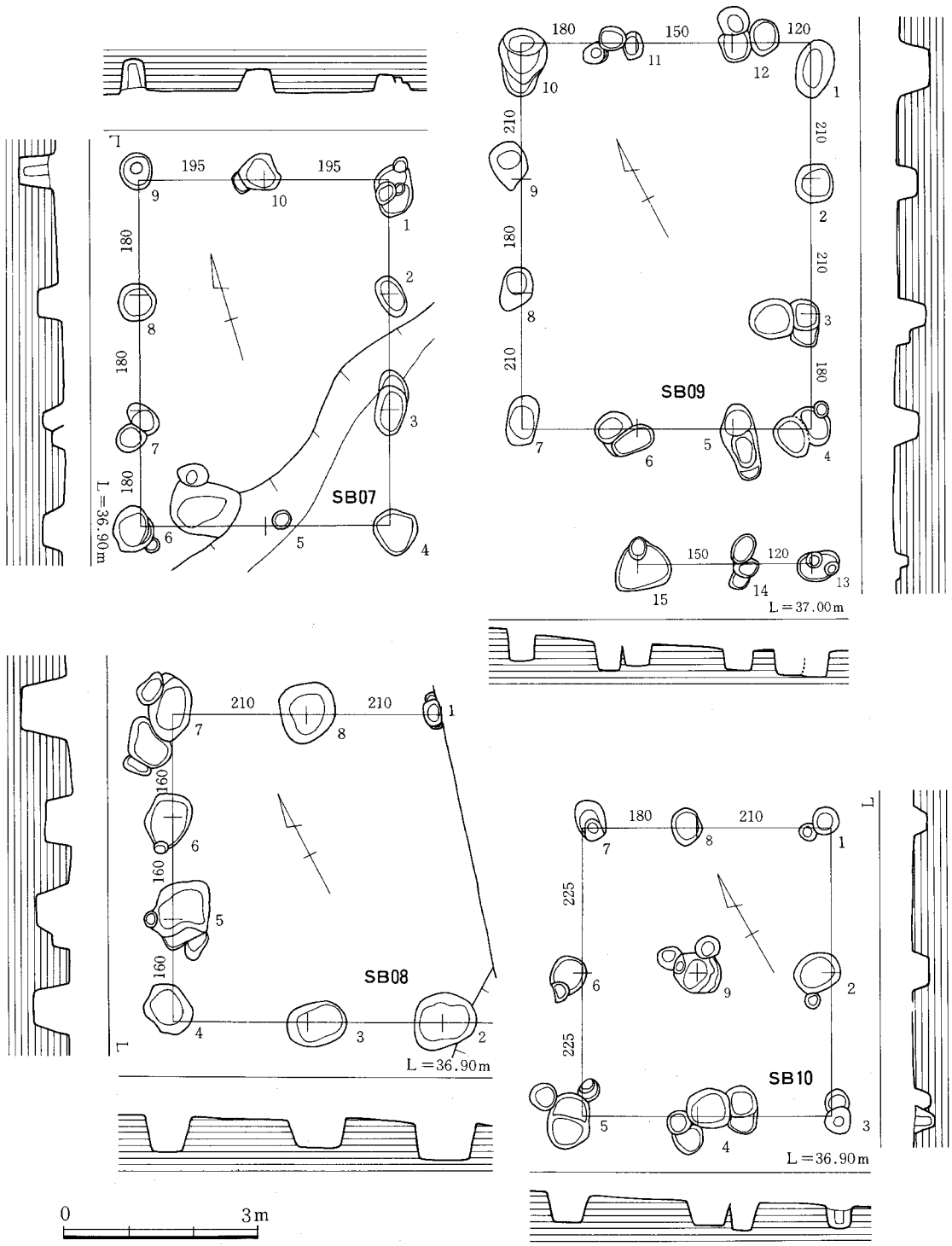


Fig. 35　SB07・08・09・10実測図（1/100）

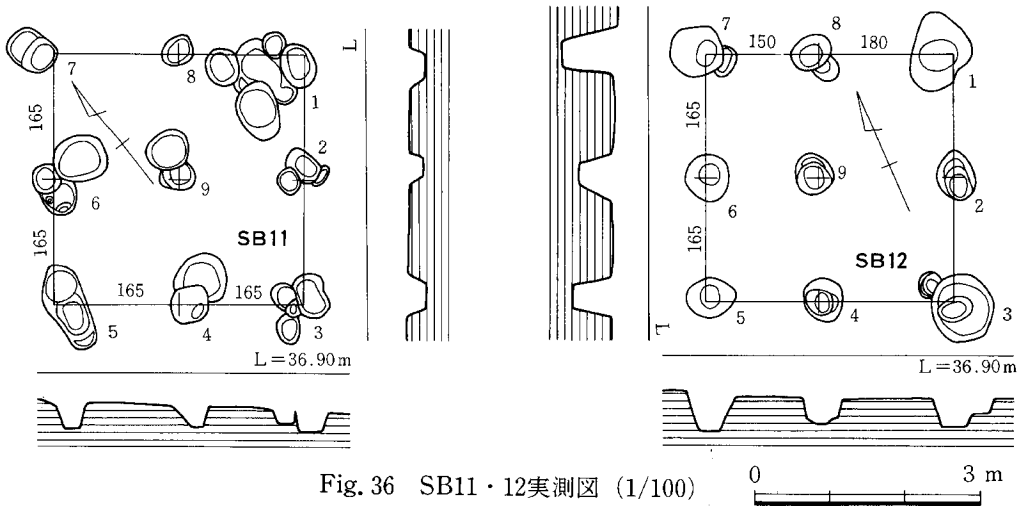


Fig. 36　SB11・12実測図（1/100）

ば6世紀後半となるが確定はできない。

ＳＢ10（Fig. 35）　Ⅲ区ＳＢ08の東北部分で検出した2×2間の総柱の建物である。実長は梁行が390cm、桁行が450cmで、南北棟となる。柱間寸法は梁が6・7尺（180・210cm）の不等、桁が7.5尺（225cm）の等間となる。建物方位はN-30°-E。柱掘形は円もしくは楕円形で、径40～87cm、深さ21～49cmをはかる。ＳＢ08・ＳＢ11・ＳＫ11を切る。Ｐ3・Ｐ4から須恵器、土師器の細片が数点出土した。

ＳＢ11（Fig. 36）　Ⅲ区ＳＢ08の南東部分で検出した2×2間の総柱の建物である。実長330cmの方形で、柱間寸法はいずれも5.5尺（165cm）の等間である。建物方位はN-38°-E。柱掘形は径37～63cmの円または楕円形で、深さは12～44cm。ＳＢ08・ＳＢ09に切られる。Ｐ2・Ｐ3・Ｐ4・Ｐ7から須恵器、土師器の細片少量と、鉄滓が出土した。8世紀か。

ＳＢ12（Fig. 36）　Ⅲ区ＳＢ08の北側で検出した2×2間の総柱建物である。実長330cmの方形で、柱間寸法は南北側が西から5・6尺（150・180cm）、東西側が5.5尺（165cm）の等間となる。建物方位はN-23°-E。柱掘形は円形に近く、径54～88cm、深さ34～74cmをはかる。Ｐ4から土師器甕細片1点のみが出土しただけである。

(2)　竪穴住居跡

ＳＣ01（Fig. 37）　Ⅲ区北側、西および北斜面下で検出した北北東に方位をとる住居跡である。西側壁は4.2m、東に向かうにつれ削平が進み、東側壁と南北側壁の東側部分は残存しない。柱穴のあり方などから勘案すれば、東西長は4.5～5.0mで、やや東西に長い隅丸方形のプランとして復元することができる。壁高は最も高い西側壁で29cmである。竈は西側壁中央に設けられるが、住居廃棄時に破壊されたものか形を残さず、長径1.2m、短径0.9m、床面からの深さ

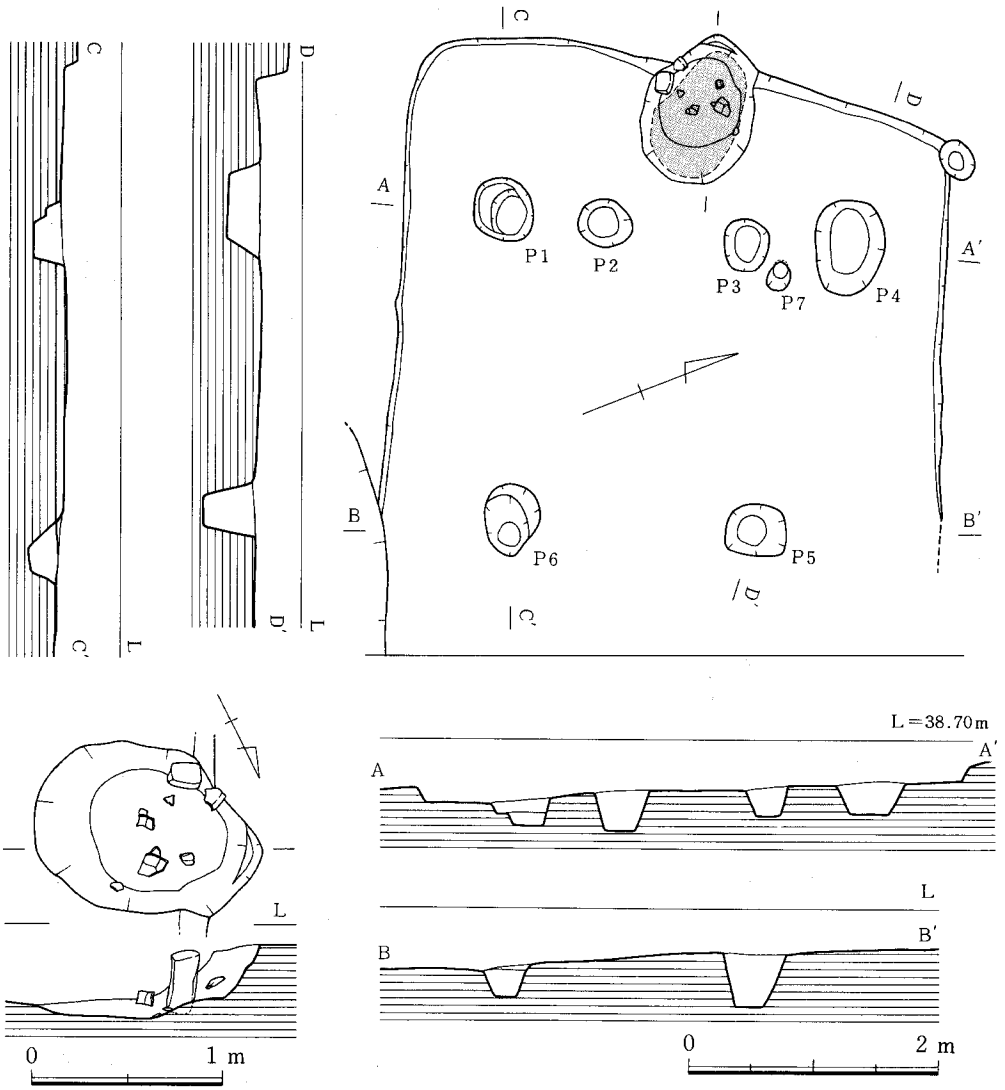


Fig. 37　SC01実測図（1/60,1/40）

10cmの楕円形土坑とその中に直立する長方体の石材が認められるだけである。坑内には焼土、炭化物、土師器甕片がつまっていた。床面には7個のピットがあり、このうちP7をのぞいたものが柱穴になるものと考えられる。やや小振りのP2・P3をのぞいた4穴が主柱穴と考えられ、P1－P4間2.75m、P4－P5間2.5m、P5－P6間2.0m、P6－P1間2.5mをはかる。覆土は礫混じりの暗茶褐色土1層で、貼床などは認められない。6世紀後半。

出土遺物（Fig. 39）　覆土から須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器甕・杯・高杯、竈から土師器甕、床面から土師器甕・高杯の破片が出土した。

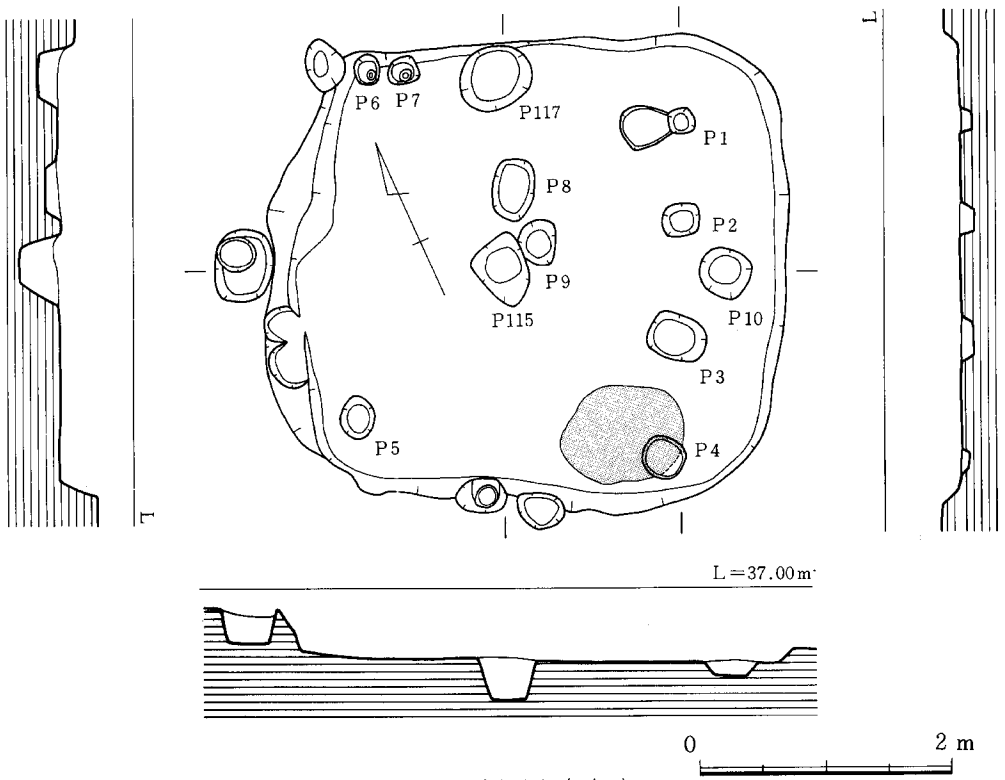


Fig. 38　SC02実測図（1/60）

須恵器（005-010）　005－007は杯蓋。005・006は口縁端部を丸くおさめるもので、005は天井部と体部の境に沈線をもうける。007は口縁内側に小さな段を作る。口径12.1～12.8cm。007がやや小さい。005は赤褐色を呈する。008・009は杯身。008はシャープな作りで、口縁が内湾気味に短く立つ。009は短く直立する口縁をもち、器肉が厚い。生焼け。010は甕で口径11.9cmと小型である。口縁は肥厚し、その端部は中くぼみになり両端がわずかに張り出す。胴外面は平行タタキ、内面は青海波当て具痕が残る。焼きがあまい。

土師器（011）　竈と床面出土のものが接合した甕で、口縁の外反は小さく、端部は丸くおさめる。外面から内面胴上位までは荒いタッチの刷毛目、それ以下はヘラ削り。口縁外面は刷毛目をナデ消す。口縁に黒斑がある。

ＳＣ02（Fig. 38）　Ⅲ区南側の西斜面下で検出した北北東に方位をとる隅丸方形の住居跡である。東西幅3.9m、南北幅3.6mで、東西にわずかに長い。壁高は西側壁で25cm、東側壁で10cm前後で、北・東両側壁の遺存状態が悪い。南側壁東寄りに、床面から10cmほど浮いた焼土とそれを取り囲む暗灰褐色土を検出しており、竈の可能性が強いが、その構造などについては不明。床面には12個のピットがあるが、このうちＰ117・Ｐ115は後世のものであり、Ｐ3・Ｐ10もその

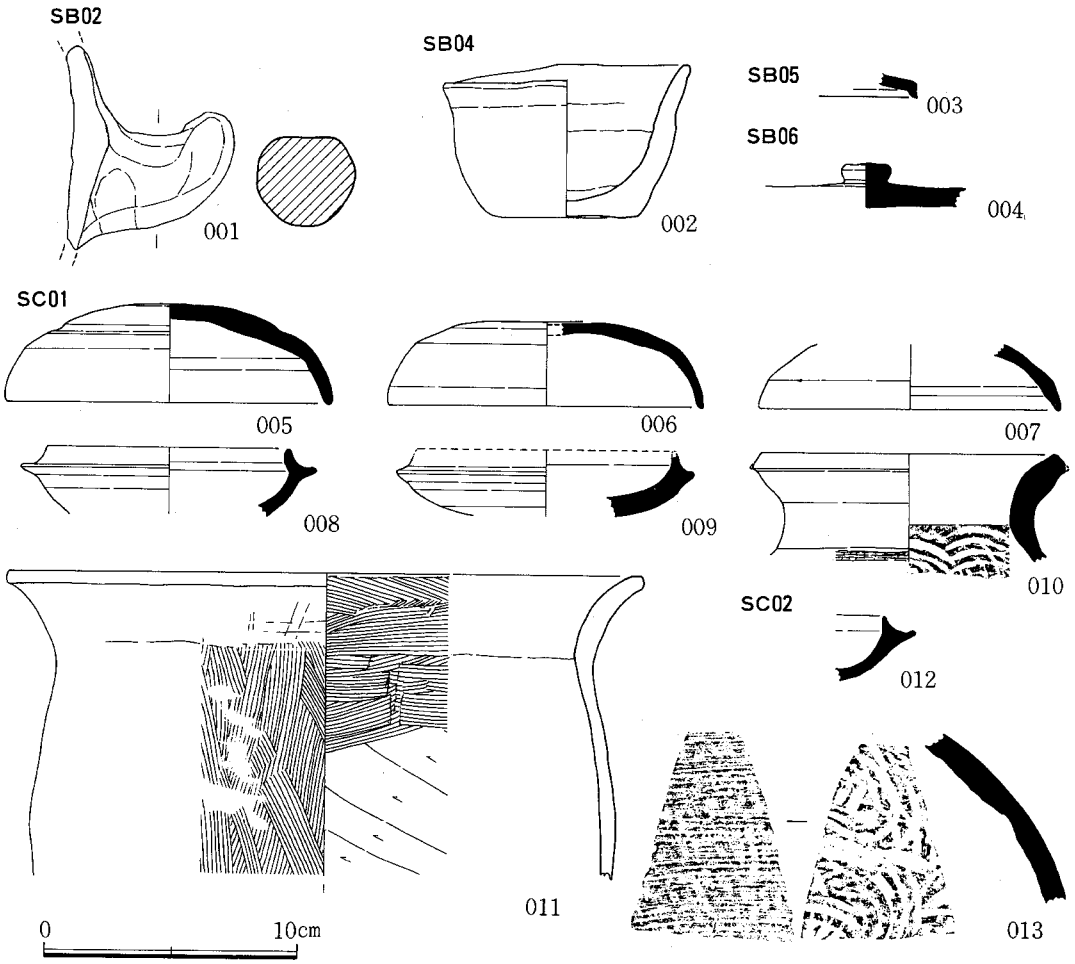


Fig. 39　SB02・04・05・06,SC01・02出土遺物実測図（1/3）

可能性が高い。主柱穴は、比較的小振りで、側壁に近いP1・P4・P5・P6 に求められ、その柱間距離はP1－P4間2.7m、P4－P5間2.4m、P5－P6間2.75m、P6－P1間2.5mとなる。覆土は礫混じりの暗褐色土１層で、貼床などは確認できなかった。６世紀後半か。

出土遺物（Fig. 39-012･013）　覆土から少量の須恵器・土師器細片が出土したにとどまった。012は須恵器杯身で、口縁は短く直立する。シャープな作りで、外底は赤色を発する。013は外面平行タタキ、内面青海波当て具痕の残る須恵器甕片で、暗い赤紫色を呈するが焼きは良い。

(3)　土坑

ＳＫ01（Fig. 40）　Ｉ区で検出した。長さ3.10m、幅1.95mの隅丸長方形の平面をなし、深さは20cm。長軸はほぼ真北に向く。ＳＢ01に切られる。覆土から須恵器杯蓋、土師器杯・壺・甕

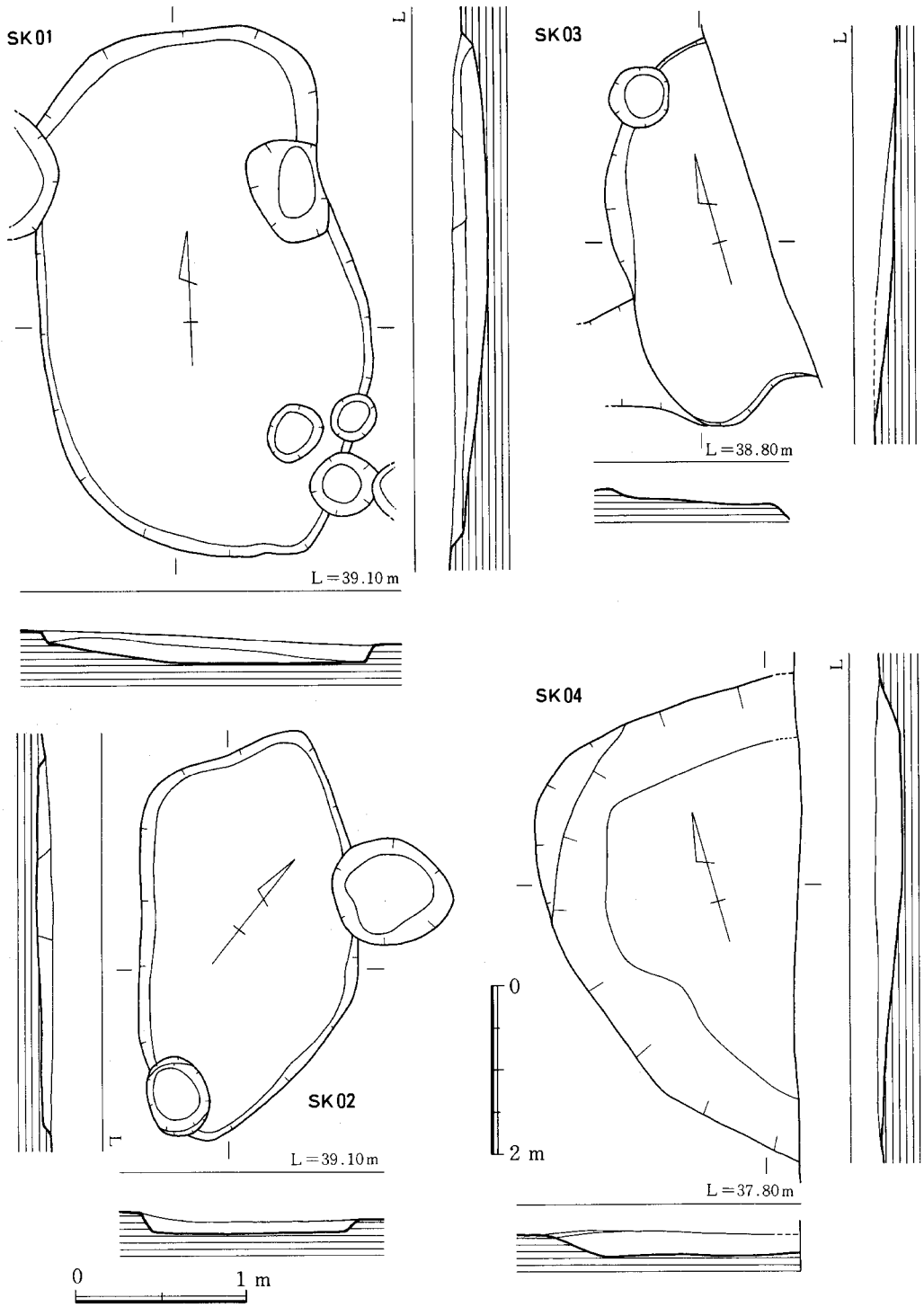


Fig. 40　SK01・02・03・04実測図（1/40, 1/80）

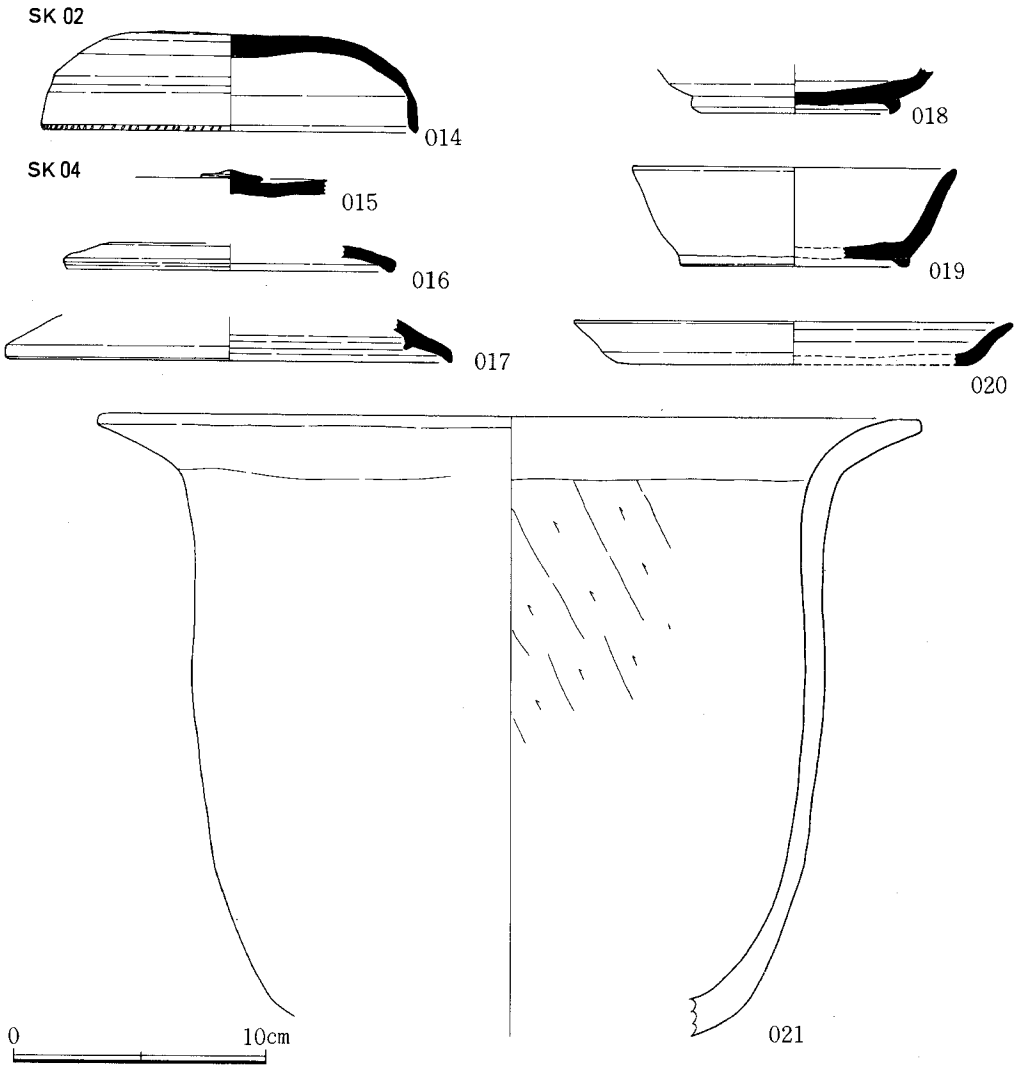


Fig. 41　SK02・04出土遺物実測図（1/3）

が出土したがいずれも細片である。6世紀後半。

ＳＫ02（Fig. 40）　Ｉ区、西北側で検出した。長さ2.5m、幅1.3mの不整長方形の平面で、深さは12cm。長軸は西北に方向をとる。ＳＢ02、ＳＢ04に切られる。6世紀後半。

出土遺物（Fig. 41-014）　須恵器杯蓋である。体部は直立し、ヘラ削りの天井部との境は浅い沈線状の段がつく。口縁端にはヘラの刻み目を施し、またその内側には小さな段がつく。他に土師器甕細片などが出土した。

ＳＫ03（Fig. 40）　Ｉ区の東北隅近くで検出した。東側を削られているものの、長さ2.28m、推定幅1.0m前後の長楕円形の平面としてとらえられる。長軸は北北西にとる。南側でＳＤ01と

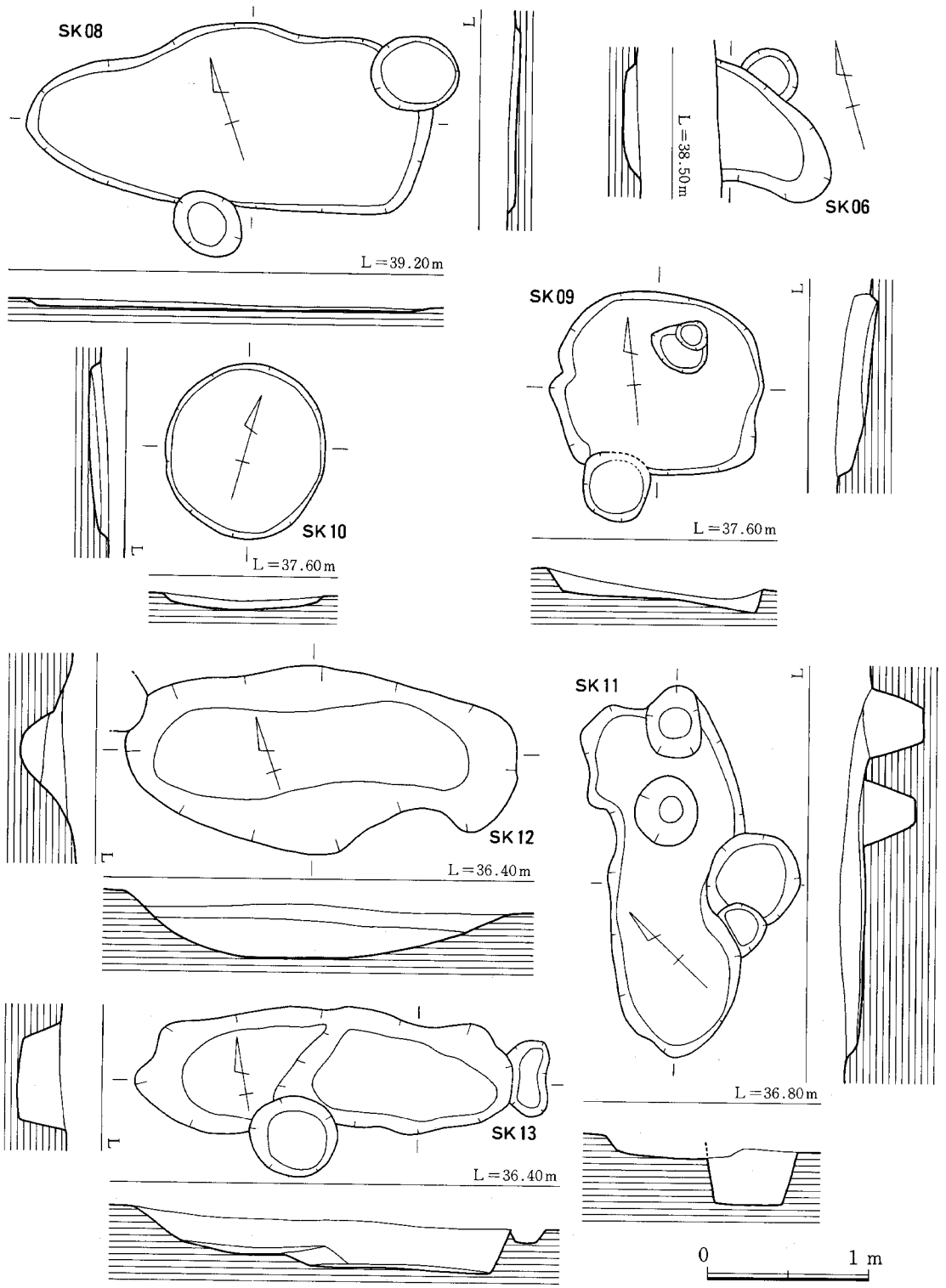


Fig. 42　SK06・08・09・10・11・12・13実測図（1/40）

重複するが、深さが8cmと浅く、先後関係は不明。出土遺物もない。

ＳＫ04（Fig. 40）　Ⅱ区上層遺構面で検出した。東側が発掘区外にかかるが、現状で南北幅5.8m、深さ32cmをはかる。円形状の平面をなすものか。８世紀中頃。

出土遺物（Fig. 41）　覆土から須恵器杯・蓋、土師器杯・甕などの破片が出土した。

須恵器（015-020）　019をのぞけばすべて小片である。015-017は蓋。016は端部が丸くなり、器高も低い。017は内面に返りをもち、口径も大きく、器高も高い。015は偏平なつまみをもつ。018・019は高台付きの杯。ともに高台は底部の外側近くに取り付けられる。019は焼きのあまいもので、体部が直線的に外傾する。020は皿で、体部が内湾気味に短く外反する。

土師器（021）　口縁が大きく外反する甕で、底部は平底に近い。外面は刷毛目の後ナデ、内面はヘラ削りを行う。胴外面には黒斑がある。内面を中心に器表の剥落著しい。

ＳＫ05　Ⅱ区上層で検出した。長さ11.0m、幅7.0m前後の長軸をほぼ北にとる楕円形状の平面を呈するが、南側は直線的になる。深さは20～30cmと浅いが、北側を中心に段がつく。南側直線部分に沿うようにして製鉄遺構＜Ａ群＞があり、これに関連した遺構であろう。８世紀中頃。

出土遺物（Fig. 43）　覆土から須恵器蓋・杯・皿・高杯・壺、土師器杯・甕などが出土した。

須恵器（022-034）　022-026は蓋。口縁端部が三角形状の断面を呈する022-024と丸くおさめる025・026に大別できる。023・024・025は天井が低い。026は生焼け。027は無高台の、028・029は高台付きの杯である。027は雑な調整で、焼きもあまい。029は低い高台が底部内側につく。生焼け。030は椀で、体部と底部の境近くに高台を設け、そこから体部が直線的に外傾する。031は皿。口縁端部を小さく外に引き出す。底部、内底はナデ、他は横ナデ。032・033は長頸壺。032は肩屈曲下に浅い沈線をめぐらす。033の屈曲部は比較的シャープである。034は高杯で、低い脚部を持つ。焼きがあまい。

土師器（035）　実測したのは椀１点のみである。高い高台が外に張り出す。ヘラ磨きと考えられるが、摩滅して不明瞭。

ＳＫ06（Fig. 42）　Ⅱ区西南部分で検出した。発掘区外にかかり、現状で幅0.63m、深さ11cmをはかる。楕円形状の平面をなすものか。上下どちらの遺構面に属するかは不明。覆土から、ＳＣ01出土のものと同じ須恵器細片が出土した。

ＳＫ08（Fig. 42）　Ⅰ区南側で検出した。ほぼ東西に長軸をとる不整長方形の平面をなし、長さ2.5m、幅1.15m、深さ5cmをはかる。土器からすれば、６世紀後半。

出土遺物（Fig. 43-036・037）　036は須恵器杯蓋で、天井部と体部の境に浅い沈線をめぐらす。端部は尖り気味である。天井はナデで仕上げている。037は黒曜石の石鏃。先端部を欠損する。他に土師器甕などの細片が出土している。

ＳＫ09（Fig. 42）　Ⅱ区下層遺構面で検出した。1.33×1.15mの東西にやや広い隅丸方形の土坑で、深さ24cm。８世紀代か。

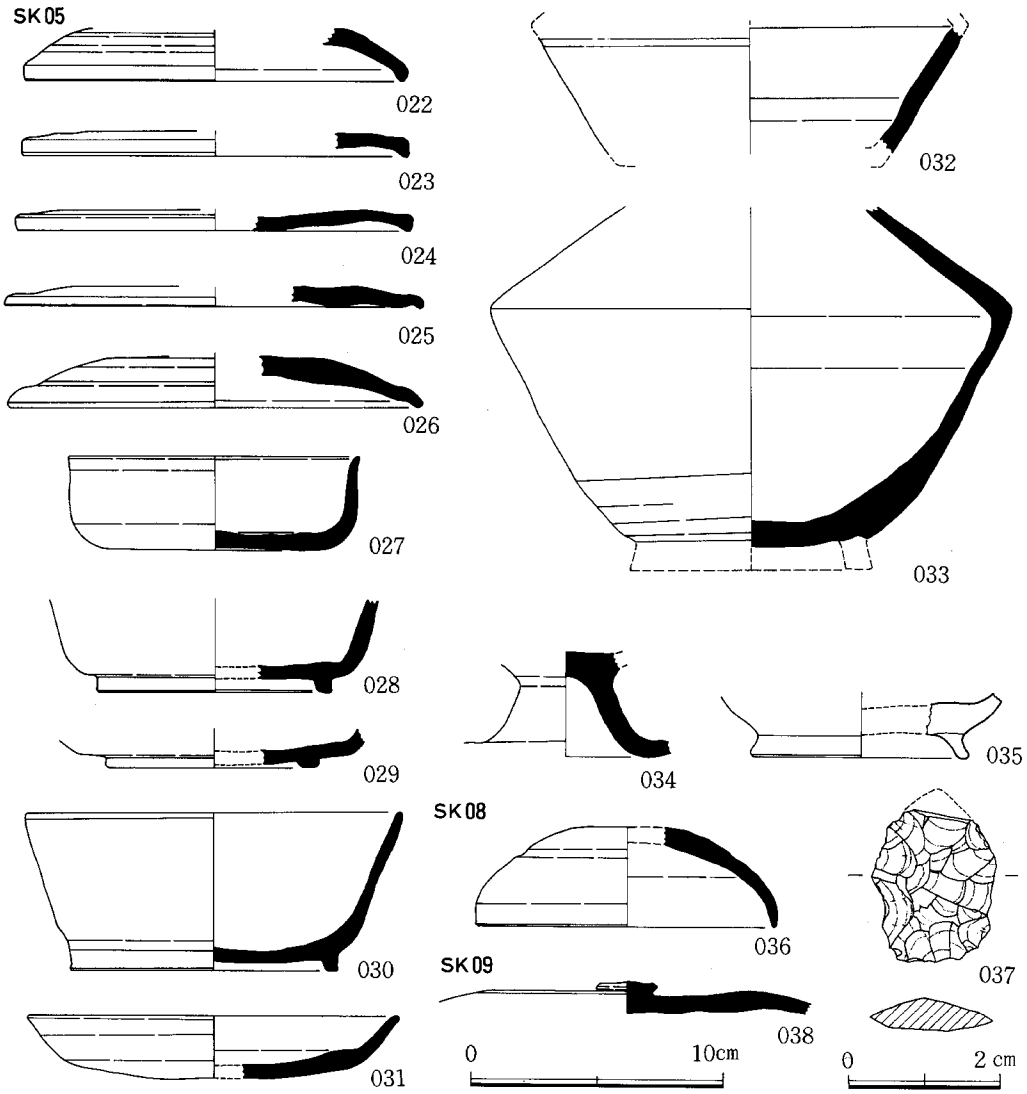


Fig. 43　SK05・08・09出土遺物実測図（1/3,1/1）

出土遺物（Fig. 43-038）　偏平なつまみを持つ須恵器蓋である。他に端部が立つ須恵器蓋、土師器蓋・甕などが出土している。

ＳＫ10（Fig. 42）　II区下層遺構面で検出した径1.0～1.1mの円形土坑である。深さは１０cm。土師器甕細片1と鉄滓1が出土したにとどまる。

ＳＫ11（Fig. 42）　III区下層遺構面で検出した。長軸を北北東にとる長さ2.32m、幅0.8mの平面長楕円形を呈し、深さは16cm。ＳＢ10に切られ、ＳＢ09と重複する。土師器杯・甕などの細片がわずかに出土した。

ＳＫ12（Fig. 42）　Ⅲ区下層遺構面の中央部で検出した。長さ2.42m、幅1.18mの長楕円形を呈し、深さは40cmをはかる。長軸方向はほぼ東西。覆土から弥生土器と考えられる甕細片が1点だけ出土している。

ＳＫ13（Fig. 42）　Ⅲ区下層遺構面、ＳＫ12のすぐ北で、ほぼ同じ形態・規模・長軸方向をとって築かれた土坑である。長さ2.35m、幅0.74m、深さ0.4mをはかる。底部は段をなす。弥生土器の鉢細片１点のみが覆土から出土した。

(4)　溝

ＳＤ01　Ⅰ区で検出した小溝である。ＳＢ01と重複したところから北に進み、すぐ東に折れ、ＳＫ03と切り合い、発掘区外にぬける。幅0.75m、深さ12cm。土師器細片が1点出土した。

ＳＤ02　Ⅱ区南側で検出した。西壁側では断面にもあらわれないくらい浅くまた狭いが、東に向かうに連れ扇形に開き、深さも増す。その広がりはⅠ区東北部分にも及んでいる。またこの溝を境に北側の地形が低くなる。南側から堀り始めた関係で、一気に下げてしまったが、下層遺構面時にはすでにこの溝はあり、また上層遺構面が築かれたときにも埋まりながらもその形を保っていたものと考えられる。その形態などからして、自然の小さな谷であろう。遺物は主として８世紀前半から後半にかけてのものである。

出土遺物（Fig. 44）　覆土から、須恵器、土師器、鉄滓などが出土した。

須恵器（039-050）　039-041は蓋で、口縁端部の作りにバラエティーがある。
042-045は杯。高台径はほとんど変わらないが、杯部が小さい042・043と大きい044・045に大別できる。体部はほぼ直線的に外傾し、高台は045を除けば底部内側につく。045の焼きはあまい。046・047は皿。小型の046と大型の047がある。047は器壁が厚く、高杯杯部片の可能性もある。048は瓶。器壁の厚い作りで、頸上部に浅い波状文、胴部にヘラ描き文および沈線を施す。胎土には砂粒を多く混じえている。049・050はともに高杯脚筒部片である。049ははめ込み式のもので、焼きがあまい。050は杯部を取り付けるタイプである。

土師器（051-053）　051は頸部が肥厚し、口縁が大きく外反する甕。052・053は甑の把手。長いものと短いものがある。

瓦（054）　内面に布目を残す。砂粒を多く含んだ胎土で、暗赤褐色を呈する。

ＳＤ03　Ⅱ区下層遺構面で検出した。Ⅱ区の北側を囲むように掘られたもので、その延長はⅢ区東南部に及ぶ。東側は発掘区外にかかるが、発掘区内の状態からすれば、西辺40m程度、北東に方位をとるコの字状の溝としてとらえることもできる。南辺には西側から幅1.70mの溝が入り込むが、切り合いなど見られず、同一溝と認めた。また南辺の東側はＳＤ02に切れ込む。西辺で溝幅2.10～3.20m、深さ20～30cm。溝底は南辺より西辺の方が低い。この溝に囲まれる遺構としてＳＢ05・06があり、その建物方位と溝方向がほぼ一致しているところから、相互の関連性

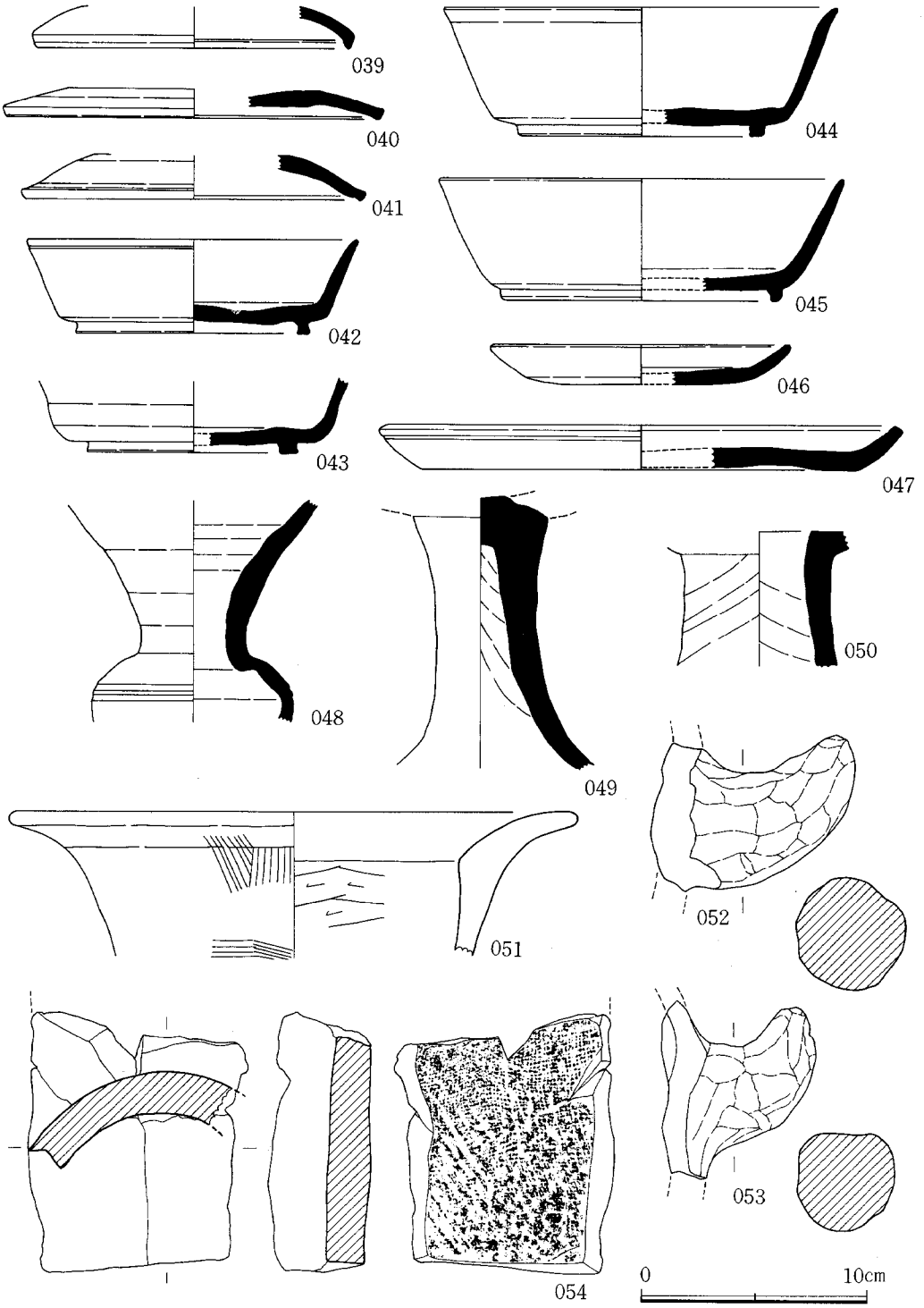


Fig. 44　SD02出土遺物実測図（1/3）

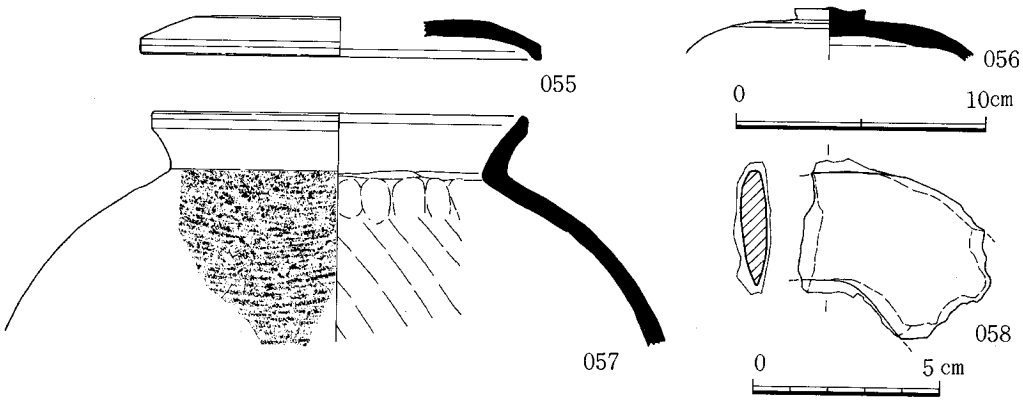


Fig. 45　SD03出土遺物実測図（1/3, 1/2）

が求められる。西斜面からの排水の便のために設けられたものであろうか。Ⅲ区ではＳＢ07に切られている。８世紀前半。

出土遺物（Fig. 45）

須恵器（055-057）　055・056は蓋。055は口端部が短く立つもので、天井はへこむ。056は低いつまみを持つもので、生焼け。ともに天井はヘラ削り、内天井はナデ。057は口縁の開きが小さく、胴が大きく張る甕。胴外面は平行タタキ、内面はタタキをナデ消す。

鉄製品（058）　鎌であろうか。銹化が激しい。

ＳＤ04　Ⅱ区上層遺構面中央東側で検出した。幅0.90m、深さ11cmの溝で、北北東に進み、発掘区外に延びる。覆土から少量の土師器、鉄滓が出土した。

(5)　ＳＸ26列石遺構（Fig. 46）

Ⅱ区上層遺構面の北端で検出した。現在残る農道とほぼ同じ西北から東南方向に続く。現状で幅約3.0mをはかる。礫と土器片が一面におかれているだけで、積み重なった様子は認められない。またこの下には溝のような施設はない。わずかに北側に傾斜している程度である。道路の可能性もある。遺物としては８世紀前半から中頃の時期を示す。

出土遺物（Fig. 47-51）　須恵器・土師器を中心に多量の遺物が出土している。また後に取り上げるⅡ区上包含層の遺物もこの周辺からの出土で、この遺構に関係したものと考えられる。

須恵器（Fig. 47-50, 059-109）　059-070は蓋。うち059-064は杯蓋で、口端部が短く立つ059-062と断面三角形をなす063・064に大別できる。059は外面を横ナデで仕上げ、また064の天井はナデで仕上げる。他は天井部はヘラ削り。内天井はいずれもナデ。060には偏平なつまみが残る。062・063は天井がつぶれる。065-069はその径からみて皿の蓋であろう。065・066は小さなつまみが残存するもので、うち065は生焼け。067-069は口端部が短く立ち、また069は天井も高

い。いずれも天井ヘラ削り、内天井ナデ。066の天井には「×」のヘラ記号がある。070は小型で、壺の蓋と考えられる。偏平な体部をなし、宝珠形の小さなつまみを持つ。

071-085は杯。071-075は無高台のもので、体部は直線的に外傾する。底部は071・072が上げ底、073・074が平底、075は体部の境に段を設け底は丸味を持つ。075は生焼け。076-085は高台を持つものである。076は小型、077-082は口径に比べ器高が低いもの、083-085は口径に比べ器高が高いものである。いずれも体部は直線的に外傾する。高台は底部内側につくものが多い。084は焼きがあまい。085は底部にヘラ記号を持つ。

086・087は椀。体部はやや内湾気味に外傾する。高台は体部との境よりわずかに底部内側に取り付けられ、端部は外に張り出す。

088-090は皿。うち088は高台を持つもので、体部は直線的に外傾する。089・090は高台を持たないもので、ともに焼きがあまい。089の底は丸みをおびる。

091-098は高杯。091・097・098は杯部が杯状のタイプで、脚部は長短両種あるが、器形は比較的小さい。092-096は杯部が皿状のもので、脚部は長短両種がある。全体に大型の器形をなす。096の焼きはあまい。

099-104は壺。099は長頸壺の頸部片、103・104は長頸壺の胴から底部片である。103は肩部と胴の境に沈線を設け屈曲する。104の胴下半は丸みをおび、高台端は外に張り出す。101は短頸壺。偏球形の胴から口縁が短く立ち、端部が小さく外反する。焼きがややあまく、暗赤紫色を呈する。100は外傾する口縁片であるが、横瓶の可能性もある。102は胴上位に最大径を持つ壺であるが、類例をあまり見ない。105は偏平な胴と平底をなすもので、平瓶かもしれない。

106は口端がわずかに内傾する鉢で、端部の作りはシャープである。

107-109は甕。107は小型で、口唇両端を外に引き出している。残存部はナデで仕上げる。胴に焼き歪みがある。108は大甕口縁片で、口唇は外傾し、尖り気味になる。外面口唇下に、沈線に挟まれた波状文があるが、シャープさに欠ける。109は丸みをおびた胴下半部で、上げ底になる。内外面とも平行タタキであるが、内面の当て具痕は粗い。

土師器（Fig. 50・51, 110-121）　111は杯で、低い高台を持つ。摩滅して調整は不明。淡赤褐色。110は皿。高台を持つもので、体部内外面とも横のヘラ磨きで仕上げている。淡褐色を主として呈するが、一部赤く発色するところがある。体部外面には黒斑が認められる。

112-121は甕。112-115は膨らみの小さい胴部から口縁が外に屈曲するもので、外面刷毛目、内面ヘラ削りを行う。112・114は外面刷毛目をナデ消す。112は下膨れの胴部を持ち、底部は丸みを帯びた平底となる。116は平底となる。117は丸みを持った胴下半部片で、外面に格子目タタキを行う。118-121は甑の把手で、バラエティーに富む。121は平面半円形のもので、一対揃うが本体は確認できなかった。

石製品（Fig. 51-122）　砂岩製の砥石片である。側面も含め三面に研ぎ痕がみられ、うち一

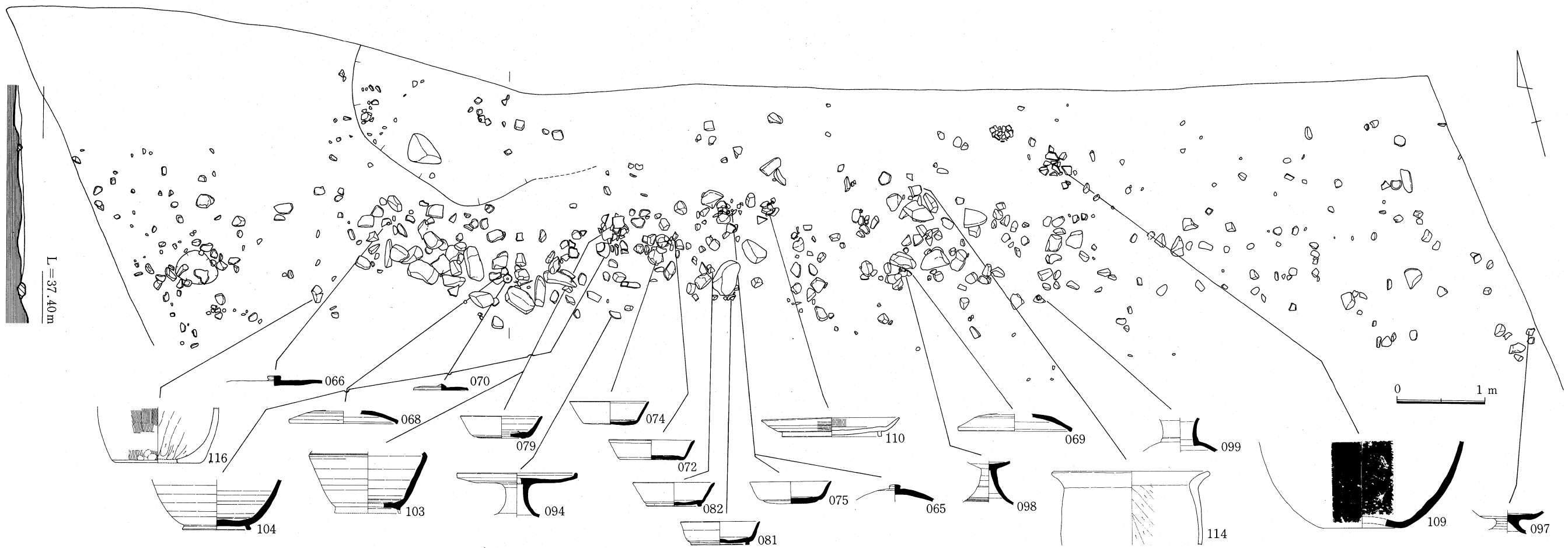


Fig. 46　SX26実測図（1/50）

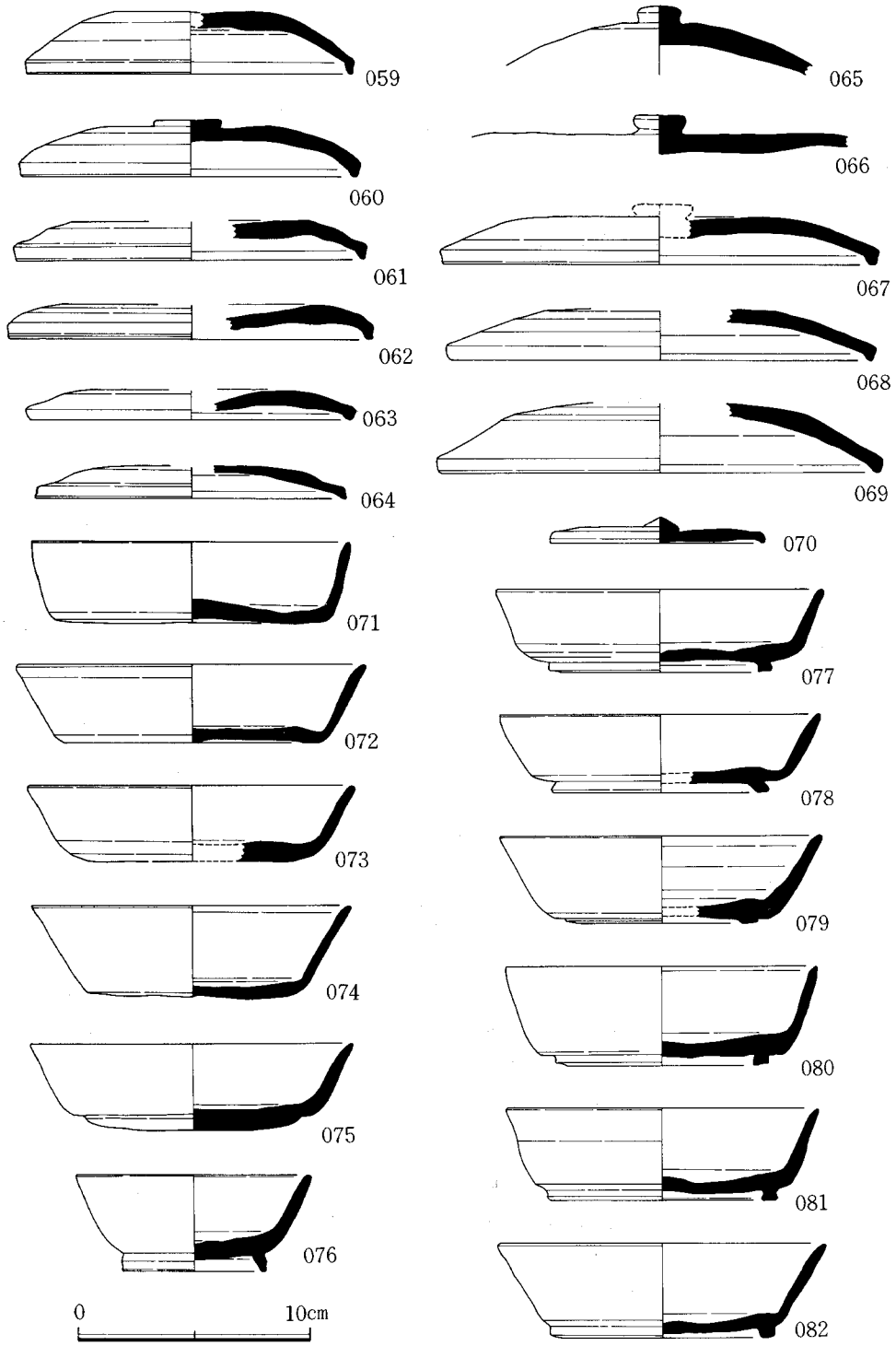


Fig. 47　SX26出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

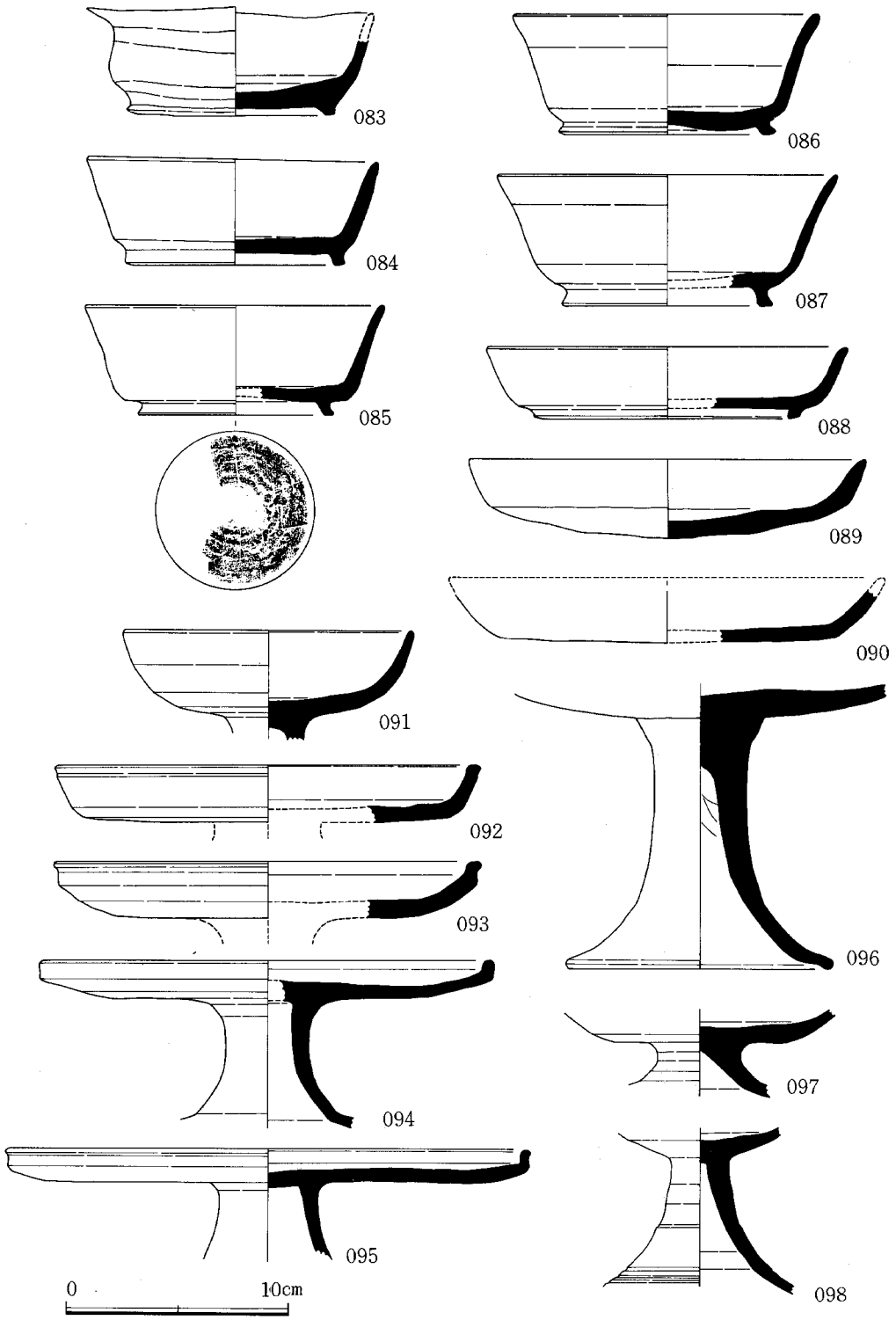


Fig. 48　SX26出土遺物実測図II（1/3）

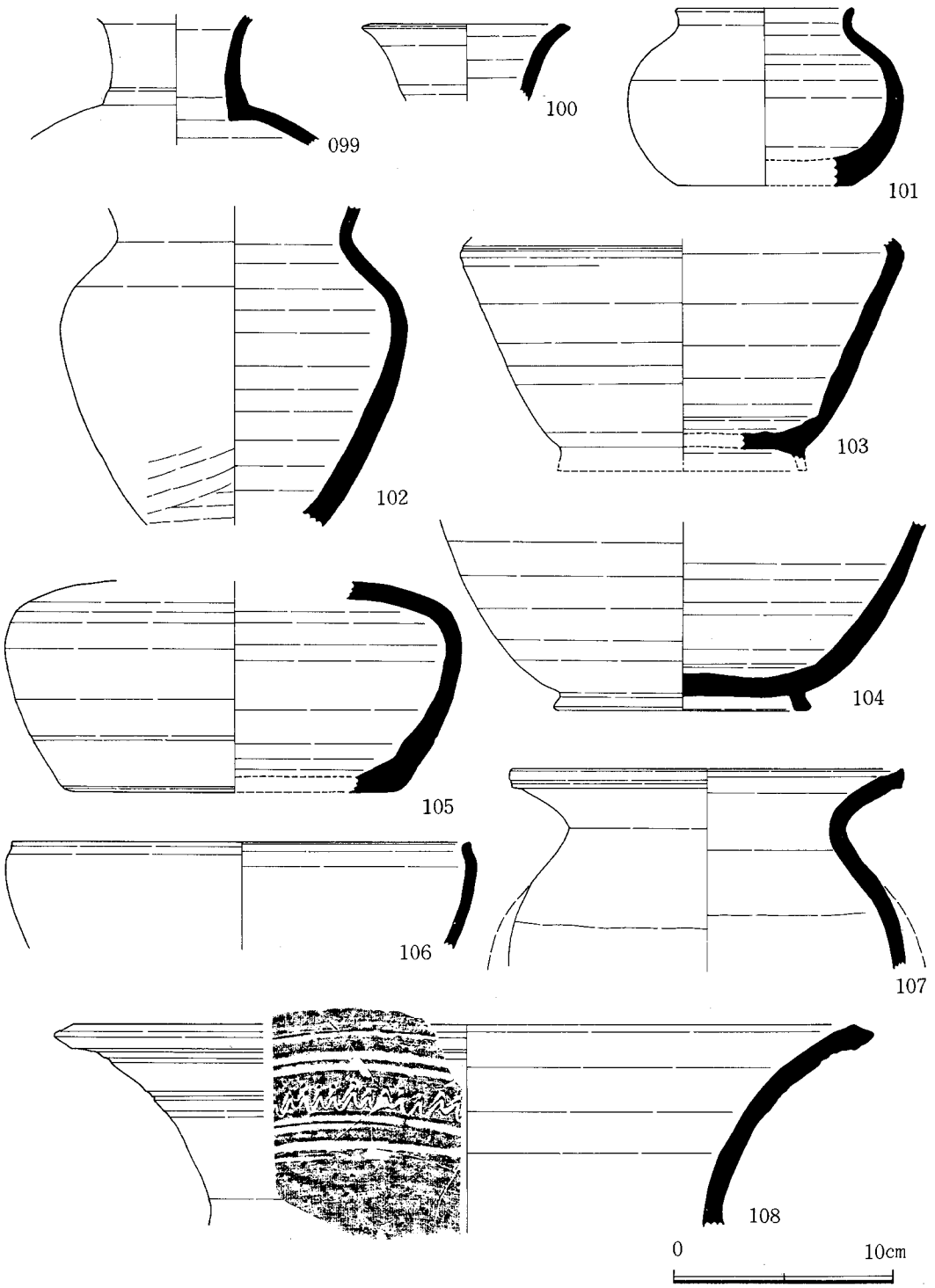


Fig. 49　SX26出土遺物実測図Ⅲ（1/3）

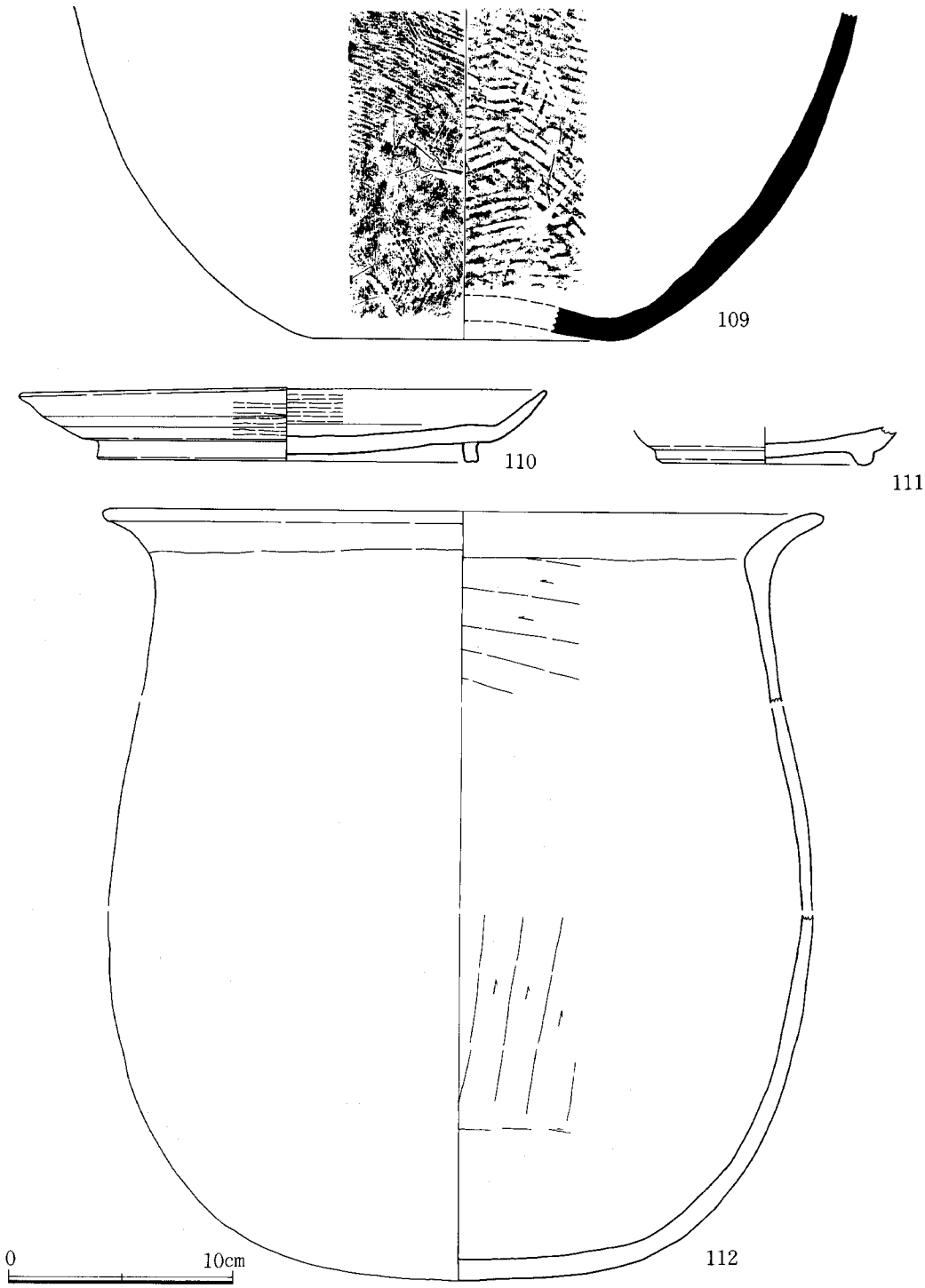


Fig. 50　SX26出土遺物実測図Ⅳ（1/3）

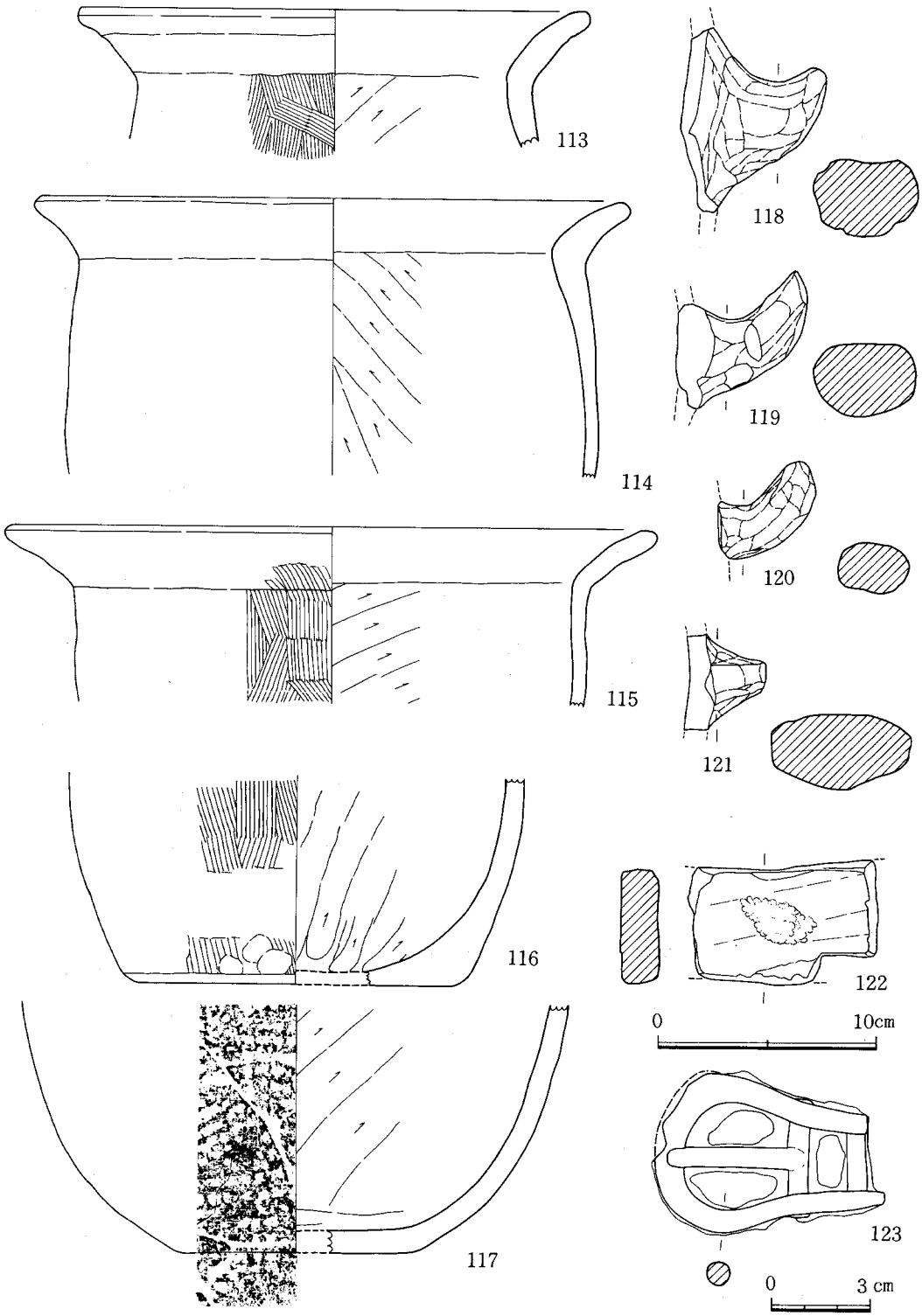


Fig. 51　SX26出土遺物実測図Ⅴ（1/3,1/2）

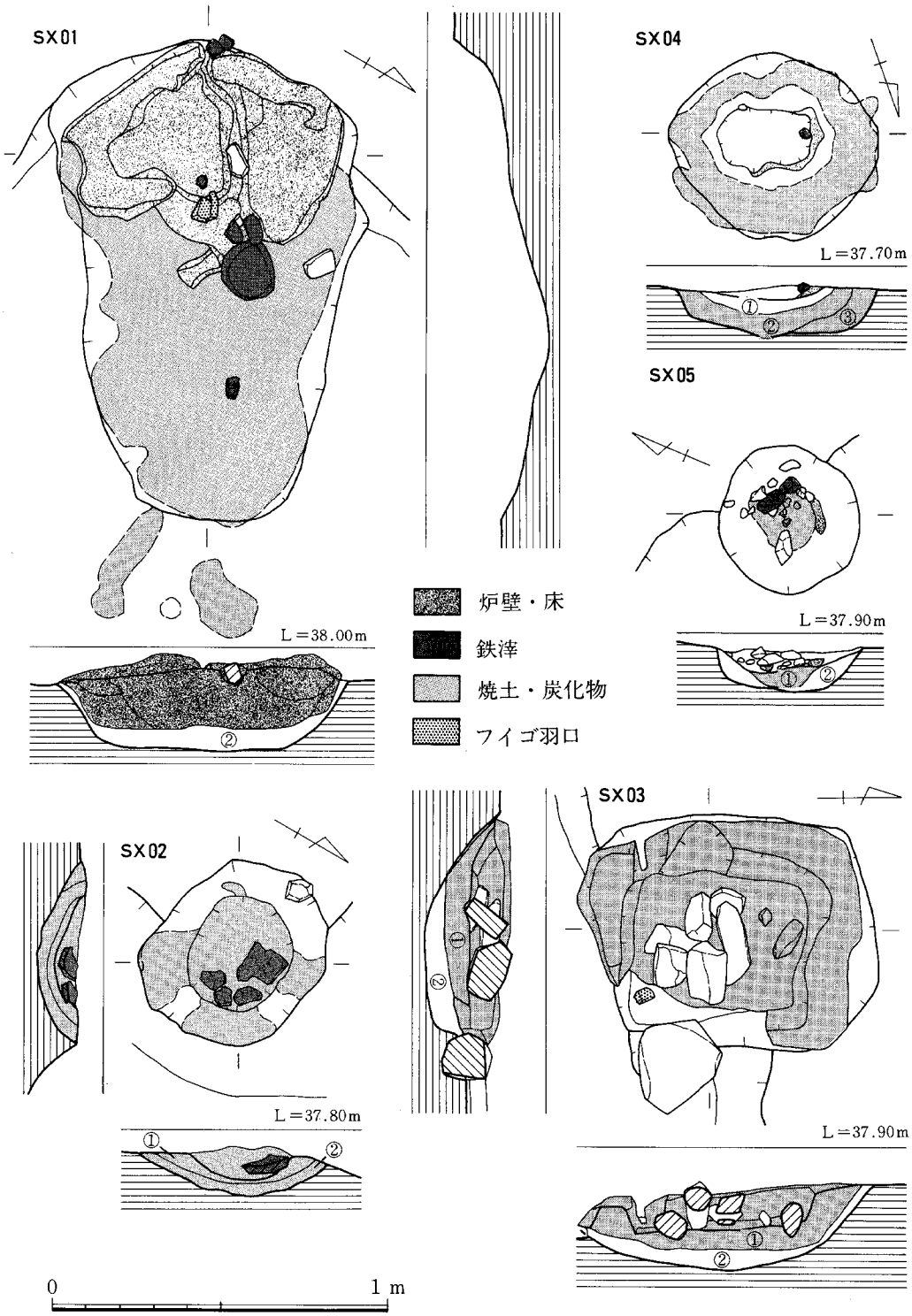


Fig.52　SX01・02・03・04・05実測図（1/20）

面の中央には敲打痕が認められる。

鉄製品（Fig. 51-123）　馬具の締め金具である。銹化がひどく細部はわからない。

(6)　製鉄遺構

II区上層遺構面を中心に製鉄遺構22基を検出した。円形あるいは楕円形の土坑のものが多いが、一部をのぞき遺存状態は悪く、炉底がかろうじて残る程度である。焼土、炭化物層のみの土坑も炉跡の可能性があるものとしてここに取り上げた。II区検出のものは、ＳＫ05の南辺に沿う一群（ＳＸ01･02･03･04･05･09･16･17）〈A群〉と、その北側ＳＸ27落込み状遺構の中の一群と（ＳＸ06･07･08･10･11･12･13･14･19）〈B群〉に大別される。III区の4基（ＳＸ20･21･22･23）も近接して築かれている。I区検出のＳＸ28は1基だけ飛び離れてある。また鉄滓以外の出土遺物はほとんどなく、その個別説明についてはＳＸ28の後にとりまとめた。出土鉄滓の分析は大澤正巳氏に依頼しているところであるが、諸事情により本書に収録することができなかった。一部の炉跡出土の鉄滓の分析結果によると、精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓があるという。

なお図化にあたってはスクリーントーンで、炉壁（ガラス質部分）、鉄滓、焼土･炭化物の範囲、フイゴ羽口の4種類に使い分けた（Fig. 52に凡例）。また炉底がわかるものについては断面図に見透しをいれた。文中の①②…は挿図の土層名と一致する。

ＳＸ01（Fig. 52）　II区A群。長軸を東北方向にとる長さ1.43m、幅0.76mの長楕円形土坑の西南端、すなわちＳＫ05の東南隅に炉本体を設けている。土坑の深さは25cm程度で、断面皿状を呈する。土坑自体は東北に向かうに連れ低くなる。炉本体はＳＫ05の壁に沿うようにして、高さ10cm弱の硬く焼き締まった鉄滓混じりの炉壁？があり、その下に炉底と思われる約60×35cmの長方形に近い平坦面がある。これも硬く焼き締まった鉄滓混じりのもので、表面はガラス質化している。炉壁の東南隅は切れており、ここから幅8cm、深さ5cmの溝が炉床を切込み東北に向かう。この溝の東北端の南側でフイゴ羽口を検出した。その北側には18×16cmの椀形の鉄滓がある。断面を見ると炉床部分は厚さ17cmほどあり、東南壁側が他の部分に比べ硬くなっている（①）。この下は②赤褐色粘質土となり、土坑東南側ではこの下に暗灰色砂質土が入る。炉本体の土坑上面は炭化物の混じった暗赤褐色の酸化面が広がる。この炉の西北には30×20cm、深さ5～13cmの楕円形ピットがあるが、出土遺物などはない。鉄滓の総重量57950g。

ＳＸ02（Fig. 52）II区A群。0.58×0.47mの楕円形土坑。断面は皿状を呈し、深さ15cm。炉底には椀形の鉄滓が砕けて残る。その下は①灰黒色の炭化物層、②焼土と続く。この2層は坑内西半分にはみられず、また東側でも約10cm幅で２カ所途切れる。鉄滓以外に出土遺物はない。鉄滓の総重量2920g。

ＳＸ03（Fig. 52）　II区A群の一番東に位置する。東南角は段落ちに破壊されているが、長さ1.0m弱、幅0.7mの長軸を南北にとる長方形の土坑を掘り、その中に箱形の炉を設けている。

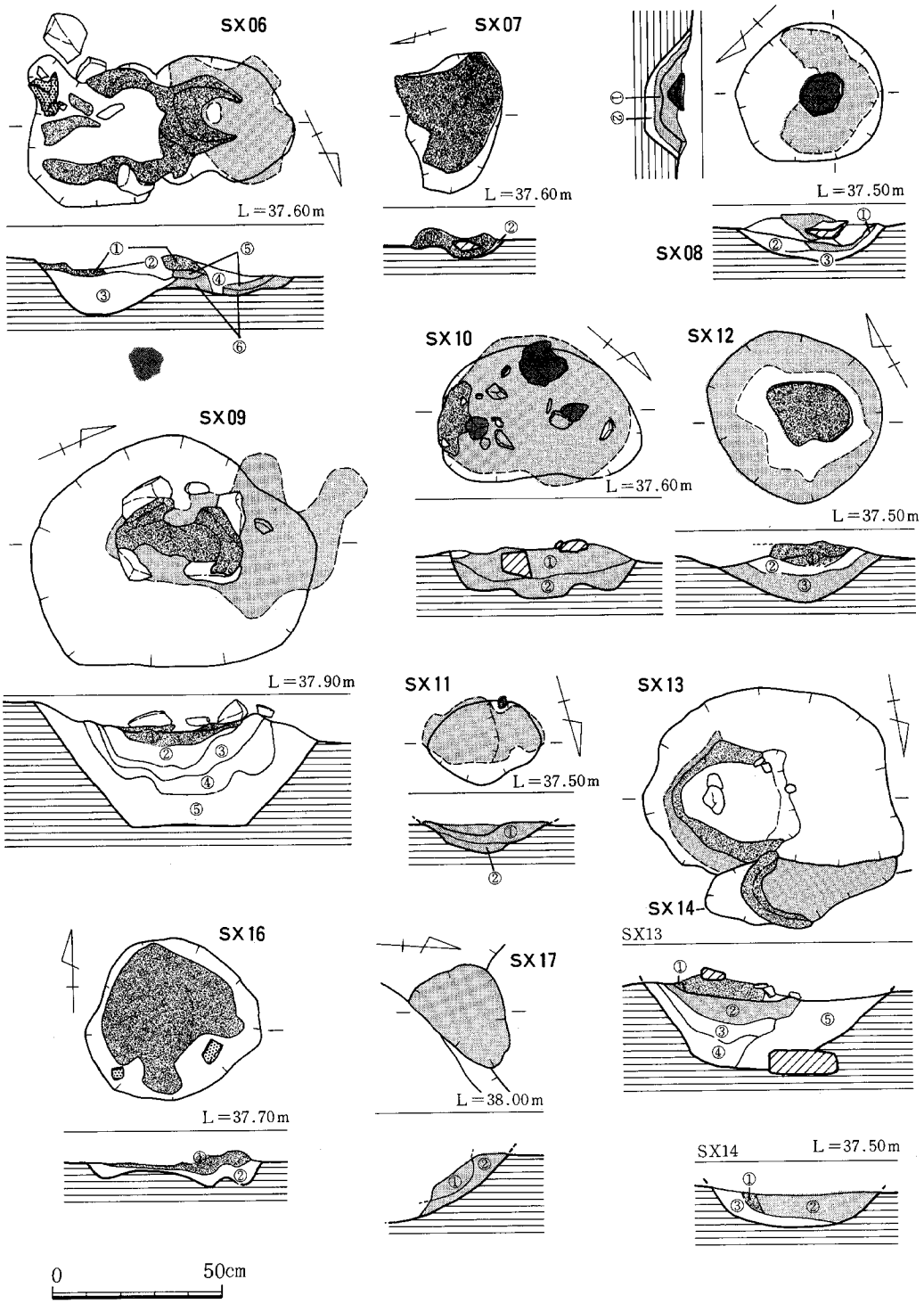


Fig.53　SX06・07・08・09・10・11・12・13・14・16・17実測図（1/20）

炉壁は厚さ10cmほどの礫を多く混じえたもので、酸化し硬く締まっている。炉底からの残高12cm。これは坑壁に沿ってめぐらされるが、西南隅には幅10cmの切れ込みがある。東南角は段落ちに破壊されているが、床面近くでフイゴ羽口片が出土した。炉底は長さ50cm、幅40cmの長方形で、廃棄時のものとと思われる礫がみられる。断面でみると、その下は厚さ5cmの炉壁と同じ酸化した礫混じり土（①）となるが、壁ほど硬くはない。さらに②灰褐色土がある。東南隅でフイゴ羽口を検出した。また炉外東南隅には上面が平らな石が埋め込まれている。炉内覆土から土師器細片が出土している。鉄滓の総重量920g。

ＳＸ04(Fig. 52)　II区Ａ群、ＳＸ03のすぐ南側で検出。径0.62×0.55m、深さ15cmをはかる断面皿状の円形土坑。中央に炉底と考えられる浅いくぼみが残り、その西側を炉壁らしき青灰色土が半環状にめぐる。炉底では鉄滓が出土した。断面を見ると、①黄灰色土、②硬い赤褐色の焼土と続き、その下には北側半分にだけ炭化物の混じった淡赤褐色焼土（③）が見られる。鉄滓の総重量1064g。

ＳＸ05(Fig. 52)　II区Ａ群、ＳＸ02のすぐ東南で検出。径0.44m、深さ13cmの円形土坑。炉底に帯状のガラス質部分があり、また鉄滓、小石片も認められる。炉底下は炭化物を多く混えた暗褐色土（①）が中央部にあり、その下に坑壁に沿うようにして②暗褐色土がある。坑内覆土から須恵器・土師器の細片が出土している。

ＳＸ06(Fig. 53)　II区Ｂ群。長径0.77mの双円形ともいうべき土坑中に、馬蹄形状のガラス質部分が背を向かい合せて列んでいる。東側のものは赤みがかっており、それに比べ小さい西側のものは青灰色を帯びる。断面土層は東南隅にフイゴ羽口がある。土坑の深さは東側が15cm、西側が10cm足らずである。断面土層は①ガラス質炉壁、②暗黄褐色土、③明黄褐色土④暗灰褐色土、⑤炭化物、⑥焼土となる。⑤⑥は西側部分にしか広がらず、またその中央部分は筒状に抜けたようになる。2基の炉が切り合った可能性もある。後述するＳＸ08、ＳＸ12との間には黄褐色の粘質土が広がる。鉄滓の総重量1797g。

ＳＸ07(Fig. 53)　II区Ｂ群。径0.42×0.26mの楕円形土坑からはみ出るようにして、鉄分の多いガラス質化した炉底？が残存している。西側部分にだけその下に②明黄褐色土がみられる。鉄滓の総重量2000g。

ＳＸ08(Fig. 53)　II区Ｂ群。土坑は径0.43m、深さ15cmの円形。炉床は黒色の粘質炭化物(①)であるが、東北側にはこの層がない。炉内に椀形鉄滓が残る。炉底下は②灰褐色土（東北側にだけある)、③暗褐色粘質土となる。

ＳＸ09(Fig. 53)　II区Ｂ群、ＳＸ01のすぐ東に位置する。0.84×0.69mの長軸をほぼ南北にとる楕円形の土坑。その中央西寄りに、四方の隅を礫で囲まれた鉄分の強いガラス質の炉底(①)が残存している。この周囲と北側の表面には焼土・炭化物が広がる。土坑断面は逆台形を呈し、深さ38cm。炉底下は②青灰色粘質土、③黄褐色粘土、④赤褐色土、⑤暗灰色粘質土。鉄滓の総

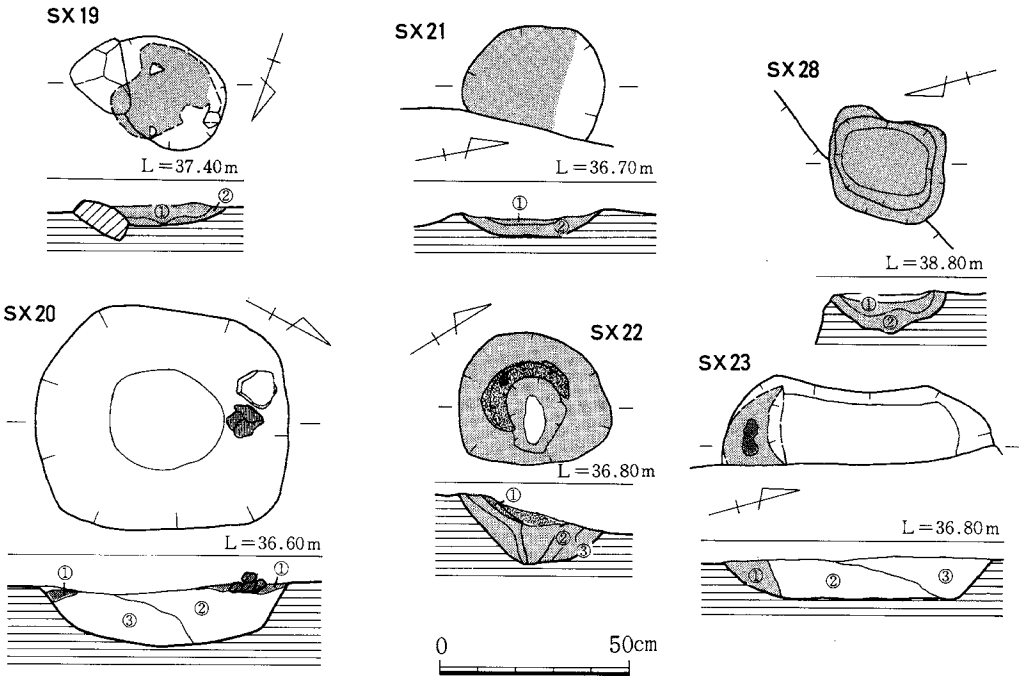


Fig. 54　SX19・20・21・22・23・28実測図（1/20）

重量1320g。

ＳＸ10（Fig. 53）　Ⅱ区Ｂ群。径0.60×0.39m、深さ13cmの楕円形土坑。表面には椀形滓、礫を含む赤褐色焼土（①）があり、その下には灰黒色の炭化物層（②）がある。炉底そのものかは分からない。鉄滓の総重量2060g。

ＳＸ11（Fig. 53）　Ⅱ区Ｂ群。径0.33×0.25m、深さ8cmの楕円形土坑。表面には①炭化物層があり、その下は②赤褐色粘土層となる。炉底は確認できない。鉄滓が１点だけ出土した。

ＳＸ12（Fig. 53）　Ⅱ区Ｂ群。径0.5m、深さ14cmの円形土坑。ガラス質の炉壁・炉底（①）が残る。その下は②淡青灰色粘土、③焼土層となり、土坑壁面に張り付く。

ＳＸ13（Fig. 53）　Ⅱ区Ｂ群。径0.73×0.55mの楕円形土坑。坑内東側に馬蹄形のガラス質の炉壁（①）が残る。炉底そのものは黒色の炭化物層（②）となる。土坑断面は逆台形状で、深さ26cm。炉底下は③黄色土、④赤褐色土となり、炉壁が開いた西側半分表面から暗黄褐色土（⑤）となる。ＳＸ14と北側で重複し、同時に使用された可能性もある。

ＳＸ14（Fig. 53）　Ⅱ区Ｂ群。ＳＸ13と重複する。径0.58×0.21mの長楕円形土坑。坑内東側でＳＸ13の炉壁と接し半環形状にガラス質の炉壁（①）がめぐる。②は炭化物が多く混じった暗灰褐色土、③は暗黄褐色土。土坑の深さ10cm。

ＳＸ16（Fig. 53）　Ⅱ区Ｂ群、ＳＸ01のすぐ南側で検出した。径0.5mの円形土坑中にガラス

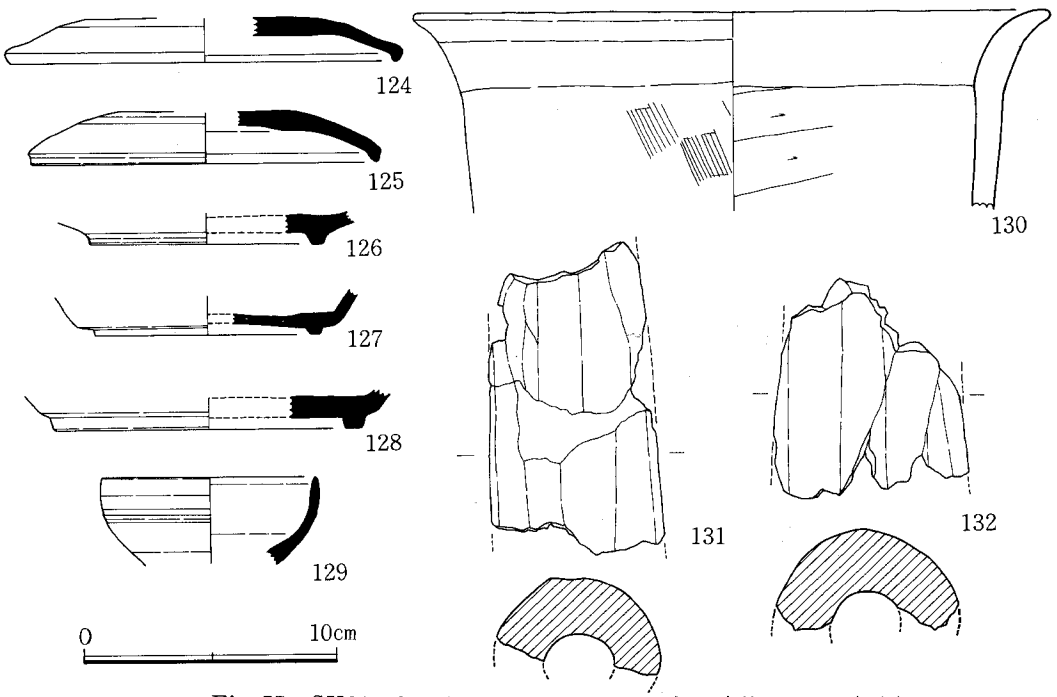


Fig. 55　SX01・04・05・06・07・09・22出土遺物実測図（1/3）

質の炉底（①）が残る。その下は②暗褐色土。表面２カ所でフイゴ羽口細片が出土した。

ＳＸ17（Fig. 53）　II区Ｂ群。ＳＸ01の西側、側溝部分で検出した炭化物（①）と焼土（②）の2層からなる径0.32mの円形状土坑である。鉄滓も含め出土遺物はない。

ＳＸ19（Fig. 54）　II区Ｂ群。一端に石を置いた径0.40×0.26mの楕円形の浅いくぼみの中に炭化物（①）が広がり、その中に鉄滓、ガラス質の壁体片が混じる。その下は②暗黄褐色土。鉄滓の総重量640g。

ＳＸ20（Fig. 54）　III区。長さ0.67m、幅0.58m、深さ16cmの長方形土坑で、上面近くで鉄滓や炉壁片が出土した（①）。しかし坑内は②暗褐色土、③暗黄褐色土となり、炭化物・焼土の類はみられない。鉄滓の総重量830g。

ＳＸ21（Fig. 54）　III区。径0.37mの円形土坑に、鉄滓の混じった炭化物（①）と焼土（②）の２層が堆積する。深さ7cm。この西側上面にＳＸ23がある。

ＳＸ22（Fig. 54）　III区。径0.4m、深さ18cmの円形土坑。半円状にガラス質の炉壁（①）が残る。その下は②炭化物と③焼土の２層。中央部には穴があき、暗黄色粘質土がつまる。

ＳＸ23（Fig. 54）　III区。ＳＸ21の西側上面で検出した。長径0.7mの楕円形土坑。南側に鉄滓を含む赤褐色土（①）があり、その前面には②暗黄褐色土、③暗黄色砂質土となる。③は上面を中心に炭化物を含む。

ＳＸ28（Fig. 54）　Ｉ区で検出した。一辺0.3m前後、深さ10cmの方形状土坑。①炭化物と②

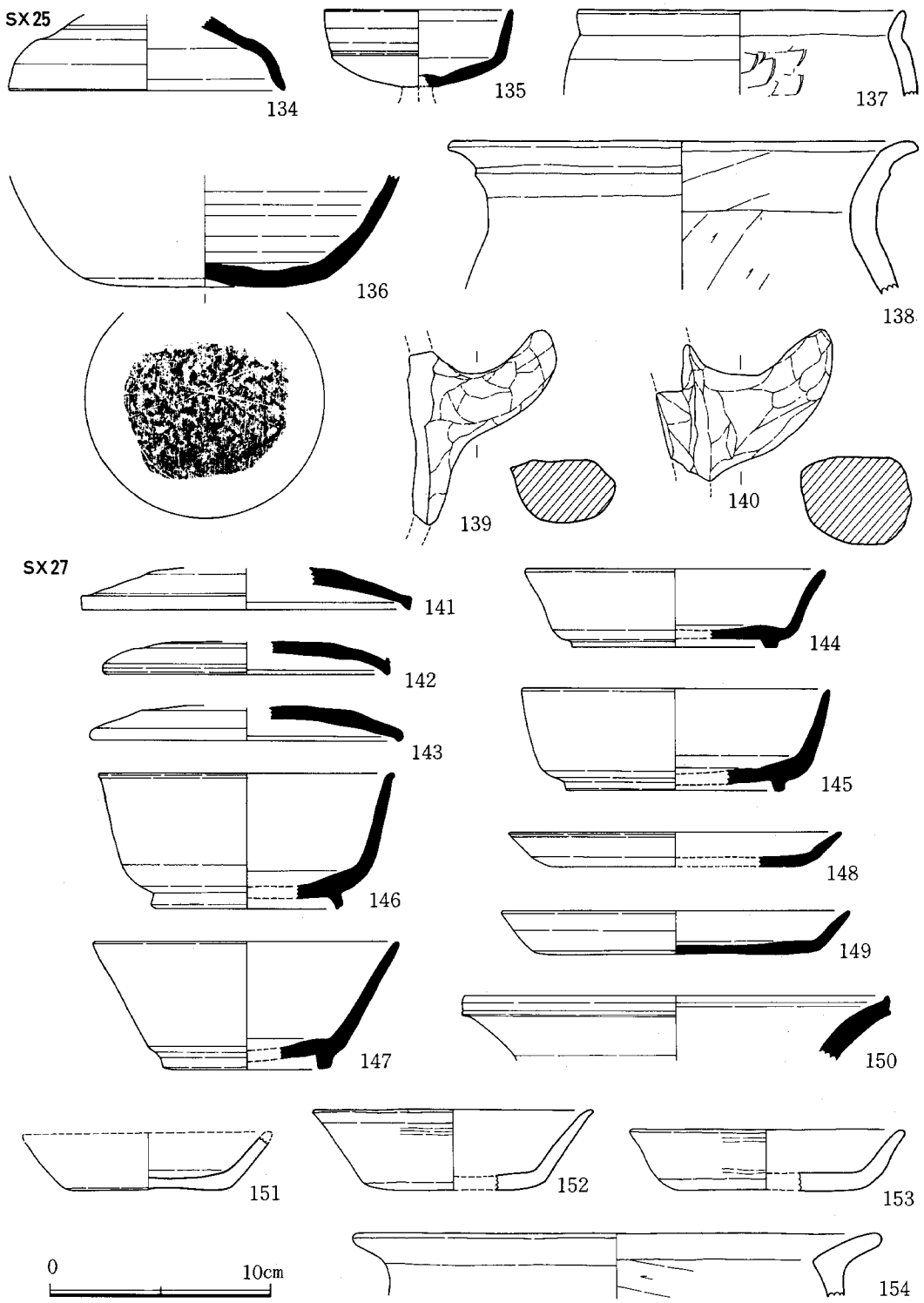


Fig. 56　SX25・27出土遺物実測図（1/3）

焼土層で、①の上面は硬くなる。鉄滓も含め出土遺物はない。

製鉄遺構出土遺物（Fig.55）　124・131がＳＸ01、127がＳＸ04、126がＳＸ05、132がＳＸ06、125がＳＸ07、128・130がＳＸ09、129がＳＸ22から出土した。

須恵器（124-129）　124・125は蓋。端部は断面三角（124）あるいは短く立つ（125）。天井はヘラ削り、その内面はナデ。126-128は杯。いずれも細片で、高台が底部内側に取り付けられるもの（126・127）と体部との境に取り付けられるものがある（128）。129は高杯杯部であろうか。体部に2条の沈線を巡らし、その下半はヘラ削りを行う。

土師器（130）　口縁の返りが小さい甕である。内面ヘラ削り、外面刷毛目。131・132はフイゴ羽口。131は端部付近で、外面は焼成痕が見られるとともに、端部近くには鉄滓が薄く付着する。132にはその種の痕跡は認められない。ともに砂粒の多い胎土で、赤褐色を呈する。フイゴ羽口の出土は少なく、図示した以外には細片が少量あるにとどまる。

(7)　その他の遺構

ＳＸ24　Ⅱ区上層遺構面。ＳＫ05の東北側に接して、西北から南東に続く、畦状の遺構である。上面幅0.7～1.5mで、北側からの高さ14cm。ＳＸ26列石遺構の方向とほぼ一致する。

ＳＸ25　Ⅱ区下層遺構面、ＳＤ02の西辺北側の溝内で検出した。約1mの範囲に厚さ5cmの焼土の堆積があり、その周囲に須恵器・土師器などの遺物が比較的集中して出土した。鉄滓は出土しておらず、またその遺構のあり方からしても製鉄遺構とは認められない。

出土遺物（Fig.56）

須恵器（134-136）　134は杯蓋。口縁内側に段を設ける。天井には焼き歪みがみられる。135は高杯杯部であろうか。体部に沈線を巡らせ、底部は手持ちのヘラ削りで仕上げる。136は壺底部か。外面ヘラ削り、内面横ナデ。底部にヘラ記号を持つ。

土師器（137-140）　137は口縁が短く立つ鉢。内面は指ナデで、爪痕が残る。138は甕で外反する口縁下に段がつく。139・140は甑の把手であろう。139の把手下にはヘラ痕が残る。

ＳＸ27　Ⅱ区上層遺構面。ＳＸ24とＳＸ26に挟まれた場所に位置する。幅5m前後の浅い落込み上の遺構で、周辺からの深さは10cm程度でしかない。南側はＳＤ04に切られる。先に述べたようにこの遺構の北側には10基の製鉄遺構＜Ｂ群＞が集中する。遺物は８世紀前半から中頃。

出土遺物（Fig.56）

須恵器（141-150）　141-143は蓋。端部が短く立つ141と、丸みを持つ142・143に分けられるが、いずれも天井は低い。144・145は高台をもつ杯。144の体部はやや内湾気味に外傾し、145は直線的に立ち上がる。146・147は椀。146が丸みを持って立ち上がり、端部が小さく外反するのに対し、147のそれは直線的に外傾する。148・149は皿。体部は大きく開く。149の底部には板状圧痕がある。150 は甕。口縁上端部はナデつまみ上げられ、その結果口唇に沈線が入る。

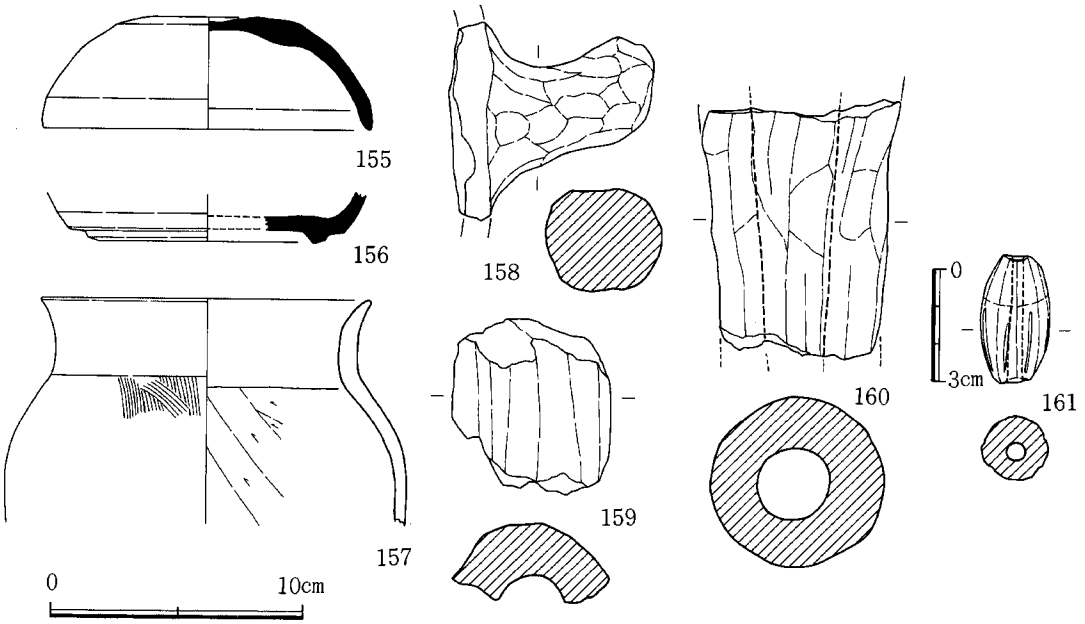


Fig. 57　ピット出土遺物実測図（1/3, 1/2）

土師器（151-154）　151-153は高台のない杯。152がやや深い。体部はヘラ磨きだが、摩滅して不明瞭。151の底部はヘラ切り離し痕が残る。153は焼きがきわめて良く、暗赤褐色を呈する。154は強く屈曲する口縁部を持つ甕片である。

(8)　ピット・包含層出土遺物

ここではまずⅠ・Ⅱ・Ⅲ区のピット出土遺物をまとめて取り扱い、その後包含層の出土遺物を各区ごとに観察する。個別遺物の出土地点などについては巻末の表によられたい。

ピット出土遺物（Fig. 57）

須恵器（155・156）　155は杯蓋。天井はヘラ切り離しの後ナデており、体部との境には段がつく。全体に横ナデ調整を行うが、雑である。156は高台を底部内側に付ける杯。

土師器（157・158）　157は甕。口縁が立ち上がり、その端部が外反する。2次焼成を受けている。158は甑の把手。

フイゴ羽口（159・160）　159は外面に2次焼成痕があるが、160には見られない。

土製品（161）　紡錘形に近い土錘。表面にはヘラによる縦方向の刻みを施す。

Ⅰ区出土遺物（Fig. 58）

須恵器（162-166）　162-165は杯身。162はシャープな作りで、底部はヘラ削りし、ヘラ記号を描く。163・164は直立気味の立ち上がり部を持つもので、受部は小さい。ともに生焼け。165

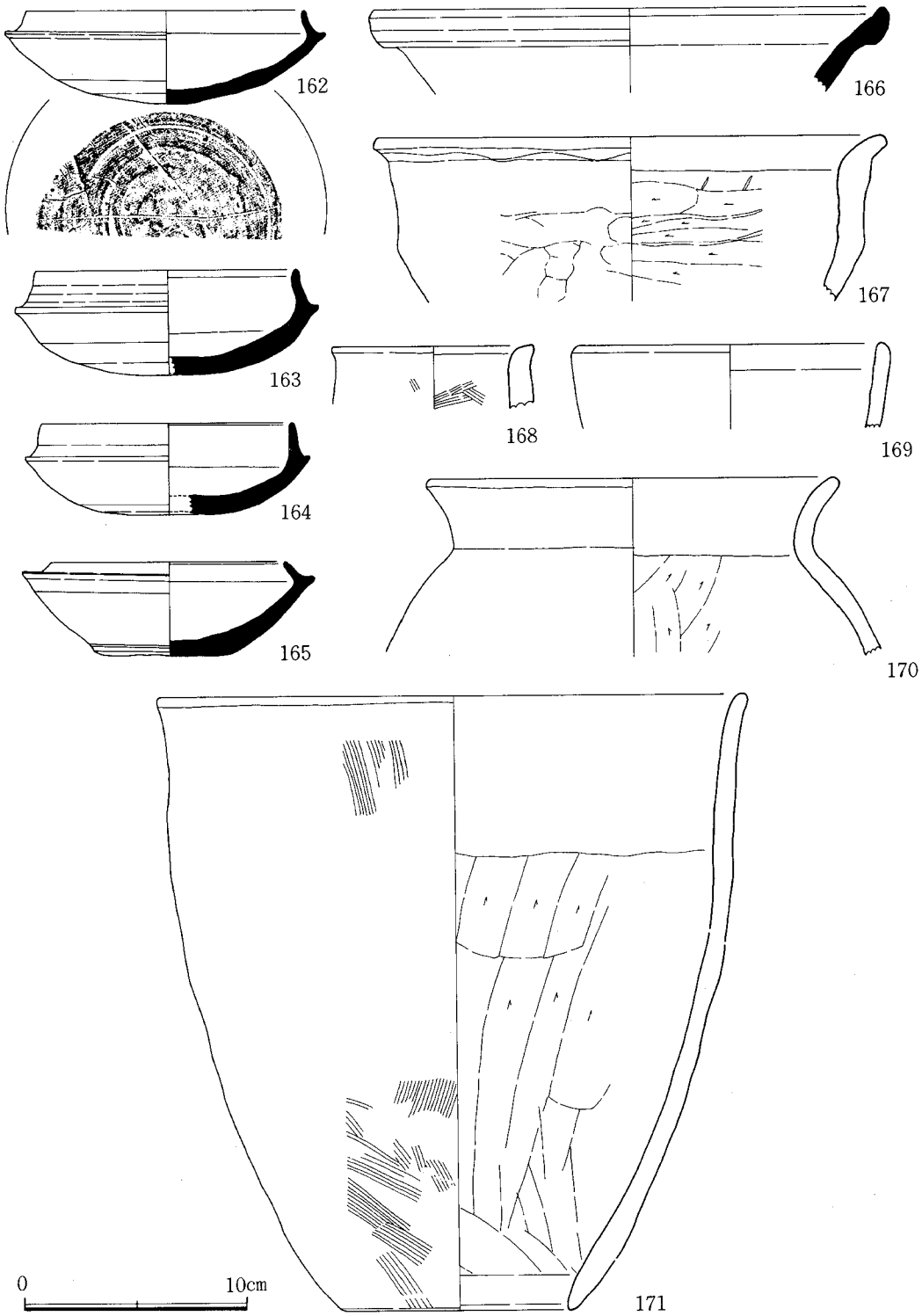


Fig. 58　I区包含層出土遺物実測図（1/3）

は立ち上がり部が内傾し、また底部がヘラ切り離しにより平底となる。調整は横ナデ。166は甕口縁片。端部は肥厚し、外面に段を作る。

土師器（167-171）　167-169は鉢の類であろうか。167は比較的大型のもので、口縁が短く外反する。荒いヘラ削りで調整した雑な作りのものである。168は直立気味の体部から口縁が強く反転する。169は直口縁を持つもので、内側にナデによる小さな段がある。170は甕片で、胴の張りが大きい。焼きは良好。171は甑。口縁は直立気味で、底部に向かい直線的に内傾する。全体に摩滅している。

II区出土遺物（Fig. 59-63）

弥生土器（172-182）　172-174は甕。張りのある胴部から口縁が強く反転する。172の口唇はコの字状になる。180・181がこの種の甕の底部となるものか。175・176は甕の蓋になるものである。175は上面がくぼみ、その下が締まるのに対し、176は上面平坦で、その下も締まらない。177は鋤先状口縁を持つ壺口縁片。内外面とも厚い丹塗りの痕が残る。178は器壁の厚い鉢で、外面下半は縦刷毛目。179は手捏の器台片。胎土には多量の砂粒を含む。182は壺の底部。

須恵器（183-229）　183-193は蓋。183は他のものに比べ大型で、皿の蓋となるものであろう。口縁端断面は小さな三角形をなす。残りは蓋。口縁端は短く立ち上がるもの（184）、断面が三角形になるもの（185-187）、丸みを持つもの（188-190）、外に引き出し気味のもの（191・192）などに分けられる。193は天井部のヘラ削りにより、体部と明瞭な境を作る。

194-215は杯。うち194-198は無高台のもので、体部は直線的に外傾する。198だけは径が大きく、体部も直立気味である。197は生焼け。199-215は有高台の杯で、法量、体部の開き具合い、高台形態・取り付け部位など様々な違いがある。全体的には体部が直線的に外傾し、また高台が底部内側に付くものが多い。

216・217は椀。216の体部は内湾気味に外反するのに対し、217のそれは直線的である。高台はともに体部と底部の境近くに付く。

218-222は皿。小皿（218-220）と大皿（221・222）がある。226の底部は丸みを持つ。

223は高杯杯部であろう。口縁端は短く反転する。224・225は高杯脚部。224の脚端部は断面三角形。225は長脚のもので、筒部には沈線を施す。

226は壺の口縁であろう。口端部は反転し、丸くおさめる。227は壺の底部。外底は回転ヘラ削り、内底は粗いナデの調整を行う。

228は大鉢とでも呼ぶものであろうか。張りのある体部から口縁が内傾し、端部を丸くおさめる。229は甑か。直線的に外傾する体部を持ち、口端部は小さく外につまみ出される。

土師器（230-238）　230は杯。体部は直線的に外傾する。外面はヘラ磨き。全体に摩滅気味である。231・232は椀。体部と底部の境に取り付けられた高台は外に張る。内湾気味に開く体部は内外面ともヘラ磨き。234は高杯杯部であろうか。口縁の開きが大きい。

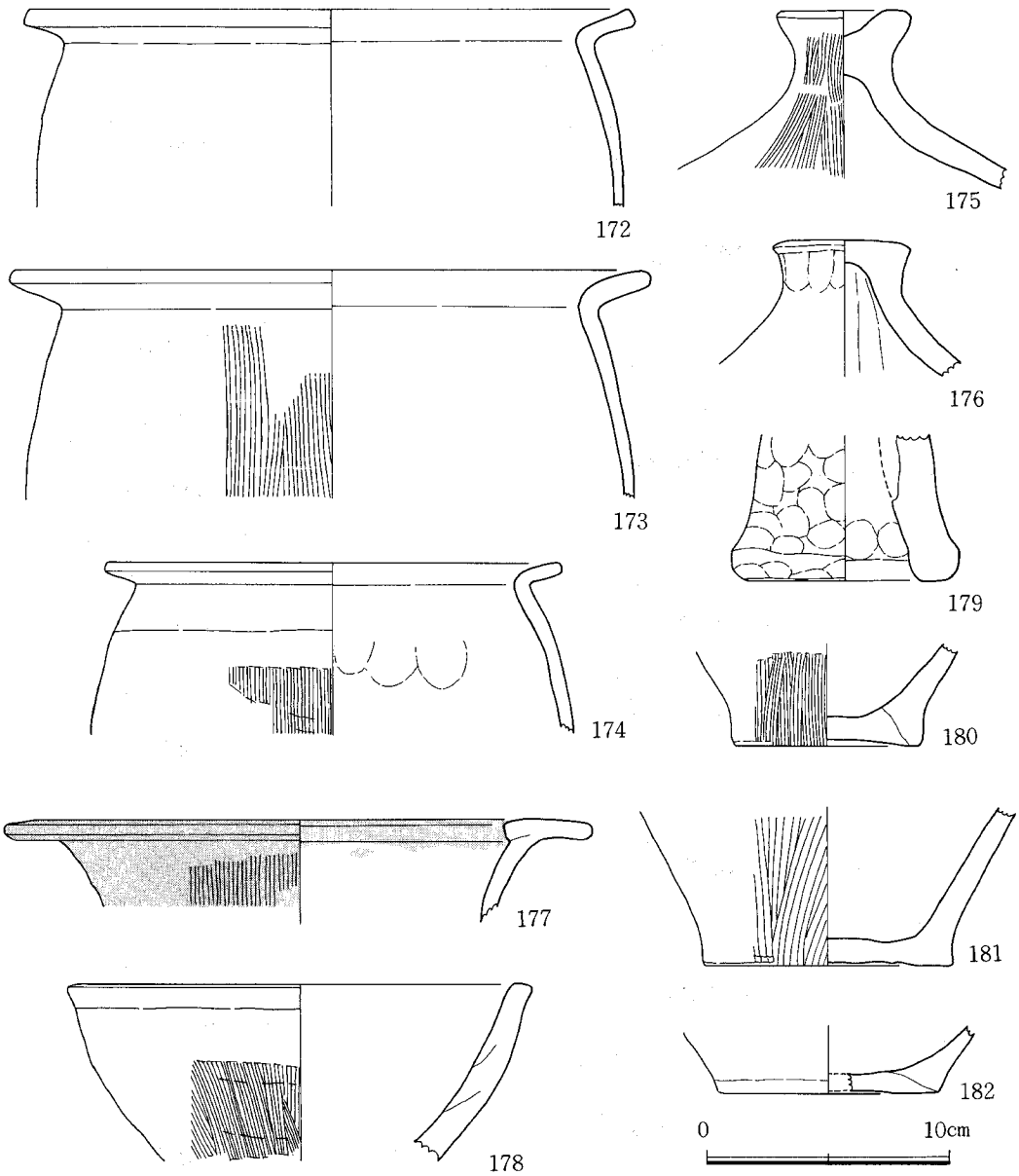


Fig. 59　II区包含層出土遺物実測図 I　(1/3)

235-238は甕。口縁は内側に稜を作って強く外反するもの（235・236）と、丸みをもって外反する（237・238）ものがある。胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削り、口縁内面は刷毛目あるいはそれをナデ消す。

黒色土器（233）　内面だけを燻したA類である。体部は比較的直線的に開く。内面はヘラ磨き、外面は表面が剝落して調整不明。

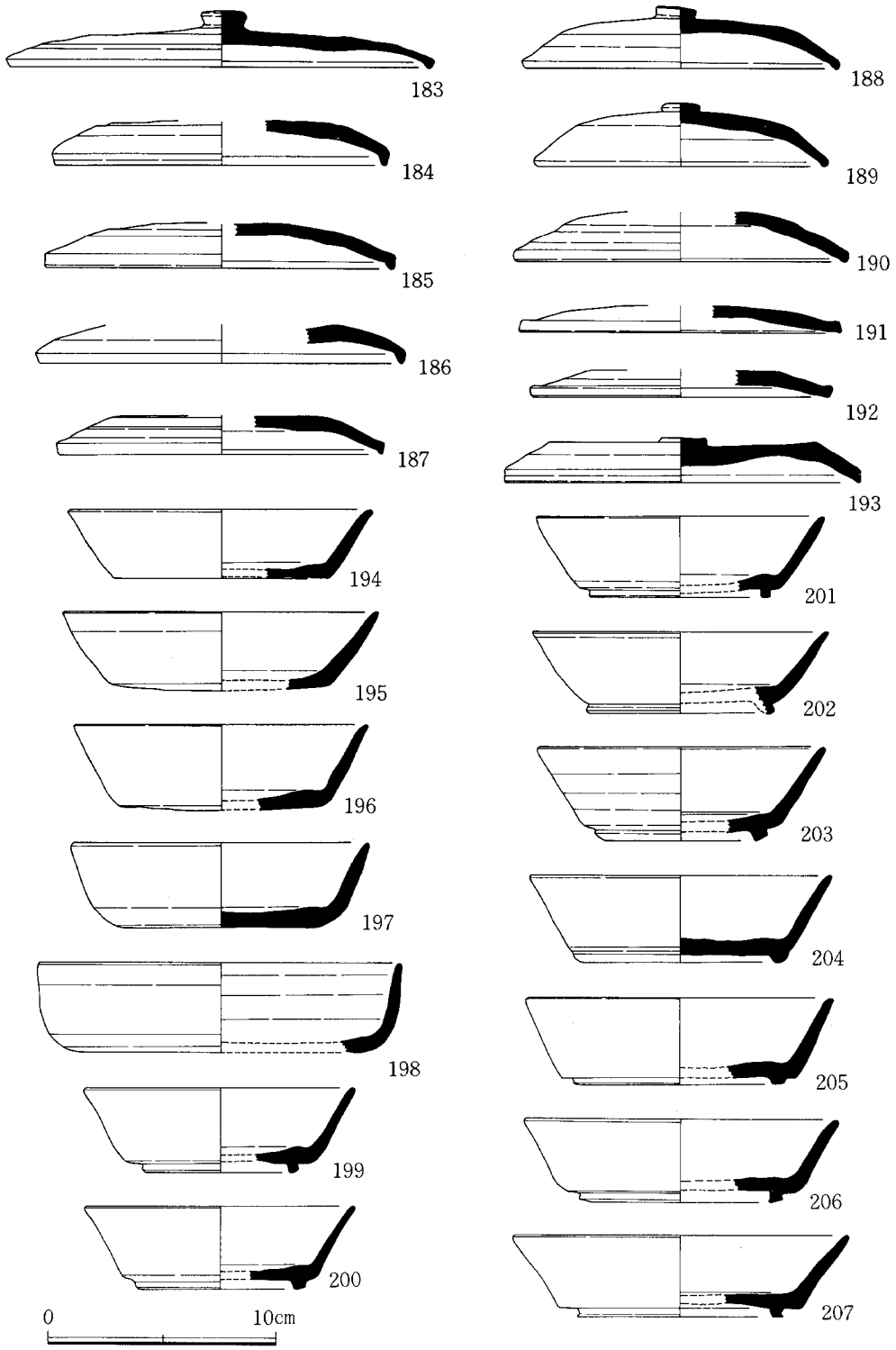


Fig. 60　II区包含層出土遺物実測図II（1/3）

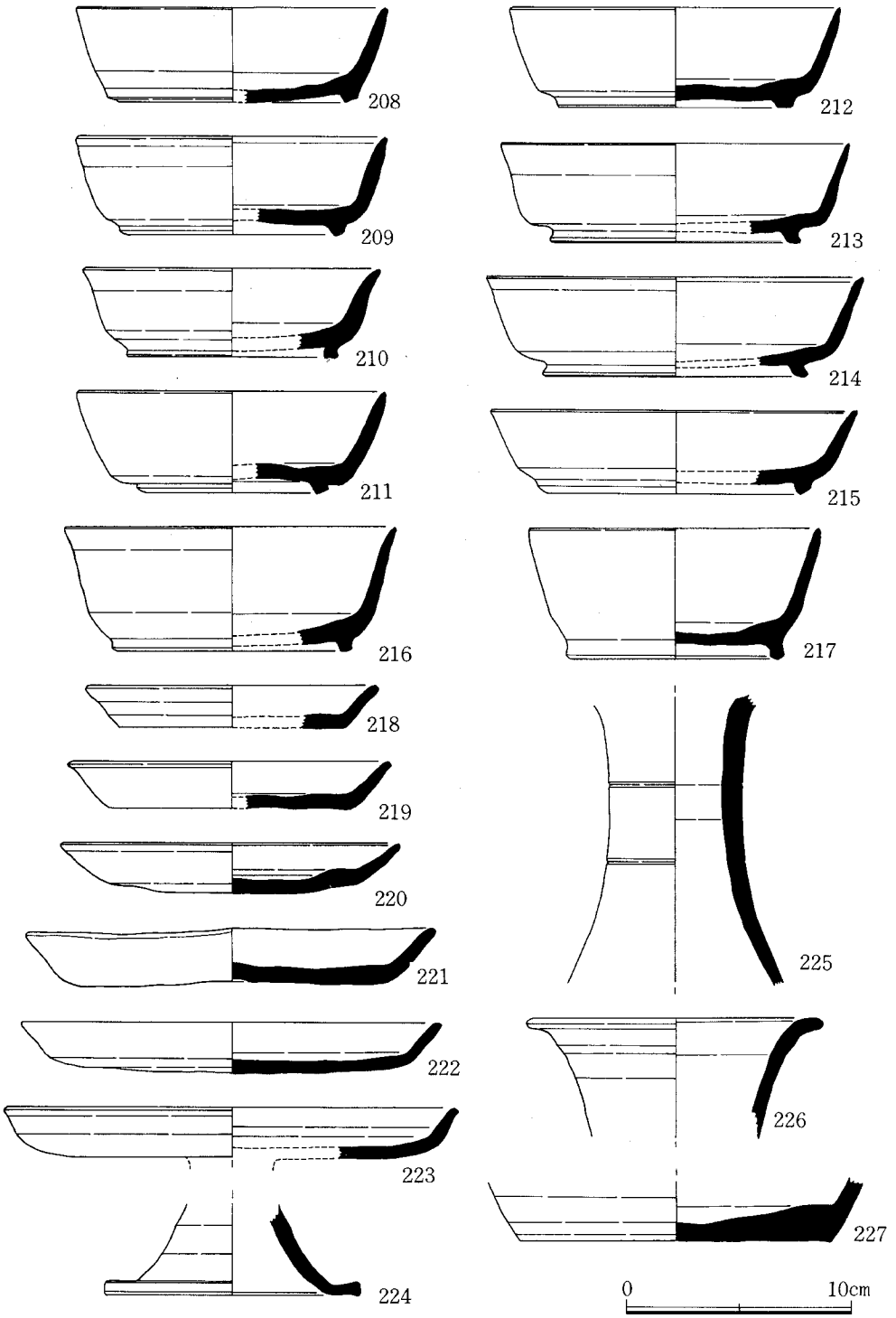


Fig. 61 II区包含層出土遺物実測図III (1/3)

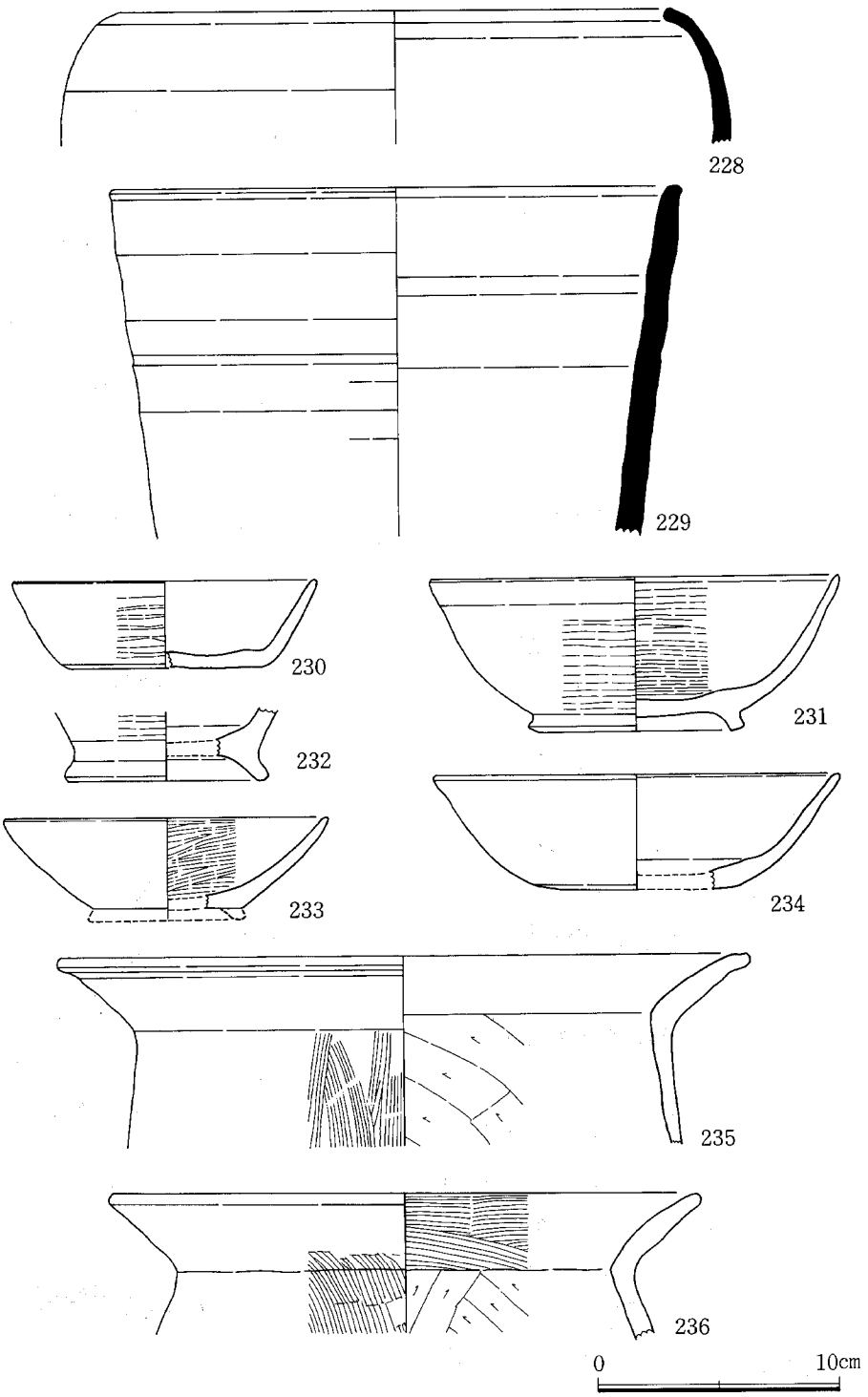


Fig. 62　II区包含層出土遺物実測図Ⅳ (1/3)

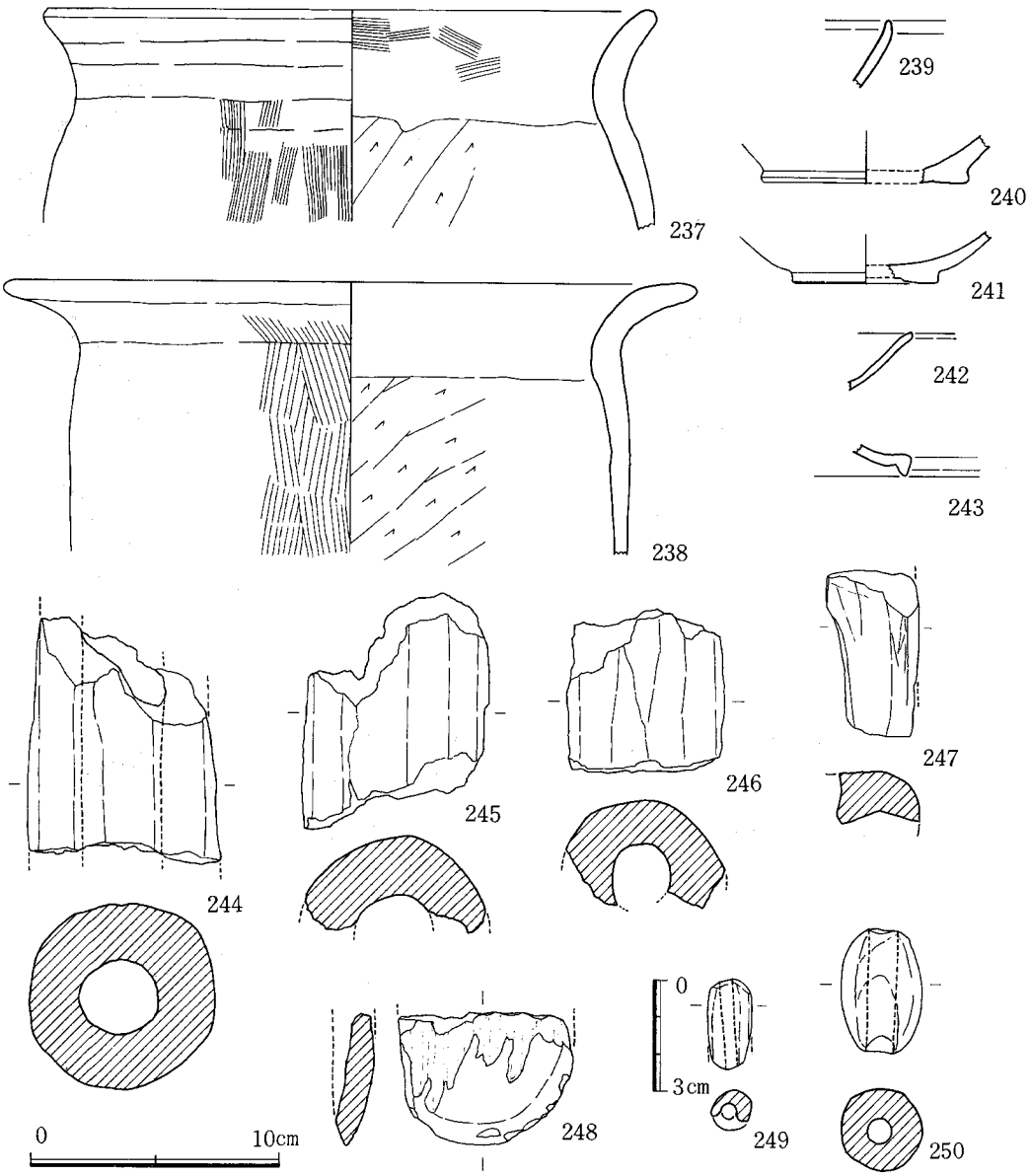


Fig. 63　II区包含層出土遺物実測図V（1/3,1/2）

磁器（239-242）　239・240は越州窯系青磁椀の細片である。239は口縁片で、端部は内湾する。おもに薄緑に発色するが、ムラが多い。胎土には黒色微粒が混じる。これらの特徴からすればII-2-d類に属するものか。240は内面に目跡が残る底部片で、外面は露胎。II-2類。

241・242は白磁。241は幅広の高台をもつもので、乳白色を発する。畳付きには施釉されていない。I-2類か。242は口禿の白磁皿口縁片。時期的には下降する。

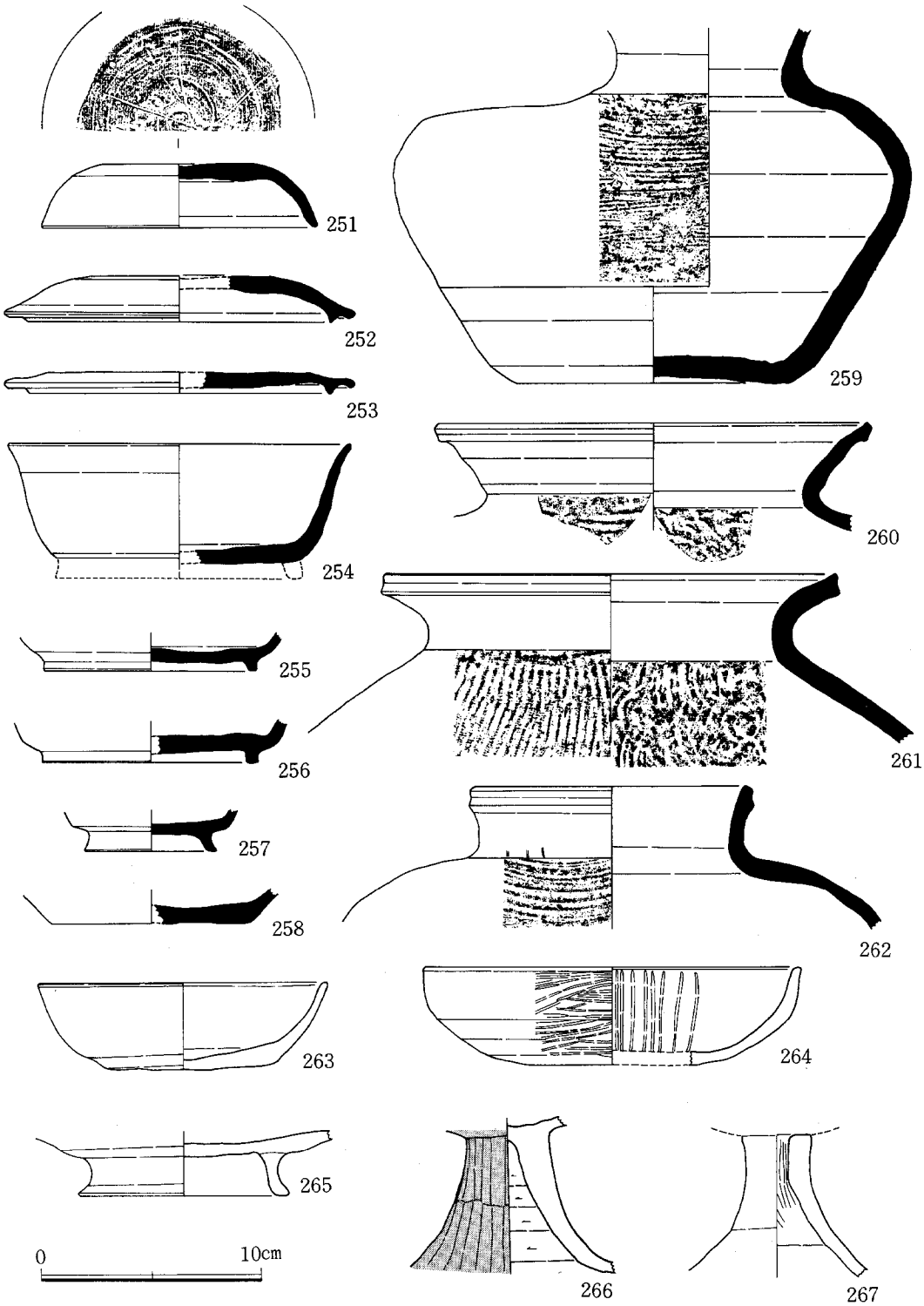


Fig. 64　Ⅲ区包含層出土遺物実測図Ⅰ (1/3)

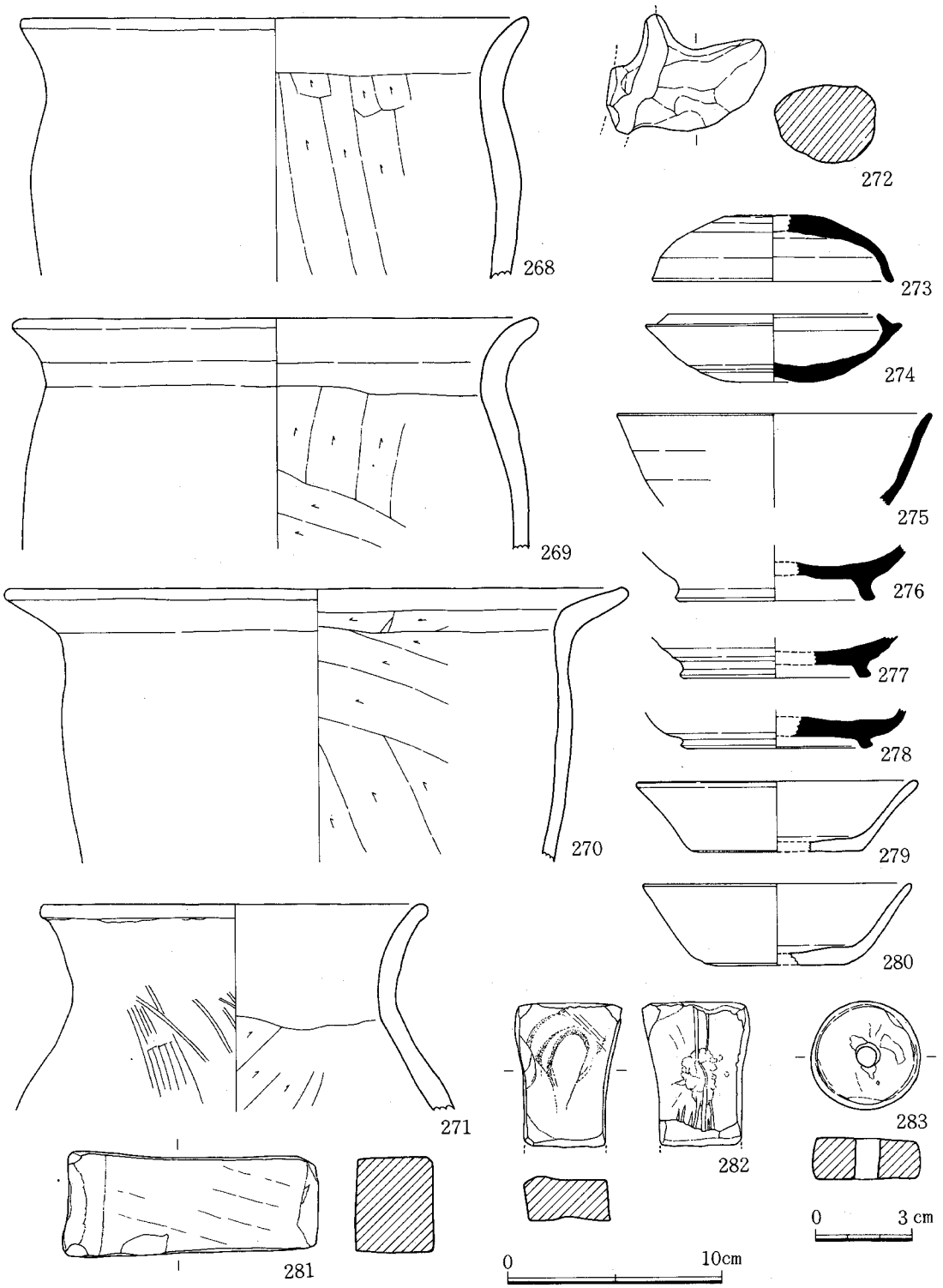


Fig. 65　Ⅲ区包含層出土遺物実測図Ⅱ（1/3,1/2）

緑釉陶器（243）　蓋であろうか。明るい黄緑の上釉がかかる。胎土は精良。

フイゴ羽口（244-246）　いずれも砂粒が多く混じったもので、外面は2次焼成を受けている。

土錘（249・250）　ややふくらみをもつ小型品と、紡錘形の大型品がある。

石器（247・248）　247は砥石片。248は蛇紋岩製の磨製石斧の刃先片である。

Ⅲ区出土遺物（Fig. 64・65）

須恵器（251-262・273-278）　251・273は杯蓋。251は端部内側に小さな段を作る。273は上層出土で、端部はわずかに開き、丸くおさめる。252・253は返りをもつ蓋。252の天井は丸みを持ち、253のそれは偏平である。天井はヘラ削り、内天井はナデ。

274は杯身。立ち上がり部は内傾し、底部はヘラ切りをナデ消す。底部と体部の境には沈線がめぐる。上層出土。255・256・258・275・278は杯。258は無高台の杯。257・258・278は断面方形状の高台をもち、体部と底部の境の稜はやや不明瞭。275はほぼ直線に開く体部をもつ。275・277・278は上層出土。

254・257・276・277は椀。254は体部下半が直立気味で、上半がゆるく外反する。277は体部と底部の境に沈線が入る。257は小椀か。276・277は上層出土。

259は平瓶。体部上半はカキ目、下半はヘラ削り。262は直口壺。直立する口頸部をもち、口縁下に一条の凸帯をめぐらす。外面凸帯下はカキ目、それ以外はナデで仕上げる。頸部にヘラ記号がある。

260・261は甕。法量、口縁の作りに違いがあるが、胴外面の平行タタキ、内面の青海波当て具痕は同じである。

土師器（263-272・279・280）　263・264・279・280は杯である。うち264は外面を横のヘラ磨き、内面を縦のヘラ磨きで調整しており、他の杯とは異なる。また赤色顔料を塗布している。263・279・280は体部と底部の境に稜をなし、体部は直線的に外傾する。279・280は上層出土。265は椀の底部。高台は高く、外に張る。

266・267は高杯の脚部片。266の外面は縦方向の削りをおこない、その後赤色顔料を塗布し、ヘラ磨きで仕上げる。267の外面は横ナデ。

268-271は甕。口縁の外反が小さいもの（268・269）、強く屈曲するもの（270）、胴に張りをもち頸部が締まり気味のもの（271）などがある。胴外面は刷毛目をナデ消すか、ヘラナデで調整している。272は甑の把手片である。

石器（281-283）　281・282は砂岩製の砥石。283は滑石製の紡錘車。重量26.8g。

4．Ⅳ区の遺構と遺物

1）概要

Ⅳ区は当初調査予定区に入っていなかったが、本調査時にトレンチを開けたところ遺構・遺

物の出土を見たため追加して調査を行うこととした。Ⅲ'区の北斜面下に位置し、調査面積は224㎡。表土（耕作土）下がすぐ地山となる。検出した遺構は掘立柱建物5棟（ＳＢ13-17)、竪穴住居跡3基（ＳＣ03-05)、土坑1基（ＳＫ07）および多数のピットである。なお、北側の段落ちまで薄くなりながらも遺構・遺物は認められるが、トレンチによる確認にとどまった。

２）遺構と遺物

(1)掘立柱建物（Fig. 66)

ＳＢ13　2×3間の南北棟である。実長は梁行390cm、桁行540cm。柱間寸法は梁が6.5尺（195cm）の等間、桁は東側が北から4･7･7尺（120･210･210cm)、西側が7･6･5尺（210･180･150cm）と統一がない。建物方位はN-7°-E。柱掘形は径40cm前後の円形が多く、深さは9～28cm。埋土から少量の土師器細片が出土した。ＳＢ14を切る。

ＳＢ14　2×3＋α間の東西棟である。実長は梁行480cm、桁行きは南側Ｐ6までで540cmをはかる。柱間寸法は梁が8尺（240cm）の等間、桁が南側Ｐ6までで7･6･5尺（210･180･150cm）と不等である。建物方位はN-5°-W。柱掘形は径33～80cmの円形で、深さは8～43cm。出土遺物はない。ＳＢ13に切られる。

ＳＢ15　方位をN-40°-Wにとる1×3間の建物である。梁は240cm（8尺)。桁の実長は600cmで、東側が6･7･7尺（180･210･210cm)、西側が8･4･8尺（240･120･240cm）の不等な柱間寸法をとる。柱堀形は34～58cmの円形で、深さ8～20cm。埋土から土師器細片が1点だけ出土した。

ＳＢ16　N-13°-Eに方位をとる2×2間の総柱の建物である。実長270cmの正方形をなし、4.5尺（135cm)の等間な柱間寸法をもつ。柱掘形は方形に近く、中に径20cm程度の柱痕跡が残る。深さは8～41cm。ＳＣ03、ＳＫ07を切る。出土遺物は６世紀後半の時期を示すが、ＳＣ03を切っているところから、この建物の時期を示すものかは確定できない。

出土遺物（Fig. 69-284）　須恵器の甕であろうか。口縁は肥厚し、外面平行タタキ、内面格子目の当て具痕が残る。他に須恵器杯・甕、土師器高杯・甕などの細片が出土している。

ＳＢ17　2×3間の東西棟である。実長は梁行で360cm、桁行で570cm。柱間寸法は梁・桁ともまちまちである。建物方位はN-10°-W。柱掘形は30cm前後の円形で、深さ8～28cmをはかる。埋土から土師器細片が出土した。ＳＣ03を切る。

(2)竪穴住居跡

ＳＣ03（Fig. 67）　北東に方位をとる長さ4.90m、幅4.30mの長方形住居跡である。全体に残りが悪く、特に東北側の側壁はＳＫ07やピットに切られ残存しない。壁高は残りの良いところでも5cm前後にしかすぎない。竈の施設はないが、南側壁下の長さ1.1m、幅0.7m の楕円形状の土坑と、住居跡中央部に焼土が認められる。主柱穴は明確でない。ＳＢ16・ＳＢ17・ＳＫ07

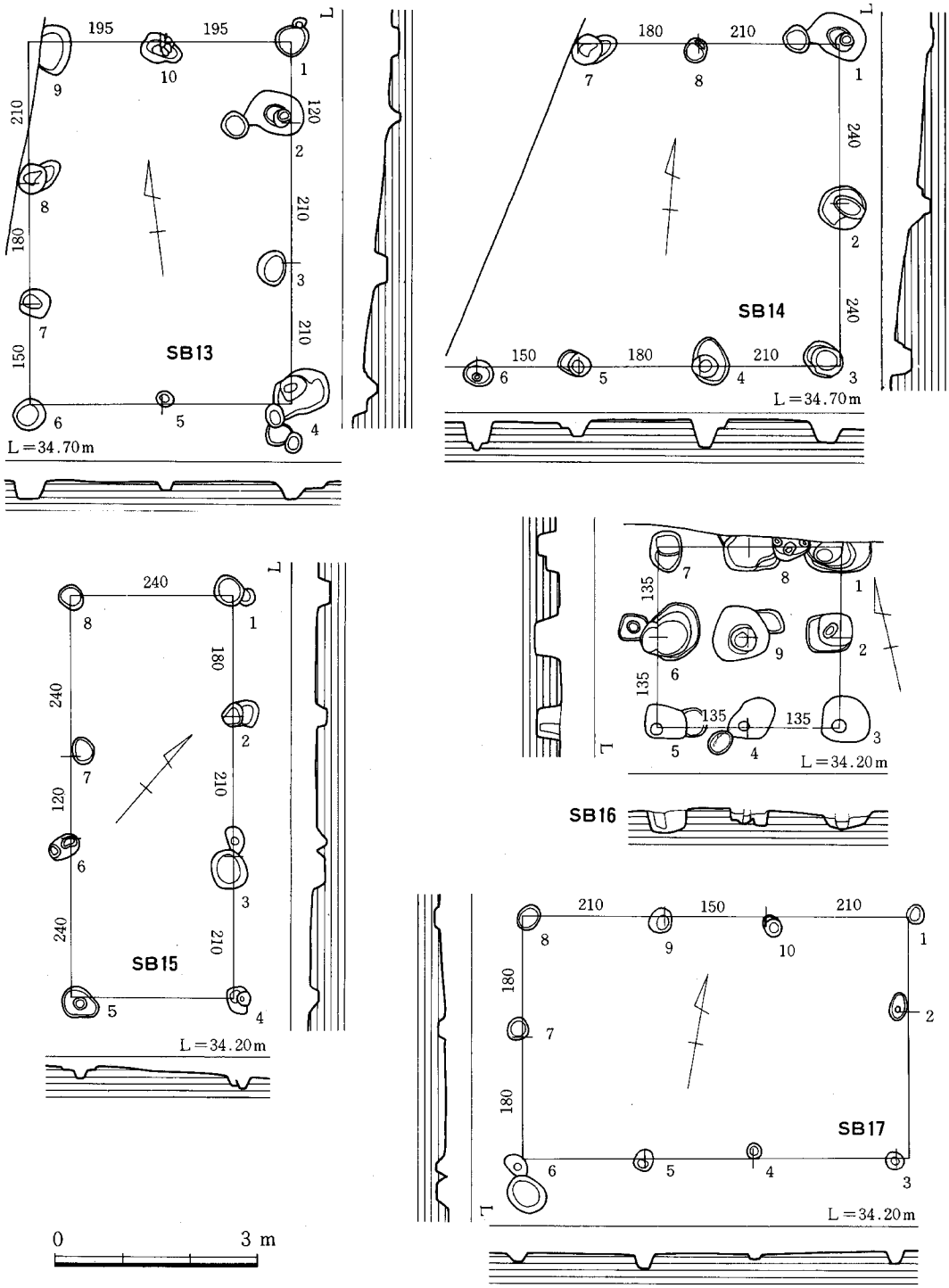


Fig. 66　SB13・14・15・16・17実測図（1/100）

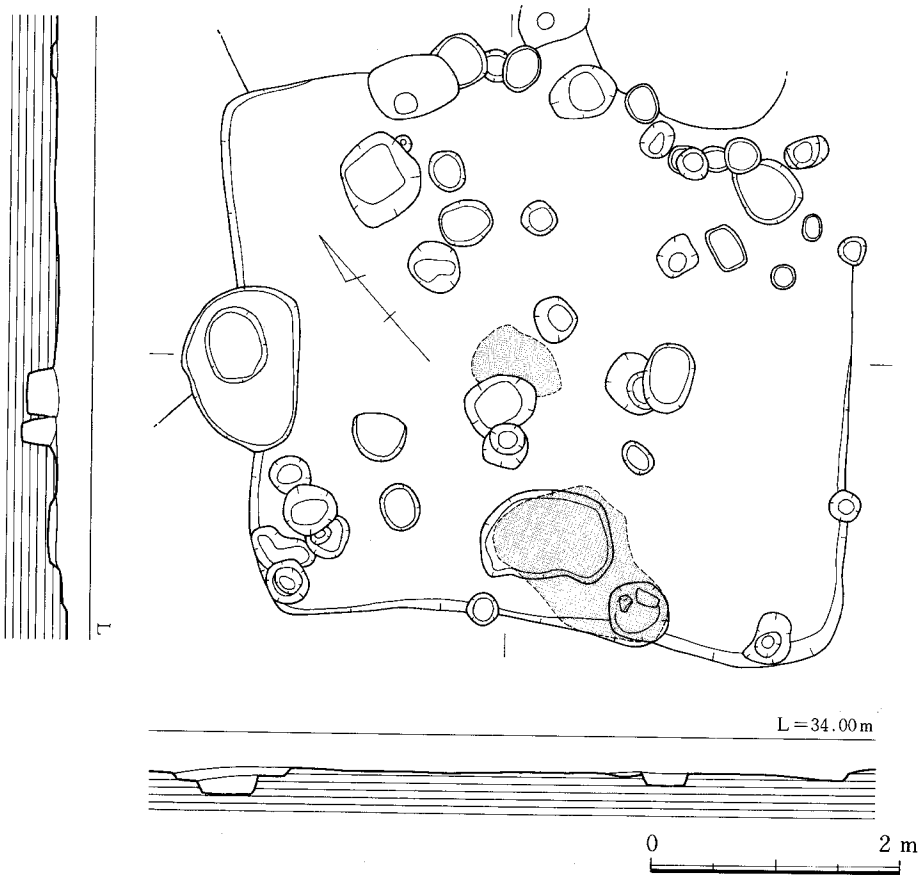


Fig. 67　SC03実測図（1/60）

に切られ、ＳＣ04を切る。６世紀後半か。

出土遺物（Fig. 69, 285・286）　削平されていたこともあり、出土遺物は多くない。285は須恵器甕。口縁は肥厚する。赤焼け。286は土師器甕。口縁がゆるやかに外反する。

ＳＣ04（Fig. 68）　ほぼ北に方位をとる南北6.60m、東西4.40mの隅丸方形の住居跡である。壁高は残りの良いところで25cm。南側壁東寄り外側に幅0.5m、床面からの高さ10cmの段がつく。竈は北側壁中央やや東寄りに設ける。長さ1.8m、幅0.95mの浅い落込み中に、割石を用いて側壁を構築している。また竈中央奥には高さ15cmの長方体の割石を据え置いている。竈内およびその周辺から土師器甕、須恵器杯などがまとまって出土した。また竈西南の床面には上面が平らな割石が置かれている。床面南側中央部には長軸を南北にとる長さ1.5m、幅0.75m、深さ10cmの長方形土坑がある。この土坑の西北には炭化物がまとまった部分がある。床面には柱痕跡を持つ柱穴も見られるが、主柱穴の確定はできない。ＳＣ03に切られ、ＳＣ05を切る。６世紀後半。

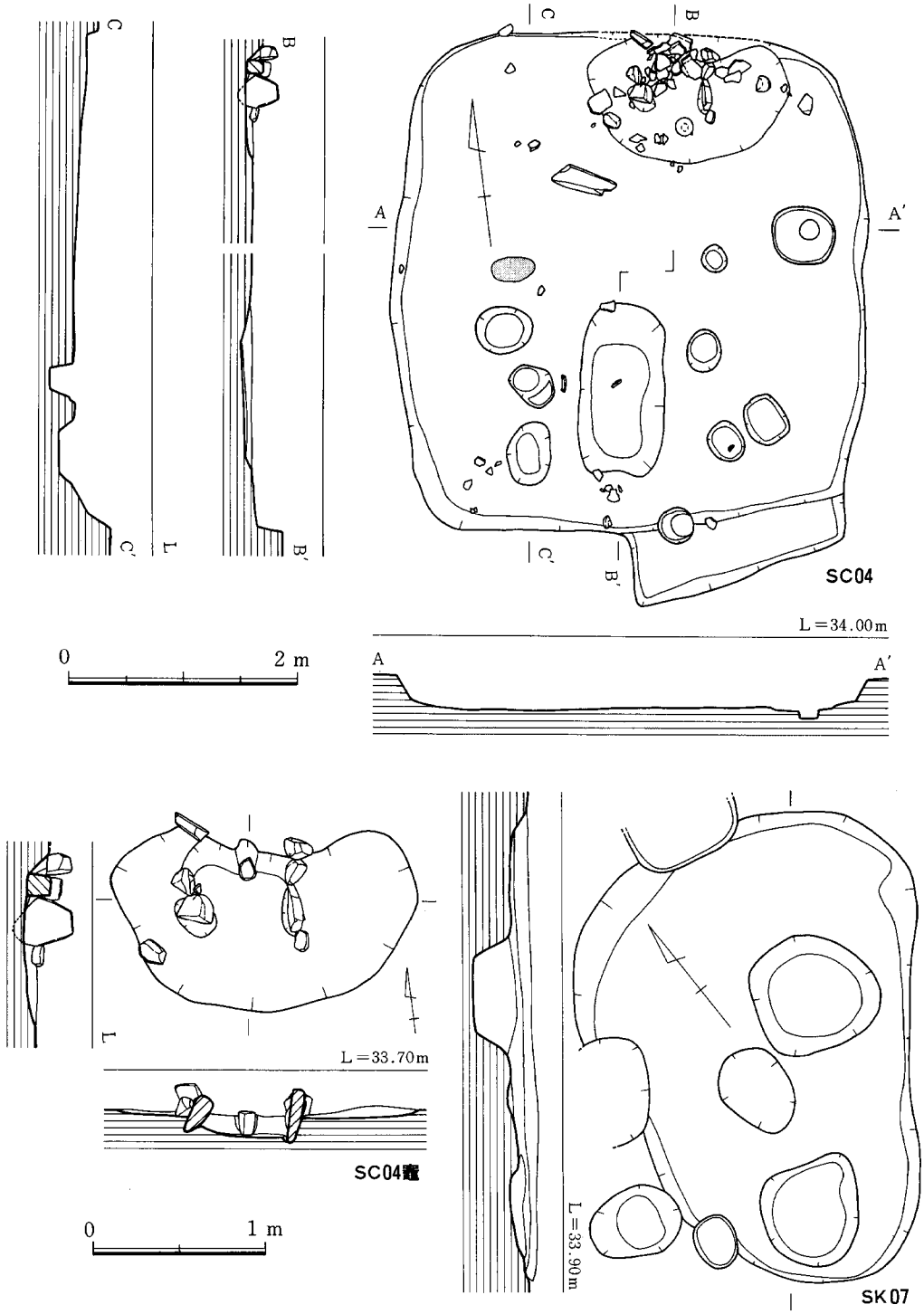


Fig. 68　SC04,SK07実測図（1/60,1/40）

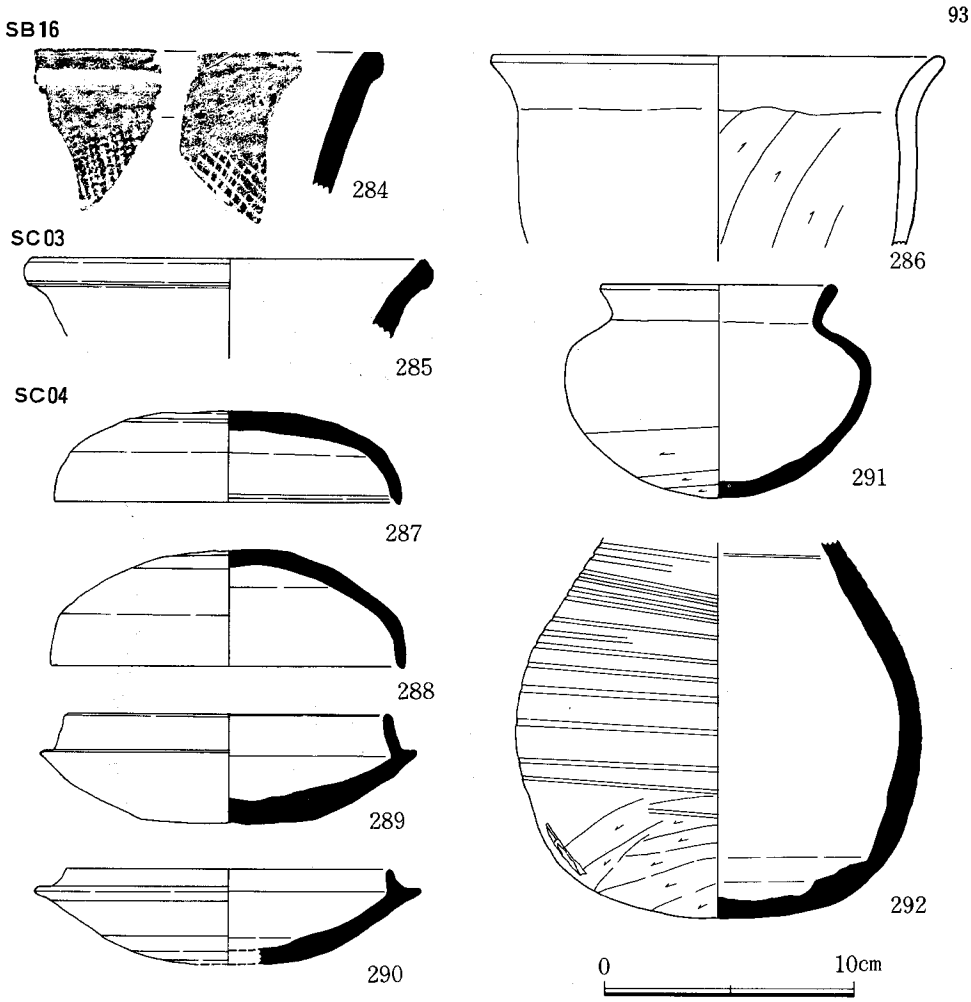


Fig. 69　SB16, SC03, SC04出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

出土遺物（Fig. 69-71）

須恵器（287-294）　287・288は杯蓋。287は口縁内側に小さい段を設ける。288は丸くおさめる。天井はともにヘラ削りであるが、288の削り範囲が小さく天井が高い。289・290は杯身。289は受部が短く、立ち上がり部が長い。290はその反対となる。底部はヘラ削り。289は赤焼け。

291は短頸壺。口縁はわずかに外反し、体部下半はヘラ削りで丸くなる。焼きがあまい。292は下膨れの壺である。体部中位から上位にかけて多くの沈線を巡らす。体部下半はヘラ削り、底部および内面はナデ。表面に別個体片が付着する。

293は甕であろうか。胴上位に注ぎ口らしき突出部をもつ。外面平行タタキ、内面には青海波の当て具痕が見られる。294は赤焼けの甕。口縁は肥厚し、外面に段を作る。293と同じ調整を

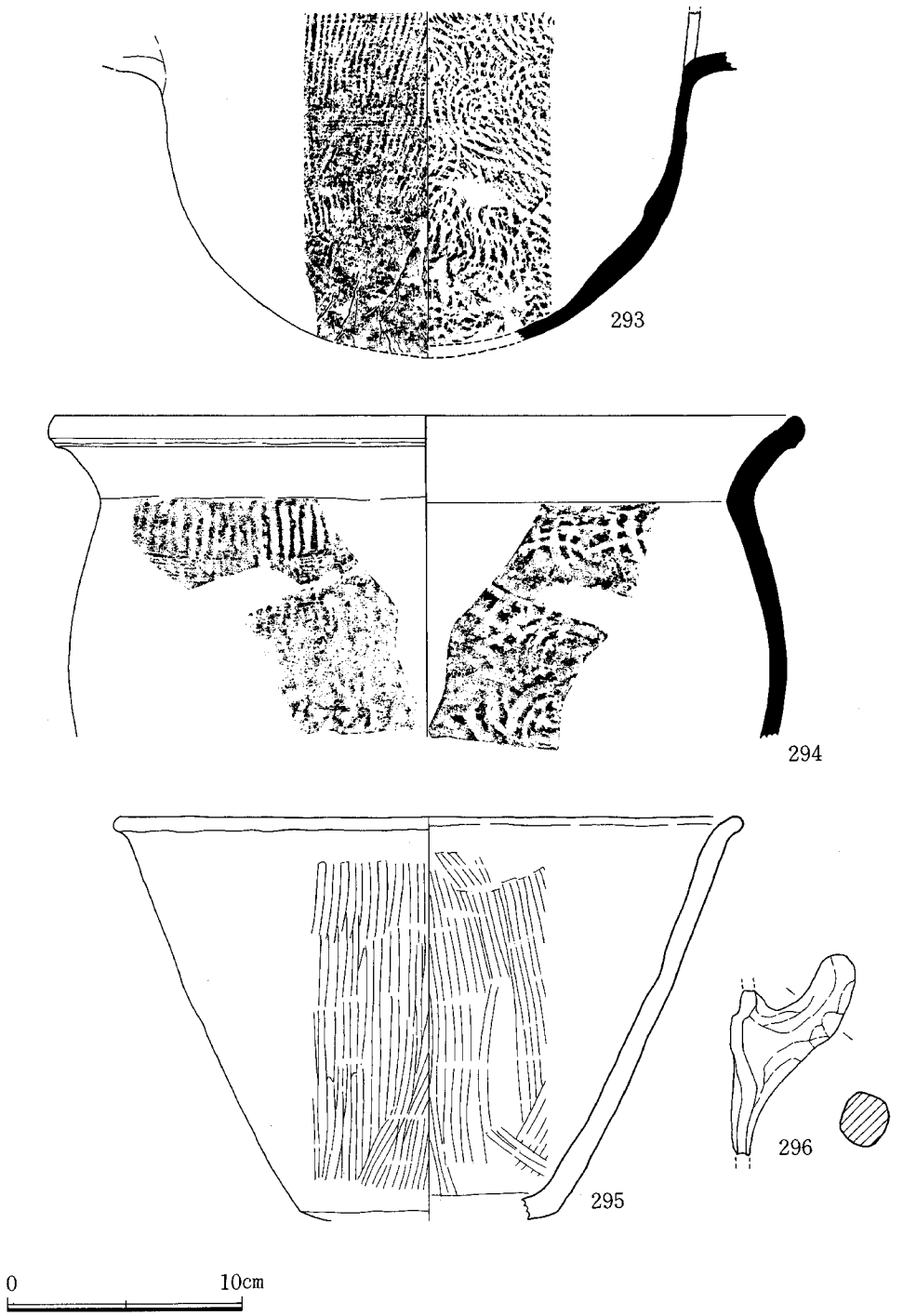


Fig. 70　SC04出土遺物実測図II（1/3）

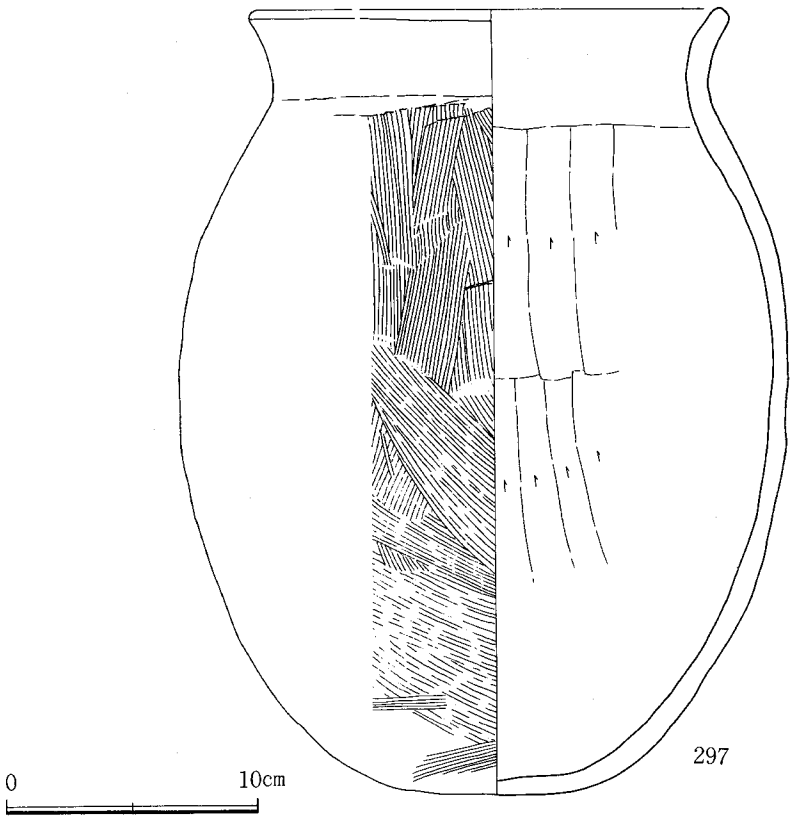


Fig. 71　SC04出土遺物実測図Ⅲ（1/3）

施した後、ナデ消しているが、すべてを消しさるには至っていない。

土師器（295-297）　295は鉢あるいは甑であろう。体部は直線的に開き、口縁は短く反転する。内外面とも粗い縦刷毛目。297は張りのある長胴をなす甕。口縁の外反は小さい。胴外面は刷毛目だが下半をナデ消す。296は甑の把手であろう。細身の作りである。

ＳＣ05　ＳＣ04の西側で検出したもので、南側壁の一部を確認したにとどまる。北に方位をとるものであろう。壁高は８㎝。覆土から須恵器、土師器の細片が出土しており、それからすればＳＣ04の出土遺物と時期的に大差ない。

(3)　土坑

ＳＫ07（Fig. 68）　長さ2.85m、幅1.65mの楕円形状の土坑である。深さ14cm。ＳＢ16に切られ、ＳＣ03を切る。須恵器・土師器細片と炭化物が出土した。

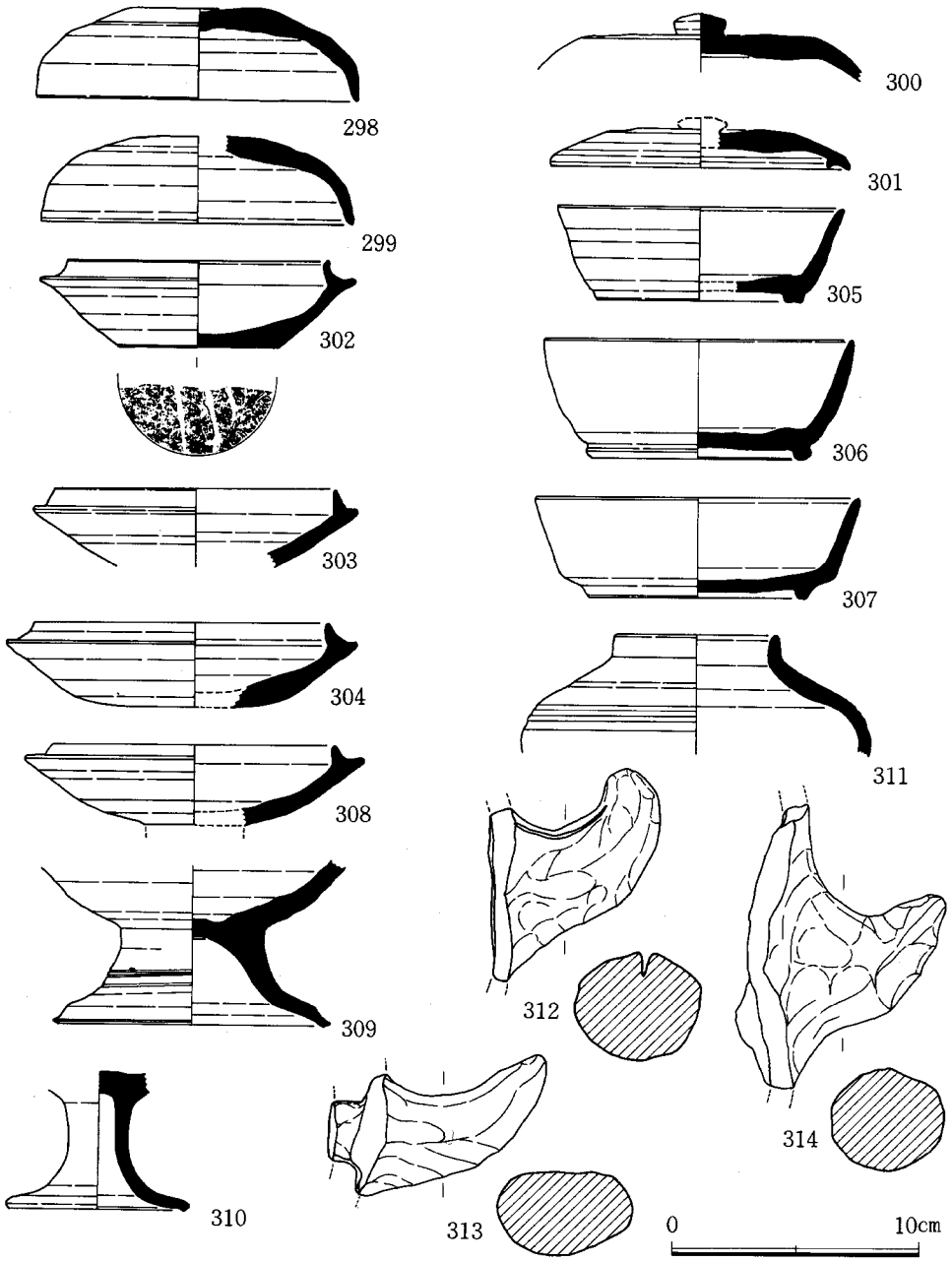


Fig. 72　Ⅳ区表土層出土遺物実測図（1/3）

(4)　表土層出土の遺物（Fig. 72）

須恵器（298-311）　298・299は杯蓋。天井と体部の境は段（298）、沈線（299）をもって画する。口端部は丸くおさめる。300・301はつまみをもつ蓋で、301は口縁に返りをもつ。ともに天井はヘラ削り、内天井はナデ。

303・304は杯身。立ち上がり部は短い。304は生焼け。305-307は有高台の杯。体部が直線的に外傾するもので、口縁の開きも大きくない。体部と底部の稜は明瞭さを欠く。

308-310は高杯。308は杯部片で、立ち上がり部が短く、受部が長い。309は短脚をなし、脚端部は尖り気味になり上方にはねる。杯部は深い。硬質で赤褐色を呈する。310は小型のもので、脚端部は丸みをおびた三角形となる。

311は短頸壺。張りの大きい体部中位に沈線が巡る。口縁は短く直立する。

土師器（312-314）　いずれも甑の把手である。312の上面には切れ目が入る。また313ははめ込み式となっている。

5．まとめ

以上みてきたように、今回の金武城田遺跡の調査では、掘立柱建物・竪穴住居跡・土坑・溝・製鉄遺構・列石遺構などとともに、縄文から鎌倉時代に至る遺物を検出した。遺構の時期については各々の項で述べておいたが、出土遺物の少なさから確定が困難なものが多い。ここではまず時代的な流れを追うことにより、各時代における遺跡の性格をつかみ、その後製鉄遺構について簡単に触れてみたい。

遺跡の年代と性格　今回の調査で出土した最も古い遺物は縄文後・晩期の土器であり、また248の磨製石器もこの時期に属するものであろう。しかし遺跡の実態は明かでない。

弥生時代の遺物は、II区を中心に前期から中期の土器が少量出土している。またIII区で検出したＳＫ12・13は付近の遺構が６～８世紀の遺物を含むのに対し、少量ながら弥生の遺物しか出土しておらず、その形態を考え併せるとこの時代の土壙墓の可能性をもつ。

古墳時代前期の遺構・遺物は全く見られず、６世紀中頃から後半の時期に至って竪穴住居跡、土坑などの遺構と遺物が全区的に認められるようになる。竪穴住居跡は方形状の平面をなし、ＳＣ01・04には竈を付設する。その上部構造は明確でないがＳＣ01などからすれば、4本の主柱と補助柱を組み合わせたものであろうか。出土した須恵器はほぼIIIｂ期段階のものであるが、IV区のように切り合いが認められ、時期差があることを示している。土坑としてはＩ区のＳＫ01・02、II区のＳＫ06、III区のＳＫ11、IV区のＳＫ07などの遺構がこの時期におさまるものであるが、その性格については判然としない。この時期以降奈良時代に至る明確な遺構は検出していない。しかしIII区の包含層をはじめ数カ所で、相当時期の遺物が出土しており、近在に遺構があることをうかがわせる。

奈良時代の遺構としては掘立柱建物、溝、製鉄遺構があげられる。また当該期の遺物が包含層から多数出土しており、今回の調査のメイン時期となっている。II区で検出した上下の遺構面もこの時代の中でとらえられる。すなわち下層のＳＤ03の出土遺物は８世紀前半頃、上層のＳＫ04・05、ＳＸ26・27は８世紀中頃から後半にかけての時期に相当する。下層のＳＤ03はＳＢ

05･06と関係する溝と考えられ、とすればこの2棟の建物の時期も判明する。Ⅲ区ではＳＢ07がＳＤ03を切っており、溝が埋没した後に建てられたことは明確である。Ⅲ区の遺構は再三述べたように一部を除き地山面でしか検出できておらず、上層遺構面に伴うものがあってもおかしくはない。このＳＢ07は他のⅢ区の建物（ＳＢ08-12）とは方位が異なっている。これらの建物からの出土遺物はきわめて少なく時期決定は困難である。ただ柱掘形の規模はＳＢ05･06より大きく、また建物方位はＳＸ26の方向とほぼ同じである。これらを勘案すれば上層遺構に伴う可能性が強いといえるが確定しがたい。いずれにせよこれらの建物も切り合い関係をもち、単一時期のものではない。Ⅰ区、Ⅲ区の建物も出土遺物は少ないが、他遺構との関係からすれば８世紀代のものと考えられる。確認した17棟のうち7棟が2×2間の総柱建物であるのは特徴的である。やや煩雑な記述となったが、この時代の遺構の変遷をたどると、まず８世紀前半頃ＳＤ03に囲まれたＳＢ05･06が建てられ、中頃にそれを埋めⅡ区では鍛冶炉およびそれに関連する施設を設け、Ⅲ区には掘立柱建物を建てたものと考えられる。Ⅱ・Ⅲ区をみると下層面は、鉄滓の出土から近辺での鉄生産が想定されるが、どちらかといえば居住に供されていた感じが強い。ところが上層面になると鍛冶炉の設置とそれに伴う遺構となり、生産の場へと大きく変貌している。Ⅰ・Ⅳ区は現状ではこの変化をとらえることができない。

出土遺物からみると遺跡はその後も継続しており、Ⅱ区の包含層で検出した越州窯系青磁、白磁、緑釉陶器などはこの遺跡の位置付けに大きな意味を持つと考えられる。今後の遺跡の調査に期待したい。

製鉄遺構について　今回の調査で検出した製鉄遺構は17基である。一般に残存状態は良くなく、炉底がかろうじて残る程度のものや、それすら残らないものもある。いずれも平地に平面円・楕円・方形の土坑を穿って、炉を設けている。規模は小さくＳＸ01をのぞけば1mにも満たない。炉壁は半円形あるいは馬蹄形状を呈するものが多く、一方が開く。例外としてＳＸ01は長方形の炉床を持ち、またＳＸ03は炉そのものが長方形となる。ＳＸ01･06では炉が開く部分でフイゴ羽口を検出した。ＳＸ02は炉の背部分が２カ所途切れ、ＳＸ03は炉壁の西南隅に切れ込みを持つ。これらはフイゴ羽口の取り付け位置を示すものであろう。炉床下はほとんどの遺構で炭化物層、焼土層が認められる。

検出した炉跡はⅠ区、Ⅱ区Ａ群、Ⅱ区Ｂ群、Ⅲ区の４地区に分布する。Ⅱ区Ａ群はＳＫ05の南壁、あるいはその外に設けられた8基の炉からなり、西北から東南方向に列をなす。ＳＫ05以外の施設はなんらもたない。各炉の位置、その方向からすればＳＸ01とＳＸ07、ＳＸ02とＳＸ05、ＳＸ03とＳＸ04がそれぞれ一組として築かれていることが知られる。また最も規模の大きいＳＸ01の周辺にはＳＸ16･17が別にある。これに対しＢ群は、ＳＸ27の浅い落込み状遺構の一画に10基が集中して設けられている。炉の方向など子細にみれば、ＳＸ08とＳＸ12、ＳＸ13とＳＸ14が一組となる。これら2基一組の炉は、その使い分けの必要性によるものであろう。大澤

正巳氏によるこの遺跡出土鉄滓の分析によれば、ＳＸ01･03･04･05･06･08からは精錬鍛冶滓、ＳＸ02･07･09は鍛錬鍛冶滓との結果を得ている。全ての分析の報告を待つべきであろうが、これだけの結果からすれば、2基一組の炉は、大鍛冶、小鍛冶に使い分けられていた可能性が高い。ただＳＸ03･04のようにともに精錬鍛冶滓を出しているところもあり、検討を要する。これらの鍛冶炉の操業時期は８世紀中頃に当たり、各炉、各群の時期幅はさほど大きくないと考えられる。すなわちⅡ区Ａ群では3組の大鍛冶･小鍛冶が場所を変えて行われ、ほぼ同時にＢ群でも複数の大鍛冶・小鍛冶が行われていた状況がうかがわれる。Ⅰ区・Ⅲ区も状況は同じであろう。Ⅱ区上層出土の鉄滓の中には製錬滓があるという大澤氏の報告も受けており、とすれば製錬・大鍛冶・小鍛冶の一貫した鉄生産をこの遺跡内で行っていた可能性も出てくる。またⅡ区の下層遺構面からも鉄滓が出土しており、８世紀前半、あるいはそれを遡る時期から鉄生産があったことは確実である。今後の調査に期待したい。

以上今回の調査で検出した製鉄遺構（鍛冶炉）についてまとめてみたが、残存状態が悪いこともあり、炉構造など不明な点が多い。これを補うため周辺の製鉄遺構を簡単にみてみたい。福岡市周辺の製鉄遺構については1976年柳沢一男氏がすでにまとめられているが、それ以後の調査により炉そのものの検出例が増えている。金武城田遺跡が所在する早良平野においても西区飯盛、羽根戸、早良区有田遺跡で奈良から平安時代の炉跡が出土している。うち羽根戸、有田の両遺跡は製錬炉である。飯盛遺跡では３次調査と４次調査の２カ所で遺構を検出しており、４次調査での炉跡のあり方は残りの悪かった本遺跡のそれを補うに余りある。調査区の一端、南北9m、東西6mほどの範囲に12基の炉跡が検出されている。東および南側では製鉄遺構が調査区外に延びるが、北から西側にかけては小さな段落ちとなっており、この不整形の段落ち内に炉が設けられている。9号炉とされるものは幅1.5～1.6m の方形状の竪穴内にあるもので、その竪穴を掘立柱建物が囲むという。他のものはそのような施設は持たない。西側段落ち下に沿うようにして、Ⅱ区Ａ群に見られた2基一組の炉が3組ある。このうち対をなす4･5号炉出土の鉄滓は分析を経ており、それによると5号炉のものが精錬鍛冶滓、4号炉ものが鍛錬鍛冶滓である。本遺跡同様大鍛冶・小鍛冶のための炉が並んで設けられたものと考えられる。このほか炉構造なども残存状態がよいことからはっきりととらえられ、本遺跡のものと似る部分も多い。詳細は報告を待ちたい。その他この時期の鍛冶炉跡として糸島郡志摩町八熊遺跡、二丈町塚田遺跡、曲り田遺跡などがあげられる。

最後にこれら鉄生産の主体者がどのようなものであったかの検討が必要であろう。本遺跡や飯盛遺跡のように鍛冶炉とはいえ集中して設けられ、複数炉が同時に操業されていた状況は、一集落内の鍛冶にとどまるものとは考えられない。このためには８世紀の歴史的背景も十分考慮する必要があり、今後の課題としたい。

註）鉄滓の分析および製鉄遺構については大澤正巳氏、飯盛遺跡については横山邦継氏の御教示を得た。

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	色調	その他の特徴	登録番号
001	39		Ⅰ.SB02	土師・甑				外指ナデと刷毛目、内ヘラ削り	黒褐色	把手のみ	00007
002	39	25	Ⅰ.SB04	土師・鉢	9.5	5.8	6.3	指ナデ（手捏ね）	暗褐色	完形	00009
003	39		Ⅱ.SB05	須恵・蓋		—		横ナデ	灰　色		00022
004	39		Ⅱ.SB06	須恵・蓋		—		外横ナデ、内ナデ	灰　色		00021
005	39		Ⅲ.SC01	須恵・杯蓋	(12.8)	—	3.9	天井ヘラ削り、体部横ナデ、内天井ナデ	赤褐色	赤焼け	00311
006	39		Ⅲ.SC01	須恵・杯蓋	(12.4)	—		天井ヘラ削り、体部横ナデ、内天井ナデ	暗青灰色		00312
007	39		Ⅲ.SC01	須恵・杯蓋	(12.1)	—		横ナデ	淡青灰色		00314
008	39		Ⅲ.SC01	須恵・杯身	(9.5)			横ナデ	淡青灰色		00313
009	39		Ⅲ.SC01	須恵・杯身	(10.2)			外底ヘラ削り、他は横ナデ	淡褐色	生焼け	00321
010	39		Ⅲ.SC01	須恵・甕	(11.9)			口縁横ナデ、胴タタキ（内青海波、外平行）	灰白色	焼きがあまい	00315
011	39		Ⅲ.SC01	土師・甕	(25.3)			口縁外横ナデ、内刷毛目、胴外刷毛目・内ヘラ削り	褐　色		00318
012	39		Ⅲ.SC02	須恵・杯身				外底ヘラ削り、他は横ナデ	暗赤褐色		00320
013	39		Ⅲ.SC02	須恵・甕				タタキ（内青海波、外平行）	暗赤紫色		00319
014	41	25	Ⅰ.SK02	須恵・杯蓋	14.8	—	4.0	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色	口縁部に刻み目	00001
015	41		Ⅱ.SK04	須恵・蓋		—		天井ヘラ削り・ナデ、内天井ナデ	淡灰色		00050
016	41		Ⅱ.SK04	須恵・蓋	(13.0)	—		残存部横ナデ	暗灰色		00052
017	41		Ⅱ.SK04	須恵・蓋	(17.6)	—		残存部横ナデ	灰　色		00051
018	41		Ⅱ.SK04	須恵・杯		(7.6)		内底ナデ、外底横ナデ	淡青灰色		00054
019	41		Ⅱ.SK04	須恵・杯	(12.9)	(9.0)	4.0	内底ナデ、他横ナデ	淡青灰色	焼きあまい	00049
020	41		Ⅱ.SK04	須恵・皿	(17.5)	14.1	1.7	横ナデ	暗灰色		00053
021	41	25	Ⅱ.SK04	土師・甕	27.6			内ヘラ削り、口縁横ナデ、外ナデ	淡褐色	器表の剝落著しい	00373
022	43		Ⅱ.SK05	須恵・蓋	(15.0)	—		天井ヘラ削り、他横ナデ	暗灰色		00068
023	43		Ⅱ.SK05	須恵・蓋	(15.4)	—		横ナデ	灰　色		00067
024	43		Ⅱ.SK05	須恵・蓋	(15.6)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色	焼き歪み	00060
025	43		Ⅱ.SK05	須恵・蓋	(16.6)	—		天井・内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00059
026	43		Ⅱ.SK05	須恵・蓋	(16.2)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡灰色	生焼け	00066
027	43		Ⅱ.SK05	須恵・杯	(11.6)	(8.6)	3.8	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	黒褐色	焼きややあまい	00061
028	43		Ⅱ.SK05	須恵・杯		(9.2)		内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00055
029	43		Ⅱ.SK05	須恵・杯		(7.0)		横ナデ	茶褐色	生焼け	00069
030	43	25	Ⅱ.SK05	須恵・杯	(14.9)	(9.1)	6.4	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00065
031	43	25	Ⅱ.SK05	須恵・皿	14.6	11.0	2.5	内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00056
032	43		Ⅱ.SK05	須恵・長頸壺				横ナデ	灰　色		00057
033	43	25	Ⅱ.SK05	須恵・長頸壺		9.2		外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00062
034	43		Ⅱ.SK05	須恵・高杯				底ナデ、他横ナデ	灰白色	焼きあまい	00058
035	43		Ⅱ.SK05	土師・椀		(7.8)		横ナデ	褐　色	摩滅著しい	00063
036	43		Ⅱ.SK08	須恵・杯蓋	(11.7)	—		天井ナデ、他横ナデ	暗灰色		00002
037	43		Ⅱ.SK08	石鏃	残長2.0cm、最大幅1.7cm、重量1.25g、黒曜石製					先端欠損	00406
038	43		Ⅱ.SK09	須恵・蓋		—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00249
039	44		Ⅱ.SD02	須恵・蓋	(13.8)	—		横ナデ	灰黒色		00033
040	44		Ⅱ.SD02	須恵・蓋	(17.6)	—		内・外底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	摩滅著しい	00034
041	44		Ⅱ.SD02	須恵・蓋	(15.0)	—		横ナデ	暗灰色		00035
042	44	25	Ⅱ.SD02	須恵・杯	(14.6)	11.2	4.2	内・外底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00024
043	44		Ⅱ.SD02	須恵・杯		(10.7)		内・外底ナデ、他横ナデ	黒灰色		00028
044	44	25	Ⅱ.SD02	須恵・杯	17.5	12.4	5.8	内・外底ナデ、他横ナデ	灰　色		00023
045	44		Ⅱ.SD02	須恵・杯	(18.0)	(12.8)	5.5	内・外底ナデ、他横ナデ	暗灰白色	焼きあまい	00027
046	44		Ⅱ.SD02	須恵・皿	(13.0)	(6.4)	1.8	内・外底ナデ、他横ナデ	灰　色	摩滅著しい	00032
047	44	25	Ⅱ.SD02	須恵・皿	(23.4)	(19.4)	2.0	内・外底ナデ、他横ナデ	淡青灰色	焼きあまい	00025
048	44		Ⅱ.SD02	須恵・甕				横ナデ、外面波状文、ヘラ描き文	暗青灰色		00042
049	44		Ⅱ.SD02	須恵・高杯				内底ナデ、他横ナデ	淡灰色	焼きあまい	00040

Tab.3　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅰ

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	色調	その他の特徴	登録番号
050	44		II.SD02	須恵・高杯				横ナデ	暗灰色	脚部のみ	00041
051	44		II.SD02	土師・甕	(24.8)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	褐色		00036
052	44		II.SD02	土師・甑				内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡赤褐色	把手のみ	00038
053	44		II.SD02	土師・甑				内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡褐色	把手のみ、焼きあまい	00037
054	44	25	II.SD02	軒平瓦	残長11.5cm、厚さ1.9cm			外面ヘラガキ、内面布目	暗赤褐色	砂粒を多く含む	00044
055	45		II.SD03	須恵・蓋	(15.8)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰色		00047
056	45		II.SD03	須恵・蓋		—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡褐色	生焼け	00048
057	45	25	II.SD03	須恵・甕	(14.7)			内面タタキ、ナデ消し、外面タタキ	暗灰色		00046
058	45	25	II.SD03	鉄鎌	残長5.6cm、幅3.6cm					錆化著しい	00043
059	47		II.SX26	須恵・蓋	(13.8)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色		00117
060	47		II.SX26	須恵・蓋	(14.2)	—	3.5	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡灰色	焼きあまい	00102
061	47		II.SX26	須恵・蓋	(15.8)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00120
062	47		II.SX26	須恵・蓋	(15.2)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	焼き歪み	00110
063	47		II.SX26	須恵・蓋	(13.6)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗青灰色		00115
064	47		II.SX26	須恵・蓋	(13.2)	—		内天井ナデ、他横ナデ	灰色		00109
065	47		II.SX26	須恵・蓋		—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡黄褐色	生焼け	00163
066	47		II.SX26	須恵・蓋		—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色	内面鉄分付着	00112
067	47		II.SX26	須恵・蓋	(18.4)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰色	外面鉄分付着	00108
068	47		II.SX26	須恵・蓋	(18.0)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰色		00107
069	47	25	II.SX26	須恵・蓋	(19.4)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗青灰色		00103
070	47	25	II.SX26	須恵・蓋	9.1	—	1.2	横ナデ	暗灰色	ほぼ完成	00101
071	47	26	II.SX26	須恵・杯	13.6	11.8	3.6	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00091
072	47	26	II.SX26	須恵・杯	15.4	11.0	3.4	内底ナデ、他横ナデ	灰色		00090
073	47	26	II.SX26	須恵・杯	(14.2)	8.9	3.3	内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00135
074	47	26	II.SX26	須恵・杯	14.0	8.2	4.0	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色	焼き歪み	00089
075	47	26	II.SX26	須恵・杯	13.9	10.4	3.8	内底ナデ、他横ナデ	灰色	生焼け	00158
076	47	26	II.SX26	須恵・杯	10.2	6.6	4.2	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	灰白色	焼きむら	00144
077	47	26	II.SX26	須恵・杯	14.3	11.4	3.6	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色	焼きあまい	00092
078	47		II.SX26	須恵・杯	(14.0)	10.4	3.4	内底ナデ、他横ナデ	淡緑灰色	焼き歪み	00099
079	47		II.SX26	須恵・杯	(14.1)	9.5	3.8	内底ナデ、他横ナデ	灰色	焼きあまい	00100
080	47	26	II.SX26	須恵・杯	13.7	10.4	4.3	内底ナデ、他横ナデ	黒灰色		00095
081	47	26	II.SX26	須恵・杯	(13.6)	11.0	4.0	内底ナデ、他横ナデ	灰色		00097
082	47	26	II.SX26	須恵・杯	14.4	10.5	4.1	内底ナデ、他横ナデ	灰色	底部焼きあまい	00094
083	48	26	II.SX26	須恵・杯				内底ナデ、他横ナデ	黒灰色	焼き歪み	00126
084	48	26	II.SX26	須恵・杯	13.1	10.7	5.0	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	焼きあまい	00093
085	48	26	II.SX26	須恵・杯	(13.6)	10.1	5.0	内底ナデ、他横ナデ	暗青灰色	底部にヘラ記号	00104
086	48	26	II.SX26	須恵・椀	(14.0)	10.8	5.5	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色	体部下半に灰釉	00105
087	48	26	II.SX26	須恵・椀	15.5	10.3	6.0	横ナデ	黒褐色	焼きあまい	00096
088	48	26	II.SX26	須恵・皿	(16.4)	11.5	3.3	横ナデ	暗灰色	外面摩滅	00098
089	48	26	II.SX26	須恵・皿	17.9	13.0	3.6	内・外底ナデ、他横ナデ	灰色	焼きあまい	00157
090	48		II.SX26	須恵・皿		15.2		内底ナデ、他横ナデ	灰色	焼きあまい	00161
091	48	26	II.SX26	須恵・高杯	(13.2)			外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00137
092	48		II.SX26	須恵・高杯	(19.3)	16.4	2.6	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	灰色	外面鉄分おびる	00134
093	48		II.SX26	須恵・高杯	(18.4)			外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	灰色	焼きあまい	00118
094	48	27	II.SX26	須恵・高杯	(20.6)			内底ナデ、他横ナデ	暗灰色	外面鉄分おびる	00106
095	48		II.SX26	須恵・高杯	(23.8)			外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	淡緑灰色	焼きあまい、鉄分おびる	00139
096	48	27	II.SX26	須恵・高杯		12.0		内底ナデ、他横ナデ	淡灰色	焼きあまい	00159
097	48		II.SX26	須恵・高杯				外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	黒灰色		00140
098	48		II.SX26	須恵・高杯				内底ナデ、他横ナデ	灰色		00141

Tab.4　金武城田遺跡掲載遺物一覧表II

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	色調	その他の特徴	登録番号
099	49		II.SX26	須恵・長頸壺				横ナデ	灰色	焼きややあまい	00142
100	49		II.SX26	須恵・壺	(8.6)			横ナデ	黒灰色		00143
101	49	27	II.SX26	須恵・短頸壺	(8.0)	(8.0)	8.1	横ナデ	暗赤紫色	焼きあまい	00151
102	49		II.SX26	須恵・壺				横ナデ、外面一部ヘラ磨き	灰色		00147
103	49	27	II.SX26	須恵・長頸壺		11.2		内面横ナデ、外面ヘラ削り後ナデ	黒灰色		00149
104	49	27	II.SX26	須恵・長頸壺		13.2		内底ナデ、他横ナデ	暗灰色	内面鉄分付着	00133
105	49	27	II.SX26	須恵・平瓶		14.2		横ナデ	淡青灰色		00148
106	49		II.SX26	須恵・鉢	(20.7)			横ナデ	黒灰色		00138
107	49		II.SX26	須恵・甕	(18.0)			横ナデ	暗灰色	焼き歪み	00146
108	49		II.SX26	須恵・甕	(37.8)			横ナデ、波状文	暗灰色		00145
109	50		II.SX26	須恵・甕		(13.4)		タタキ	黒灰色		00153
110	50	27	II.SX26	土師・皿	23.5	18.2	3.3	外底ヘラ削り、内底ナデ、他ヘラ磨き	淡赤褐色		00162
111	50		II.SX26	土師・杯		10.6		内底ナデ、他横ナデ	淡赤褐色	摩滅著しい	00165
112	50		II.SX26	土師・甕	28.4			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ナデ	黒灰色	表面調整粗い	00178
113	51		II.SX26	土師・甕	(23.0)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡赤褐色	外面摩滅著しい	00176
114	51		II.SX26	土師・甕	(26.4)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ナデ	暗褐色	外面鉄分付着	00156
115	51		II.SX26	土師・甕	(29.0)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡赤褐色		00179
116	51		II.SX26	土師・甕		14.4		内面ヘラ削り後ナデ、外面刷毛目後ナデ	暗褐色		00164
117	51		II.SX26	土師・甕		(10.4)		内面ヘラ削り、外面タタキ	暗褐色		00175
118	51		II.SX26	土師・甑				内面ヘラ削り、外面刷毛目、指押え	淡赤褐色	把手のみ	00174
119	51		II.SX26	土師・甑				内面ヘラ削り、外面刷毛目、指押え	淡褐色	把手のみ	00167
120	51		II.SX26	土師・甑				外面指押え	淡褐色	把手のみ	00170
121	51		II.SX26	土師・甑				内面ヘラ削り、外面刷毛目、指押え	淡褐色	把手のみ(一対揃い)	00166
122	51	27	II.SX26	砥石	残長8.8cm、最大幅5.8cm、厚さ1.8cm、重量152.8g、砂岩製					破片	00399
123	51	27	II.SX26	鉄馬具	残長7.2cm					鉸具、銹化著しい	00403
124	55		II.SX01	須恵・蓋	(15.2)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡灰褐色		00071
125	55		II.SX07	須恵・蓋	13.8	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰色	焼きややあまい	00081
126	55		II.SX05	須恵・杯		(9.8)		横ナデ	淡青白色		00082
127	55		II.SX04	須恵・杯		(10.2)		横ナデ	暗青灰色		00070
128	55		II.SX09	須恵・杯		(13.5)		外底ヘラ削り、他横ナデ	淡灰色	鉄分付着	00079
129	55		II.SX22	須恵・(高)杯	(8.4)			下半ヘラ削り、他横ナデ	暗紫色	外面に自然釉	00078
130	55		II.SX09	土師・甕	(25.4)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	黄褐色	表面摩滅	00080
131	55		II.SX01	フイゴ羽口	残長6.7cm、孔径2.5cm			ナデ	赤褐色	砂粒多い、端部に鉄滓	00073
132	55		II.SX06	フイゴ羽口	残長9.0cm、径6.8cm、孔径2.8cm			ナデ	赤褐色	砂粒多い	00074
133	(欠番)										
134	56		II.SX25	須恵・杯蓋	(12.5)			天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色	焼き歪み	00075
135	56		II.SX25	須恵・(高)杯	(8.4)			外底ヘラ削り、他横ナデ	暗青灰色		00076
136	56	27	II.SX25	須恵・壺		8.4		外面ヘラ削り、内面横ナデ	黒白色	底部にヘラ記号	00077
137	56		II.SX25	土師・鉢	(14.8)			内面ナデ、他横ナデ	暗褐色		00086
138	56		II.SX25	土師・甕	(20.8)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り	暗褐色	摩滅著しい	00084
139	56		II.SX25	土師・甑				内面ヘラ削り、外面ナデ	褐色	把手のみ	00087
140	56		II.SX25	土師・甑				内面ヘラ削り、外面ナデ	淡赤褐色	把手のみ	00088
141	56		II.SX27	須恵・蓋	(14.9)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色	生焼け	00198
142	56		II.SX27	須恵・蓋	(12.8)	—		内天井ナデ、他横ナデ	青灰色		00190
143	56		II.SX27	須恵・蓋	(14.0)	—		内天井ナデ、他横ナデ	灰色	表面摩滅	00189
144	56	27	II.SX27	須恵・杯	(13.6)	10.3	3.6	内底ナデ、他横ナデ	灰色		00180
145	56	27	II.SX27	須恵・杯	(14.0)	11.2	4.7	内底ナデ、他横ナデ	淡灰色	生焼け	00182
146	56	27	II.SX27	須恵・椀	(11.8)	(8.2)	7.2	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	黒灰色		00184
147	56	27	II.SX27	須恵・椀	(13.8)	(8.4)	5.9	内底ナデ、他横ナデ			00181

Tab.5　金武城田遺跡掲載遺物一覧表III

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	色調	その他の特徴	登録番号
148	56		II.SX27	須恵・皿	(15.1)	(11.6)	1.6	横ナデ	灰色	焼きややあまい	00191
149	56		II.SX27	須恵・皿	(15.8)	(12.4)	2.0	外底板押え、内底ナデ、他横ナデ	灰色		00183
150	56		II.SX27	須恵・甕	(19.4)			横ナデ	黒灰色		00186
151	56	27	II.SX27	土師・杯		6.8		内・外底ナデ、他横ナデ	淡褐色		00197
152	56		II.SX27	土師・杯	(12.6)	(9.3)	3.7	ヘラ磨き	淡褐色	摩滅著しい	00194
153	56		II.SX27	土師・杯	(12.3)	8.0	2.8	内底ナデ、他横ナデ	暗赤褐色		00195
154	56		II.SX27	土師・甕	(24.1)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り	淡赤褐色		00199
155	57	27	I.P31	須恵・杯蓋	13.0	—	4.5	天井ナデ、他横ナデ	淡緑灰色		00005
156	57		II.P110	須恵・杯		(10.9)		内底ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00200
157	57	28	I.P11	土師・甕	(13.1)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	暗褐色	2次焼成痕	00003
158	57		II.P133	土師・甑				内面ヘラ削り、外面押え	淡赤褐色	把手のみ	00201
159	57		II.P88	フイゴ羽口	残長7.6cm、孔径2.6cm			ナデ	赤褐色	2次焼成痕	00203
160	57	28	II.P85	フイゴ羽口	残長10.4cm、孔径2.9cm			ナデ	赤褐色		00202
161	57	28	III.P26	土錘	残長3.4cm、径1.8cm、重量10.5g			ナデ	淡赤褐色	外面ヘラ刻み	00404
162	58	28	I.包	須恵・杯身	(12.5)	14.5※	4.2	内底ナデ、内面横ナデ、外面ヘラ削り	淡青灰色	底部ヘラ記号	00017
163	58		I.包	須恵・杯身	(11.8)	13.9※	4.8	内底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	生焼け	00019
164	58		I.包	須恵・杯身	(11.4)	12.9※	4.2	内底ナデ、他横ナデ	灰白色	生焼け	00018
165	58	28	I.包	須恵・杯身	10.6	7.2	4.3	内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00016
166	58		I.包	須恵・甕	(23.2)			横ナデ	淡青灰色	摩滅著しい	00020
167	58		I.包	土師・鉢	(22.9)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ヘラナデ	暗褐色	調整雑	00010
168	58		I.包	土師・鉢	(9.1)			内面刷毛目、他横ナデ	黒褐色		00014
169	58		I.包	土師・鉢	(13.8)			内面ヘラ削り、外面横ナデ	暗褐色		00013
170	58		I.包	土師・甕	(18.3)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ナデ	黄褐色		00015
171	58		I.包	土師・甑		(10.0)		内面ヘラ削り、外面刷毛目	暗褐色	摩滅著しい	00011
172	59		II-E包上	弥生・甕	(24.5)			外面ナデ、他横ナデ	黒灰色	外面摩滅著しい	00219
173	59		II-E包上	弥生・甕	(25.6)			口縁横ナデ、内面ナデ、外面刷毛目	褐色		00217
174	59		II-E包上	弥生・甕	(18.5)			口縁横ナデ、内面ナデ、外面刷毛目	淡赤褐色		00216
175	59		II-E包上	弥生・蓋		—		外面刷毛目、他ナデ	淡褐色		00227
176	59		II-E包上	弥生・蓋		—		内面指押え、外面ナデ	淡褐色	摩滅著しい	00226
177	59		II-E包上	弥生・壺	(20.5)			内面ナデ、他刷毛目	淡赤褐色	丹塗り	00220
178	59		II-E包上	弥生・鉢	(17.6)			口縁横ナデ、内面ナデ、外面刷毛目	淡褐色		00221
179	59		II-E包上	弥生・器台		(8.4)		内面横ナデ、外面指押え	褐色		00225
180	59		II-E包上	弥生・甕		7.6		内面ナデ、外面刷毛目	暗褐色		00222
181	59		II-E包上	弥生・甕		10.4		内底ナデ、外面刷毛目	淡褐色		00224
182	59		II-E包上	弥生・壺		(9.2)		ナデ	褐色	摩滅著しい	00223
183	60		II-H包上	須恵・蓋	(19.7)	—	2.5	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色	調整粗い	00258
184	60		II-H包上	須恵・蓋	(14.4)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色	調整粗い	00293
185	60		II-H包上	須恵・蓋	(15.1)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他	青灰色		00292
186	60		II-H包上	須恵・蓋	(15.9)	—		天井ヘラ削り、他横ナデ	暗灰色		00290
187	60		II-H包上	須恵・蓋	(14.1)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色		00291
188	60		II-H包上	須恵・蓋	(13.8)	—	2.7	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰白色	内面鉄分付着	00257
189	60		II-H包上	須恵・蓋	(12.6)	—	2.8	内天井ナデ、他横ナデ	灰色	焼きあまい、摩滅	00284
190	60		II-G包上	須恵・蓋	(14.6)	—		内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色	天井にヘラ記号	00250
191	60	28	II-F包上	須恵・蓋	14.3	—		内天井ナデ、他横ナデ	灰色	外面鉄分付着	00235
192	60		II-G包上	須恵・蓋	(13.0)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色		00248
193	60		II-F包上	須恵・蓋	(15.7)	—	2.0	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰色		00232
194	60		II-H包下	須恵・杯	(13.2)	(9.4)	3.0	内底ナデ、他横ナデ	淡灰色		00283
195	60		II-H包上	須恵・杯	(13.9)	(9.0)	3.5	横ナデ	黒灰色	生焼け	00260
196	60	28	II-H包上	須恵・杯	(12.9)	(9.1)	3.8	内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00209

Tab.6　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅳ

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	色調	その他の特徴	登録番号
197	60	28	II-I 包上	須恵・杯	13.0	8.6	3.8	内底ナデ、他横ナデ	暗灰褐色	生焼け	00302
198	60		II-H包上	須恵・杯				内底ナデ、他横ナデ	暗褐色		00281
199	60		II-H包上	須恵・杯	(11.9)	(8.4)	3.8	外底ヘラ削り、他横ナデ	暗褐色		00274
200	60		II-H包上	須恵・杯	(11.8)	(8.8)	3.7	内底ナデ、他横ナデ	灰　色	焼きややあまい	00265
201	60		II-G包上	須恵・杯	(12.7)	(8.9)	3.6	横ナデ	淡青灰色		00246
202	60		II-H包上	須恵・杯	(13.1)	(8.2)	3.7	横ナデ	灰　色	内面鉄分付着	00275
203	60		II-G包上	須恵・杯	(13.0)	(9.5)	3.9	横ナデ	黒灰色	内面鉄分付着	00236
204	60	28	II-H包上	須恵・杯	13.2	9.6	3.9	内底ナデ、他横ナデ	暗灰色	鉄分付着	00208
205	60		II-H包上	須恵・杯	(13.4)	(10.4)	3.9	内底ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00264
206	60	28	II-H包上	須恵・杯	13.8	10.2	3.7	内底ナデ、他横ナデ	灰　色	底部鉄分付着	00271
207	60		II-H包下	須恵・杯	(14.6)	10.6	3.6	内・外底ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00282
208	61		II-I 包上	須恵・杯	(13.6)	(10.2)	4.2	内底ナデ、他横ナデ	灰　色		00300
209	61		II-H包上	須恵・杯	(13.6)	(10.4)	4.4	内底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	摩滅著しい	00267
210	61		II-F包下	須恵・杯	(13.0)	(9.6)	3.9	内底ナデ、他横ナデ	黒灰色		00228
211	61		II-H包上	須恵・杯	(13.4)	(9.6)	4.5	内・外底ナデ、他横ナデ	暗灰色	内面鉄分付着	00286
212	61	28	II-H包上	須恵・杯	14.6	12.0	4.4	内・外底ナデ、他横ナデ	黄褐色	焼きあまい	00261
213	61		II-H包上	須恵・杯	(15.4)	(12.8)	4.4	内・外底ナデ、他横ナデ	淡黒灰色		00262
214	61		II-H包上	須恵・杯	(16.7)	(13.1)	4.4	内底ナデ、他横ナデ	青灰色		00266
215	61		II-H包上	須恵・杯	(16.2)	(12.3)	3.7	横ナデ	暗灰色	摩滅著しい	00263
216	61		II-H包上	須恵・椀	(14.5)	(10.6)	5.5	内底ナデ、他横ナデ	灰褐色		00269
217	61		II-H包上	須恵・椀	(12.9)	(9.6)	5.7	内外底ナデ、他横ナデ	黒灰色	摩滅著しい	00268
218	61		II-H包上	須恵・皿	(12.7)	(9.8)	2.9	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00278
219	61		II-F包上	須恵・皿	(13.9)	(10.6)	2.1	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	暗灰色		00230
220	61		II-G包下	須恵・皿	(15.0)	(10.8)	2.2	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00237
221	61		II-H包上	須恵・皿	(17.7)	(13.3)	2.3	内・外底ナデ、他横ナデ	暗灰色	底部焼き歪み	00259
222	61	28	II-H包上	須恵・皿	18.2	13.6	2.3	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	灰　色	内面鉄分付着	00207
223	61		II-F包上	須恵・高杯	(19.6)	(14.2)	2.2	内・外底ナデ、他横ナデ	灰　色		00229
224	61		II-H包上	須恵・高杯		(11.2)		横ナデ	淡灰緑色		00285
225	61		II-G包上	須恵・高杯				横ナデ	黒灰色		00256
226	61		II-G包下	須恵・壺	(12.6)			横ナデ	黒灰色		00244
227	61		II-H包下	須恵・壺		13.6		内底ナデ、他ヘラ削り	灰　色		00288
228	62		II-H包上	須恵・鉢	(23.1)			横ナデ	黒灰色		00270
229	62	28	II-G包上	須恵・甑	(23.6)			外面ヘラ削り、他横ナデ	灰　色		00243
230	62		II-H包上	土師・杯	(12.5)	(7.9)	3.7	内・外底ナデ、外面ヘラ磨き	淡黒灰色	摩滅著しい	00279
231	62	28	II-H包上	土師・椀	(16.8)	8.6	6.4	内底ナデ、外底ヘラミガキ、他横ナデ	淡茶褐色		00294
232	62		II-G包上	土師・椀		(7.6)		ヘラ磨き	淡褐色		00255
233	62		II-G包上	土師・杯	(13.4)	(6.2)	3.8	ヘラ磨き	淡灰褐色	内黒土器	00245
234	62		II-H包上	土師・高杯	(16.7)			横ナデ	黄褐色		00206
235	62		II-E包上	土師・甕	(28.6)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目後ヘラ磨き	淡褐色		00211
236	62		II-H包上	土師・甕	(24.0)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡赤褐色	摩滅著しい	00295
237	63		II-H包上	土師・甕	(24.2)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡褐色		00205
238	63		II-G包上	土師・甕	(27.0)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	淡褐色		00253
239	63	29	II-H包上	青磁・椀				施釉	薄緑色	越州窯系	00308
240	63	29	II-I 包上	青磁・椀		(8.4)		露胎(ヘラ削り)	灰　色	越州窯系	00307
241	63	29	II-H包上	白磁・椀		(6.0)		底部露胎、他施釉	乳白色		00309
242	63	29	II-H包上	白磁・皿				施釉	白灰色	口禿	00305
243	63	29	II-I 包上	緑釉・蓋?				施釉	淡緑色		00306
244	63	28	II-G包上	フイゴ羽口	残長10.9cm、孔径3.2cm			ナデ	赤褐色	2次焼成痕	00254
245	63		II-H包上	フイゴ羽口	残長9.6cm、孔径3.2cm			ナデ	赤褐色	2次焼成痕	00298

Tab.7　金武城田遺跡掲載遺物一覧表V

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調整	色調	その他の特徴	登録番号
246	63		II-H包上	フイゴ羽口	残長6.7cm、孔径2.4cm			ナデ	赤褐色	2次焼成痕	00297
247	63	28	II-J包上	砥石	残長6.7cm、幅3.8cm、重量62.6g、砂岩製？						00401
248	63	29	II.表土	磨製石斧	残長5.4cm、刃幅6.5cm、蛇紋岩製					刃部片	00407
249	63	29	II-H包上	土錘	残長2.5cm、径1.1cm、重量1.8g			ナデ	淡赤褐色		00405
250	63	29	II-G包下	土錘	残長3.4cm、径2.2cm、重量13.8g			ナデ	淡赤褐色		00310
251	64		III.包下	須恵・杯蓋	(12.3)	6.8	3.0	内底ナデ、体部横ナデ、外底ヘラケズリ	灰黒色	底部にヘラ記号	00328
252	64		III.包下	須恵・蓋	(15.8)	—		外天井部ヘラ磨き、体部横ナデ、内天井部ナデ	緑灰色	焼きややあまい	00326
253	64		III.包下	須恵・蓋	(15.4)	—		外天井部ヘラ磨き、体部横ナデ、内天井部ナデ	緑灰色	焼き歪み	00325
254	64		III.包下	須恵・椀	(15.5)	(11.0)		内底ナデ、体部・外底横ナデ	灰黒色		00346
255	64		III.包下	須恵・杯		9.6		内・外底ナデ、体部横ナデ	灰　色		00331
256	64		III.包下	須恵・杯		9.8		内・外底ナデ、体部横ナデ	灰黒色		00332
257	64		III.包下	須恵・杯		6.9		内底ナデ、体部・外底横ナデ	灰黒色		00329
258	64		III.包下	須恵・椀		(9.0)		内底ナデ、他横ナデ	灰　色		00333
259	64	29	III.包下	須恵・平瓶		(12.4)		肩部カキメ、底部ヘラ削り、ナデ、他横ナデ	黒褐色		00347
260	64		III.包下	須恵・甕	(19.6)			口縁横ナデ、他タタキ	黒灰色		00342
261	64	29	III.包下	須恵・甕	(20.5)			口縁横ナデ、他タタキ	黒褐色	内面鉄分付着	00344
262	64		III.包下	須恵・壺	(12.3)			外面下部カキメ、他横ナデ、ナデ	淡緑灰色	頸部にヘラ記号	00343
263	64	29	III.包下	土師・杯	12.8	8.6	4.0	体部横ナデ	淡赤褐色	摩滅著しい	00350
264	64		III.包下	土師・杯	(17.0)			内面ヘラ磨き、外面ヘラ磨き後ナデ消し	黒褐色	赤色顔料塗布	00322
265	64		III.包下	土師・椀		9.4		横ナデ	淡茶褐色	摩滅著しい	00352
266	64		III.包下	土師・高杯				内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き	赤褐色	赤色顔料塗布	00361
267	64		III.包下	土師・高杯				横ナデ	淡褐色	外面摩滅	00360
268	65		III.包下	土師・甕	(23.3)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り	褐　色	摩滅著しい	00348
269	65		III.包下	土師・甕	(23.7)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ナデ	褐　色		00323
270	65		III.包下	土師・甕	(28.4)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ナデ	淡褐色		00357
271	65		III.包下	土師・甕	(17.5)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面ヘラナデ	茶褐色		00324
272	65		III.包下	土師・甑				指押え	褐　色	把手のみ	00349
273	65		III.包上	須恵・杯蓋	(11.2)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	暗灰色	内面鉄分付着	00341
274	65		III.包上	須恵・杯身	(9.9)	(12.0)※	3.3	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	淡緑褐色		00327
275	65		III.包上	須恵・杯	(14.6)			横ナデ	暗青灰色		00337
276	65		III.包上	須恵・椀		9.4		内底ナデ、他横ナデ	淡緑灰色	焼きあまい	00338
277	65		III.包上	須恵・椀		(9.0)		内底ナデ、他横ナデ	淡青灰色	内面鉄分付着	00339
278	65		III.包上	須恵・杯		10.5		内・外底ナデ、他横ナデ	黒灰色	底部鉄分付着	00340
279	65		III.包上	土師・杯	(12.9)	(7.9)	3.3	内底ナデ、他横ナデ	淡赤褐色	摩滅著しい	00335
280	65		III.包上	土師・杯	(12.4)	(6.8)	3.8	横ナデ	淡赤褐色		00334
281	65	29	III-J包下	砥石	残長11.8cm、幅4.9cm、厚3.7cm、重量390g、砂岩製						00402
282	65	29	III-J包下	砥石	残長6.8cm、幅5.0cm、厚2.1cm、砂岩製						00400
283	65	29	III-J包下	紡錘車	径3.4cm、厚1.3cm、重量26.8g、滑石製					完形	00408
284	69		IV.SB16	須恵・甕				口縁横ナデ、他タタキ	淡茶褐色		00296
285	69		IV.SC 03	須恵・甕	(15.5)			横ナデ	淡褐色	赤焼け	00316
286	69		IV.SC 03	土師・甕	(17.9)			口縁横ナデ、内面ヘラ削り	淡赤褐色		00317
287	69	30	IV.SC 04	須恵・杯蓋	(13.7)	—	3.7	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡灰褐色		00362
288	69	30	IV.SC 04	須恵・杯蓋	14.1	—	4.7	天井ヘラ削り、他横ナデ	淡灰褐色	焼きあまい	00369
289	69	30	IV.SC 04	須恵・杯身	(12.7)		4.4	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	褐　色	赤焼け	00368
290	69	30	IV.SC 04	須恵・杯身	(12.9)			外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色		00363
291	69	30	IV.SC 04	須恵・短頸壺	9.0		8.6	外底ヘラ削り、内底ナデ、他横ナデ	淡青灰色	焼きあまい	00370
292	69		IV.SC 04	須恵・壺				体部下半ヘラ削り、他ナデ	黒灰色	自然釉かかる	00371
293	70	30	IV.SC 04	須恵・甕				タタキ	茶褐色		00364
294	70		IV.SC 04	須恵・甕	(31.8)			口縁横ナデ、体部タタキ	褐　色	赤焼け	00365

Tab.8　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅵ

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	色調	その他の特徴	登録番号
295	70	30	Ⅳ.SC04	土師,甑(鉢)	26.5			内底ナデ、他刷毛目	淡茶褐色		00372
296	70		Ⅳ.SC04	土師・甕				内面ヘラ削り、外面指押え	茶褐色	把手のみ	00367
297	71	30	Ⅳ.SC04	土師・甕	16.5		31.5	口縁横ナデ、内面ヘラ削り、外面刷毛目	茶褐色	黒斑、煤付着	00366
298	72		Ⅳ.包	須恵・杯蓋	(13.0)	—	3.7	天井ヘラ削り、他横ナデ	淡黒灰色		00397
299	72		Ⅳ.包	須恵・杯蓋	(13.0)	—	3.5	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	青灰色		00386
300	72		Ⅳ.包	須恵・蓋		—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	灰褐色		00395
301	72		Ⅳ.包	須恵・蓋	(12.2)	—		天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡青灰色		00383
302	72		Ⅳ.包	須恵・杯	(10.7)	6.4	3.4	天井ヘラ削り、内天井ナデ、他横ナデ	淡黒灰色	底部にヘラ記号	00381
303	72		Ⅳ.包	須恵・杯身	(11.4)			横ナデ	淡青灰色	焼きあまい	00388
304	72		Ⅳ.包	須恵・杯身	(13.2)		3.4	外底ヘラ削り、他横ナデ	灰褐色	生焼け	00398
305	72		Ⅳ.包	須恵・杯	(11.7)	(8.6)	3.8	内底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	焼きあまい	00382
306	72	30	Ⅳ.包	須恵・杯	(12.6)	9.2	4.9	内底ナデ、他横ナデ	灰褐色	焼きあまい	00378
307	72	30	Ⅳ.包	須恵・杯	13.2	10.8	4.1	内底ナデ、他横ナデ	淡灰褐色	焼きややあまい	00379
308	72		Ⅳ.包	須恵・高杯	11.4			口縁横ナデ、外面ヘラ削り、内面ナデ	赤褐色		00380
309	72	30	Ⅳ.包	須恵・高杯		11.1		横ナデ	暗赤褐色	赤焼け	00396
310	72		Ⅳ.包	須恵・高杯		(7.4)		内底ナデ、他横ナデ	青灰色		00385
311	72		Ⅳ.包	須恵・短頸壺	(6.4)			横ナデ	青灰色		00384
312	72		Ⅳ.包	土師・甑				ナデ	淡褐色	把手のみ	00392
313	72		Ⅳ.包	土師・甑				内面ヘラ削り、外面ナデ	褐色	把手のみ、はめ込み式	00393
314	72		Ⅳ.包	土師・甑				内面ヘラ削り、外面ナデ	褐色	把手のみ	00394

Tab.9　金武城田遺跡掲載遺物一覧表Ⅶ

表凡例

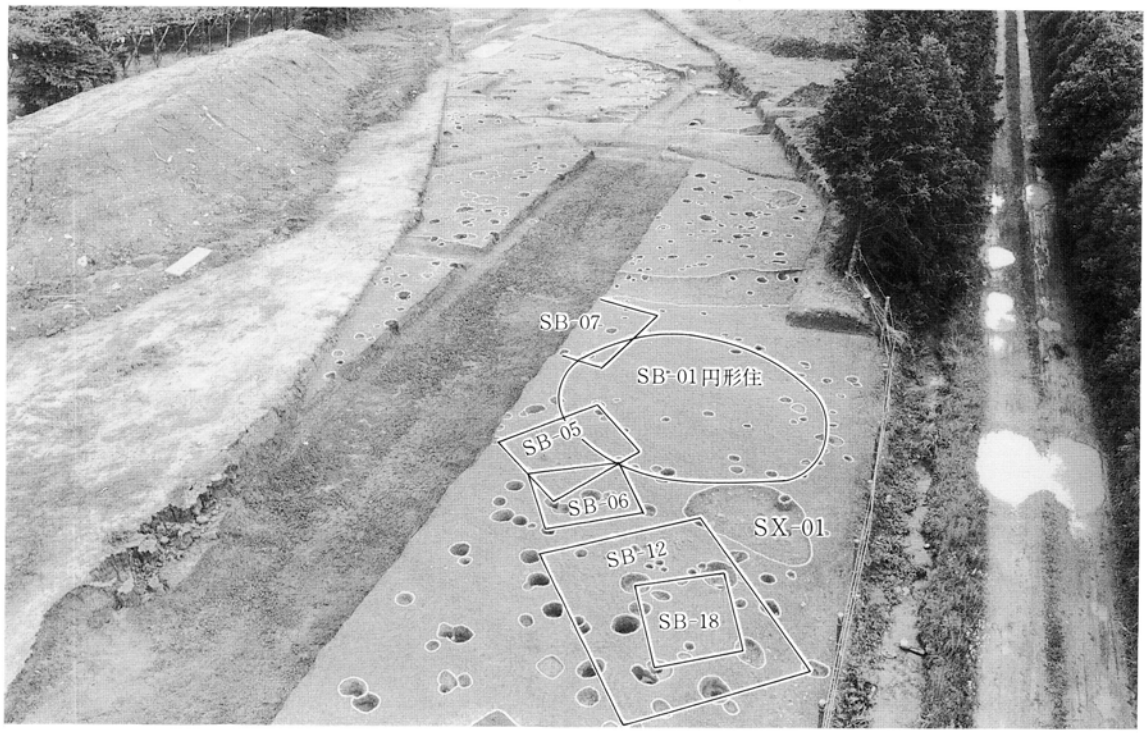
出土遺構……Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは区、Ⅱ-E、Ⅱ-Hなどは小区を表わす。また包含層→包、上層→上、下層→下と略した。

口径・底(脚)径・器高……数値の単位はすべてcm(センチメートル)。この規格に合わないものは別表記をしている。(　　)内は復元数値。底(脚)径の項に※があるものは杯身の受部径。

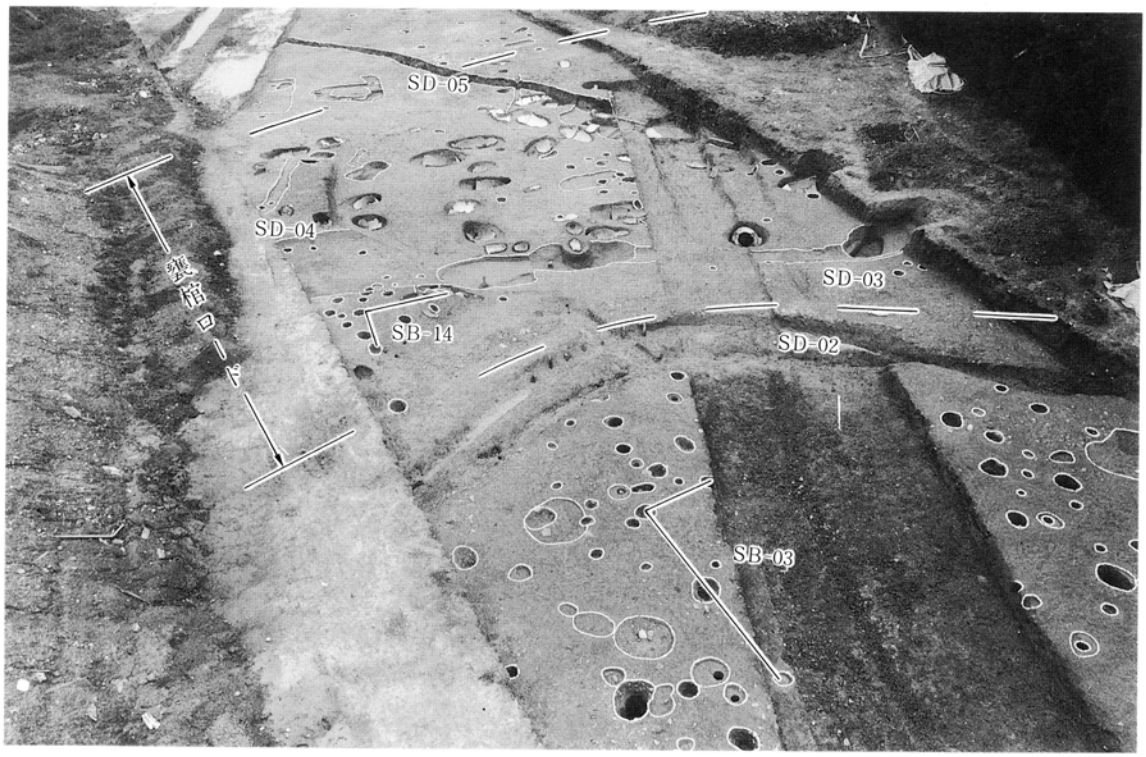
色調……主だった色調を記載。内外面別色の場合は外面色を表記。

登録番号……表記の数値の頭に8322(遺跡調査番号)を付けたものが正式な遺物登録番号となる。例えば00001は832200001が正式番号である。

PLATES

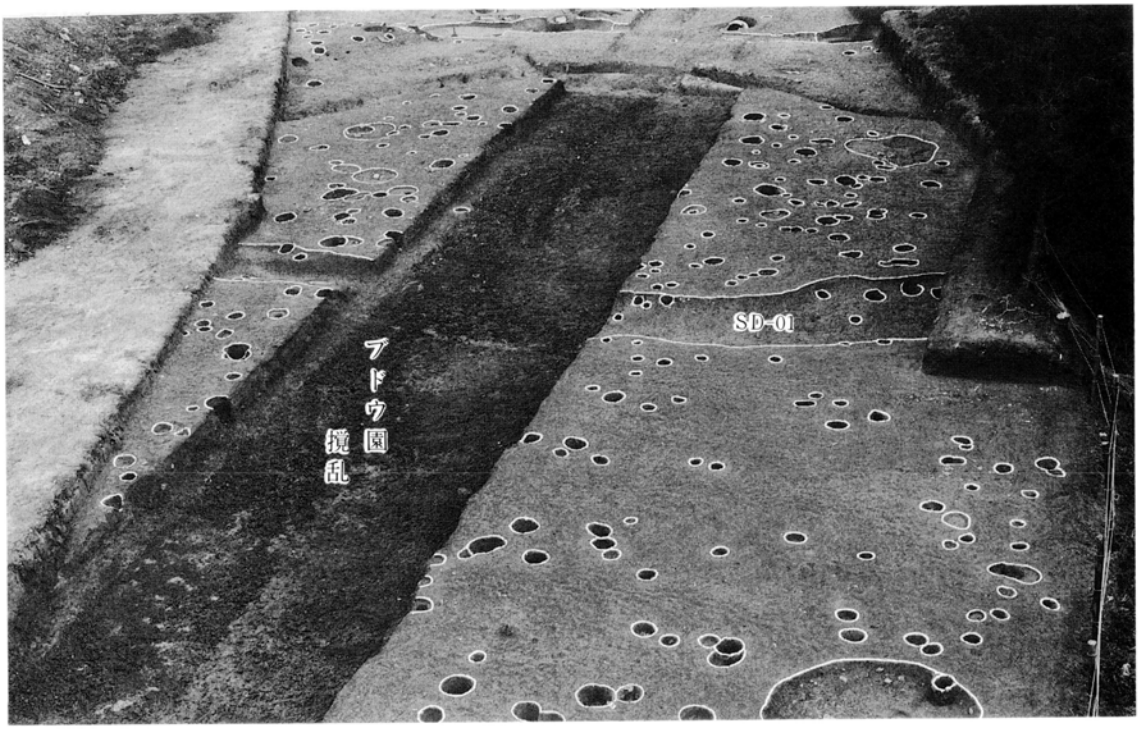


a　都地遺跡調査区全景（南から撮影）

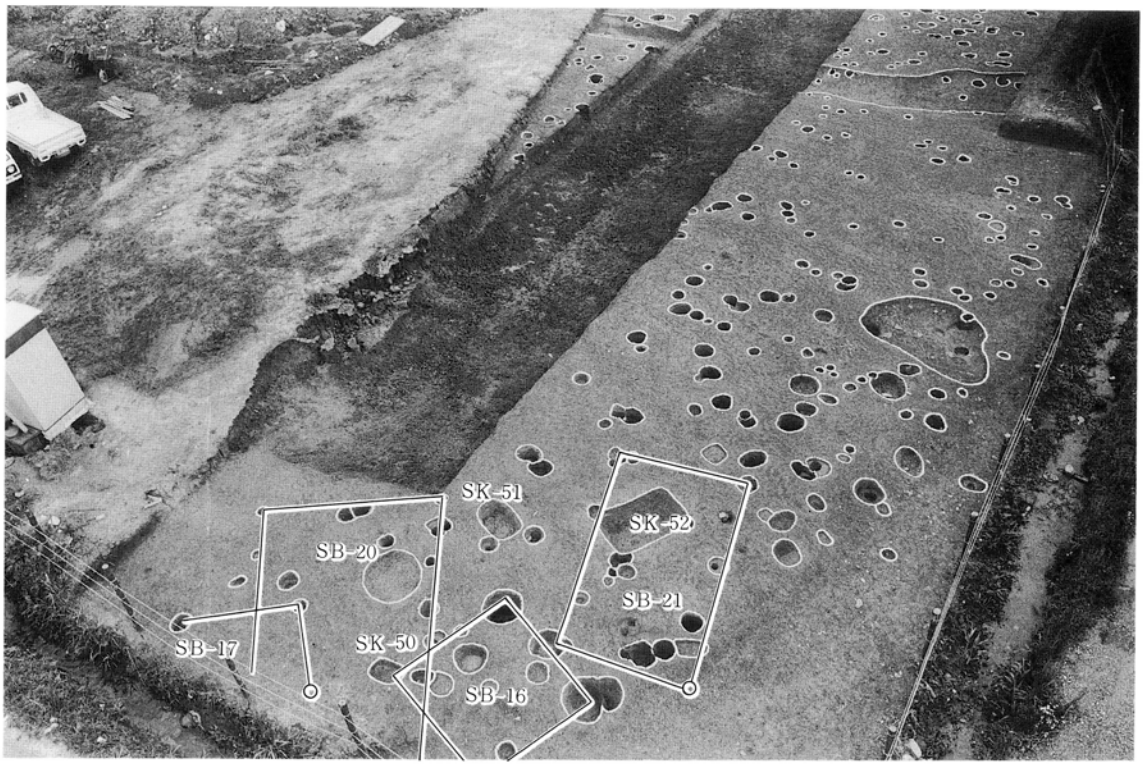


b　調査区近景（南から撮影）

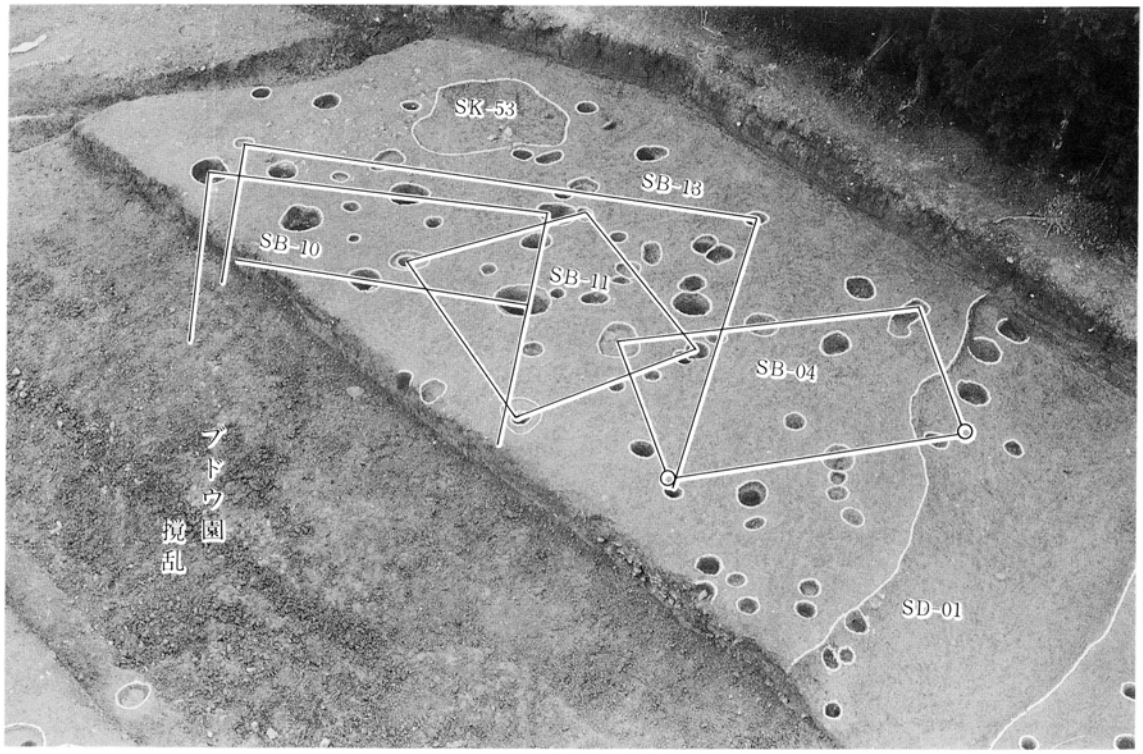
a　溝・甕棺墓・掘立柱建物全景（南から撮影）



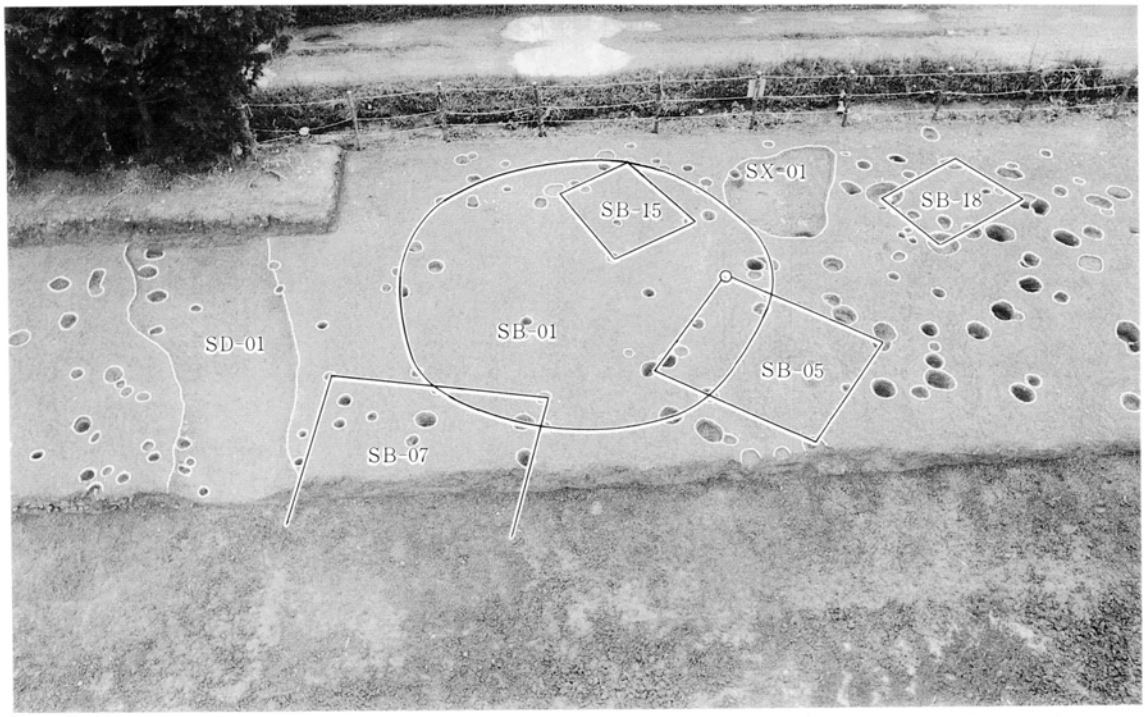
b　溝・掘立柱建物近景（南から撮影）



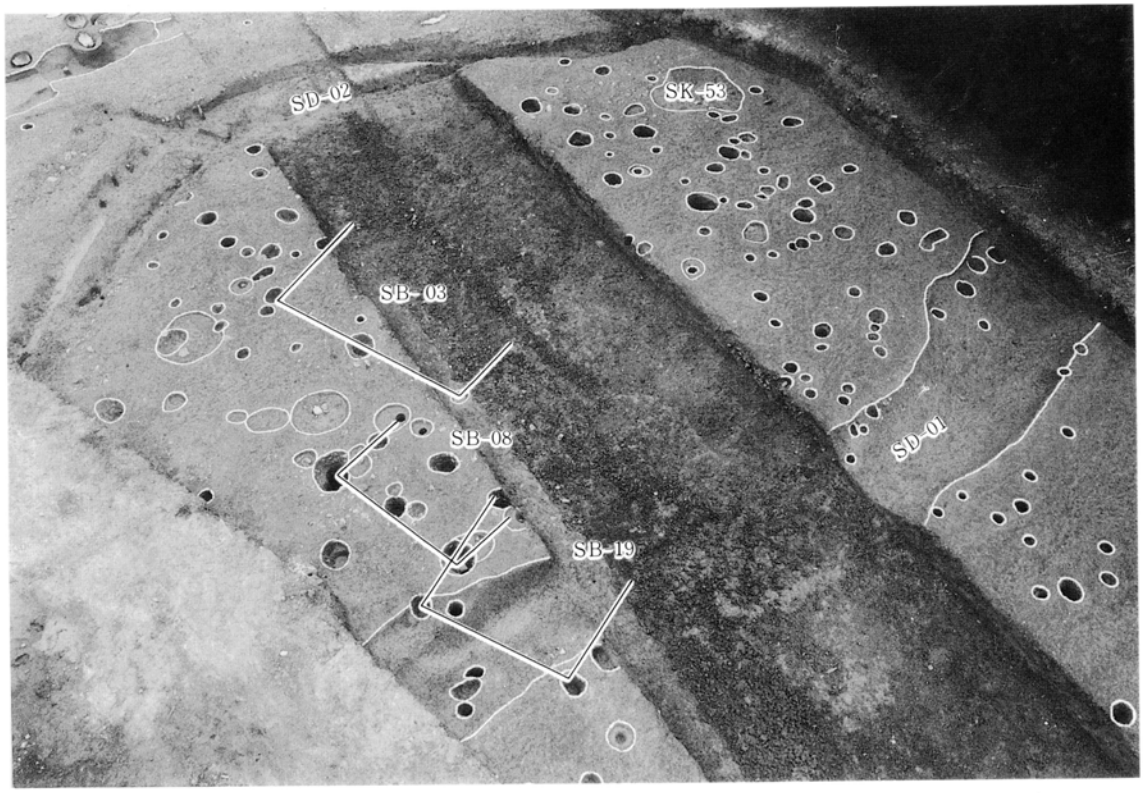
a　掘立柱建物・土坑墓全景（南から撮影）



b　土坑・溝・建物検出状態（南から撮影）

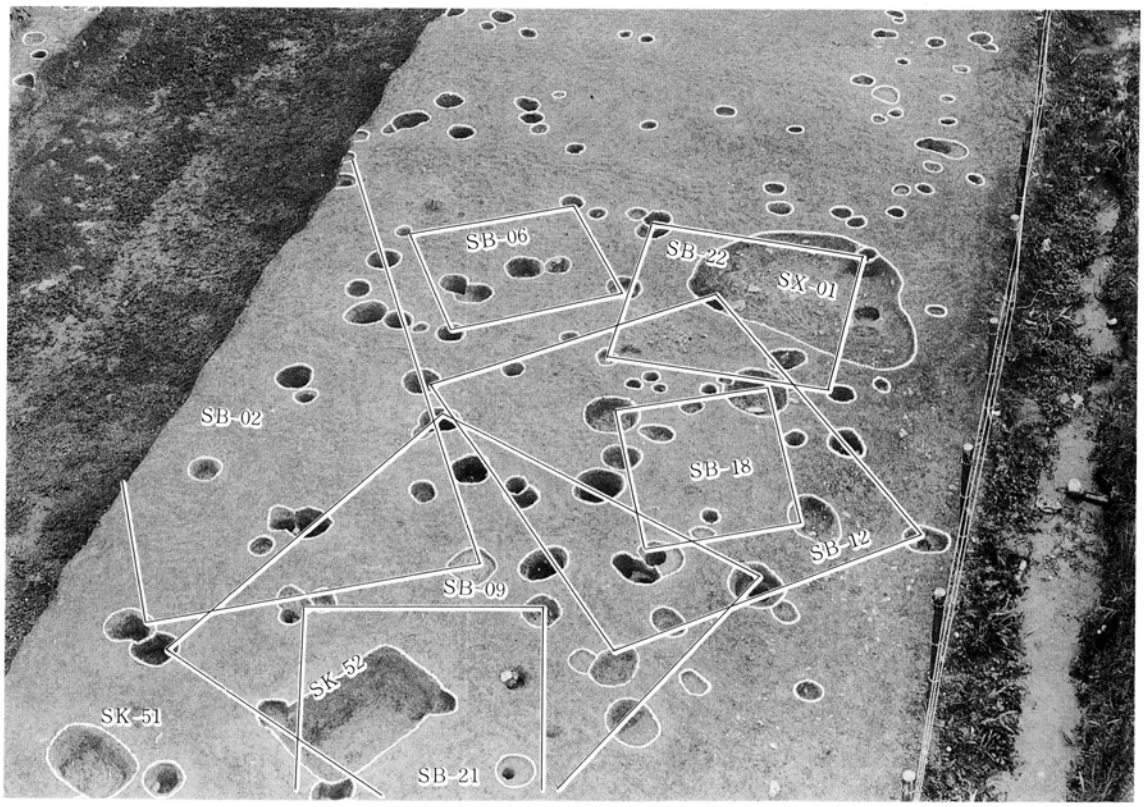


a　土坑・溝・掘立柱建物近景（西から撮影）

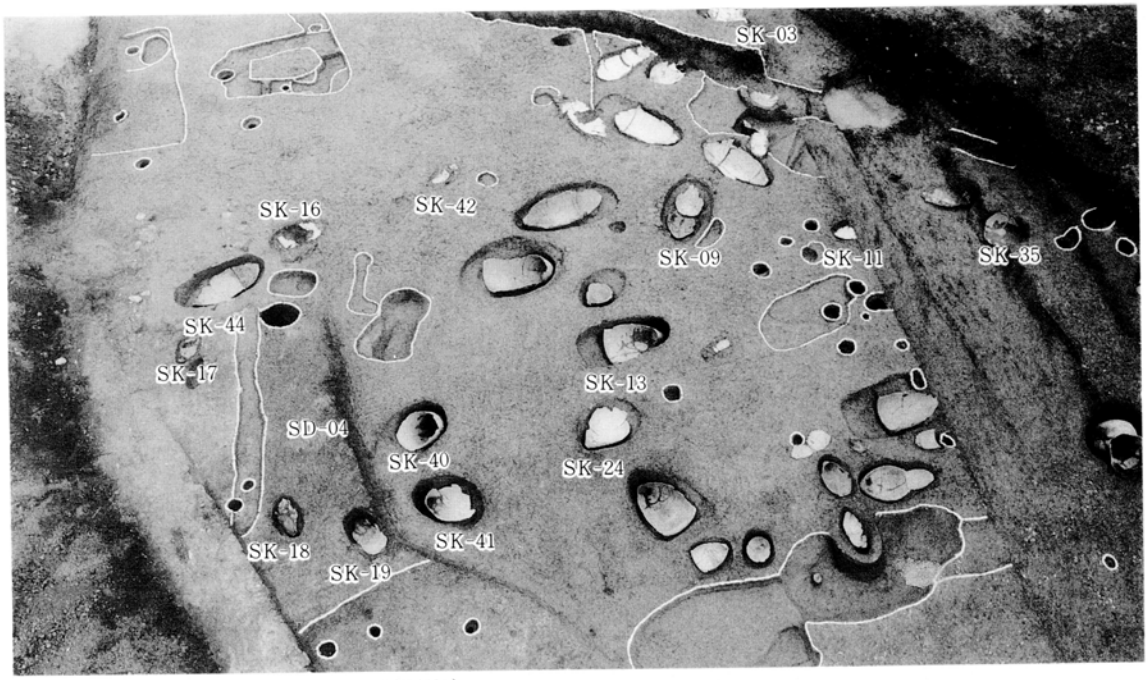


b　掘立柱建物全景（南から撮影）

a　土坑墓・掘立柱建物全景（北から撮影）

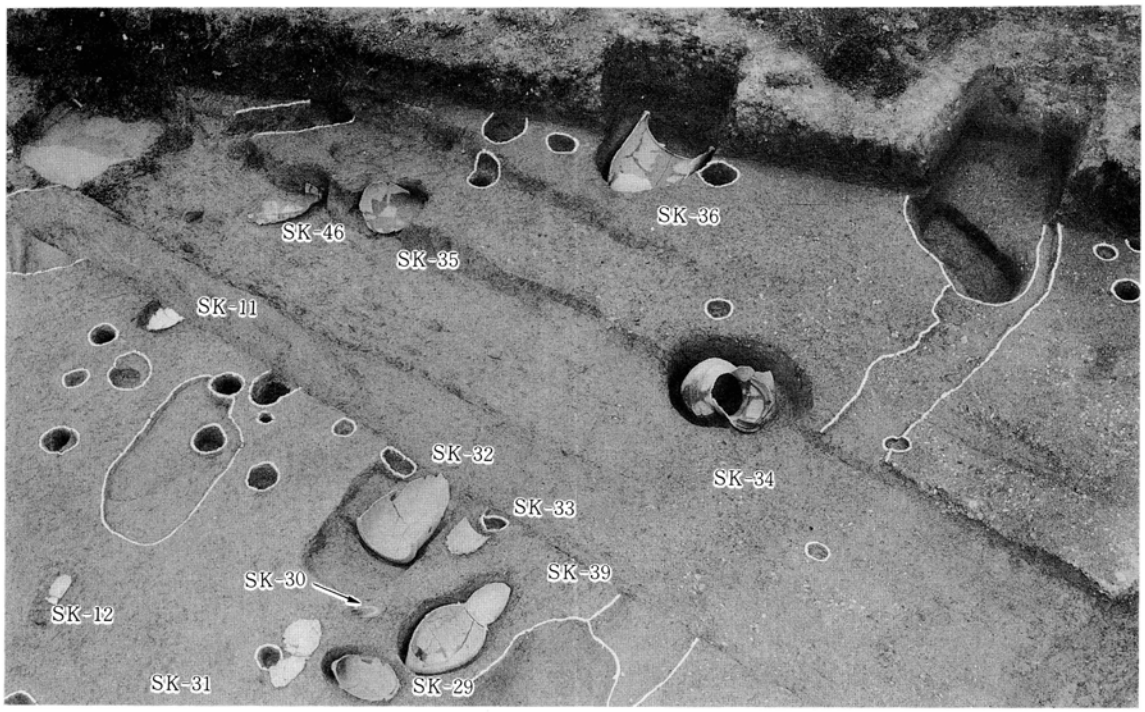


b　掘立柱建物全景（南から撮影）

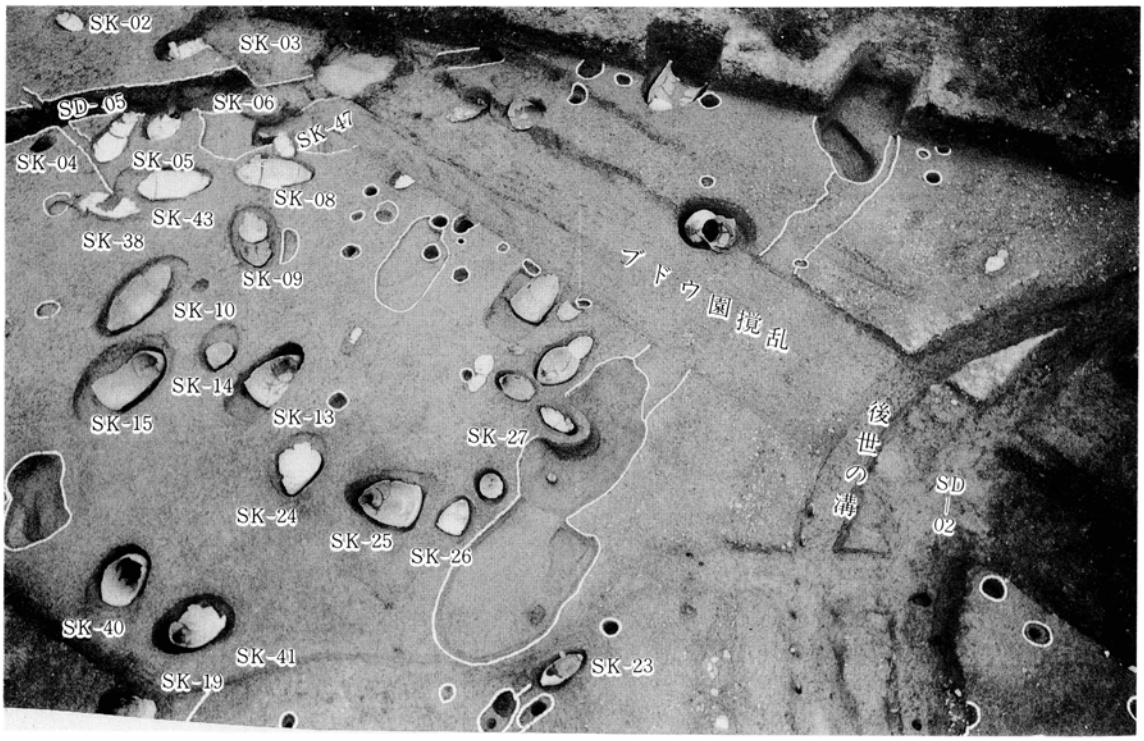


a　甕棺墓検出状態（南から撮影）

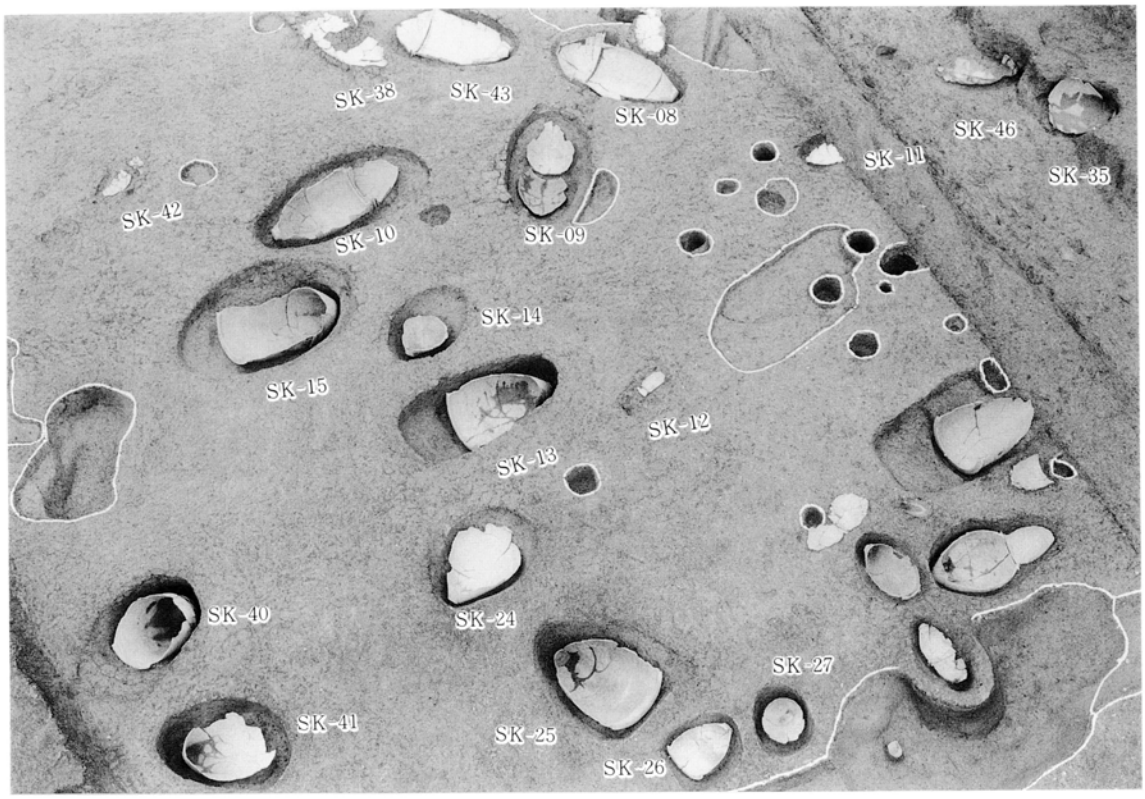
b　甕棺墓検出状態全景（南から撮影）



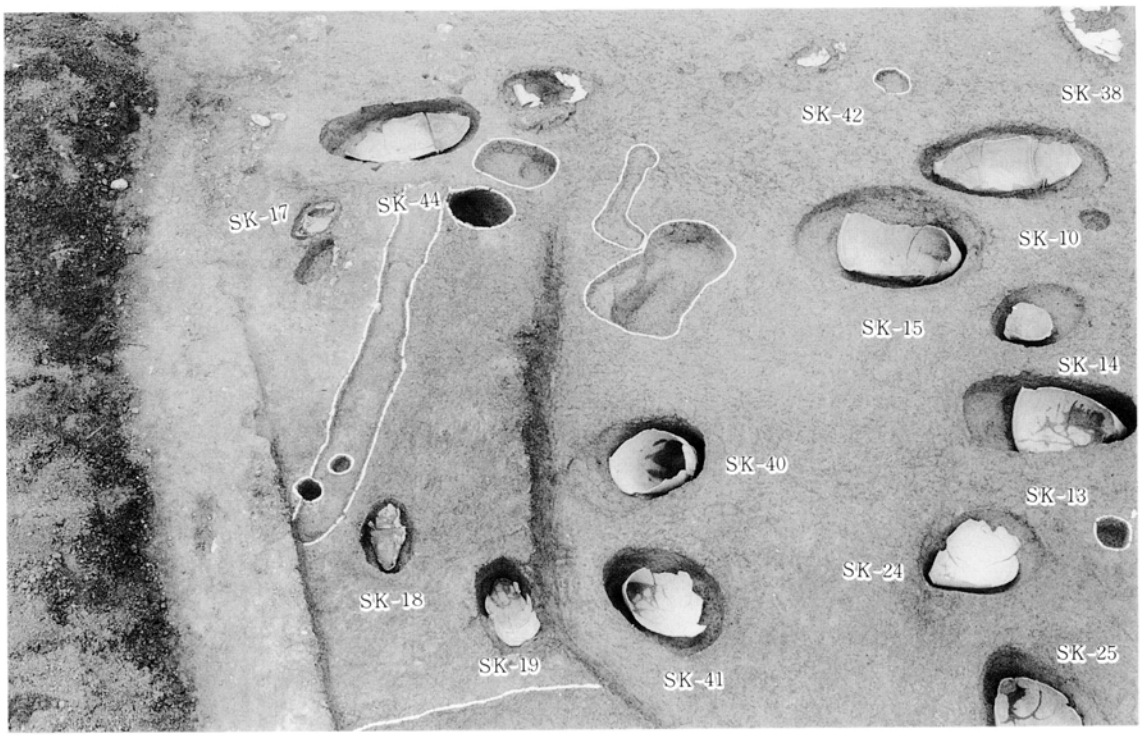
a　甕棺墓検出状態近景（西から撮影）



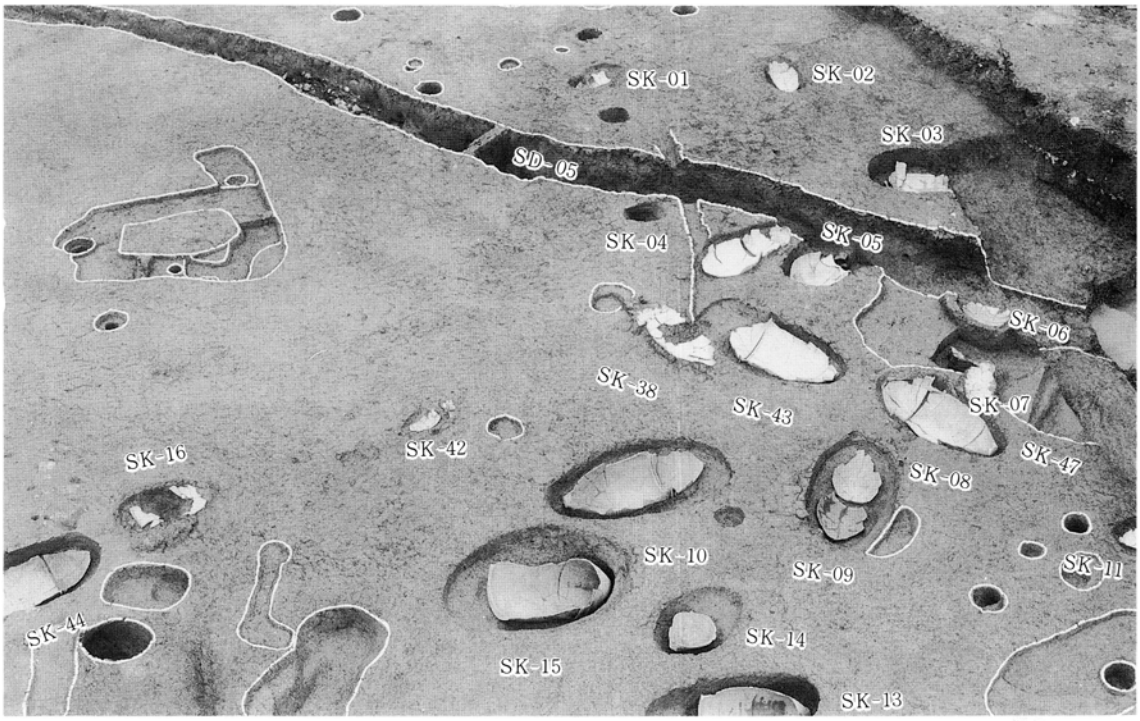
b　甕棺墓検出状態近景（南から撮影）



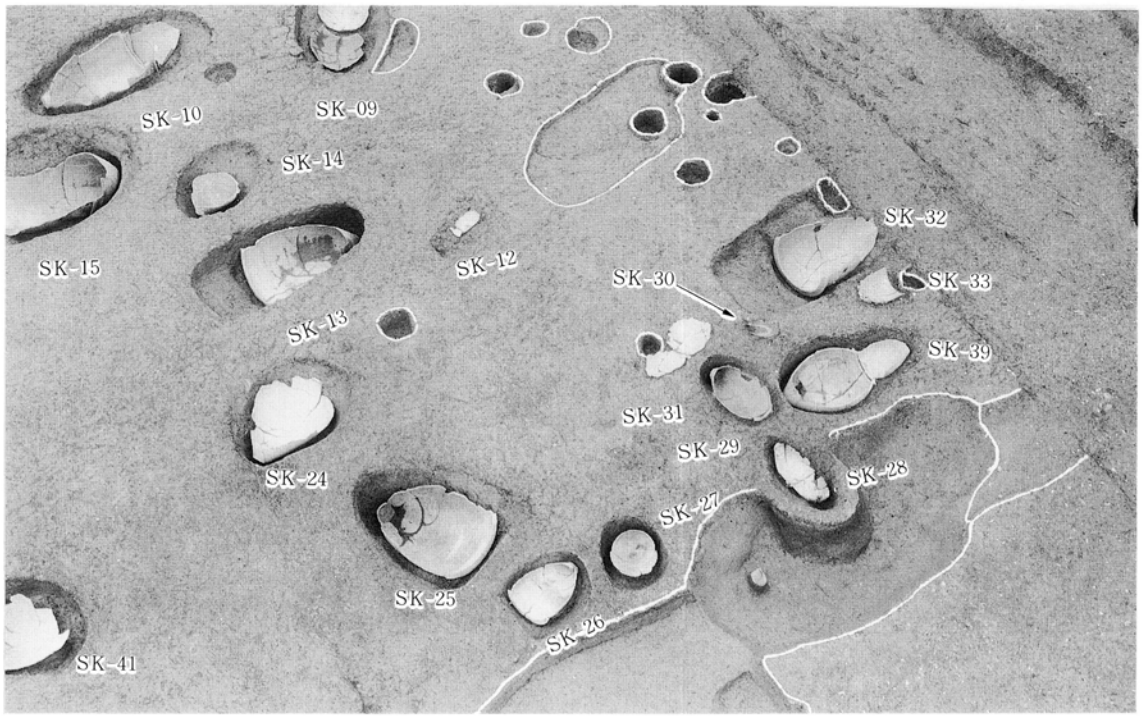
a　甕棺墓検出状態部分写真（南から撮影）



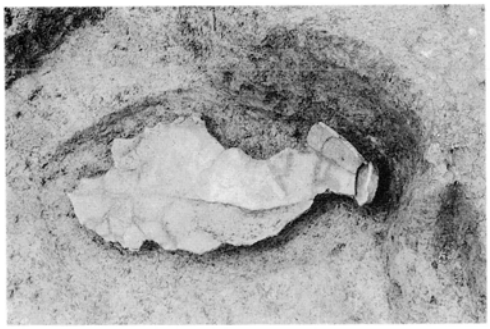
b　甕棺墓検出状態部分写真（南から撮影）



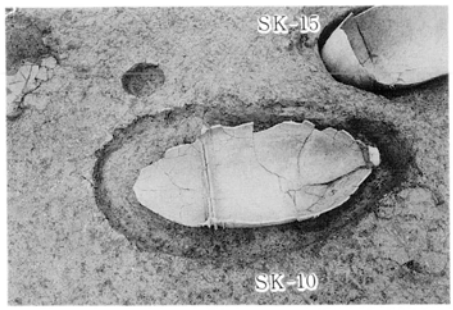
a　甕棺墓検出状態部分写真（南から撮影）



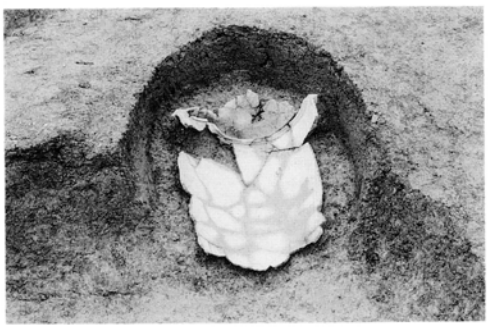
b　甕棺墓検出状態部分写真（西から撮影）



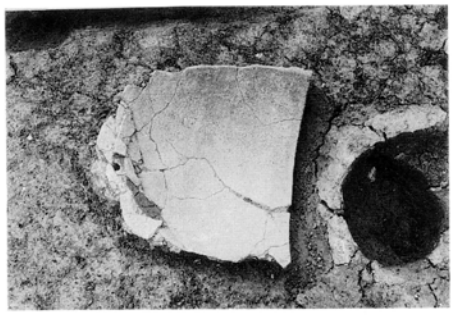
SK-46



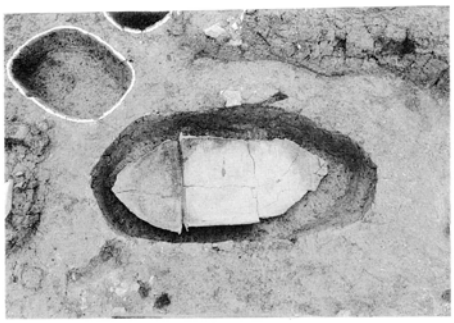
SK-10



SK-03

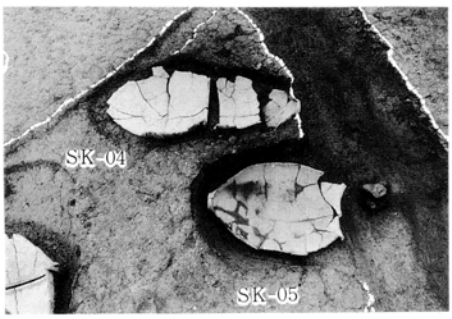


SK-33

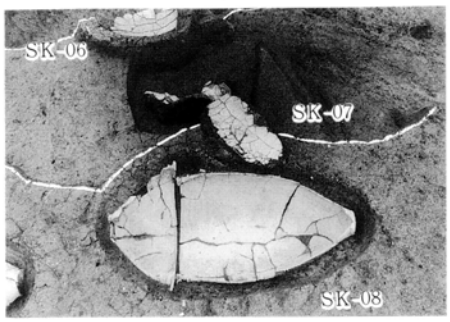


SK-44

SK-19

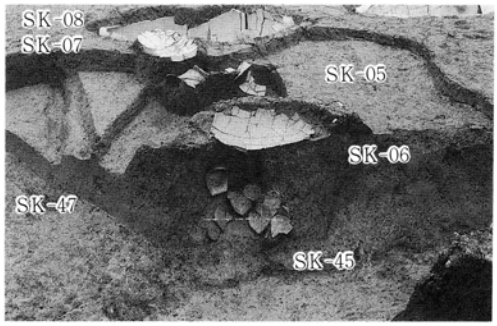


SK-05

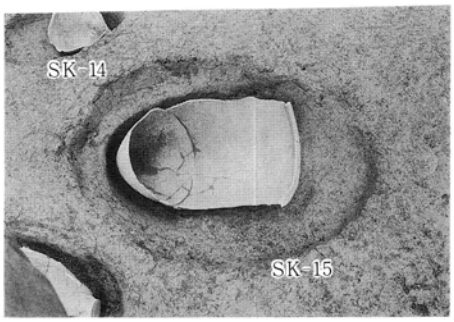


SK-08

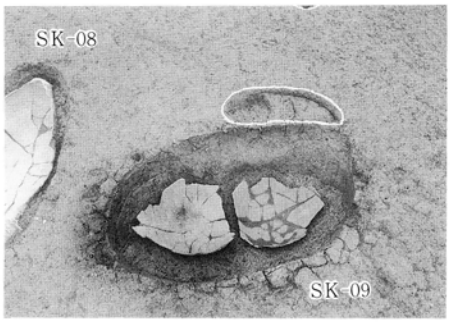
各甕棺墓検出状態－1



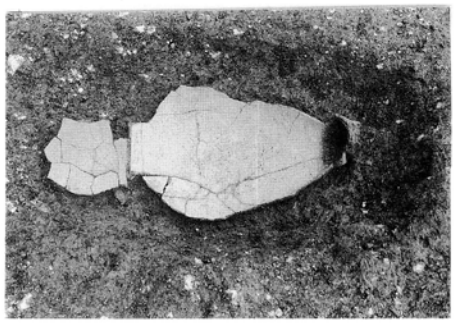
SK-06



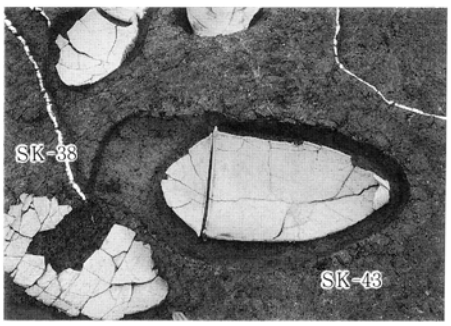
SK-15



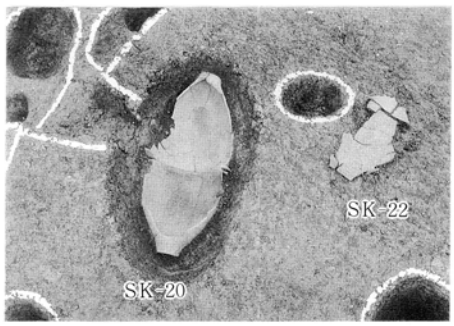
SK-09



SK-37

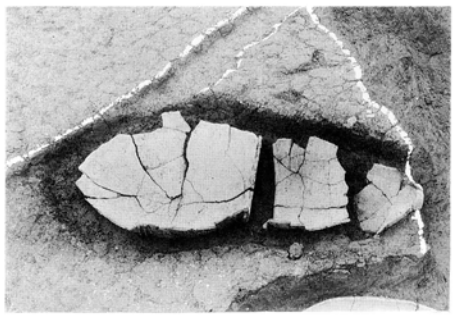


SK-43



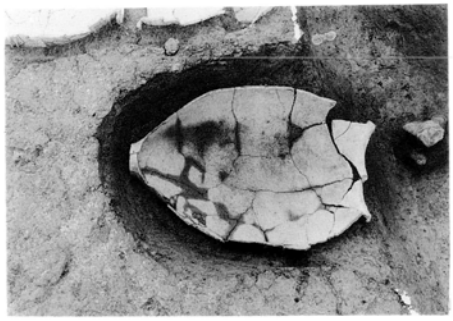
SK-20、22

SK-01

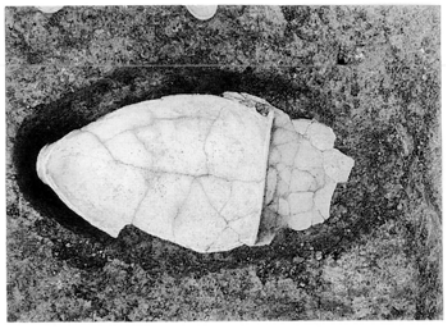


SK-04

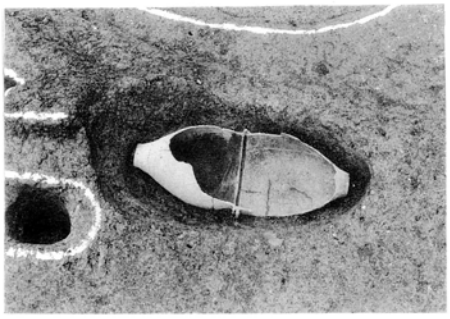
各甕棺墓検出状態－2



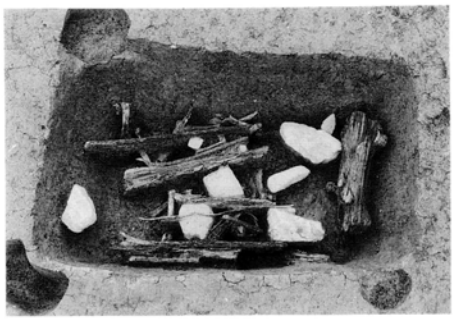
SK-05



SK-02

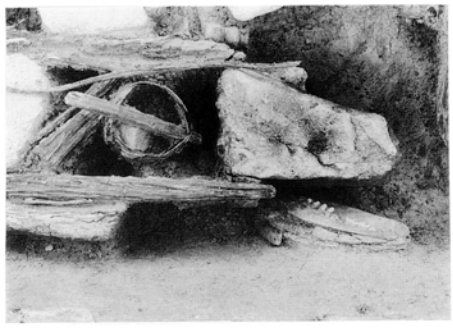


SK-20

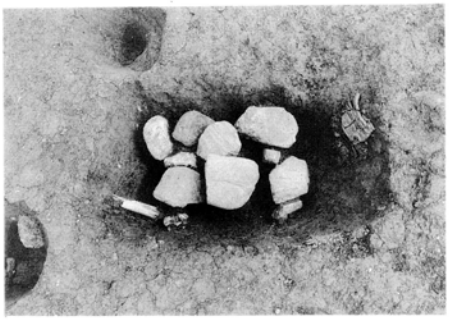


SK-52　近景

SK-52　全景



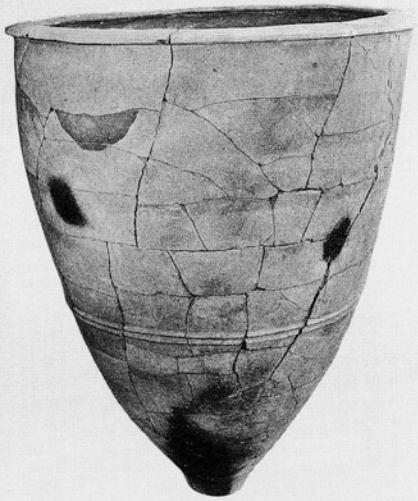
SK-52　遺物出土状態



SK-51

SK-50

甕棺墓・土坑墓検出状態



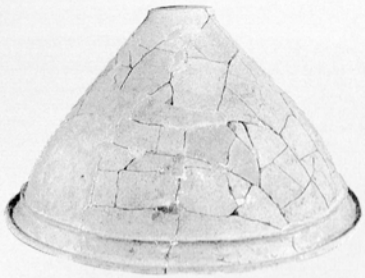
SK-25
00061

SK-32
00070

SK-15
00044

SK-36
00075

遺物写真－１（縮尺1/15）



SK-05

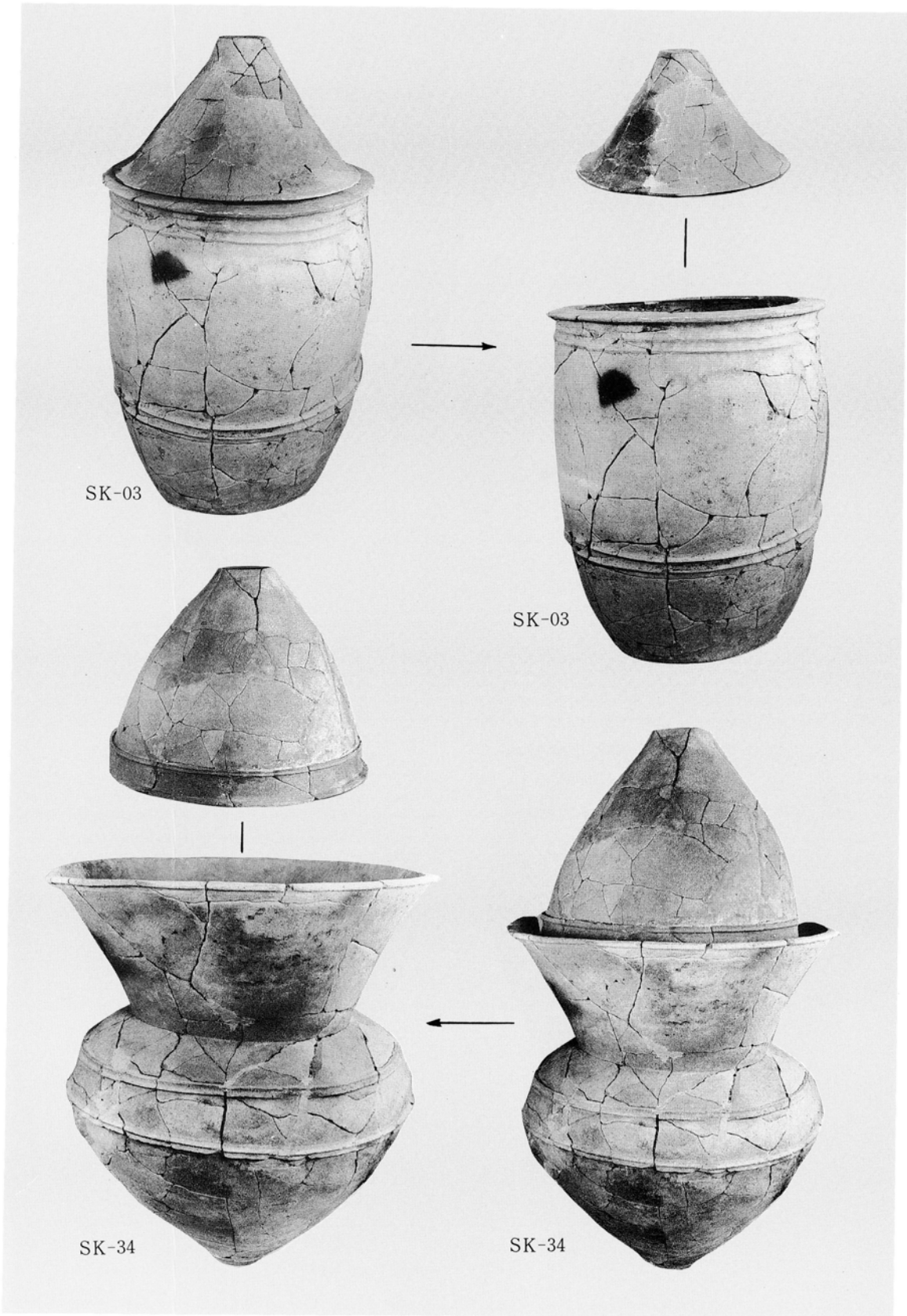
SK-10

SK-18

SK-46

SK-41

遺物写真－２（縮尺1/15）



遺物写真－３（縮尺1/15）

SK-09
00034

SK-29
00066

SK-02
00023

SK-19
00052

遺物写真－4（縮尺1/7.5、00034は1/15）

SK-14
00043

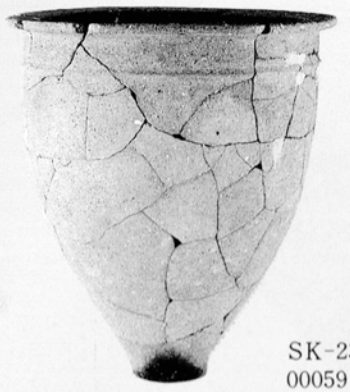
SK-26
00062

SK-19
00051

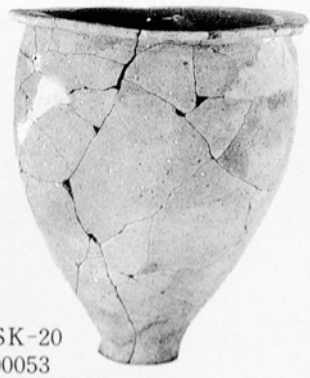
SK-42
00085

SK-39
00080

遺物写真－５（縮尺1/7.5）



SK-23
00059

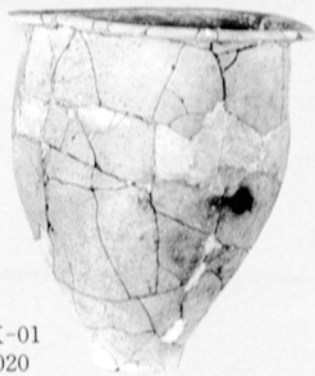


SK-20
00053

SK-28
00064

SK-28
00065

SK-20
00054

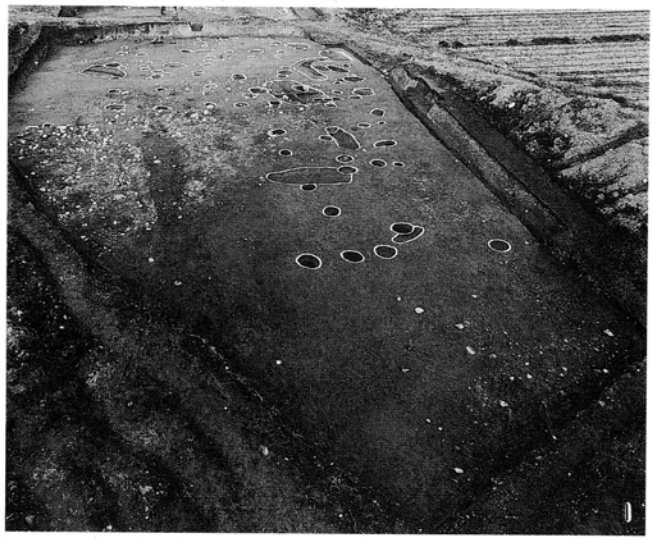


SK-01
00020

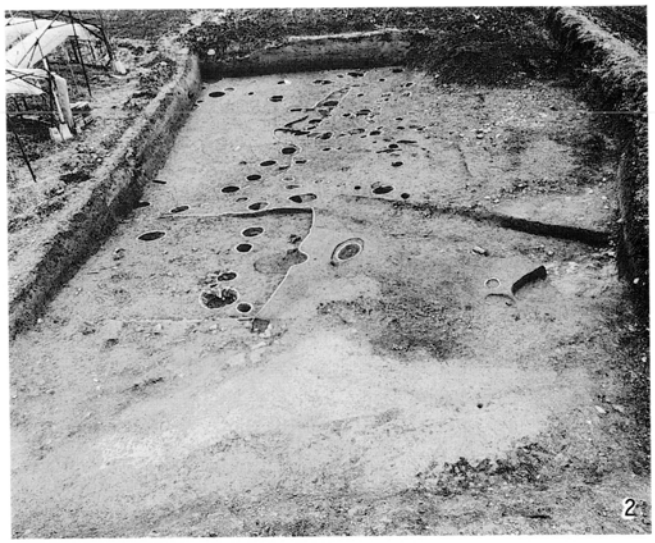
SX-01
00017

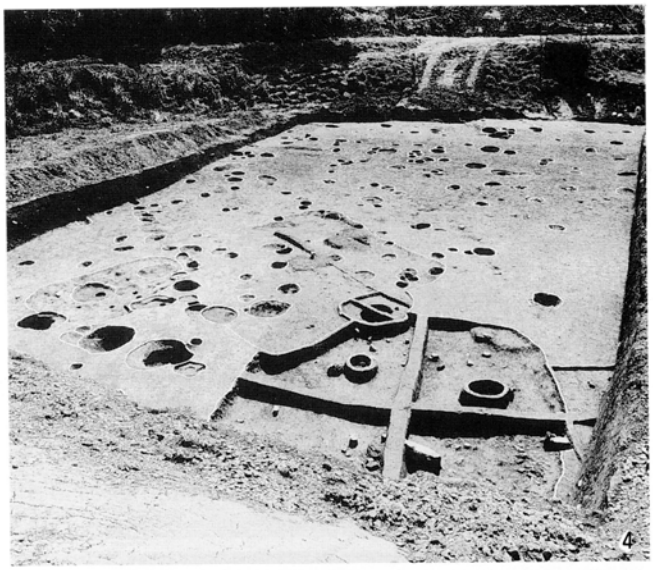
SD-04
00007

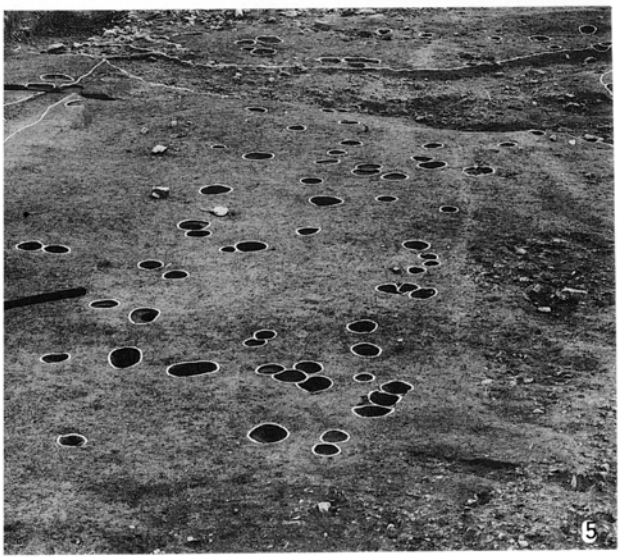
遺物写真－６（縮尺00007は1/6、00017は1/12、他は1/7.5）

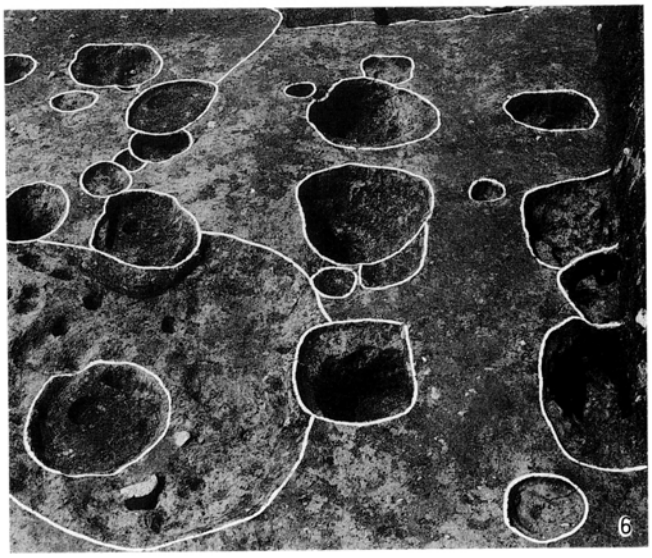


1　Ⅰ区全景（南から）　2　Ⅰ区全景（北から）　3　Ⅱ区上層全景（南から）
4　Ⅱ区上層全景（南から）　5　Ⅱ区下層全景（南から）　6　Ⅱ区下層全景（北から）

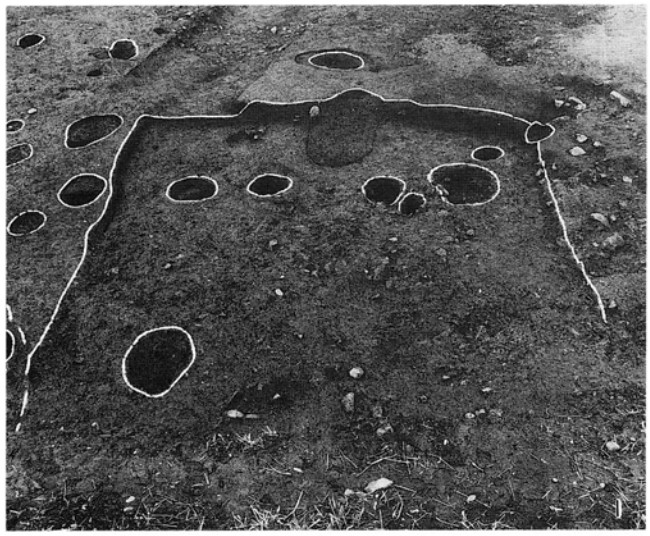


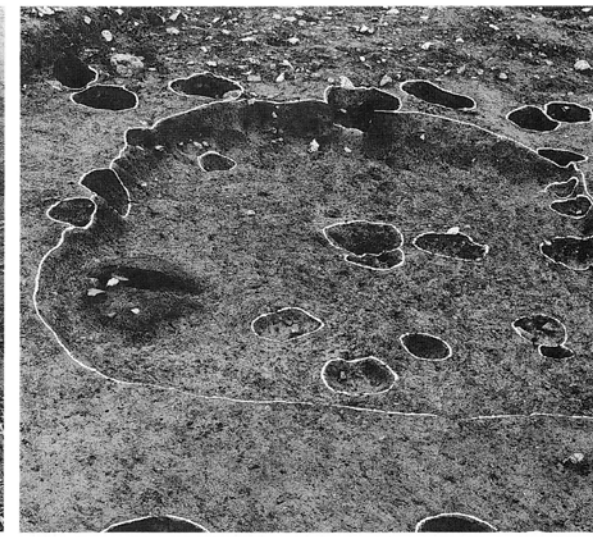


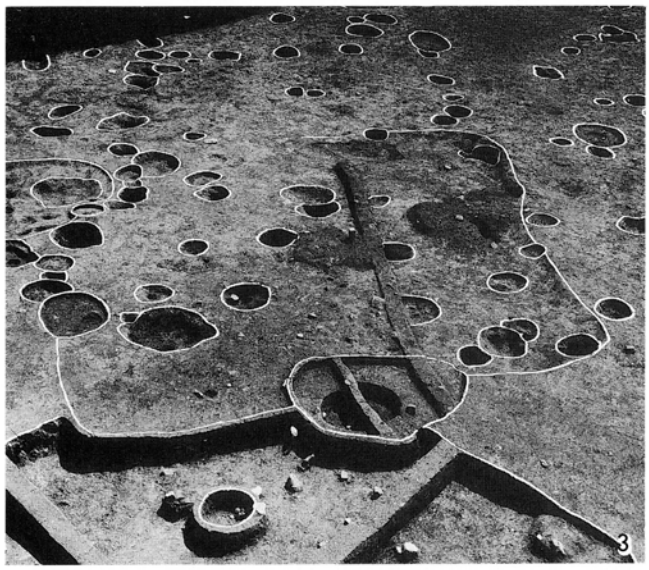


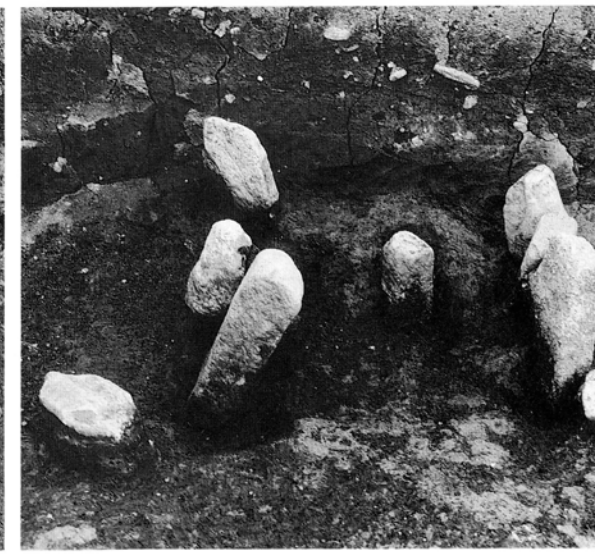


1　Ⅲ区南半全景（南から）　2　Ⅲ区北半全景（北から）　3　Ⅳ区全景（南から）
4　Ⅳ区全景（北から）　5　ＳＢ05・06　6　ＳＢ16

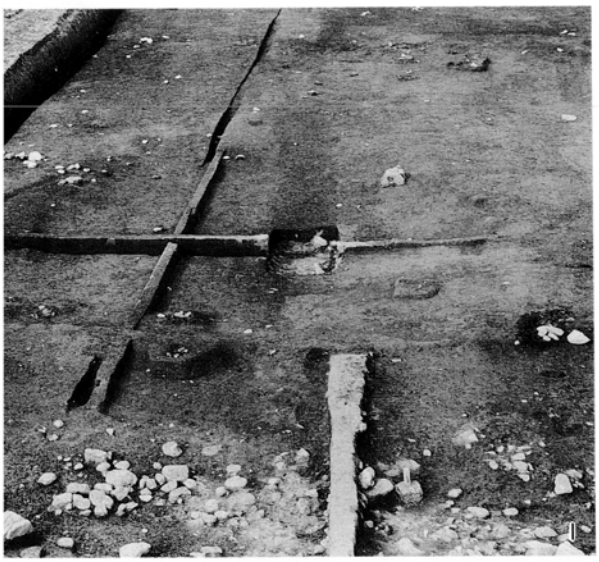




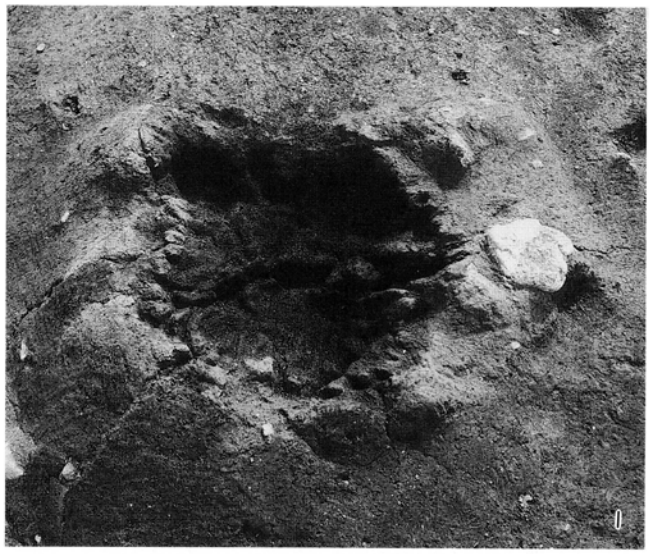


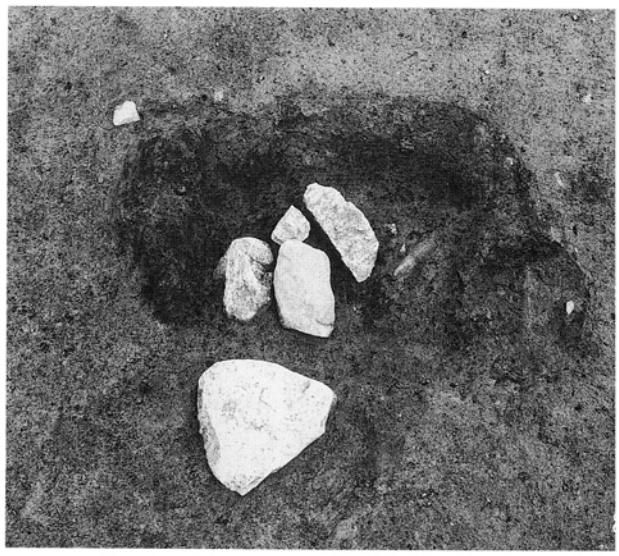


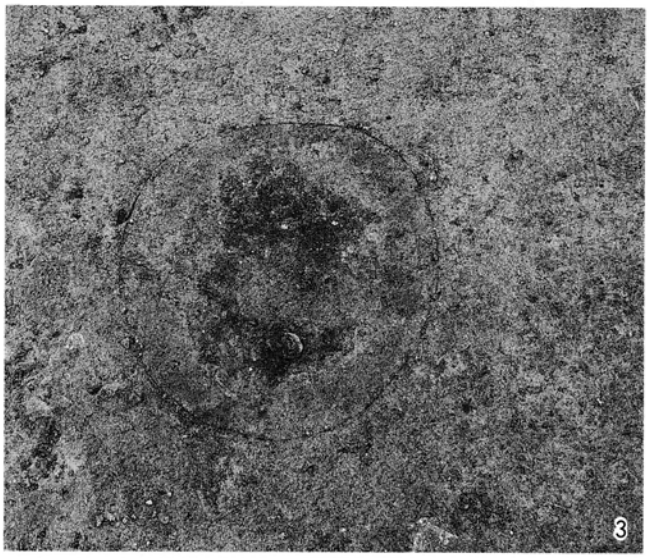
1　S C01　　2　S C02　　3　S C03
4　S C04　　5　S C04竈　　6　S C04竈

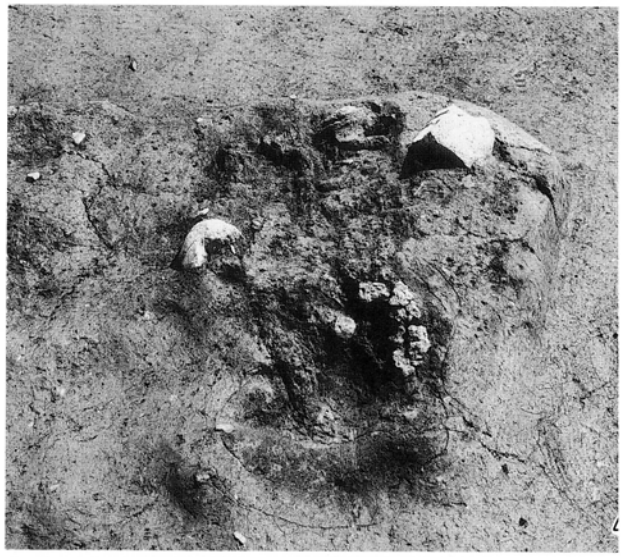


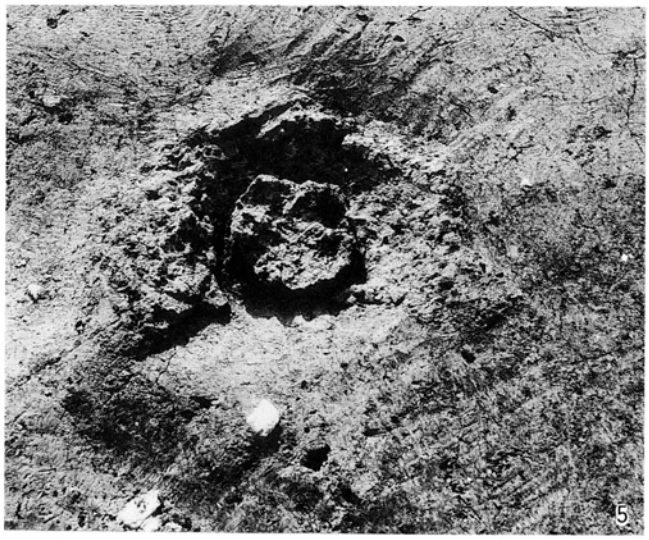
1　S K05　　2　S K04　　3　S X26
4　S X25　　5　S X01　　6　S X01土層



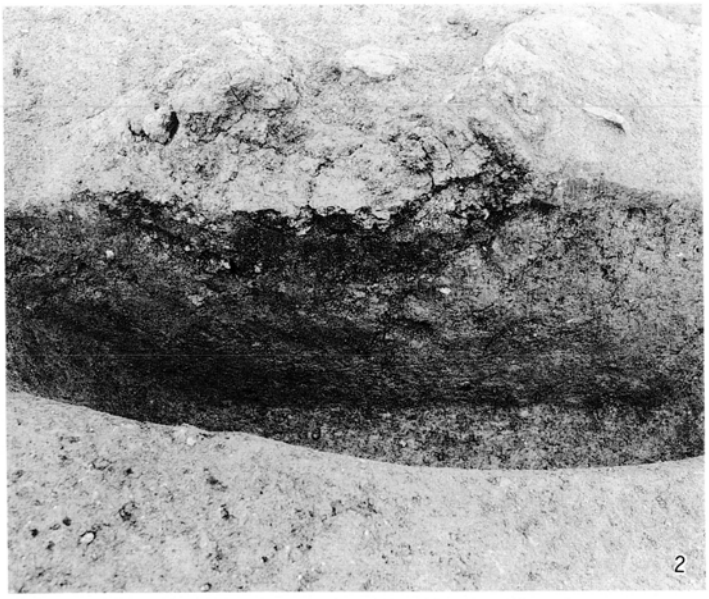


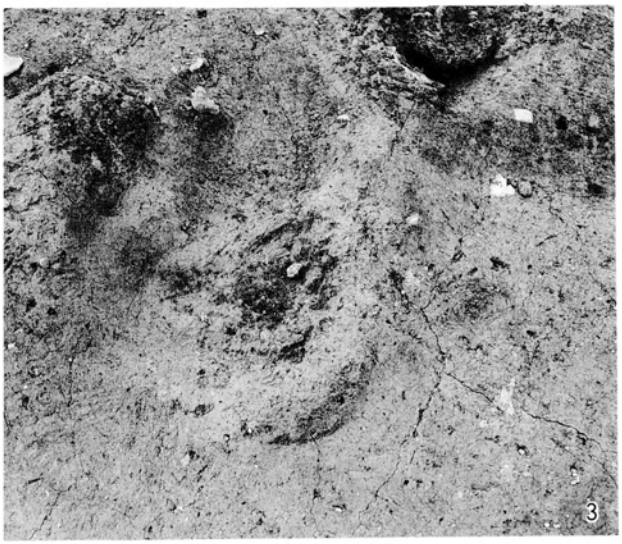


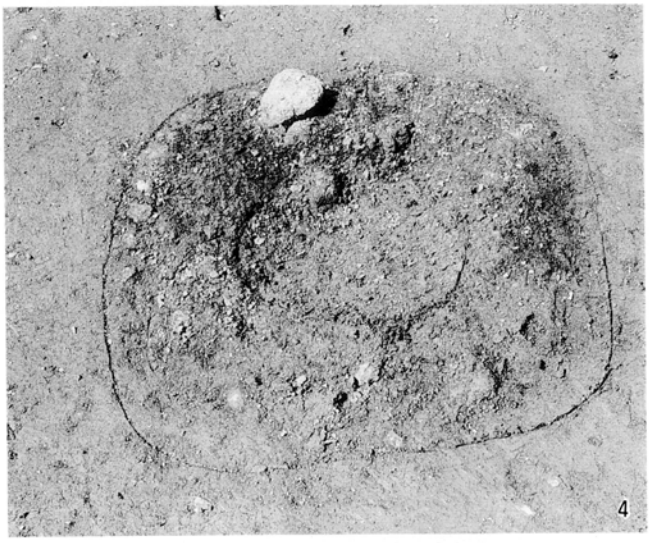


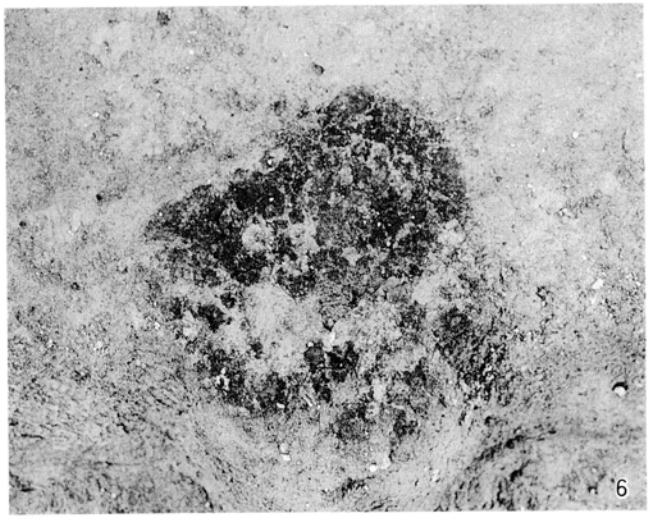


1 S X02　　2 S X03　　3 S X04
4 S X06　　5 S X08　　6 S X12・13



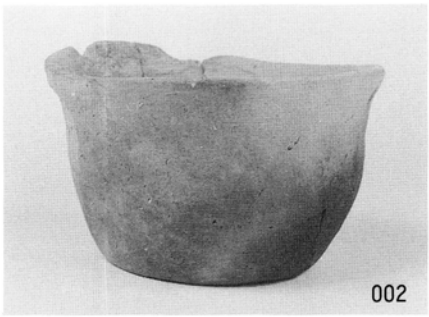


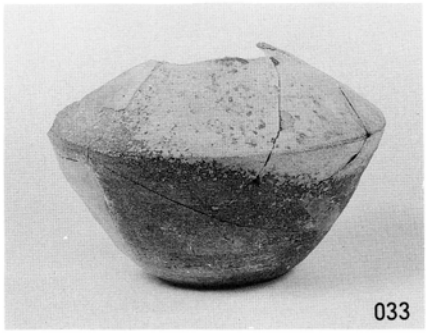


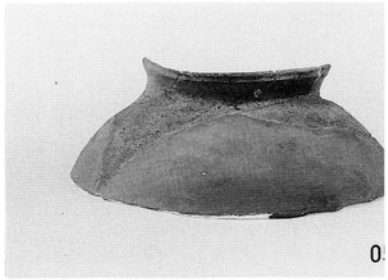


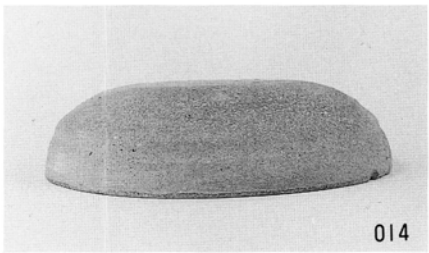
1　S X09　　2　S X09土層　　3　S X07

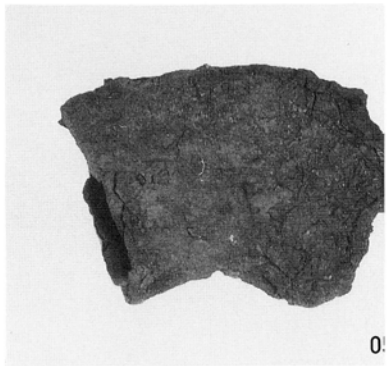
4　S X20　　5　S X21　　6　S X28

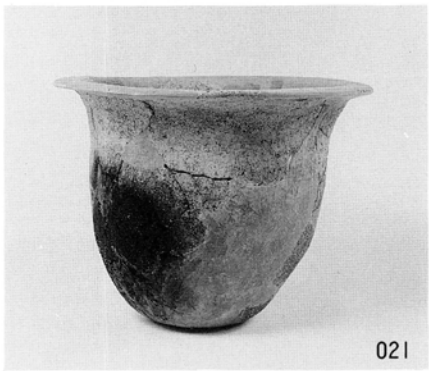


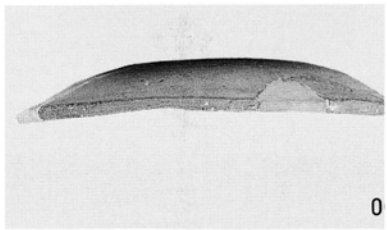


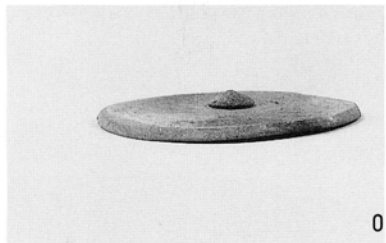


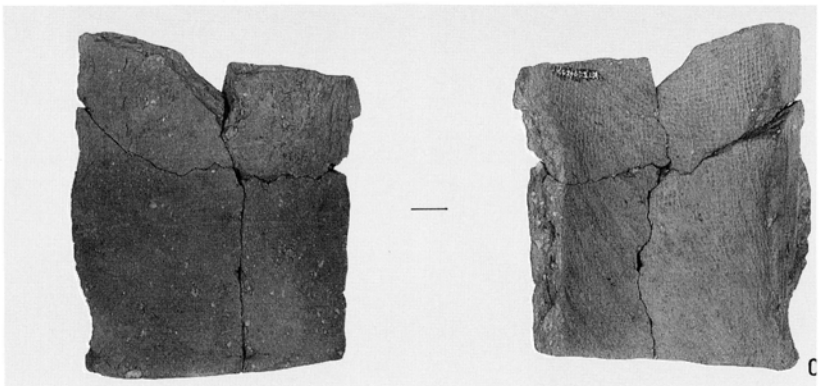












I・II・III区出土遺物 I

071

072

073

074

075

076

077

080

081

082

083

084

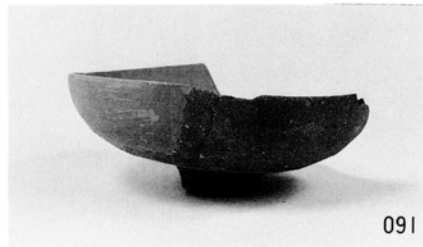
085

086

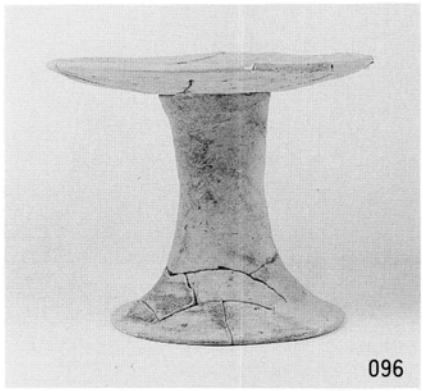
087

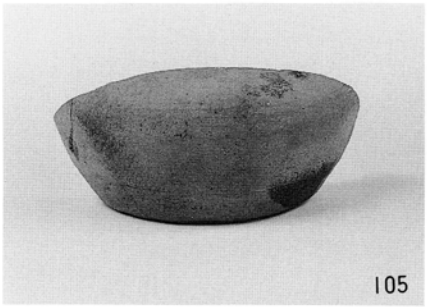
088

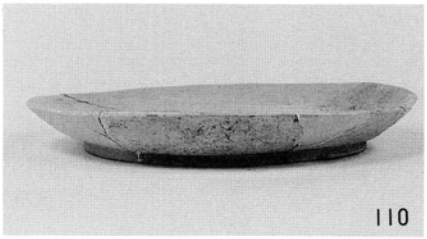
089

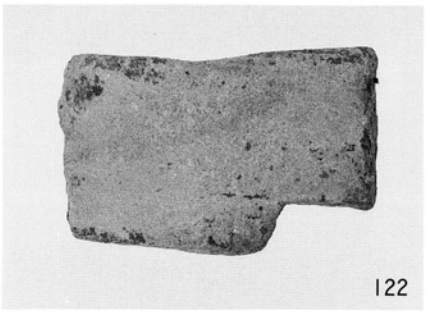

091

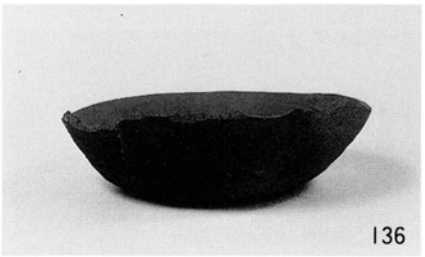
I・II・III区出土遺物II

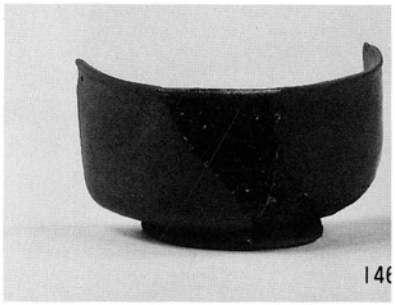


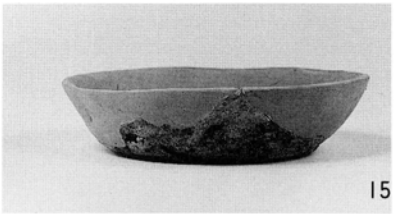


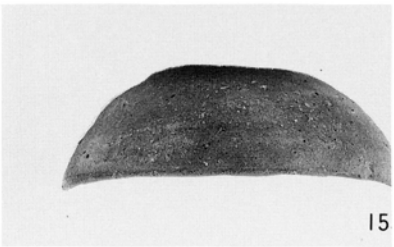






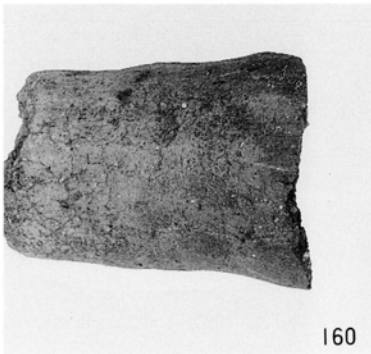






I・II・III区出土遺物III

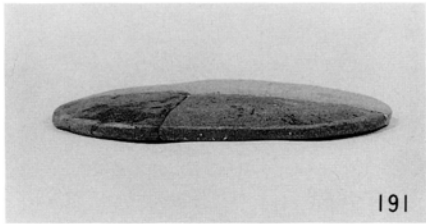
157


160

161

162

165

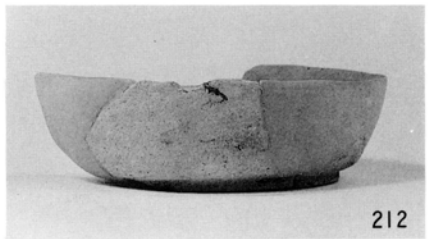

191

196

197

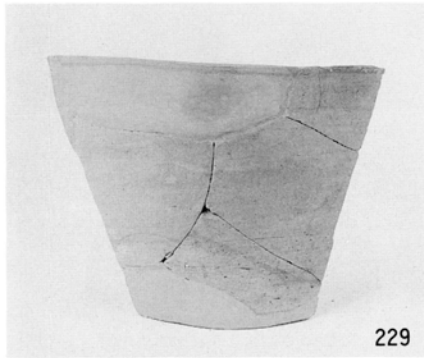
204

206

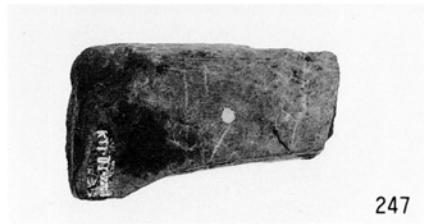

212

222

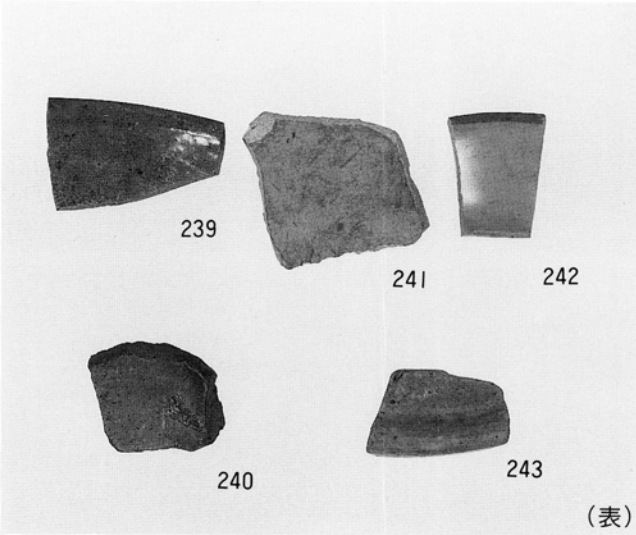
231

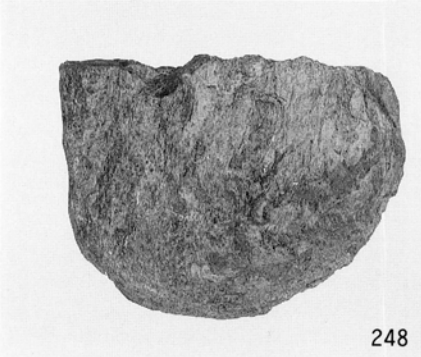

229

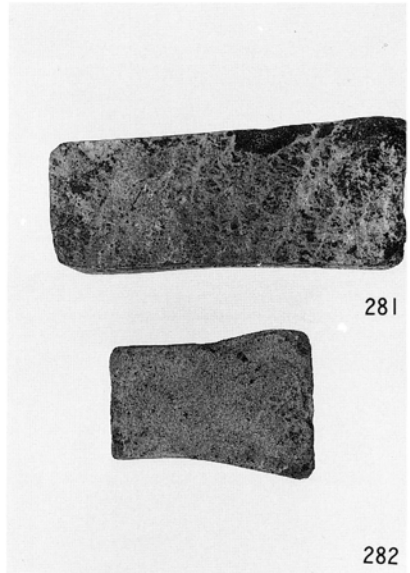
244

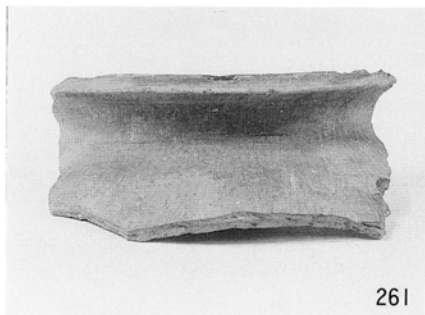

247

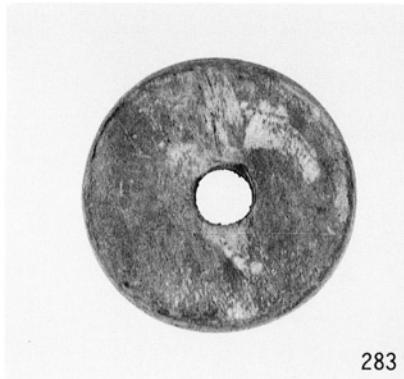
I・II・III区出土遺物IV

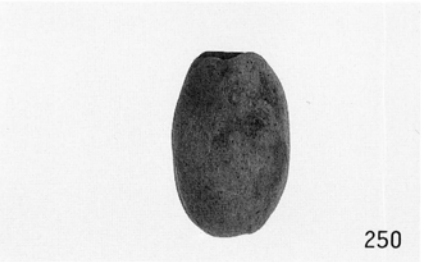




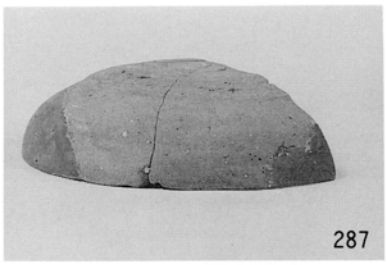


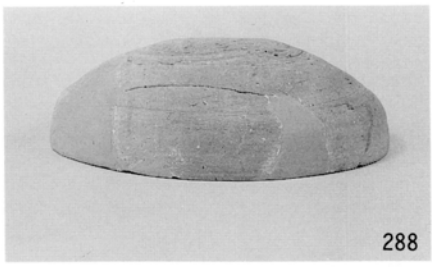






I・II・III区出土遺物V


287


288

289

290

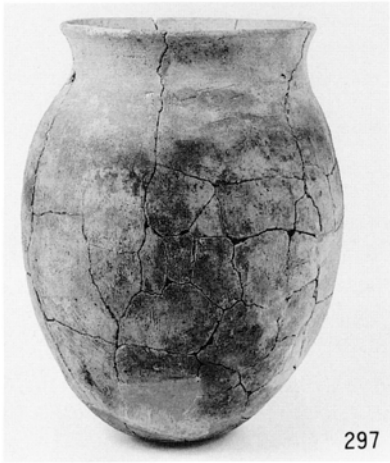
291

293

295

306

307


297

309

Ⅳ区出土遺物

都地・金武城田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第186集

1988年 3 月31日

発 行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区大名 2 丁目10番28号　ようきビル

印 刷　赤 坂 印 刷 株 式 会 社
福 岡 市 中 央 区 大 手 門 1 丁 目 8 番 34 号